

Oracle® Hyperion Financial Reporting Studio

User's Guide

リリース 11.1.2.4

著作権情報

Oracle® Hyperion Financial Reporting Studio User's Guide, 11.1.2.4

Copyright © 1989, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	11
ドキュメントのフィードバック	12
第1章. Reporting Studioスタート・ガイド	13
Financial Reportingについて	13
Reporting Studioを使用したレポートの設計	13
EPM Workspaceを使用したブックおよびバッチの作業	15
Reporting Studioの基本的なタスク	16
Reporting Studioのインストール	16
Reporting Studioの起動	16
レポートを開く	17
オブジェクトの保存	17
レポート・サーバー情報の表示	17
レポートの設計	17
レポートの設計前	17
レポート・デザイナを使用したレポートの設計	18
設計に関する考慮事項	19
第2章. メンバーの定義	23
メンバーの定義について	23
メンバーの割当て	23
データの行と列のメンバーの割当て	24
ページ軸のメンバーの割当て	24
特殊メンバーの割当て	25
関数を使用したメンバーの割当て	28
「メンバー選択」ダイアログ・ボックスと式バーで使用できる関数	28
「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのみで選択できる関数	29
メンバーの検索	34
メンバーのソート	35
選択したメンバーのプレビュー	36
別のアプリケーションのメンバーのコピー	36
メンバーの追加と除去	36
条件に基づくメンバーの選択およびフィルタリング	37
条件に基づいた複数のメンバーの選択	37
フィルタの定義による表示メンバーの指定	38
メンバー・リストの定義および編集	38
メンバー・リストの定義	39
メンバー・リストの編集	39
関数にメンバーを含める	40
Planningデータベース・ソースのメンバーのアクセス権	40
第3章. チャートのカスタマイズ	43
チャートについて	43
棒グラフ	44

折れ線グラフ	44
複合チャート	44
円グラフ	45
チャートのフォーマット	45
チャートのデータの定義	45
「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスの使用法	46
チャート内のフォントの設定	48
チャートの枠線と背景のオプション	48
棒グラフと複合チャートの棒のフォーマット	48
折れ線グラフと複合チャートの線のフォーマット	49
複合チャートのオプションの定義	50
円グラフのフォーマット	50
チャートの背景オプションの設定	51
レポート上のチャートの位置	52
グリッド線の定義	53
データ・セットのスタイルの定義	53
チャートのサイズの変更と移動	53
チャートのタイトルとラベルのフォーマット	54
チャート凡例のタイトルの定義	54
チャートのタイトルの定義	55
チャートの軸のタイトルの定義	55
軸のラベルの定義	56
チャートの表示	57

第4章. レポートの作成 59

レポート・オブジェクトの追加	59
リンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの使用法	60
リンク付きオブジェクト	60
Financial Reporting内のローカル・オブジェクト	61
テキスト・オブジェクトの追加	62
テキスト・オブジェクトの変更	63
テキスト・オブジェクトの保存	63
グリッドの追加	64
グリッドについて	64
グリッドのディメンション・レイアウトの定義	65
新しいグリッドの追加	66
既存のグリッドの挿入	66
グリッドの選択	67
グリッド・オブジェクトのプロパティの変更	67
グリッド・オブジェクトの保存	67
イメージの挿入	68
イメージ・オブジェクトの保存	69
チャートの挿入	70
チャート・オブジェクトの保存	70
保存したレポート・オブジェクトの挿入	71
ヘッダーとフッターの作成	71
レポート・オブジェクトの位置設定	72
レポート・オブジェクトのサイズ変更	73

レポート・オブジェクトの保存	74
レポートのオブジェクトの除去	75
ヘッダーとフッターの設計	75
タイトル・ページの作成	76
レポート・オブジェクトの前への改ページの挿入	76
レポートの要約の表示	76
サーバー情報の表示	77
第5章. グリッドのカスタマイズ	79
グリッドへの行と列の挿入	79
グリッドでの切り取り、コピー、貼付け	81
グリッドの行見出しと列見出しの指定	82
グリッドの行見出しと列見出しのオーバーライド	83
行と列のテンプレートの使用	85
行と列のテンプレートについて	85
行と列のテンプレートのフォーマットの継承	86
行と列のテンプレートのプロパティ値	86
行と列のテンプレートの作成	88
行と列のテンプレートの挿入	90
行と列のテンプレートのリンクの解除	91
行と列のテンプレートの変更	91
行および列テンプレートの保存	92
データ問合せ最適化オプションの設定	92
Financial Managementのライン・アイテムの詳細の表示	94
Planningのサポート詳細の表示	94
グリッド視点の定義	96
グリッドPOVバーの表示と非表示の切替え	96
グリッド視点のメンバーの選択	97
グリッド視点の設定	97
改ページの挿入	98
ページ軸の見出しの定義	98
グリッドのデータベース接続の変更	100
グリッドへの複数のデータベース接続の割当て	100
データ行とデータ列の自動計算の追加	101
自動計算されたデータの行と列のフォーマット	104
式の行や列の定義	106
式の行と列の見出しの定義	108
行または列の展開	108
計算の複数繰返し	114
式バーの使用方法	114
式を含むレポートの例	115
式バーを使用した式の作成	116
式バーを使用した式の編集	117
式の削除	118
式バーを使用したメンバー選択の変更	118
プロパティ・シートの機能へのアクセス	119
セル・レベルでの計算	119
テキスト関数を使用した情報の表示	120

グリッド・ヘッダーの固定	121
第6章. ユーザーのPOVの定義	123
レポート・デザイナーでのユーザーのPOVの設定	123
レポート・デザイナーでのユーザーのPOVのメンバーの選択	124
第7章. レポートの詳細データとドキュメントの表示	125
レポートの詳細データにアクセスするための展開機能の設定	126
行と列を展開する位置	126
レポートへのセル・ドキュメントの添付	126
サポートされているMicrosoft Officeファイル・タイプ	127
印刷と印刷プレビューのオプション	127
考慮事項	129
セル・ドキュメントの印刷	129
添付されているセル・ドキュメントのリストの印刷	130
関連コンテンツへのリンクの設定	130
関連コンテンツの適用	130
グリッド・セルに指定されている場合の関連コンテンツの結果の例	133
リポジトリの複数のレポートやグリッドの関連コンテンツ・サーバーの変更	134
関連コンテンツへのリンクの除去	134
関連コンテンツのプロパティの変更	135
「関連コンテンツのプロパティ」ダイアログ・ボックス	135
関連コンテンツ・リンクの説明の指定	135
Smart View for Officeの使用方法	136
第8章. レポートのプレビューと印刷	139
プレビュー時のプロンプトへの応答	139
現在のユーザーのPOV設定のプレビュー	140
プレビュー・プリファレンスの設定	140
Webブラウザでのレポートのプレビュー	140
Reporting Studioでのレポートのプレビュー	141
スナップショット・レポートのプレビュー	141
レポートの印刷	141
レポート・デザイナーでの印刷について	142
位置設定	142
テキスト・ボックスの印刷	143
グリッドの印刷	143
ページ・ディメンションの見出しの印刷	143
ページのメンバーの印刷	144
ヘッダーとフッターの印刷	144
第9章. レポートのフォーマット	145
テキスト・ボックスのフォーマット	145
テキスト・ボックスのフォントの指定	145
テキスト・ボックス内のテキストの配置	146
テキスト・ボックスの枠線と網掛けの設定	146
グリッドのフォーマット	147

グリッドの拡大表示	147
フォーマットのヒント	147
グリッド内の数値のフォーマット	147
行、列、グリッドの非表示	155
非表示の行や列での抑制の評価の制御	155
行、列、ページのソート	156
条件付きフォーマットについて	157
グリッドへの条件付きフォーマットの適用	160
条件の削除	164
条件付きフォーマットの追加	164
条件付きフォーマットの順序の変更	164
条件付きフォーマットの削除	165
行の高さと列の幅の変更	165
複数のセルのマージ	166
条件付き抑制	167
条件付き抑制の動作	167
条件付き抑制の基本オプションの使用	169
条件付き抑制の詳細設定オプションの使用	169
条件付き抑制の削除	172
イメージのフォーマット	173
ページ設定の変更	174

第10章. 関数の使用方法 177

算術関数	177
算術関数	177
Abs	184
Average	185
AverageA	186
CountA	187
Count	188
Difference	189
Eval	190
Max	191
Min	192
Mod	192
PercentOfTotal	193
Pi	194
Product	194
Random	195
Round	195
Sqrt	196
Sum	197
Truncate / Trunc	198
テキスト関数	199
テキスト関数	200
Annotation	209
CalcStatus	211
CellText	212

Date	216
DataSource	218
DPDescription	220
DPJustification	221
DPNotesAndAttachments	222
Footnote	223
GetCell	225
GetHeading	226
GridDimension	228
HFMCurrency	228
ListOfCellDocuments	229
MemberAlias	231
MemberDescription	232
MemberName	233
MemberProperty	234
MemberQualifiedName	236
Page	237
PageCount	238
PlanningAnnotations	238
注釈の区切りの指定	240
ProcessManagementStatus	241
ReportAuthor	242
ReportCreated	242
ReportDesc	243
ReportFolder	243
ReportModified	244
ReportModifiedBy	244
ReportName	245
ReportRunBy	245
RetrieveValue	246
条件関数	246
IfThen、If	246
条件演算子	246
複合条件	249
財務関数	250
ランク	250
Variance / Var	252
VariancePercent/VarPer	254

第11章. エクスプローラのリポジトリの管理 257

フォルダの作成	257
リポジトリ内のオブジェクトの複製	258
レポート・オブジェクトのフィルタ	258
リポジトリの項目の切取り、コピー、貼付け	258
データベース接続の管理	258
リポジトリのオブジェクトとレポート・オブジェクトのエクスポート	259
レポート・オブジェクトのリポジトリへのインポート	259
電子メールによるレポートへのリンクの送信	259

リポジトリのアイテムの削除	259
リポジトリ内のレポートとレポート・オブジェクトのデータベース接続の変更	260
レポートのデータベース接続の変更	260
リポジトリのオブジェクトのセキュリティの管理	260
第12章. バッチ処理の使用方法	263
第13章. ブックとスナップショット・ブックの操作	265
第14章. Financial Reportingの管理情報	267
非ASCIIユーザー・アカウントのサポート	267
POVの管理	267
ユーザーのPOVユーティリティの使用方法	268
Financial Reportingの初期ユーザー・プリファレンスの定義	271
レポート・サーバーのタスク	272
計算の最大繰返し回数の指定	273
ファイアウォール環境またはポート競合を解決するためのFinancial Reporting TCPポートの割 当て	273
NATを実行するデバイスからのサーバー・コンポーネントへのアクセス	274
Essbaseのポート	275
現在のEssbase接続の確認	277
Essbaseの構成ファイルの設定の変更	277
Essbaseポートの最大数の式の計算	277
スケジューラのコマンド・ライン・インタフェース	278
バッチ入力ファイルの作成	278
コマンド・ラインからのバッチの起動	278
外部スケジューラを使用したバッチのスケジュール	279
パスワードのエンコード	279
属性の変更	280
バッチ入力ファイルのXMLタグ・リファレンス	282
BATCH_JOB_OBJECT - ノード・タグ	282
RUN_OPTIONS - 子ノード・タグ	282
NOTIFICATION/EMAIL - 子ノード・タグ	283
JOB_STATUS - 子ノード・タグ	283
JOB_OBJECT - 子ノード・タグ	283
DATA_SOURCE_USER_CREDENTIALS - 子ノード・タグ	283
HR_USER_CREDENTIALS - 子ノード・タグ	283
OUTPUT_OPTIONS - 子ノード・タグ	283
CHILD NODE - HTML	284
CHILD NODE - PDF	284
CHILD NODE - SAVE_AS_SNAPSHOT	284
CHILD NODE - PRINT	284
USER_POV - 子ノード	284
ADMプロパティ値の最大長の増加	285
Microsoft Wordテンプレート	285
注釈でのセル・テキスト、Planningユニットの注釈、およびFinancial Reportingドキュメントの表示	287
Linux/UNIXサーバー環境でのFinancial Reportingのフォントの更新	287
付録A. よくある質問	289

ユーザーのPOVにあるディメンションを変更しても、グリッドに影響がないのはなぜですか?	289
グリッドのPOVがレポート・デザイナーに表示されないのはなぜですか?	290
ワークスペースを使用しているユーザーは、どのようにしてグリッドのPOVにディメンションが設定されていることを確認できますか?	290
ユーザーのPOVを変更した場合に、グリッドの行、列、またはページの軸で選択したメンバーに変更が反映されるようにするには、どのようにレポートを設計すればよいですか?	291
なぜブックのPOVが必要なのですか?	291
レポート・メンバー選択とは何ですか?	291
レポート・メンバー選択を「レポートのPOV」と呼ばないのはなぜですか?	291
なぜバッチのPOVが必要なのですか?	292
付録B. 通貨一覧	293
付録C. Oracle User Productivity Kitの使用	295

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracleのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracleサポート・サービスでは、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントへのフィードバックをお送りください: epmdoc_ww@oracle.com

次のソーシャル・メディア・サイトでEPM情報開発をフォローできます:

LinkedIn - http://www.linkedin.com/groups?gid=3127051&goback=.gmp_3127051

Twitter - <http://twitter.com/hyperionepminfo>

Facebook - <http://www.facebook.com/pages/Hyperion-EPM-Info/102682103112642>

Google+ - <https://plus.google.com/106915048672979407731/#106915048672979407731/posts>

YouTube - <http://www.youtube.com/user/OracleEPMWebcasts>

1

Reporting Studioスタート・ガイド

この項の内容:

Financial Reportingについて	13
Reporting Studioの基本的なタスク	16
レポートの設計	17

Financial Reportingについて

サブトピック

- [Reporting Studioを使用したレポートの設計](#)
- [EPM Workspaceを使用したブックおよびバッチの作業](#)

Oracle Hyperion Financial Reportingは、分析データを設計してグラフィック表示する、強力なツールです。資金管理レポート、損益計算書、貸借対照表などの従来の財務諸表のフォーマットを設計できます。また、テキストやグラフィックを含む財務データまたは分析データの従来とは異なるフォーマットを設計することもできます。

Financial Reportingはオブジェクト指向のグラフィック・レポート・レイアウトを使用します。オブジェクト指向のグラフィック・プログラムを使用した経験にかかわらず、レポートを簡単に設計できます。テキスト・ボックス、グリッド、イメージ、チャートなどのレポート・オブジェクトを使用してレポートを設計します。同じレポート・オブジェクトを複数のレポートで使用できます。

Financial Reportingタスクは、Oracle Hyperion Financial Reporting Studio、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace、またはその両方で実行できます。

Reporting Studioを使用したレポートの設計

サブトピック

- [Studioエクスプローラ](#)
- [レポート・デザイナー](#)
- [プロパティ・シート](#)

Reporting Studioではレポートを設計できます。Reporting Studioにログインすると、新しいレポートの作成や既存レポートを開くこと、またはリポジトリへのアクセスなどができます。レポートを設計する際は、メニュー・コマンドを選択するか、ツールバーのショートカットを使用するか、または右クリックしてショートカット・メニュー・アイテムを選択できます。

Oracle Hyperion Financial Management、Oracle Hyperion PlanningおよびOracle Essbaseからデータを取得してフォーマットするレポートを設計および表示できます。



注:

レポート・デザイナーでレポートを設計するには、レポート設計者またはグローバル管理者であることが必要です。権限とセキュリティの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System*のセキュリティ構成ガイドを参照してください。

Studioエクスプローラ

Reporting Studioにログインすると、Studioエクスプローラ・ページが表示されます。Studioエクスプローラ内を移動するには、ページの上にあるメニュー・コマンドを使用するか、ツールバー・ボタンを使用するか、右クリックしてショートカット・メニューにアクセスします。

Studioエクスプローラでは次のタスクを実行できます:

- 新規レポートを作成
- 既存のレポートを開く
- Reporting Studioリポジトリにアクセスする
- レポート・サーバー情報を表示

レポート・デザイナー

Reporting Studioで新しいレポートを作成、または既存のレポートを開くことを選択すると、レポート・デザイナーが表示されます。レポート・デザイナーで、メニュー・コマンドを選択、またはツールバー・ボタンを使用して、レポートにレポート・オブジェクトを追加します。次に、レポート・オブジェクトのプロパティ・シートを使用して、各レポート・オブジェクトをカスタマイズできます。たとえば、グリッドを選択し、「グリッドのプロパティ」プロパティ・シートを使用してディメンションの指定、メンバーの選択、および見出しオプションの指定を行うことができます。レポート・オブジェクトを選択し、右クリックしてショートカット・メニューを表示することもできます。

レポート・デザイナーでレポートを設計する際は次のコンポーネントを使用できます。

- ヘッダー
- テキスト・ボックス
- グリッド

グリッドの構成は次のとおりです。

○行 - 行には、データ、テキストまたは式を使用できます。グリッド内の個々の行をフォーマットできます。

○列 - 列には、データ、テキストまたは式を使用できます。グリッド内の個々の列をフォーマットできます。

○ページ軸 - グリッド・レポート・オブジェクト上の3番目の交差参照。ページでは、追加ディメンションの複数のメンバーについて行と列のデータを繰り返します。ページ上のメンバーを定義して、レポートを再実行せずに、様々なビューでデータを表示できます。

- チャート

- イメージ
- フッター

プロパティ・シート

プロパティ・シートは、現在選択されているレポート・コンポーネントのオプションを定義します。設定したプロパティ・オプションは、選択したレポート・コンポーネントに自動的に適用されます。

プロパティ・シートは、選択したカテゴリによって変わります。使用可能なカテゴリは、選択したレポート・コンポーネントのタイプによって異なります。各カテゴリには、選択したレポート・コンポーネントに設定できる特性の別のセットが表示されます。デフォルトでは、プロパティ・シートはレポート・デザイナの右側に表示されます。

プロパティ・シートを表示または非表示にするには、「表示」、「プロパティ・シート」の順に選択します。

EPM Workspaceを使用したブックおよびバッチの作業

Reporting Studioの機能に加えて、EPM Workspaceは、レポートの設計時に拡張機能を提供します。EPM Workspaceでは、リポジトリ・オブジェクト(レポート、ブックおよびグラフィックスなど)を開くことや、コピー、削除、移動、インポート、エクスポート、および名前の変更ができます。また、フォルダを開くことや、作成、削除、インポート、エクスポート、および名前の変更ができます。さらにHTMLまたはPDF形式でレポートとブックをプレビューできます。

EPM Workspaceのコンポーネントは次のとおりです。

- **エクスプローラ** - 保管されているファイルを開いたり、フォルダの作成、ファイルのインポートとエクスポート、さらに電子メールからフォルダ、レポートおよびスナップショット・ブックへのリンクの設定ができます。
- **ブック・エディタ** - 複数のレポートからブックを作成できます。このブックは、ブックまたはスナップショット・ブックとして保存できます。
- **バッチ・エディタ** - バッチ・ジョブに対するオブジェクトの追加と除去、バッチ処理のスケジュール、バッチ処理後にバッチを削除するかどうかの指定を行うことができます。
- **スケジューラ** - バッチをスケジュールしたり、処理するようスケジュールされたバッチのステータスを確認したりできます。



注:

参照者の役割を持つ場合は、レポートを表示したり、ドキュメントをMicrosoft Word、Microsoft ExcelおよびMicrosoft PowerPointにエクスポートしたりすることができます。



ヒント:

EPM Workspaceと、EPM WorkspaceでのFinancial Reportingタスクの詳細は、*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド*と*Oracle Hyperion Financial Reportingユーザー・ガイド*を参照してください。ブックおよびバッチの詳細は、*Oracle Hyperion Reporting and Analysis Frameworkユーザー・ガイド*を参照してください。

Reporting Studioの基本的なタスク

サブトピック

- Reporting Studioのインストール
- Reporting Studioの起動
- レポートを開く
- オブジェクトの保存
- レポート・サーバー情報の表示



注:

この項ではReporting Studioで実行されるFinancial Reportingのタスクについて説明します。EPM Workspaceで実行されるFinancial Reportingタスクの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド』を参照してください。

Reporting Studioのインストール

- ▶ Reporting Studioをインストールするには:
 1. EPM Workspaceから、「ツール」、「インストール」、「**Financial Reporting Studioの起動**」の順に選択します。
 2. ダウンロードが完了したらブラウザをすべて終了し、Reporting Studioインストーラ (FinancialReportingStudio.exe)を管理者として実行します。

Reporting Studioの起動

- ▶ Reporting Studioを起動するには:
 1. 「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle」、「**Financial Reporting Studio 11.1.2.4.000**」、「**Financial Reporting Studio 11.1.2.4.000**」の順に選択します。
 2. 「ログイン」ダイアログ・ボックスでユーザー名、パスワードおよびサーバーURLを入力します。
- ▶ WebブラウザからReporting Studioを起動するには:
 1. Oracle Hyperion Financial Reporting Studioがインストールされていることを確認します。
 2. リポジトリでレポートを強調表示し、「ファイル」、「ファイル形式を指定して開く」、「**Studioプレビューで開く**」の順に選択します。

レポートを右クリックして、「ファイル形式を指定して開く」、「**Studioプレビューで開く**」の順に選択することもできます。

選択したレポートがReporting Studioに表示されます。



ヒント:

レポートを開かずにReporting Studioを起動するには、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceへログオンし、「ツール」、「**Financial Reporting Studioの起動... 1**」の順に選択します。

レポートを開く

既存のレポートを開き、レポート・デザインを変更したり、レポートに最新データを表示したりすることができます。レポートを開いたり表示したりすると、データがリフレッシュされます。スナップショット・レポートとして保存するときには、レポートとともに静的データを保存できます。

レポートを開くには、「ファイル」、「開く」の順に選択するか、目的のレポートをダブルクリックします。

オブジェクトの保存

Reporting Studioでオブジェクトを保存するには、レポート・デザイナーから「ファイル」、「オブジェクトの保存」の順に選択します。

レポート・サーバー情報の表示

Reporting Studioでは、次のようなレポート・サーバー情報を確認できます。

- レポート・アクティビティ
- JVMメモリー
- スレッド

レポート・サーバー情報を表示するには、「ファイル」、「レポート・サーバー情報」の順に選択します。

レポートの設計

サブトピック

- [レポートの設計前](#)
- [レポート・デザイナーを使用したレポートの設計](#)
- [設計に関する考慮事項](#)

レポートの設計前

レポートを設計する前に、次のことを検討してください。

- データソース・アプリケーションが、すべてのレポートに必要な階層と計算をサポートするように設計されているかどうか。
- レポートの主な目的は何か。
- レポートのエンド・ユーザーは誰か。
- レポートを生成する頻度と、生成するユーザーの数はどのくらいか。

- データの取得とレポートの生成にかかる時間はどのくらいまで許容できるか。
- 抑制される前に、レポート問合せを実行するセルの数はどれくらいか。

レポート・デザイナを使用したレポートの設計

レポート・デザイナで空白のレポート・レイアウトを使用し、レポートのコンテンツ(グリッド、チャート、イメージ、テキスト・ボックス、ヘッダー、フッターなど)を指定してレポートを設計できます。

▶ レポート・デザイナでレポートを設計するには:

1. Reporting Studioで、「ファイル」、「新規」、「レポート」の順に選択します。
2. 「挿入」、「グリッド」の順に選択し、グリッドの領域を選択します。
3. 「データベース接続の選択」で、既存のデータベース接続を選択するか、「新規データベース接続」をクリックして新規のデータベース接続を作成します。
4. 「ユーザー名」と「パスワード」を入力し、「OK」をクリックします。

新規データベース接続を作成する場合は、次のことを検討してください。

- Oracle Hyperion Planningデータ・ソースでレポートを設計している場合、グリッドにサポート詳細またはPlanningユニットの注釈が含まれている場合のみ、**Planning Details**をデータ・ソース・タイプとして選択します。それ以外の場合は、**Essbase**または**Financial Management**をデータ・ソース・タイプとして選択します。
- Oracle EssbaseまたはOracle Hyperion Financial Managementデータ・ソースの場合、「サーバー」テキスト・ボックスにデータベース・サーバー名を入力します。

埋込みモードまたは3層APSモードでEssbaseサーバーにアクセスできます。3層APSモードの場合、Financial Reportingで、EssbaseJAPIServerプロパティを使用してJConsoleのAPSサーバー・マシン名を定義します。すべてのAPI呼出しはそのサーバーを介して送信されます。

○両方のモードで、Essbaseサーバーを直接指定します。たとえば、EssServer1です。

両方のモードのEssbaseクラスタ名では、次のいずれかの行えます:

- Essbaseクラスタ名を直接指定します。たとえば、EssCluster1です。Financial Reportingでは、実行時にクラスタ名をサーバー名に内部的に解決します。
- Essbaseクラスタ名を含むAPS URLを入力します。たとえば、`http://host:port/aps/Essbase?ClusterName=EssCluster1`です。ここで、`host:port`はEssbaseクラスタ名を解決するためのAPSサーバーです。フェイルオーバーはEssbaseクラスタ内のEssbaseサーバー全体でサポートされています。

○3層モードでのみ、APSクラスタ名を入力できます。たとえば、APSCluster1です。

APSクラスタ名およびメンバーはEssbase管理ユーティリティで定義されています。この方法は、APSクラスタ内のEssbaseサーバー全体でフェイルオーバーおよびロード・バランシングをサポートします。

-  をクリックして、アプリケーション/カタログおよびデータベースを選択します。

データベース/キューブの検索は、アプリケーション/カタログ検索ボタンと共用です。アプリケーション/カタログ検索ボタンを使用すると、アプリケーションまたはカタログと、対応するデータベースおよびキューブのツリー表示が表示されます。アプリケーションは親として、データベースは子としてリストされます。データベースに関連付けられていないデータ・ソースでは、アプリケーションのみがリストされます。



ヒント:

レポートの設計時にガイドラインを表示するには、「表示」、「ガイドライン」の順に選択するか、右クリックして「ガイドラインの表示」を選択します。Web上でレポートをプレビューする際に行および列見出しを表示するには、「表示」、**Webプレビュー**での行および列見出しの順に選択します。

設計に関する考慮事項

サブトピック

- [レポート・パフォーマンス](#)
- [Planningデータベース接続の使用](#)
- [Workforce Planningスマート・リストのサポート](#)
- [EssbaseおよびPlanningのデータベース接続](#)
- [データ問合せ - 展開データ・セグメントと単一データ・セグメント](#)
- [欠落ブロックの抑制を使用したレポートの設計に関するPlanningの考慮事項](#)
- [ディメンション名およびメンバー名への変更に関する考慮事項](#)
- [動的レポートの設計に関する注意事項](#)

レポート・パフォーマンス

レポート・パフォーマンスは、クライアントごとに異なります。許容できるパフォーマンスもクライアントによって異なります。たとえば、ピーク時以外にレポートをバッチで実行する際、翌営業日までに処理を完了する必要がある場合があります。また、1時間ごとにデータが更新されるときに、秒単位でレポート出力を行うレポート・パフォーマンスが求められる場合もあります。

Planningデータベース接続の使用

Oracle Hyperion Planning ADMドライバをインストールした後、データベース接続としてPlanningを選択できます。Planning詳細ADMドライバは、サポート詳細、プランニング・ユニットの注釈、メタデータ・フィルタなどの機能を提供するデータ・ソースとして最適化されています。これらのPlanning機能をレポート・グリッドで使用しない場合は、最適なパフォーマンスを得るために、レポートのデータベース接続としてOracle Essbaseを選択します。詳細は、[94ページのPlanningのサポート詳細の表示](#)および [238ページのPlanningAnnotations](#)を参照してください。

その他の考慮事項

- Planningでは、属性ディメンションはディメンションとしてサポートされません。(レポートに属性値を表示する場合は、MemberPropertyテキスト関数を使用してください。)
- Planningデータ・ソースを使用している場合、Hsp_Ratesをディメンションとして使用することはできません。
- レベル0以外のレベルを使用するメンバー選択はサポートされません。

Workforce Planningスマート・リストのサポート

スマート・リストは、メンバーに割り当てられた属性のような値で、実際の割当ては、メンバーのEssbaseキューブにデータとして保管されます(0、1、2、3、4など)。Planningリポジトリは、この数値をテキスト文字列に変換します(0="定額償却", 1="倍額定率"など)。

Oracle Hyperion Financial Reportingのスマート・リストのサポートの例:

- Planningデータベース内でスマート・リストを含むセルを参照するグリッドは、数値ではなく文字列値を戻します。結果には、数値ではなく文字列が常に表示されます。
- `GetCell()`というテキスト関数がスマート・リストを含むセルを参照すると、数値ではなく文字列値が戻されます。
- 数値比較演算子および文字列比較演算子(`equals`、`startswith`など)を使用すると、条件付きフォーマットおよび条件付き抑制でセル値オペランドを含む任意のセル(データ、式、テキスト)を選択できます。たとえば、条件付き抑制では、スマート・リスト文字列を含むデータ・セルを参照して、「セルの値B6がABCで始まる場合に行を抑制」などの条件付き抑制を適用できます。
- 条件付きフォーマットおよび条件付き抑制は、Workforce Planningまたはスマート・リスト・テキスト・データに適用できます。
- スマート・リストの文字列をPlanningから取得すると、文字列値(「Meets」など)および数値が格納され使用できるようになり、次の機能を可能にします:
 - スマート・リスト文字列値またはその基盤となる数値のいずれかに基づいて、条件付き抑制および条件付きフォーマットを設定できます。
 - 数値のデータ・セル値と組み合わせたスマート・リスト値を持つ行または列をソートします。このとき、スマート・リストの数値は他の数値のセル値と比較して使用されます。
 - セルへの式参照を通じてスマート・リスト数値にアクセスします。スマート・リスト・セルへの式参照はすべて、スマート・リスト数値に対して機能します。

EssbaseおよびPlanningのデータベース接続

Oracle Hyperion Interactive Reportingデータベース接続からPlanningデータベース接続(またはその逆)にレポートを変更する場合は、データ・ソース参照のみが変わるので、いくつかの制約があります。詳細は、[260ページのレポートのデータベース接続の変更](#)を参照してください。

データ問合せ - 展開データ・セグメントと単一データ・セグメント

データ・セグメントは、データベースからデータを取得する行または列です。展開データ・セグメントは展開可能な行または列なので、結果のグリッドは表示するときに複数の行または列に展開します。展開データ・セグメントでは、子または子孫などの関数が使用されることがあります。単一データ・セグメントは、1つの行または列としてビューアに表示される1つの行または列です。

通常、同じグリッドで展開データ・セグメントと単一データ・セグメントを使用できますが、大量のデータを含むグリッドを設計する場合は、単一データ・セグメントではなく展開データ・セグメントを使用することを検討してください。展開データ・セグメントは、単一データ・セグメントよりもパフォーマンスの点で優れています。しかし、複数の異なるデータ行または列に詳細なフォーマットを行う場合は、単一データ・セグメントを使用します。

欠落ブロックの抑制を使用したレポートの設計に関するPlanningの考慮事項

行または列に疎ディメンションが含まれる場合、欠落ブロックの抑制を使用してパフォーマンスを改善できます。欠落ブロックの抑制を使用すると、行に大きな疎ディメンションを配置して、問合せの密度が低い場合に応答時間を改善できます。データがあるブロックのみ取得されます。たとえば、行に数千のメンバーを含む従業員ディメンションを配置し、ページまたはPOVにエンティティを配置できます。次に、選択したエンティティの従業員だけを取得できます。

欠落ブロックの抑制によって、多くの行(90%以上)を抑制するときに欠落データの抑制のパフォーマンスが向上します。抑制する行が少ない場合または抑制する行がない場合は、欠落ブロックの抑制設定によってパフォーマンスが低下することがあります。また、一部の抑制されたブロックでは、動的計算メンバーが無視されることがあります。

ディメンション名およびメンバー名への変更に関する考慮事項

データ・ソース内のディメンションまたはメンバーの名前を変更する場合は、Reporting Studioで各レポートを手動で更新して変更を反映する必要があります。

動的レポートの設計に関する注意事項

- 展開データ・セグメントを使用して、パフォーマンスを最適化する:
 - 関数は、別々の行や列に配置されない展開データ・セグメントで使用する。
 - 複数メンバー選択は、別々の行や列に配置されない展開データ・セグメントで使用する。
 - フォーマットや計算が必要な場合のみ、単一データ・セグメントを使用します。
- 効率的な式を作成する:
 - できるかぎり、セルではなく、行や列の式を使用する。
 - 参照プロパティを使用する。
 - 軸の相互参照ではなく、セルの参照を使用する
 - 式で不要なカッコを除去する。
- レポートをグリッド・オブジェクトに限定しない:
 - 特定の領域をハイライトするテキスト・ボックスに関数を追加する。
 - レポートのデータのグリッドを非表示にして、グラフィックスのみをハイライトする。
- レポートのテンプレートを作成する:
 - POVとプロンプト関数を活用する。
 - 現在のPOVとプロンプト関数を使用して、一度設計する。
 - グリッド、ユーザー、ブック、およびバッチのPOVの使用を覚える。
- 再使用可能なオブジェクトおよび行と列のテンプレートを作成する。テキスト、イメージ、グリッド、チャート・オブジェクト、および行と列のテンプレートは、複数のレポートで再使用できます。

2

メンバーの定義

この項の内容:

メンバーの定義について	23
メンバーの割当て	23
メンバーの検索	34
メンバーのソート	35
選択したメンバーのプレビュー	36
別のアプリケーションのメンバーのコピー	36
メンバーの追加と除去	36
条件に基づくメンバーの選択およびフィルタリング	37
メンバー・リストの定義および編集	38
関数にメンバーを含める	40
Planningデータベース・ソースのメンバーのアクセス権	40

メンバーの定義について

グリッドのデータを指定する場合は、取得するデータを識別する条件を設定します。グリッドの視点(POV)およびユーザーのPOVのバーだけでなく、グリッドの行、列およびページ軸にメンバーを割り当てて、基準を設定します。([123ページの第6章「ユーザーのPOVの定義」](#)を参照してください。)

再使用可能なメンバーのリストを作成し、関数を使用してメンバーを動的に取得できます。メンバーを定義する前に、レポートにグリッドを挿入し、ディメンション・レイアウトを定義する必要があります。([64ページのグリッドの追加](#)を参照してください。)



注:

Planning DetailsをPlanningキューブに逆行するデータベース接続として使用する場合、使用可能なすべてのディメンションがリストされますが、ユーザーには特定のディメンション内のメンバーへのアクセス権しかありません。これはレポートの出力に影響を与えます。([40ページのPlanningデータベース・ソースのメンバーのアクセス権](#)を参照してください。)

メンバーの割当て

サブトピック

- [データの行と列のメンバーの割当て](#)
- [ページ軸のメンバーの割当て](#)

- 特殊メンバーの割当て
- 関数を使用したメンバーの割当て
- 「メンバー選択」ダイアログ・ボックスと式バーで使用できる関数
- 「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのみで選択できる関数

データの行と列のメンバーの割当て

メンバーとメンバー・リストを割り当てて、レポートのデータを取得します。レポートに表示するメンバーを選択するか、ディメンション・メンバーを動的に選択する関数を使用できます。選択した各メンバーに対してグリッドに個別の行または列を挿入することや、選択したすべてのメンバーを1つの行または列に配置することができます。

▶ データの行と列にメンバーを割り当てるには:

1. レポートを開きます。
2. 「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスで、ディメンションを選択します。

グリッドでディメンションをダブルクリックするか、グリッドでディメンションを選択し、そのディメンション名の式バーのボタンをクリックします。

ディメンションのメンバー名がわかっている場合は、メンバー名をカンマで区切って式バーのテキスト領域に入力します。メンバー名では大文字と小文字が区別されますが、関数名では区別されません。たとえば、メジャー・ディメンションの場合は、(Profit)の子を入力し、チェック・マークをクリックしてメンバー名を確認します。

3. メンバー、メンバー・リストまたは関数を割り当てます。
 - 個々のメンバーを割り当てるには、「メンバー」タブを選択し、データ行または列に追加するメンバーをハイライトします。
 - メンバー・リストを割り当てるには、「リスト」タブを選択し、データ行または列に追加するメンバー・リストをハイライトします。
 - 関数を割り当てるには、「関数」タブを選択し、データ行または列に追加する関数をハイライトします。

4. 強調表示したアイテムを「選択済」領域に追加するか(をクリック)、メンバー関数(子、子孫など)を選択したメンバーに追加してをクリックします

「関係の追加」ボタンは、「メンバー」タブのみで使用できます。

5. オプション: 「選択済」領域で、「表示」をクリックして「プレビュー」を選択し、選択したメンバーを確認します。

詳細は、[36ページの選択したメンバーのプレビュー](#)を参照してください。

6. オプション: 選択したメンバーごとに行または列を割り当てて挿入するには、「選択したアイテムを別々の行に配置」または「選択したアイテムを別々の列に配置」を選択します。

このオプションは、「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでのみ使用可能です。

7. 「OK」をクリックして、レポート・デザイナーに戻ります。

ページ軸のメンバーの割当て

グリッドのページ軸にメンバーを割り当てることができます。ページ軸のメンバーを選択してレポートを実行すると、各ページ・メンバーのグリッドが生成されます。複数のページ・メンバーを含むグリッドをチャートが参照している場合は、ページ・メンバーごとに新しいチャートが生成されます。

たとえば、ページ軸にシナリオ・ディメンションとエンティティ・ディメンションの次のメンバーを割り当てるとします。

- ・ シナリオ・ディメンションの目標1と目標2
- ・ エンティティ・ディメンションのラジオ販促部とWeb販促部

レポートを表示すると、ページ軸のメンバーのすべての組合せのデータがフォーマットされて読み込まれます。レポートには、4つのグリッド(ページ・メンバーの組合せごとに1つのグリッド)が含まれます。

どのメンバーの組合せでも選択できます:

- ・ 目標1: ラジオ販促部
- ・ 目標1: Web販促部
- ・ 目標2: ラジオ販促部
- ・ 目標2: Web販促部

ページ軸のディメンションの追加と変更については、[64ページのグリッドの追加](#)を参照してください。



注:

Financial Reportingでレポートを実行すると、ページ軸のメンバー(および対応するデータ)がすべて取得されます。ページ軸のメンバー数が多いレポートを実行すると、パフォーマンスに影響することがあります。

▶ ページ軸にメンバーを割り当てるには:

1. レポートを開きます。
2. 「ページ」バーで、ディメンションを選択します。
3. 式バーで、ディメンション名のボタンを選択します。



注:

ディメンションのメンバー名がわかっている場合は、式バーのテキスト領域にメンバー名を入力します。たとえば、メジャー・ディメンションに「収益、販売」と入力します。チェック・マークをクリックして、メンバーの選択を確認します。

4. 「メンバー選択」ダイアログ・ボックスで、ページ軸で使用するメンバーを選択して「OK」をクリックします。

特殊メンバーの割当て

「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスを使用して、特殊メンバー(プロンプト、Same As関数、現在の視点、ユーザーの視点)を選択できます。

- ・ プロンプトは、レポートの実行時にメンバーの選択をユーザーに求める変数のように動作します。設計時にディメンションとデフォルト値を決定し、ユーザーがレポートの生成時にメンバーを選択します。プロンプトでは、レポートの実行時にユーザーが選択できるディメンション・メンバーをレポート・ライターでフィルタすることもできます。
- ・ Same As関数は、列または行のメンバーを選択するのに、他の列または行と同じ設定を使う場合に使用します。

- ・現在の視点は、レポートの実行時にディメンションのメンバーを指定するPOVの変数として動作します。
- ・ユーザー視点は、ブックのPOVのメンバーとして選択できます。パラメータは、エンド・ユーザーが変更できます。

メンバーの選択用のプロンプトの設定

プロンプトにより、参照者はディメンションへのメンバーの割当てが可能になります。プロンプトは、設計時に設定します。レポート設計者は、ディメンションに割り当てるデータのタイプを制限できます。「プロンプトに応答」ダイアログ・ボックスにメンバー名、説明(Oracle Hyperion Financial Managementデータベース接続の場合)、別名(EssbaseまたはPlanningデータベース接続の場合)、またはメンバー名と説明または別名の両方を表示するかどうかも指定できます。

たとえば、製品ラインからユーザーが選択できるレポートを作成するとします。レポート設計者はプロンプトを製品のメンバーとして選択して、特定の製品ラインを選択します。レポートを実行するエンド・ユーザーは、これらの製品ラインから選択します。

▶ メンバーの選択用のプロンプトを設定するには:

1. レポートを開きます。
2. プロンプトを割り当てるディメンションのセルをダブルクリックします。
3. 「メンバー」タブの「使用可能」領域で、「プロンプト:(ディメンション名)」を選択して、「選択済」領域に移動します。
4. 「OK」をクリックします。

「プロンプトの定義」ダイアログ・ボックスが表示されます。

5. オプション: プロンプトに回答するときを選択できるものを、特定のデフォルト・メンバーかメンバー・リスト(またはその両方)に制限するには、次のいずれかのアクションを行います。

- ・メンバー名がわかっている場合は、「デフォルト・メンバー」にメンバー名を入力するか、「デフォルト・メンバー」検索ボタンをクリックします。プロンプトに複数のメンバーを入力する場合は、各メンバーをカンマで区切る必要があります。メンバーの選択の詳細は、[24ページのデータの行と列のメンバーの割当て](#)を参照してください。



注:

「デフォルト・メンバー」を空白にした場合は、ユーザーがレポートを実行するとき、またはバッチを作成するときに「プロンプトに回答」ダイアログ・ボックスにデフォルト・メンバーが表示されません。ユーザーは、空白のデフォルトを受け入れずに、メンバーを指定する必要があります。メンバーを選択しない場合、レポートは実行されません。

- ・メンバー・リストがわかっている場合は、「選択リスト」ボタンをクリックして、メンバーのリストを選択します。プロンプト用に複数のメンバー・リストを指定する場合は、メンバー・リストをカンマで区切る必要があります。詳細は、[39ページのメンバー・リストの定義](#)を参照してください。
6. プロンプトのメンバー・ラベルから、レポートの実行時に「プロンプトに回答」ダイアログ・ボックスに表示されるラベルを選択します:
 - ・データベース接続がEssbaseまたはPlanningの場合は、「メンバー名」、「別名」、または「メンバー名と別名」を選択します。

- Planningの場合は、「メンバー名」、「別名」または「メンバー名と別名」を選択します。
- データベース接続がFinancial Managementの場合は、「メンバー名」、「説明」または「メンバー名と説明」を選択します。
- Essbase接続の場合は、「メンバー名」、「別名」または「メンバー名と別名」を選択します。

7. 「OK」をクリックします。

Same As関数の参照の設定

Same As関数を使用すると、設計者は、別の行または列からメンバー選択を取得できます。Financial ReportingのSame As関数には、次のような特徴があります。

- Same As関数で参照するメンバーは、レポート内で常に同じディメンション、同じタイプのデータベース接続、同じグリッドにあるメンバーになります。
- Same As関数で参照するメンバーは、グリッドの行または列のメンバー選択に対してのみ使用可能です。Same As関数は、次のメンバー選択として使用できません。
 - ページ軸
 - グリッドのPOV
 - ユーザーのPOV
 - ブックのPOV
 - バッチのPOV
 - プロンプトのデフォルト・メンバー選択
 - プロンプトへの応答
 - Member関数のメンバー・パラメータ(範囲など)
 - ブック・エディタで使用するメンバー選択
- Same As関数は、プロンプトや現在のPOVにメンバー選択を取得する行や列を参照できます。
- Same As関数は、他のSame As関数の参照先を参照できません。
- Same As関数は、行と列のテンプレートで使用することはできません。
- Same As関数は、必ず単独で使用します。別のメンバー選択と組み合わせることはできません。

▶ Same As関数を設定するには:

1. レポートを開き、Same As関数を設定するメンバー選択をダブルクリックします。
2. 「メンバー」タブで、「次のメンバー選択と同じ」を展開し、ディメンションの行または列で**Same As**関数を選択します。次に、「追加」、 をクリックし、ディメンションの**Same As**関数を選択済領域に追加します。
3. 「OK」をクリックします。

現在の視点の設定

設計者は、現在のPOVを設定して、ユーザーのPOVから行、列またはページのメンバーを取得できます。

▶ 現在のPOVを設定するには:

1. レポートを開き、現在のPOVを設定するメンバー選択をダブルクリックします。
2. 「メンバー」タブで、ディメンションの「現在の視点」を選択し、「追加」ボタンをクリックして、 ディメンションの「現在の視点」を「選択済」領域に追加します。
3. 「OK」をクリックします。

関数を使用したメンバーの割当て

関数を使用して、メンバーを動的に選択できます。関数を選択した後、そのパラメータを編集できます。関数の動的使用の詳細は、[114ページの式バーの使用法](#)を参照してください。関数のパラメータの編集の詳細は、[40ページの関数にメンバーを含める](#)を参照してください。



注:

明記してある場合を除き、記載されているすべての関数はEssbaseおよびPlanningでサポートされています。Financial Managementでサポートされている関数は、個別の列に示されています。

▶ 関数を使用してメンバーを割り当てるには:

1. レポートを開きます。
2. ディメンション・セルをダブルクリックします。
3. 「メンバーの選択」で「関数」タブを選択します。
4. 関数をハイライトします。
5. 「追加」ボタン  をクリックし、「(名前)関数の編集」ダイアログ・ボックスを開きます。

「(名前)関数の編集」ダイアログ・ボックス

は、BottomofHierarchy、TopofHierarchy、AllMembers、SuppressSharedMembersなど、パラメータ値が不要な関数では表示されません。

6. 行1の「値」列をダブルクリックし、「検索」ボタンをクリックして値を編集します。
7. [28ページのステップ 2](#)から [28ページのステップ 6](#)を繰り返して、残りの行を編集します。

「メンバー選択」ダイアログ・ボックスと式バーで使用できる関数

表1 「メンバー選択」ダイアログ・ボックスと式バーで使用できる関数

関数	構文	Financial Management	説明
Children	メンバー名の子(含む)	x	指定した親の1レベル下のメンバー
Descendants	<メンバー名>の子孫(含む)	x	指定した親より下のレベルの全メンバー
BottomOfHierarchy	階層ディメンションの最下位	x	レベル0のすべてのメンバー
Siblings	<メンバー名>の兄弟(含む)	x	指定したメンバーと同じ親を持つメンバー

関数	構文	Financial Management	説明
OnSameLevelAs	メンバー名と同じレベル		指定したメンバーと同じディメンションで同じレベルのメンバー
SameLevelAs			同一レベルのすべてのメンバーです。
OfSameGeneration	メンバーと同じ世代		指定したメンバーとディメンションと世代が同じメンバー
Parent	<メンバー名>の親(含む)	x	指定したメンバーの1レベル上のメンバー
TopOfHierarchy	階層ディメンションの最上位	x	階層の最上位のメンバー
SystemMemberList	システム定義メンバー・リスト・レベル(n)、ディメンション	x	指定したシステム定義メンバー・リストに含まれるメンバー
Ancestors	<メンバー名>の祖先(含む)	x	指定したメンバーより上のレベルの全メンバー
AllMembers	階層ディメンションのすべてのメンバー	x	指定したディメンションのメンバー
Member	メンバー	x	指定したメンバー
Members			現在のディメンションのすべてのメンバー
Base	階層ディメンションの基本メンバー	x	階層の基本メンバーまたはレベル0のメンバー。基本メンバー関数は、Financial Managementでのみ使用可能であり、EssbaseおよびPlanningではサポートされていません。EssbaseおよびPlanningについては、BottomOfHierarchyおよびDescendants関数を使用してください。
UserDefined1	ユーザーが定義したすべてのメンバーは選択した属性です	x	Financial Managementのみ。すべてのエンティティとカスタム・ディメンションは、ビュー、ICP、年、期間、シナリオ以外で使用できます。選択した属性のメンバー
UserDefined2	ユーザーが定義したすべてのメンバーは選択した属性です	x	Financial Managementのみ。すべてのエンティティとカスタム・ディメンションは、ビュー、ICP、年、期間、シナリオ以外で使用できます。選択した属性のメンバー
UserDefined3	ユーザーが定義したすべてのメンバーは選択した属性です	x	Financial Managementのみ。すべてのエンティティとカスタム・ディメンションは、ビュー、ICP、年、期間、シナリオ以外で使用できます。選択した属性のメンバー

「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのみで選択できる関数

次の表に示すメンバー関数は、メンバー選択の「関数」タブで選択できます。これらの関数は式バーに動的に入力できません。

表2「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのみで選択できる関数

関数	説明
プロパティ	EssbaseおよびPlanningのみで使用されます。指定したプロパティ値のメンバーを取得します。
UserMemberList	Essbaseのみで使用されます。指定したユーザー定義メンバー・リストのメンバーを取得します。
Match	Financial Management, EssbaseおよびPlanningで使用されます。指定したパターンまたは文字のセットに一致するメンバー。 注: Planningでアスタリスク(*)ワイルドカードを使用する場合は、パターンの最後にアスタリスクを1つだけ付けることができます。
CommonChildren	Financial Managementのみで使用されます。この関数は、エンティティ・ディメンションの共通メンバーに対してのみ有効です。たとえば、次に示すような構造です。 Parent1 ChildA ChildB ChildC Parent2 ChildA ChildB ChildD 共通の子関数は、メンバーを親で置き換えます。この例では、メンバーはParent1で、親はParent2です。したがって、この例でCommonChildrenを使用すると、次の出力が得られます。 Parent2.ChildA Parent2.ChildB Parent2.ChildC これはParent1の子で、Parent2が親として置き換えられています。この例では、ChildAとChildBはParent2の子なので、これらの2つの結果は有効です。しかし、Parent2.ChildCの結果は有効ではなく、何も戻されません。
PeriodOffset	Financial Managementデータベース接続のみで使用されます。この関数では、期間ディメンションでのみ演算オフセットを実行できます。

関数	説明
	<p>注:</p> <p>演算オフセットとは、指定したレベルから前後にどれだけ移動するかを示す数値です。たとえば、次のデータをリストするには: 現在の四半期 翌月 次のようにパラメータを設定します: Member = Current POV Offset = +1 Hierarchy = Dim</p> <p>注:</p> <p>PeriodOffset関数は、常に期間と年の組合せをスパンします。したがって、2002年の1月に対して-2のオフセットを選択すると、表示されるメンバーは2001年11月になります。</p>
RelativeMember	<p>EssbaseおよびPlanningデータベース接続のすべてのディメンションで使用します。この関数は、Financial Managementデータベース接続の年ディメンションでも使用できます。この関数では、演算オフセットを実行できます。</p> <p>注:</p> <p>演算オフセットとは、指定したレベルで前後にどれだけ移動するかを示す数値です。たとえば、Essbaseデータベース接続で次のデータをリストするには: 現在の四半期 翌月 次のようにパラメータを設定します:</p> <p style="text-align: center;">Member = Current Point Of View</p> <p style="text-align: center;">Offset = 1</p> <p style="text-align: center;">Hierarchy = Year</p> <p style="text-align: center;">RelativeMemberList = Lev0, Year</p> <p style="text-align: center;">UseFirstDescendant = checked</p> <p>注:</p> <p>上の例では、UseFirstDescendant = checkedに設定しているので、第1四半期の最初の子孫である1月から計算が始まります。オフセットは+1なので、翌月は2月になります。</p> <p>現在のPOVがQtr1の場合は、次のような結果になります: 現在の四半期翌月 Qtr1 Feb</p> <p>注:</p> <p>時間ディメンションを使用する場合は、同じ暦年のオフセットを指定したレベルと同じにします。たとえば、6月から開始する場合、1月まで戻るオフセットまたは12月まで進むオフセットを設定できます。</p> <p>Financial Managementデータベース接続の場合、次のデータをリストするには: 年 翌年 次のようにパラメータを設定します:</p> <p style="text-align: center;">Year = Current Point Of View for Year</p> <p style="text-align: center;">Offset = 1</p>

関数	説明
	<p style="text-align: center;">Hierarchy = Year</p> <p>現在の視点がYearの場合は、次のような結果になります: 現在の年 翌年 2003 2004</p>
DynamicMemberList	<p>Financial Managementデータベース接続でのみ使用します。この関数では、エンティティ・ディメンションで動的POVを使用するために定義されたメンバー・リストを選択できます。DynamicMemberList関数はPOVに基づき、パラメータとしてエンティティと親(オプション)を取ります。親パラメータが指定されている場合は、リストの列挙から戻されるすべてのエンティティに親の名前が使用されます。親パラメータが指定されていない場合は、置換は行われません。</p> <p>注:</p> <p>強化されたFinancial ManagementのDynamicMemberList機能はFinancial Reportingでは使用できません。</p> <p>エンティティは、POVレベルで定義されたシナリオ、年および期間に基づきます。したがって、グリッドではシナリオ、年および期間は使用されません。グリッドにシナリオ、年または期間を配置した場合、「5200: 問合せを実行中にエラーが発生しました: シナリオ、年、期間は、動的なメンバー・リストの視点で指定する必要があります。」というメッセージが表示されます。</p> <p>注:</p> <p>DynamicMemberList関数は、「リスト」タブまたは「関数」タブから実行できます。「リスト」タブでは、(動的)リストを選択して、エンティティおよび親パラメータを追加します。「関数」タブでは、DynamicMemberList関数を選択して、動的リスト(DynamicNamedGroup)、エンティティおよび親を選択します。</p>
動的時系列メンバー	<p>次の動的時系列メンバーは、Essbase内で定義できます。Financial Reportingの「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスの「関数」タブには、Essbaseデータベースで定義された動的時系列メンバーだけが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • H-T-D (History-to-date、累計) • Y-T-D (Year-to-date、年次累計) • S-T-D (Season-to-date、季節累計) • P-T-D (Period-to-date、期間累計) • Q-T-D (Quarter-to-date、四半期累計) • M-T-D (Month-to-date、月次累計) • W-T-D (Week-to-date、週次累計) • D-T-D (Day-to-date、日次累計) <p>これらのメンバーは、最大8レベルの期間累計レポートを提供します。使用するメンバーの数および使用するメンバーは、データおよびデータベース・アウトラインにより決定されます。</p>

関数	説明
	<p>注:</p> <p>これらのメンバーは、時間ベースのディメンションおよび最下位レベルのデータでのみ使用されます。サンプル・アプリケーションおよび基本データベースに対して年ディメンションを選択すると、「関数」タブに累計、四半期累計および月次累計の動的時系列メンバーが表示されます。</p> <p>動的時系列メンバーの詳細は、『Oracle Essbaseデータベース管理者ガイド』Volume 1を参照してください。</p>
代替変数	<p>「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスで選択されたディメンションのディレクトリに保管された代替変数は、定期的に変更される情報のプレースホルダとして機能します。変数の値は、Essbase管理者によって随時変更されることがあります。代替変数は、レポート期間に依存するレポートの場合に便利です。CurMnthなどの代替変数をサーバーで設定すると、期間に対して割り当てられた値を毎月変更できます。</p> <p>注:</p> <p>「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに表示される使用可能なEssbase代替変数のリストは、Financial Reportingレポート・クライアントを起動したときに取得されます。Essbaseアプリケーション・マネージャを使用して新しい代替変数を追加した場合は、レポート・クライアントを再起動する必要があります。レポートを実行するたびに、すべてのEssbase代替変数の最新の値が使用されます。サンプル・アプリケーションおよび基本データベースに対して年ディメンションを選択すると、「メンバー」タブにCurrMonth代替変数のメンバーが表示されます。代替変数の前には緑の正方形が表示されます。</p> <p>代替変数の詳細は、『Oracle Essbaseデータベース管理者ガイド』Volume 1を参照してください。</p>
SuppressSharedMember	<p>EssbaseおよびPlanningでのみ、重複するメンバーの表示を抑制します。この関数は、DIMBOTTOM、OFSAMEGENまたはONSAMELEVELAS関数と組み合わせた場合にのみ有効です。</p> <p>注:</p> <p>正常に動作させるには、ANDではなくUNIONを使用してください。</p>
Range	<p>EssbaseおよびPlanningデータベース接続では、範囲の開始メンバーと終了メンバーを選択してメンバーの範囲を指定できます。たとえば、年ディメンションを使用した場合、範囲の開始メンバーとして1月を選択し、終了メンバーとして3月を選択すると、第1四半期のすべての月を指定できます。Financial Managementの場合、Range関数は、期間ディメンションにのみ適用されます。たとえば、次のデータをリストするには: 開始期間 終了期間 現在の四半期のメンバーの範囲として、次のパラメータを設定します。 Start Member = July End Member = September Years to Iterate Over = 0 指定した繰返し数により期間ディメンションの範囲が決定されます。たとえば、Years to Iterate Overパラメータに1を指定した場合、レポートは7月から翌年の9月までスパンします。</p>

関数	説明
	注: Range関数にプロンプトを含めている場合は、プロンプトとRange関数を同じグリッドで使用しないでください。
OrderBy	Planningデータベース接続のみで使用できます。メンバー・プロパティを指定して、メンバー選択から戻される順序を指定できます。OrderBy関数には、次の2つの必須パラメータがあります。 <ul style="list-style-type: none"> Property - Member Name(メンバー名)オプションとメンバーのプロパティのリストを指定します。デフォルト値はNameです。 Direction - 方向のオプション(昇順、降順、階層昇順、階層降順)を指定します。 OrderBy関数は、「選択済」リストにあるすべてのメンバー選択に適用されます。
SortHierarchy	Web Analysisでのみ階層ごとにアウトラインの順序でメンバーをソートします。この関数は、Essbaseレポート・スクリプト・コマンド<sortHierarchyに変換されます。詳細は、Essbaseのドキュメントを参照してください。

メンバーの検索

編集するメンバーを検索できます。検索は、テキスト文字列またはプロパティ(名前および説明)を使用して実行できます。空白スペースを区切り記号として使用して、同時検索を実行することもできます。文字列を引用符で囲むと、完全一致検索を実行できます(文字間の空白スペースを含む)。

以前の検索条件文字列は最大25個まで保存されます。リストまたは関数を検索する場合は、「次を検索」または「前を検索」ボタンを使用して、この機能をアクティブにする必要があります。



注:

Financial Managementでは、エンティティを検索する場合、parent.entityを検索する必要があります(たとえばD62VIELO.D62475LO)。エンティティだけを検索する場合は、エンティティの前にワイルドカードを配置する必要があります(*D62475LOなど)。

表3 メンバーの検索のオプション

オプション	説明
「検索」テキスト・ボックス	検索を実行する文字を入力するか、保存された検索条件文字列をリストから選択します。検索文字列には、検索文字列の一部、単語、または複数の単語を使用できます。
	メンバーの検索に使用します。「検索」ボタンをクリックすると、検索条件を満たすメンバーが表示されます。
ワイルドカードを使用	「検索」テキスト・ボックスでワイルドカード記号(*および?)を使用して、指定したメンバーを検索できます。デフォルトでは、「ワイルドカードを使用」は使用可能になっています。 <ul style="list-style-type: none"> 疑問符(?)は、任意の1文字を表します。

オプション	説明
	<ul style="list-style-type: none"> アスタリスク(*)は、任意の複数の文字を表します。 <p>注:</p> <p>検索条件にスペースを含める場合は、検索フレーズを二重引用符で囲みます。たとえば、*IC Offset*は""IC Offset""と指定します。IC Offset*のように*ワイルドカードを最後にのみ指定する場合は、引用符で囲む必要はありません。</p>
Parameters...	<p>クリックすると、「検索」テキスト・ボックスの検索パラメータが設定されます。次のパラメータ・オプションから選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> 検索 - 検索するメンバーのプロパティを選択します。 ワイルドカード検索(デフォルト) - 「検索」テキスト・ボックスにテキストとワイルドカード記号(*および?)を挿入して、指定したメンバーを検索します。*は複数の文字を表し、?は1文字を表します。 大文字と小文字を区別した検索 - 「検索」テキスト・ボックスにテキストを入力して指定したメンバーを検索します。このとき、大文字と小文字が区別されます。
(前を検索)	リストまたは関数の検索に使用します。検索条件に一致する前のアイテムがハイライトされます。
(次を検索)	リストまたは関数の検索に使用します。検索条件に一致する次のアイテムがハイライトされます。

▶ メンバーを検索するには:

1. レポートを開き、ディメンション・セルをダブルクリックします。
2. 「使用可能」ダイアログ・ボックスで、テキストを入力するか保存されている条件文字列を選択します。

メンバー選択中に、ワイルドカード・オプションが自動的に使用可能になります。

3. 次のいずれかのアクションを行います:

- ・ メンバーを検索するには、「検索」  をクリックします。
- ・ リストまたは関数を検索するには、「次を検索」または「前を検索」をクリックします。

4. 「OK」をクリックしてレポートに戻ります。

メンバーのソート

メンバーをソートして、メンバー選択内の表示を見やすくできます。デフォルトでは、メンバーはデータベース接続のソート順で表示されます。

希望する順序で選択可能なメンバーをソートできます。また、レポートのデータの行または列の順序に一致するようメンバーをソートできます。選択したアイテムは、メンバー選択に表示される順序に従ってレポートで評価および表示されます。

プロパティごとにメンバーをソートして、昇順または降順で表示できます。デフォルトでは、リストは数字、アルファベットの順にソートされます。

ビューを切り替えたときにリストが自動的にソートされるように設定したり、リストを手動でソートしたりできます。

▶ メンバーを手動でソートするには:

1. レポートを開き、ディメンション・セルをダブルクリックします。
2. 「選択したメンバー」リストで、「表示」、「ソート」の順に選択します。
3. (ディメンション)アイテムのソートで、1番目のソート方法のプロパティを選択して  をクリックします。
4. 「OK」を2回クリックします。

選択したメンバーのプレビュー

レポートを実行する前に、選択したメンバーまたはメンバー・リストをプレビューできます。表示されるメンバーは、評価されたメンバー・リストまたは関数から戻されるメンバーです。

▶ メンバーをプレビューするには:

1. レポートを開き、セルをダブルクリックします。
2. **Select**「メンバーの選択」で「選択済」領域をクリックします。
3. 「表示」をクリックして「プレビュー」を選択します。

別のアプリケーションのメンバーのコピー

Excelスプレッドシートなどのアプリケーションから有効なメンバーをコピーして、別のアプリケーションの対応するディメンションの新しいメンバーとして貼り付けることができます。たとえば、Excelの年ディメンションに1月、2月、3月、4月、5月、6月、8月、9月、10月、11月、12月のメンバーがある場合、これらのメンバーを年ディメンションを含むグリッドにコピーできます。セカンダリ・データベース接続を含む行または列にメンバーを貼り付けると、データベース接続のタイプはメンバーとともにコピーされます。

▶ 別のアプリケーションのメンバーをコピーするには:

1. レポートにコピーするメンバーを含むアプリケーションを開きます。
2. Financial Reportingで使用するメンバーをコピーします。
3. Financial Reportingに切り替えます。
4. 「ファイル」を選択してから「開く」を選択します。
5. レポートを開きます。
6. グリッドで、メンバーのコピー先のディメンションを含むセルを選択します。
7. 式バーでコンテンツをクリアし、右クリックして「貼付け」を選択します。
8. 式バーに表示されるメンバーとメンバーの間にカンマを追加します。
9.  をクリックして、メンバー名を確認します。

メンバーの追加と除去

ディメンションに対してメンバーの除去または追加を行うことができます。メンバーを除去すると、レポートの出力が変更され、レポートのコンテンツを詳細に制御できます。

▶ 1つのセルに含まれているメンバーを追加または除去するには:

1. メンバーを含むセルをクリックします。式バーのボタンにディメンション名が、テキスト領域にメンバー名が表示されます。
2. 式バーで、次のいずれかのアクションを行います。

- コマンド・ボタンに表示されているディメンション名をクリックして、「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスを開きます。

○

「選択済」領域から1つ以上のアイテムを除去するには、アイテムを選択して、「削除」ボタン  をクリックします。

○すべてのアイテムを除去するには、「すべて削除」ボタンをクリックします

- メンバーを除去または追加して式バーのテキスト領域を編集します。メンバーはカンマで区切ります。  をクリックしてメンバー名を確認します。

▶ 別々の行や列にあるメンバーを除去するには:

1. 行または列を選択します。
2. 行または列を右クリックして、「削除」を選択します。

条件に基づくメンバーの選択およびフィルタリング

サブトピック

- [条件に基づいた複数のメンバーの選択](#)
- [フィルタの定義による表示メンバーの指定](#)

条件に基づいた複数のメンバーの選択

ユーザー定義の条件に基づいてメンバーを動的に選択できます。条件は、メンバー、ブール演算およびコマンドの式を作成して定義します。

ブール演算子を使用すると、レポートに対してメンバーの正確な組合せを指定できるので、大量のデータを扱う場合に便利です。AND、OR、UNIONおよびNOTブール演算子を式のコマンドと組み合わせて使用して、メンバー選択を絞り込みます。

▶ 条件を指定して複数のメンバーを選択するには:

1. レポートを開きます。
2. メンバーを割り当てるディメンションのセルをダブルクリックします。
3. 「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスの「選択済」領域を右クリックして、「詳細設定」をクリックします。



注:

条件を作成するには、「選択済」領域に少なくとも2つのメンバーが表示されている必要があります。

4. 次の演算子や記号を1つ以上使用して、式を作成します:

- ブール演算子NOTを式に追加するには、「**NOT**」を選択します。NOTは、選択した条件の逆の条件を指定します。
- 式に開始文字を追加するには、左カッコ(を入力します。
- 式に終了文字を追加するには、右カッコ)を入力します。
- 「**演算子**」列をクリックして、「**AND**」、「**OR**」、または「**UNION**」を選択します。
 - すべての条件を満たす必要がある場合は、AND演算子を使用します。
 - いくつかの条件のうち1つを満たす必要がある場合は、OR演算子を使用します。
 - データを結合するには、UNION演算子を使用します。



注:

3つのメンバーを使用する場合は、2組みのカッコを使用する必要があります。たとえば、市場 (Market)の子孫を選択して東部(East)、西部(West)および南部(South)を除外する場合、詳細なメンバー選択問合せは、Descendants of Market AND NOT (East AND NOT (West AND NOT SOUTH))となります。

5. 「**OK**」をクリックしてレポートに戻ります。

フィルタの定義による表示メンバーの指定

フィルタを定義して、条件を満たすメンバーだけを表示します。次に、フィルタされたリストからレポートのメンバーを選択します。たとえば、米国部門のみの地域を表示できます。フィルタは、表示されるメンバーの数を減らす場合に便利です。

▶ フィルタを定義するには:

1. レポートを開きます。
2. メンバーを編集するディメンションのセルをダブルクリックします。

「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

3. 「**使用可能**」領域の内側を右クリックして、次のいずれかを選択します:

- 「**フィルタ**」、「**カスタム**」の順に選択して、使用可能な関数のリストをハイライトします。次に、「**追加**」ボタ



ンをクリックして、ハイライトしたアイテムを「**選択済**」領域に移動します。

- 「**フィルタ**」、「**事前定義**」の順に選択して、使用するリストをハイライトします。

4. 「**OK**」をクリックします。
5. 「**OK**」をクリックしてレポートに戻ります。

メンバー・リストの定義および編集

サブトピック

- [メンバー・リストの定義](#)

メンバー・リストの定義

メンバー・リストは、ユーザー定義の保存された問合せまたはシステム定義のメンバー・リストです。システム定義のリストは、一般的にデータベース管理者が作成します。メンバー・リストには、メンバー、その他のメンバー・リストおよび関数を含めることができます。



注:

ユーザー定義リストは、Essbaseをデータベース接続に使用した場合にのみ作成できます。メンバー・リストの最大サイズは、4Kです。

▶ メンバー・リストを定義するには:

1. レポートを開きます。
2. メンバーを割り当てるディメンションのセルをダブルクリックします。
3. 「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスで、次のいずれかのアクションを行います。
 - ・ 「メンバー」タブで、メンバー・リストに含めるメンバーをハイライトして、「使用可能」領域内を右クリックして、「ハイライト済項目の保存」をクリックします。
 - ・ 「リスト」タブで、「使用可能」領域内を右クリックして、「作成」をクリックします。
4. 「(ディメンション名)リストの作成」ダイアログ・ボックスの「使用可能」領域で、メンバー・リストに含めるメンバー、メンバー・リスト、および関数を選択し、「追加」ボタン  または「関係の追加」ボタン  をクリックします。
5. オプション: 関数を編集するには、[40ページの関数にメンバーを含める](#)に説明されている手順を使用します。
6. 「OK」をクリックします。
7. メンバー・リストの名前と説明を入力して、「OK」をクリックします。



注:

メンバー・リストを入力するときは、引用符(")を使用しないでください。引用符を使用すると、引用符付きで名前がFinancial Reportingに保存されますが、その名前は後で選択できません。

8. 「OK」をクリックしてレポートに戻ります。

メンバー・リストの編集

ユーザー定義のメンバー・リストを編集できます。たとえば、メンバー・リストに対してメンバーや関数の追加または除去を行うことができます。

▶ メンバー・リストを編集するには:

1. レポートを開き、ディメンション・セルをダブルクリックします。
2. 「メンバーの選択」で「リスト」タブを選択します。

3. メンバー・リストをダブルクリックします。
4. ...リストの編集ダイアログ・ボックスで、次のいずれかを行います:
 - 「選択済」リストにメンバーを追加するには、「メンバー」、「リスト」、または「関数」タブでアイテムをハイライトして、「追加」または「関係の追加」をクリックします。
 - リストからメンバーを除去するには、「選択済」領域でメンバーをハイライトして、「除去」をクリックします。
 - すべてのアイテムを除去する場合は、「すべて削除」をクリックします
5. 「OK」をクリックします。
6. 「OK」をクリックしてレポートに戻ります。

関数にメンバーを含める

関数のパラメータ値を変更して関数を編集できます。たとえば、指定したメンバーを関数に含めるか除外するかを指定したり、関数の階層値を変更することもできます。

▶ 関数を編集するには:

1. レポートを開き、関数を編集するデータの行や列、またはその見出しのセルを選択します。
2. 「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスの「選択済」領域で、編集する関数をダブルクリックします。
3. 行1の「値」列をダブルクリックし、「検索」ボタンをクリックして値を編集します。
4. [40ページのステップ 1](#)から [40ページのステップ 3](#)を繰り返して、残りの行を編集します。

Planningデータベース・ソースのメンバーのアクセス権

グリッドでデータベース接続としてPlanningを使用する場合、Financial Reportingでは、特定のディメンションのメンバーに対するアクセス権が付与されます。これらのディメンションには、会計、エンティティ、シナリオ、およびバージョンがあります。「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスには、アクセス権に関係なく、Planningデータベース接続のすべてのメンバーが表示されます。そのため、レポートの実行時に戻されないメンバーをグリッドに配置できます。選択したメンバーは、レポートの出力に影響します。たとえば、視点またはページ軸でユーザーがアクセスできないメンバーを選択すると、エラー・メッセージが戻されます。

エンド・ユーザーに対するアクセス権セキュリティの設定の詳細は、『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace管理者ガイド*』を参照してください。

次の4つのシナリオで、グリッドのディメンションやメンバーに有効なものと無効なものが含まれている場合に、どのような値が戻されるかについて説明します。

どのシナリオでも、ユーザーは、Planningデータベース接続を使用してレポートを実行し、次のディメンションとメンバーのアクセス権を持っています。

- 勘定科目: 販売、利益
- バージョン: 第1版、第3版、最終版
- エンティティ: 北部、カナダ

- ・ シナリオ: 予算

シナリオ1

ユーザーは、次のグリッドのレポートを実行します。

ページ: 予算

	ドラフト第1版	ドラフト第2版	ドラフト第3版
北部	###	###	###
中部	###	###	###
南部	###	###	###

結果: ユーザーは、中部や南部、第2版のアクセス権を持っていないので、次のようなレポートになります。

ページ: 予算

	ドラフト第1版	ドラフト第3版
北部	23.89	12.90

シナリオ2

ユーザーは、次のグリッドのレポートを実行します。

ページ: 実績

	ドラフト第1版	ドラフト第2版	ドラフト第3版
北部	###	###	###
中部	###	###	###
南部	###	###	###

結果: ユーザーはページのシナリオ: 実績のアクセス権を持っていないので、ページは表示されず、アクセス権がないことを示すエラー・メッセージが表示されます。

シナリオ3

ユーザーは、次のグリッドのレポートを実行します。

ページ: 予算

	ドラフト第1版	ドラフト第2版	ドラフト第3版
ロンドン	###	###	###
パリ	###	###	###
ニューヨーク	###	###	###

結果: ユーザーは、行のエンティティ・ディメンションのアクセス権を持っていないので、ページは表示されず、アクセス権がないことを示すエラー・メッセージが表示されます。

シナリオ4

ユーザーは、次のグリッドのレポートを実行します。

ページ: 予算

	バージョンの子孫
エンティティの子孫	###

結果: レポートのデータは次のようになります。

ページ: 予算

	ドラフト第1版	ドラフト第3版	最終バージョン
北部	23.89	12.90	67.12
カナダ	2.67	8.90	54.78

3

チャートのカスタマイズ

この項の内容:

チャートについて	43
チャートのフォーマット	45
チャートのタイトルとラベルのフォーマット	54

この章では、作成できるチャートの種類と、チャートをフォーマットする方法について説明します。次のトピックで、チャートをカスタマイズする基本的なフレームワークを作成します。

チャートは、レポートのグリッドのレポート・データをグラフィック表示したものです。チャートはグリッドからデータを動的に取得するので、グリッドのデータが変更されると、チャートが自動的に更新されます。

チャートの次のコンポーネントを定義およびフォーマットできます。

- チャートのタイプとデータ・コンテンツ
- チャートの属性(タイトル、タイトルの角度、フォントの角度、背景のフォーマットなど)
- 凡例と軸の情報(ラベル、フォント、背景色、方向など)
- チャートのタイプに固有のフォーマット・オプション(棒グラフの棒の幅など)
- レポート内のチャートの位置(縦横)

コントロール・グリッドを非表示にして、レポート内にチャートのみを表示できます。詳細は、[155ページの行、列、グリッドの非表示](#)を参照してください。

レポートにチャートを追加する方法の詳細は、[70ページのチャートの挿入](#)を参照してください。

チャートについて

サブトピック

- [棒グラフ](#)
- [折れ線グラフ](#)
- [複合チャート](#)
- [円グラフ](#)

チャートを作成して、レポートでデータを視覚的に示します。様々なタイプのチャートを使用して、トレンドや傾向を示し、違いや進歩を強調したり、レポートに値や情報のチャートやグラフを追加したりできます。

棒グラフ、折れ線グラフ、複合チャートおよび円グラフを設計できます。次の項では、これらのチャート・タイプについて説明します。

棒グラフ

棒グラフは、最大50のデータ・セットを表示できます。各データ・セットには、値の任意のメンバーを割り当てることができます。棒グラフでは、次のアイテムのプロパティを使用できます。

- 表示形式
- 凡例
- 軸
- 要素のスタイル
- 棒

対応する棒をグループ化したり重ねたりしてデータ・グループを表示できます。また、個別の行に表示することもできます。棒、三角形棒グラフ、ひし型棒グラフまたは円柱グラフの形状を適用して、3D効果で棒を表示することもできます。

折れ線グラフ

折れ線グラフは、最大50のデータ・セットを表示できます。X軸には均一の間隔が自動的に設定されます。折れ線グラフでは、次のアイテムのプロパティが使用できます。

- 表示形式
- 凡例
- 軸
- 要素のスタイル
- 線

複合チャート

複合グラフは、棒グラフと折れ線グラフの組合せです。複合グラフは、一般的に比較目的で使用されます。複合チャートでは、棒データ・セットと折れ線データ・セットのグループを使用できます。棒グラフと折れ線グラフのすべての表示パラメータが使用されます。2つのデータ・セット(棒のレンダリングを行うデータ・セットと折れ線のレンダリングを行うデータ・セット)を選択する必要があります。複合グラフでは、次のアイテムのプロパティを使用できます。

- 表示形式
- 凡例
- 軸

- 要素のスタイル
- 棒
- 線

円グラフ

円グラフは、円のスライスで1つのデータ・セット・セグメントを表します。円グラフでは、次のアイテムのプロパティを使用できます。

- 表示形式
- 凡例
- 要素のスタイル
- 円グラフ

チャートのフォーマット

サブトピック

- [チャートのデータの定義](#)
- [「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスの使用方法](#)
- [チャート内のフォントの設定](#)
- [チャートの枠線と背景のオプション](#)
- [棒グラフと複合チャートの棒のフォーマット](#)
- [折れ線グラフと複合チャートの線のフォーマット](#)
- [複合チャートのオプションの定義](#)
- [円グラフのフォーマット](#)
- [チャートの背景オプションの設定](#)
- [レポート上のチャートの位置](#)
- [グリッド線の定義](#)
- [データ・セットのスタイルの定義](#)
- [チャートのサイズの変更と移動](#)

チャートをフォーマットして、レポートでのチャートの外観とレイアウトをカスタマイズします。チャートをフォーマットして、棒グラフや複合チャートを含む様々なチャート・タイプを使用してデータを表すこともできます。チャートのフォーマットを変更するには、「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスを使用します。このダイアログ・ボックスには、「チャートのプロパティ」プロパティ・シートからアクセスします。

チャートのデータの定義

「チャートのプロパティ」プロパティ・シートを使用して、チャート・データを定義します。グリッドを制御して、表示するデータを含む行と列を識別できます。データ範囲の連続した(または連続しない)行と列を選択してグリッドを制御し、データまたは式の行と列を参照できます。データ・セットに自動計算を含めることや、データ・セットから自動計算を除外することもできます。

折れ線グラフ、棒グラフ、または複合チャートを設計する場合は、グリッドの複数の行または列を参照できます。円グラフを設計する場合は、グリッドの1つの行または列を参照できます。複合チャートを定義する場合は、棒グラフと折れ線グラフのデータ行および列を指定します。

展開可能な集約行または集約列をチャートに表示できます。たとえば、チャートで行1を指定し、行1に含まれている関数が10個の子メンバーを取得する場合は、チャートには、10個のデータ・セット(各子メンバーに1個のデータ・セット)が示されます。

▶ チャートのデータを定義するには:

1. レポートを開き、グリッドとチャートを作成します。
2. 「グリッド」ドロップダウン・リストから、このチャートで参照するグリッドの名前を選択します。グリッドは、現在のレポート上に存在する必要があります。
3. 「凡例に入れるグリッドのアイテム」で、「行」(行データを参照する場合)または「列」(列データを参照する場合)を選択します。
4. すべてのタイプのチャート(棒グラフ、折れ線グラフ、複合チャートまたは円グラフ)に表示するデータの範囲を指定します。「データ範囲」リスト・ボックスで、含める行を「行」リストのチェック・ボックスで選択するか、含める列を「列」リストのチェック・ボックスで選択します。



注:

データ範囲に指定する行と列は、連続していてもしていなくてもかまいません。

5. オプション: データ・セットの自動計算を設定する場合は、「自動計算を含める」チェック・ボックスを選択します。
6. オプション: チャートの前に改ページを挿入する場合は、「前に改ページ」チェック・ボックスを選択します。
7. 「チャートのフォーマット」ボタンをクリックし、チャートにフォーマットを適用します。46ページの「[チャートのフォーマット](#)」ダイアログ・ボックスの使用方を参照してください。
8. オプション: 「レポート上のオブジェクトの位置」ドロップダウン・リスト・ボックスを使用して、オブジェクトの水平および垂直位置を変更します。詳細は、52ページの[レポート上のチャートの位置](#)を参照してください。
9. 関連コンテンツを追加するには、「関連コンテンツの追加」チェック・ボックスを選択し、「設定」をクリックします。130ページの[関連コンテンツの適用](#)を参照してください。
10. 「名前」フィールドに、チャートの名前を入力します。
11. チャートとデータを表示するには、「ファイル」を選択し、「印刷プレビュー」または「Webプレビュー」を選択します。

「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスの使用法

「チャートのプロパティ」シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックして、チャートのフォーマットを変更します。「チャートのフォーマット」に表示されるタブは、「チャートのプロパティ」プロパティ・シートで選択したチャートのタイプに応じて異なります。たとえば、円グラフを選択した場合、ダイアログ・ボックスに「円グラフのオプション」タブが表示されますが、「棒グラフのオプション」タブは表示されません。



注:

使用するチャートのタイプによって、「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスで選択できるオプションが異なります。

表4「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスのタブ

タブ	説明
表示形式	<p>「表示形式」タブを使用して、すべてのチャート・タイプのチャートのタイトル、チャートの枠線、フォント、グリッド線、グリッド線のスタイル、グリッド線の色、グリッドの背景色を指定します。チャート・グリッドの奥行きも指定できます。「表示形式」タブでは、チャートのプレビューも表示できます。</p>
凡例	<p>「凡例」タブを使用して、すべてのチャート・タイプの凡例プロパティを指定します。チャート上での凡例の位置を指定し、凡例のタイトルを定義できます。凡例タイトルのフォント、フォント・スタイル、フォント・サイズおよびテキストの効果を設定できます。「繰返しのラベルを抑制」のデフォルト設定は使用不可ですが、使用可能にしてグリッドの設定を継承できます。詳細は、54ページのチャート凡例のタイトルの定義を参照してください。</p>
軸	<p>「軸」タブを使用して、軸のプロパティ(メタデータ、プライマリ軸、セカンダリ軸のタイトルおよび軸ラベル)を指定します。プライマリおよびセカンダリ軸ラベルを指定して、両方のフォント・オプションを指定できます。値のデフォルトまたはカスタム範囲を使用して、プライマリおよびセカンダリ軸のデータ・ラベルも指定できます。フォント・オプション(フォント、フォント・スタイル、フォント・サイズおよびテキストの効果)も指定できます。</p> <p>注:</p> <p>棒グラフ、複合チャートおよび折れ線グラフで作業する場合は、セカンダリ軸のタイトル・ラベルを設定できます。これらのタイトルとラベルには、パーセンテージを表す0から100までの値が表示されます。複合チャートで作業する場合は、値のデフォルトまたはカスタム範囲を使用して、セカンダリ軸のデータ・ラベルを表示できます。</p> <p>メタデータ・ラベルを表示して、ラベルの表示のフォントの角度を指定できます。メタデータ・ラベルのその他のフォント・オプションも変更できます。詳細は、55ページのチャートの軸のタイトルの定義を参照してください。</p> <p>注:</p> <p>円グラフを除くすべてのチャート・タイプの軸プロパティを定義できます。</p>
要素のスタイル	<p>「要素のスタイル」タブを使用して、チャート・タイプに応じてデータ・セットの棒グラフと円グラフの塗りつぶし、線スタイル、ライン・マーカのスタイル、マーカ・サイズ、および線の幅を指定します。たとえば、円の塗りつぶしは円グラフでのみ指定できます。棒の形は、棒グラフと複合チャートで指定できます。データ・セットを選択して、そのデータ・セットに適用するパターン、スタイル、色および形状を指定できます。各パターンまたは塗りつぶしの指定では、最大2つの色を指定できます。グラフ内の棒に色を適用する際は、2つの異なる色を切り替えることができます。</p>
折れ線グラフのオプション	<p>折れ線グラフをフォーマットする場合は、「折れ線グラフのオプション」タブのオプションを使用して、線のタイプ(行、パーセント、または上下に重ねるラベル表示)を指定します。点の値を表示し、チャートに表示される値のフォント・オプションを設定することもできます。「折れ線グラフのオプション」では、フォーマットを変更する際に折れ線グラフのプレビューを表示できます。</p>
棒グラフのオプション	<p>棒グラフをフォーマットする場合は、「棒グラフのオプション」タブを使用して、棒グラフの棒のタイプ(グループ、スタックまたは行)および向き(垂直または水平)を指定します。グラフの棒の幅(0から100)を指定できます。棒の枠線のスタイルおよび幅(0から20)を選択できます。点の値を表示して、グラフに表示されるデータ値のフォント・オプションを設定できます。</p>

タブ	説明
	「棒グラフのオプション」タブでは、フォーマットを変更する際に棒グラフのプレビューを表示できます。
折れ線グラフと棒グラフのオプション	<p>複合チャートをフォーマットする場合は、「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスに「折れ線グラフのオプション」と「棒グラフのオプション」タブが表示されます。これらのタブの詳細は、この表の「折れ線グラフのオプション」タブおよび「棒グラフのオプション」タブの説明を参照してください。</p> <p>注:</p> <p>複合チャートをフォーマットする場合は、「チャートのプロパティ」シートには、折れ線グラフ用と棒グラフ用のデータの範囲を選択するオプションが表示されます。</p>
円グラフのオプション	円グラフのフォーマット・オプションを指定するには、「円グラフのオプション」を使用します。円グラフの角度の変更、区切り距離の指定(円グラフの最初のスライスにのみ適用されます)および円グラフに表示するスライス値の選択(パーセント、データまたはラベル)を行うことができます。これらの値のフォント・オプションもフォーマットできます。スライス値の位置(外側または内側)を指定できます。スライスの枠線のスタイル(実線、点線、波線、または一点鎖線)およびスライスの枠線の幅(0から20)を指定できます。「円グラフのオプション」タブでは、フォーマットを変更する際に円グラフのプレビューを表示できます。

チャート内のフォントの設定

チャートで作業する場合、フォントをフォーマットして表示形式をカスタマイズできます。フォント・フォーマットのオプションには、フォントの選択、フォント・サイズ、色、およびフォントの角度(0から45度単位で315度まで)が含まれます。

「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスのすべてのタブに表示される「フォーマット」ボタン  をクリックして、フォントをフォーマットできます。

「フォーマット」ダイアログ・ボックスでは、チャートに戻らずにフォント・オプションの選択をプレビューできます。フォントのフォーマットの詳細は、[150ページのフォントのオプションの変更](#)を参照してください。

チャートの枠線と背景のオプション

「枠線と背景」ダイアログ・ボックスを使用して、チャートの枠線と背景をフォーマットできます。このダイアログ・ボックスにアクセスするには、「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスの「枠線と背景」アイコン  をクリックします。

枠線と背景のフォーマット・オプションには、枠線のタイプ、枠線色、背景色および枠線幅があります。

棒グラフと複合チャートの棒のフォーマット

データ・セットをグループ化し、チャート上での向きを指定して棒グラフまたは複合チャートの棒を表示できます。点の値も棒グラフまたは複合チャートに表示できます。棒の形状と幅および棒の枠線を変更できます。

チャートで棒をどのように表示するかを決めるときは、次のことに注意してください。

- 棒の向きを垂直に指定すると、横軸から垂直に棒が伸びます。
- 棒の向きを水平に指定すると、縦軸から水平に棒が伸びます。
- 棒を3Dで表示できます。3つめの次元である奥行きは、3D効果またはシャドウのピクセルの奥行きを表します。
- 棒の幅は、使用可能なスペースのパーセンテージとして棒の相対的な幅を表します。小さい値を設定すると、棒の間隔が広がります。
- チャートに表示される棒の形を指定できます。
- 「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスの「要素のスタイル」タブを使用して、データ・セットごとに網掛け(パターンと色)を適用できます。詳細は、[47ページの表 4](#)を参照してください。

▶ 棒グラフや複合チャートの棒をフォーマットするには:

1. レポートを開き、棒グラフまたは複合チャートを作成するか選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「棒グラフのオプション」タブを選択します。
4. 「タイプ」オプションで、次のいずれかを選択します。
 - 棒を並べて表示するには、「グループ」を選択します。
 - 棒を下から上へ積み上げて表示するには、「スタック」を選択します。
 - 棒を前から後ろへ表示するには、「行」を選択します。
5. 「向き」オプションで、次のいずれかを選択します。
 - 棒が横軸から垂直に伸びるようにするには、「縦方向」を選択します。
 - 棒が縦軸から水平に伸びるようにするには、「横方向」を選択します。
6. 棒が表す数値またはデータを表示するには、「点の値を表示」チェック・ボックスを選択します。値が棒の内部に表示されます。
7. 「フォント」ボタン  をクリックして、棒の値のフォント・オプションを設定します。
8. 棒の枠線のスタイルを指定するには、「棒の枠線のスタイル」ドロップダウン・リストから「実線」、「点線」、「波線」または「一点鎖線」を選択します。
9. 棒の幅を変更するには、「棒の幅」ボックスのスライダ・ツールを使用します。
10. 棒の枠線の幅を変更するには、「棒の枠線の幅」ボックスのスライダ・ツールを使用します。
11. 「OK」をクリックします。



注:

現在のデータ・セットを表す棒のスタイルを定義できます。詳細は、[53ページのデータ・セットのスタイルの定義](#)を参照してください。

折れ線グラフと複合チャートの線のフォーマット

折れ線グラフと複合チャートの線の表示オプションを指定できます。たとえば、線を複数の個別の行、すべての値の合計のパーセンテージとしてのスタック、または絶対値のスタックとして表示できます。

▶ 折れ線グラフと複合チャートの線をフォーマットするには:

1. レポートを開き、折れ線グラフまたは複合チャートを作成するか選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「折れ線グラフのオプション」タブを選択します。
4. 線のタイプを、次のいずれかから選択します。
 - 線のセットを複数の個別の行に表示するには、「行」を選択します。たとえば、0以外の3Dの奥行きを定義した場合、線は前面から背面への複数の個別の行に表示されます。
 - 線のセットを相互に重ねて表示するには、100%に正規化して「パーセント」を選択します。それぞれの線のセットが描画されるに従って、表示された以前の値に値が追加され、すべての値の合計のパーセンテージとして表示されます。
 - 線のセットを重ねて表示するには、「スタック」を選択します。それぞれの線のセットが描画されるに従って、値が以前の値に追加されます。ドロップダウン・リストから次のいずれかを選択します。
 - 累積値をポップアップで表示する場合は、「合計値」を選択します。
 - 各アイテムの値をポップアップで表示する場合は、「セグメント値」を選択します。
5. 線が表す数値またはデータを表示するには、「点の値を表示」チェック・ボックスを選択します。値が線の上に表示されます。
6. 表示される値のフォント・オプションを設定するには、「フォント」ボタン  をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。



注:

現在のデータ・セットを表す線のスタイルを定義できます。詳細は、[53ページのデータ・セットのスタイルの定義](#)を参照してください。

複合チャートのオプションの定義

複合チャートは、折れ線グラフと棒グラフの組合せです。一般的に、データ・セットを比較する複合チャートは、棒グラフと折れ線グラフのオプションを使用し、棒グラフと折れ線グラフと同じ変数が設定されます。

複合チャートをフォーマットする場合は、「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスに「折れ線グラフのオプション」タブと「棒グラフのオプション」タブが表示されます。詳細は、[47ページの表 4](#)を参照してください。複合チャートの折れ線グラフのオプションの定義の詳細は、[48ページの棒グラフと複合チャートの棒のフォーマット](#)を参照してください。複合チャートの折れ線グラフのオプションの定義の詳細は、[49ページの折れ線グラフと複合チャートの線のフォーマット](#)を参照してください。

円グラフのフォーマット

円グラフを作成するとき、最初の円スライスの開始角度、円スライス間の区切りのレベル、円スライス・ラベルの位置とタイプ、およびスライスの枠線のスタイルと幅を指定できます。フォント・オプション(スライス値のテキスト表示のフォント、フォント・サイズ、効果および角度)も設定できます。

- ▶ 円グラフをフォーマットするには:

1. レポートを開き、円グラフを作成するか選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「円グラフのオプション」タブをクリックします。
4. 最初の円スライスの角度を指定するには、「扇形の角度」のスライダ・ツールを使用します。角度は、左回りに0度から360度で設定されます。0度は、3時の位置を示します。
5. スライス間の距離を指定するには、「区切り」のスライダ・ツールを使用します。スライダ・ツールを左に移動するとスライス間の距離が小さくなり、右に移動すると大きくなります。
6. 「スライスの値の表示形式」で、次のいずれかを選択します。
 - ・ データ値をパーセンテージとして表示するには、「パーセント」を選択します。
 - ・ データの絶対値を表示するには、「データ」を選択します。
 - ・ データ値をラベルとして表示するには、「ラベル」を選択します。
7. グラフに表示されるスライス値のフォント・オプションを設定するには、「フォント」ボタン  をクリックします。
8. 「位置」オプションで、次のいずれかを選択します。
 - ・ スライス値を円グラフの外側に表示するには、「外側」を選択します。
 - ・ スライスの値を円グラフの内側に表示するには、「内側」を選択します。スライダ・ツールを使用して、スライス内のデータ値の位置を調整します。
9. 「スライスの枠線のスタイル」ドロップダウン・リストで、円グラフのスライスの枠線に適用するスタイル(実線、点線、波線または一点鎖線)を選択します。
10. スライスの枠線の幅を指定するには、「スライスの枠線の幅」のスライダ・ツールを使用します。最大幅は100です。
11. 「OK」をクリックします。



注:

現在のデータ・セットを表すスライスのスタイルを定義できます。詳細は、[53ページのデータ・セットのスタイルの定義](#)を参照してください。

チャートの背景オプションの設定

チャートの背景オプション(枠線、グリッド線、グリッド線の色、グリッド線のスタイルおよびグリッドの背景)を設定できます。グリッドの奥行きも設定できます。

▶ チャートの背景オプションを設定するには:

1. レポートを開き、チャートを選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「表示形式」タブを選択します。
4. オプション: チャートの周囲に枠線を付けるには、「チャートの枠線」チェック・ボックスを選択します。
5. 「枠線と背景」アイコン  をクリックして、チャートの枠線と背景をフォーマットします。
6. グリッド線、グリッド線の色とスタイル、背景を変更するには、ドロップダウン・リストから適切なオプションを選択します。
 - ・ グリッド線を指定するには、「グリッド線」ドロップダウン・リストから「両方」、「縦方向」、「横方向」、または「なし」を選択します。

- グリッド線のスタイルを指定するには、「グリッド線のスタイル」ドロップダウン・リストから「実線」、「点線」、「波線」、「一点鎖線」または「棒」を選択します。
- グリッド線の色を定義するには、「グリッド線の色」ドロップダウン色パレットで色を選択します。
- グリッド線の背景色を指定するには、「グリッドの背景」ドロップダウン色パレットで色を指定します。



注:

円グラフでは、これらの背景オプションは使用できません。

7. オプション: グリッドの奥行きを変更する場合は、「グリッドの奥行き」のスライダ・ツールを使用します。
8. フォントの補整を使用するには、「フォントの補整」チェック・ボックスを選択します。
9. 「OK」をクリックします。

レポート上のチャートの位置

レポート上のチャートの位置および印刷時の表示方法を指定できます。グリッドに相対的な位置またはその他のレポート・オブジェクトに相対的な位置を指定できます。位置を指定しないことも可能です。位置を指定しない場合、チャートはレポート上で最初に作成された位置に配置されます。

▶ レポート上のチャートの位置を設定するには:

1. レポートを開き、チャートを選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「レポート上のオブジェクトの位置」でチャート・オブジェクトの水平および垂直位置を変更します。
 - a. 「横方向」ドロップダウン・リストで、次のいずれかを選択します。
 - チャートをレポート内の現在の位置に固定する場合は、「なし」を選択します。チャートは、その位置で印刷されます。
 - チャートの左側にあるその他のレポート・オブジェクトに相対的な距離でチャートを配置する場合は、「相対」を選択します。このオプションを使用すると、別のレポート・オブジェクト上にチャートが印刷されないようになります。
 - レポートの左マージンに沿ってチャートを配置する場合は、「左」を選択します。
 - レポートの中央にチャートを配置する場合は、「中央」を選択します。
 - レポートの右マージンに沿ってチャートを配置する場合は、「右」を選択します。
 - b. 「縦方向」ドロップダウン・リストで、次のいずれかを選択します。
 - チャートをレポート内の現在の位置に固定する場合は、「なし」を選択します。チャートは、その位置で印刷されます。
 - チャートの上部にあるその他のレポート・オブジェクトに相対的な距離でチャートを配置する場合は、「相対」を選択します。このオプションを使用すると、別のレポート・オブジェクト上にチャートが印刷されないようになります。
 - レポートの上端に沿ってチャートを配置する場合は、「上」を選択します。
 - レポートの中央にチャートを配置する場合は、「中央」を選択します。
 - レポートの下端に沿ってチャートを配置する場合は、「下」を選択します。

グリッド線の定義

棒、折れ線または複合チャートの背後にグリッド線を表示できます。グリッド線は表示することも非表示にすることも可能で、グリッド線の色、スタイルおよび背景色を指定できます。

▶ グリッド線を定義するには:

1. レポートを開き、チャートを選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「表示形式」タブを選択します。
4. 「グリッド線」ドロップダウン・リストで、次のいずれかを選択します。
 - 水平グリッド線を表示するには、「横方向」を選択します。
 - 垂直グリッド線を表示するには、「縦方向」を選択します。
 - 垂直と水平の両方のグリッド線を表示するには、「両方」を選択します。
 - グリッド線を表示しない場合は、「なし」を選択します。
5. オプション: グリッド線のスタイルを指定するには、「グリッド線のスタイル」をクリックし、ドロップダウン・リストから、「実線」、「点線」、「破線」、「一点鎖線」または「棒」のいずれかを選択します。
6. オプション: グリッド線の色を指定するには、「グリッド線の色」をクリックし、カラー・パレットで色を選択します。
7. オプション: グリッド線の背景色を指定するには、「グリッドの背景」をクリックし、ドロップダウンのカラー・パレットで色を選択します。

データ・セットのスタイルの定義

チャート内のデータ・セットのスタイルを定義できます。レポート内の各データ・セットのパターンおよび色を定義できます。指定された網掛けおよびパターンは、チャート内の値を区別するため、それぞれのデータ・セットに適用されます。

▶ データ・セットのスタイルを定義するには:

1. レポートを開き、チャートを選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「要素のスタイル」タブを選択します。
4. データ・セットを選択します。
5. 選択したデータ・セット用の塗りつぶしのパターンを選択します。
6. 「色1」と「色2」のドロップダウン・リストで、パターンに使用する2色を選択します。



注:

選択した2色を入れ替えるには、色の切替えアイコンをクリックします。

7. データ・セットに適用する線スタイル、ライン・マーカのスタイル、マーカ・サイズおよび線の幅を選択します。
8. 「OK」をクリックします。

チャートのサイズの変更と移動

チャートのサイズを変更したり、レポートの別の場所にチャートを移動したりできます。

▶ チャートのサイズを変更するには:

1. チャート・オブジェクトをクリックして、チャートを選択します。
2. チャートの周りに表示されるハンドルをクリックし、チャートが適切なサイズになるまでドラッグします。

▶ チャートを移動するには:

1. チャートの内側をクリックし、チャート・オブジェクトを選択します。
2. マウスの左ボタンを押したまま、チャートをレポートの別の場所にドラッグします。

チャートのタイトルとラベルのフォーマット

サブトピック

- [チャート凡例のタイトルの定義](#)
- [チャートのタイトルの定義](#)
- [チャートの軸のタイトルの定義](#)
- [軸のラベルの定義](#)
- [チャートの表示](#)

チャートでは、チャート凡例のタイトル、チャートのタイトル、チャートの軸のタイトル、および軸のラベルの指定およびフォーマットを行うことができます。また、指定したタイトルおよび軸のフォント、枠線および背景をフォーマットできます。チャートのタイトルおよびラベルは、「チャートのフォーマット」ダイアログ・ボックスで指定します。

チャート凡例のタイトルの定義

凡例を定義して、チャートで使用されるデータ・セットの識別と説明を行います。フォントおよび背景のオプションと枠線の色を指定できます。また、チャートの境界内の凡例の配置場所も指定できます。

ラベルを繰り返し表示しないようにすることもできます。それによって、参照するグリッドから設定を継承できます。繰返しラベルは、非表示にしなかった場合にチャート内で繰返される軸のラベルです。



注:

チャート凡例のオプションは、すべてのタイプのチャートで設定できます。

▶ チャート凡例のオプションを指定するには:

1. レポートを開き、チャートを選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「凡例」タブを選択し、凡例のフォーマットと配置のオプションを表示します。
4. 「凡例の配置」チェック・ボックスを選択して、チャートの境界に対してチャート凡例の垂直および水平位置を選択します。垂直の配置のオプションには、「上」、「中央」、「下」があります。水平の配置のオプションには、「左」、「中央」、「右」があります。
5. 凡例の枠線と背景をフォーマットするには、「枠線と背景」アイコン  をクリックします。
6. 「凡例タイトル」テキスト・ボックスに、凡例のタイトルを入力します。
7. 「フォント」ボタン  をクリックして、凡例のタイトルとラベルのフォント・オプション(フォント、フォント・サイズ、文字飾り、角度)を設定し、「OK」をクリックします。
8. X軸のラベルを繰り返し表示しないようにするには、「繰返しのラベルを抑制」の「グリッドから設定を継承」、「オン」または「オフ」を選択します。

9. 「OK」をクリックします。

チャートのタイトルの定義

チャートの外観を定義するには、タイトルを指定し、そのフォントと背景オプションを選択します。

▶ チャートのタイトルを定義するには:

1. レポートを開き、チャートを選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「表示形式」タブを選択します。
4. 「チャートのタイトル」テキスト・ボックスに、チャートのタイトルを入力します。



ヒント:

凡例、軸、またはチャートのタイトルを定義する際、タイトル内で\nを使用して複数行のタイトルを印刷できます。凡例、軸、またはチャートのタイトル内では、\'sを使用して所有格のアポストロフィを示すことができます。これらのコマンドを組み合わせると、複数行にまたがるタイトルでアポストロフィを使用できます。

5. オプション: 「フォント」ボタン  をクリックし、フォントのオプションを設定して、「OK」をクリックします。
6. オプション: 「枠線と背景」アイコン  をクリックし、チャートのタイトルの枠線と背景のオプションを指定して、「OK」をクリックします。
7. チャートの周りに枠線を付けるには、「チャートの枠線」チェック・ボックスを選択します。
8. オプション: 「枠線と背景」アイコン  をクリックし、チャートの枠線について枠線と背景のオプションを指定して、「OK」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

チャートの軸のタイトルの定義

メタデータのタイトルおよびプライマリ軸とセカンダリ軸のタイトルを指定して、チャートの軸に表示されるデータを識別できます。また、フォント・サイズ、色、フォントの角度などのフォントのオプションも指定できます。同じフォーマットのオプションを使用して、メタデータにラベルを付けることができます。

また、フォント・サイズ、色、フォントの角度などのフォントのオプションも指定できます。同じフォーマットのオプションを使用して、メタデータにラベルを付けることができます。

各軸のタイトルの色、枠線および背景のオプションを指定できます。



注:

軸のオプションは、棒グラフ、折れ線グラフ、複合チャートでのみ設定できます。

▶ チャートの軸のタイトルを定義するには:

1. レポートを開き、チャートを選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「軸」タブを選択して、軸のフォーマット・オプションを表示し、次の1つ以上のアクションを行います。
 - ・「メタデータのタイトル」テキスト・ボックスに横軸のタイトルを入力します。
 - ・「プライマリ軸のタイトル」テキスト・ボックスに、縦のプライマリ軸のタイトルを入力します。タイトルはチャートの左側に表示されます。
 - ・「セカンダリ軸のタイトル」テキスト・ボックスに、縦のセカンダリ軸のタイトルを入力します。このタイトルはチャートの右側に表示されます。
4. 「フォント」ボタン  をクリックし、フォントのオプションを設定して、「OK」をクリックします。
5. 「枠線と背景」アイコン  をクリックし、軸のタイトルの枠線と背景のオプションを指定して、「OK」をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。

軸のラベルの定義

チャートのプライマリ軸とセカンダリ軸のラベルを定義して、フォーマットできます。複合チャートの場合は、セカンダリ軸のラベルを指定してフォーマットできます。メタデータのラベルも表示してフォーマットできます。



注:

プライマリ軸またはセカンダリ軸のラベルで、軸に表示される値の範囲を指定します。

▶ 軸のラベルを定義するには:

1. レポートを開き、チャートを選択します。
2. 「チャートのプロパティ」プロパティ・シートの「チャートのフォーマット」ボタンをクリックします。
3. 「軸」タブを選択し、次の1つ以上のアクションを行います。
 - ・プライマリ軸でデフォルトの範囲の値を使用するには、「**プライマリ軸のラベル**」チェック・ボックスを選択します。
 - ・プライマリ軸の値の範囲(最小値、最大値、間隔)を入力するには、「**プライマリ軸のラベル**」チェック・ボックスと「**カスタム範囲**」チェック・ボックスを選択します。



注:

カスタム範囲を使用すると、軸の開始の数値と終了の数値および目盛の間隔を変更できます。たとえば、40、60および3を「最小」、「最大」および「目盛」のチェック・ボックスに入力すると、40から60までの値を3つの目盛間隔で表示できます。

- ・複合チャートのセカンダリ軸で、デフォルトの値の範囲を使用するには、「**セカンダリ2軸のラベル**」チェック・ボックスを選択します。
- ・棒グラフまたは折れ線グラフのセカンダリ軸に、デフォルトの値の範囲をパーセンテージで表示するには、「**セカンダリ2軸のラベル**」チェック・ボックスを選択します。

- 棒グラフまたは折れ線グラフのセカンダリ軸に示す値の範囲(最小値、最大値および目盛)を入力するには、「セカンダリ2軸のラベル」チェック・ボックスと「カスタム範囲」チェック・ボックスを選択します。
- 「フォント」ボタン  をクリックし、データ・ラベルのフォントのオプションを設定して、「OK」をクリックします。
 - 「枠線と背景」アイコン  をクリックし、データ・ラベルの枠線と背景のオプションを指定して、「OK」をクリックします。
 - メタデータのラベルを標準の形式で表示するには、「メタデータ・ラベルの表示」チェック・ボックスを選択します。



注:

Financial Reportingでは、ラベルは、デフォルトで互い違いに表示されるように設定されているので、レポートの軸にデータが均等に配置されます。

- 「フォント」ボタン  をクリックし、メタデータ・ラベルのフォントのオプションを設定して、「OK」をクリックします。

チャートの表示

Reporting StudioおよびFinancial Reportingでレンダリングされたチャートは、印刷と印刷プレビューを実行できます。Adobe SVGビューアをインストールしている場合、次の出力では高い品質でレンダリングされます。

- Financial ReportingでPDFを表示する場合。
- Reporting StudioでPDFをエクスポートする場合。



注:

Adobe SVGビューアを使用する際の高い品質のチャート出力は、PDF生成にAdobe Distillerを使用している場合にのみサポートされます。

Adobe SVGビューアのダウンロードの詳細は、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストール概要』ドキュメントを参照してください。

4

レポートの作成

この項の内容:

レポート・オブジェクトの追加	59
リンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの使用法	60
テキスト・オブジェクトの追加	62
グリッドの追加	64
イメージの挿入	68
イメージ・オブジェクトの保存	69
チャートの挿入	70
チャート・オブジェクトの保存	70
保存したレポート・オブジェクトの挿入	71
ヘッダーとフッターの作成	71
レポート・オブジェクトの位置設定	72
レポート・オブジェクトのサイズ変更	73
レポート・オブジェクトの保存	74
レポートのオブジェクトの除去	75
ヘッダーとフッターの設計	75
タイトル・ページの作成	76
レポート・オブジェクトの前への改ページの挿入	76
レポートの要約の表示	76
サーバー情報の表示	77

レポートを作成するには、レポート・オブジェクトをデザインに追加し、レポート・オブジェクトのプロパティを定義して、レポート・デザインを作成します。レポート・オブジェクトには、テキスト・ボックス、グリッド、イメージおよびチャートが含まれます。レポートを作成するときは空白のデザイン領域から始めます。必要に応じて、空白のレポートを変更できます。

レポート・オブジェクトの追加

レポート・オブジェクトは、レポートのデザイン領域内でテキスト・ボックス、グリッド、チャートまたはイメージとして定義されます。レポートにレポート・オブジェクトを追加するには、レポートのレイアウトおよびオブジェクトのプロパティの指定、データ・コンテンツの選択を行います。あらかじめリポジトリに保管されているレポート・オブジェクトを挿入することもできます。レポート・オブジェクトは複数のレポートで使用できます。

レポート・オブジェクトの追加後、フォーマットのオプションなどのプロパティを割り当てることができます。フォーマットのオプションには、フォント、配置、間隔、網掛け、位置設定などがあります。

▶ レポート・オブジェクトを追加するには:

1. 「ファイル」、「新規」、「レポート」の順に選択します。
2. レポートにレポート・オブジェクトを追加します。
3. 「ファイル」、「保存」の順に選択して、レポートを保存します。

リンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの使用方法

サブトピック

- [リンク付きオブジェクト](#)
- [Financial Reporting内のローカル・オブジェクト](#)

レポート・オブジェクトはリポジトリに保存でき、他のレポートのリソースとして利用できます。レポート・オブジェクトは、リンク付きオブジェクトまたはローカル(リンクなし)オブジェクトとして他のレポートに挿入し、そのまま、またはカスタマイズして使用できます。

オブジェクトをソース・オブジェクトにリンクすると、時間と労力を節約できます。1つのソース・オブジェクトを更新すると、このソース・オブジェクトにリンクしているすべてのレポートが更新されます。

リンクを設定するかどうかは、次の操作を行うときに指定できます。

- レポート・オブジェクトをリポジトリに保存
- オブジェクトをリポジトリからレポートに挿入。保存されたオブジェクトをリンク付きオブジェクトとしてリポジトリから挿入した場合、レポートにコピーした後にリンクをクリアできます。ただし、このアクションを元に戻すことはできません。

リンク付きオブジェクト

リンク付きオブジェクトを使用すると、オブジェクトをレポートおよびリポジトリに保存できます。レポート内のオブジェクトをリポジトリ内のソース・オブジェクトにリンクすると、ソース・オブジェクトに加えた変更をレポート内に存在するオブジェクトに反映できます。

ソース・オブジェクトをレポートに挿入して変更を加え、保存するときにソース・オブジェクトにリンクすると、ソース・オブジェクトと、他のレポートでそのオブジェクトにリンクされているすべてのオブジェクトに変更が反映されます。リンク付きのレポート・オブジェクトの作成例は、[63ページのテキスト・オブジェクトの保存](#)を参照してください。

たとえば、レポートにテキスト・オブジェクトCompany_Logoをリポジトリから挿入したとします。ソース・オブジェクトへのリンクを指定し、Company_Logo内のテキストを変更してオブジェクトを保存します。修正されたCompany_Logoテキスト・オブジェクトによってリポジトリ内のソース・オブジェクトが上書きされ、新しいレポートまたはCompany_Logoソース・オブジェクトにリンクされている既存のレポートにも、変更されたテキストが反映されません。

次の表に、リポジトリにリンクして、レポートに含めることができるオブジェクトと、Financial Reportingの各オブジェクト・タイプの手順が記載されている場所を示します。

表5 リンク付きオブジェクトの使用方法

オブジェクト	ソース・オブジェクトにリンクする手順
グリッド	「オブジェクトの保存」ダイアログ・ボックスからソース・オブジェクトにリンクできます。詳細は、 67ページのグリッド・オブジェクトの保存 を参照してください。
行と列のテンプレート	「オブジェクトの保存」ダイアログ・ボックスからソース・オブジェクトにリンクできます。リンクすると、「行と列のテンプレートのプロパティ」プロパティ・シートに「ソース・オブジェクトにリンク」が表示されます。
チャート	「オブジェクトの保存」ダイアログ・ボックスからソース・オブジェクトにリンクできます。詳細は、 70ページのチャートの挿入 を参照してください。
テキスト・ボックス	「オブジェクトの保存」ダイアログ・ボックスからソース・オブジェクトにリンクできます。詳細は、 63ページのテキスト・オブジェクトの保存 を参照してください。
イメージ	「オブジェクトの保存」ダイアログ・ボックスからソース・オブジェクトにリンクできます。詳細は、 69ページのイメージ・オブジェクトの保存 を参照してください。

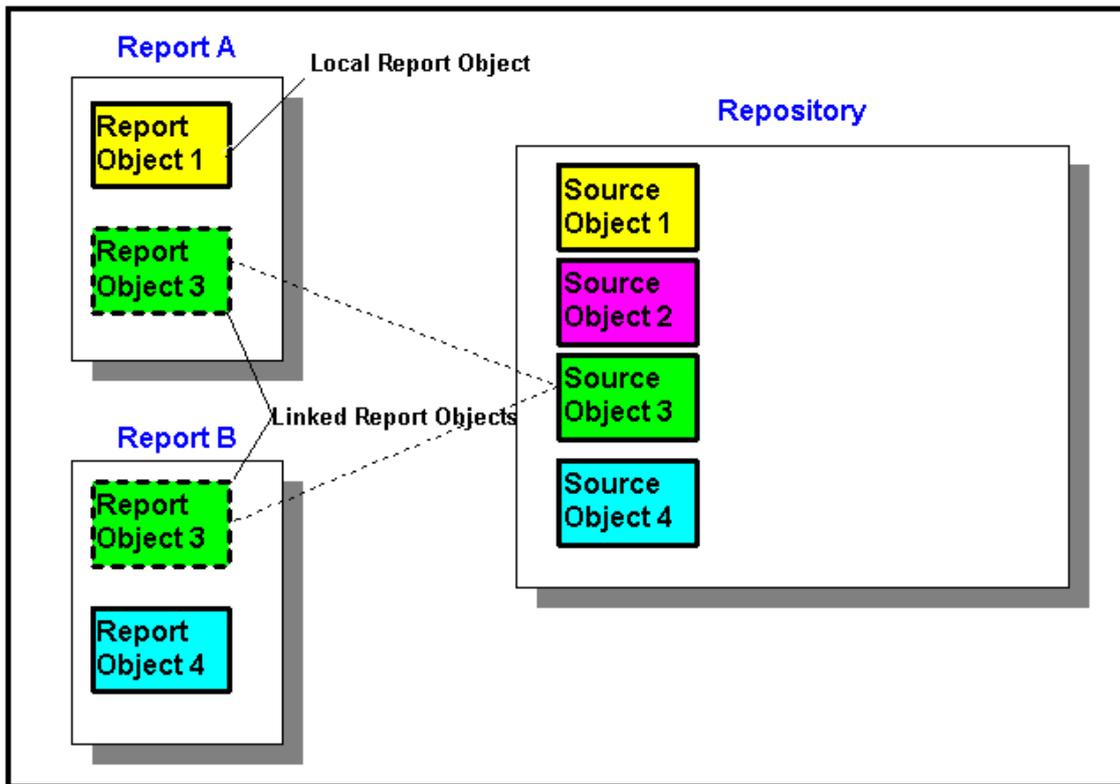
Financial Reporting内のローカル・オブジェクト

リポジトリのオブジェクトをソース・オブジェクトにリンクしないでレポートに保存すると、ローカル・オブジェクト(現在のレポートのオブジェクト)はリポジトリに保存済のオブジェクトとリンクされません。ローカル・オブジェクトに加えられた変更はリポジトリに保存されているオブジェクトに影響せず、リポジトリのオブジェクトに加えられた変更もレポートのローカル・オブジェクトに影響しません。

このようにしてレポートに挿入したレポート・オブジェクトのコピーは、個々の要件に合わせてカスタマイズできます。

次の図に、レポートにあるリンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの動作の違いを示します。

図1 リンク付きレポート・オブジェクトとローカル・レポート・オブジェクト



Report Aでは、Report Object 1はローカル・オブジェクトとしてリポジトリからコピーされています。ローカル・レポート・オブジェクトに加えられた変更はソース・オブジェクトに反映されません。Report Object 3はリポジトリ内のソース・オブジェクトにリンクされています。Report Object 3に加えられた変更は、保存時にソース・オブジェクトおよび Report BのReport Object 3など、そのソース・オブジェクトにリンクされている他のレポートに反映されます。

テキスト・オブジェクトの追加

テキスト・オブジェクトは、テキストまたはテキストの関数を含むことができるレポート・オブジェクトです。たとえば、ラベル、説明、テキスト・ボックス内の現在の日付を取得する関数などを入力できます。テキストの関数の詳細は、[199ページのテキスト関数](#)を参照してください。テキストは複数の段落に分けて入力できます。テキストが含まれている領域は、他のレポート・オブジェクトと同様に、移動、サイズ変更、位置の変更を行うことができます。

新しいテキスト・オブジェクトを作成するか、既存のテキスト・オブジェクトをレポートに挿入します。新しいテキスト・オブジェクトは空の領域であり、エディタやワード・プロセッサからテキスト、テキスト関数またはリッチ・テキストを入力できます。テキスト・オブジェクトはリポジトリに保管され、多数のレポートに挿入できます。たとえば、すべてのレポート・デザインに、同じテキスト・オブジェクトを追加することもできます。

▶ テキスト・オブジェクトを追加するには:

1. 「ファイル」を選択してから「開く」を選択します。
2. レポートを開き、「挿入」、「テキスト」の順に選択します。
3. テキスト・ボックスの左上角になる場所をクリックし、そのままドラッグします。ボックスが適切なサイズになったらマウスのボタンを離します。
4. 挿入したテキスト・オブジェクトをクリックし、テキストを直接入力します。

▶ リポジトリに保存されているテキスト・ボックスを挿入するには:

1. 「ファイル」を選択してから「開く」を選択します。
2. レポートを開き、「挿入」、「保存したオブジェクト」の順に選択します。
3. 「タイプ」ドロップダウン・リストで「テキスト」を選択します。
4. テキスト・オブジェクトを探すディレクトリを選択し、使用するテキスト・オブジェクトを選択します。
5. 次のいずれかのアクションを行います:
 - テキスト・オブジェクトをリンク付きオブジェクトとして使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。
 - テキスト・オブジェクトをリンクなしのオブジェクトとして使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」チェック・ボックスの選択を解除します。これがデフォルトのオプションです。
6. 「挿入」をクリックします。

テキスト・オブジェクトの変更

テキスト・オブジェクトのプロパティを変更できます。変更とは、テキスト・オブジェクトへの関数の挿入、テキスト・ボックスの垂直方向または水平方向の位置の変更、またはテキストの自動サイズ調整の関数の選択を行うことです。テキストの自動サイズ調整の関数を選択すると、テキスト・オブジェクトに含まれるすべてのテキストを表示できます。また、「前に改ページ」チェック・ボックスを選択すると、レポートをプレビューまたは印刷する際に、次のページの先頭にテキスト・ボックスを表示できます。現在のテキスト・オブジェクトをリポジトリのソース・オブジェクトにリンクすることもできます。



注:

「ソース・オブジェクトにリンク」チェック・ボックスは、テキスト・オブジェクトをリポジトリに保存するときに「ソース・オブジェクトにリンク」チェック・ボックスを選択した場合にのみ使用可能です。

▶ テキスト・オブジェクトを変更するには:

1. テキスト・オブジェクトを選択します。
2. 「テキストのプロパティ」シートを使用して、オブジェクトのプロパティを変更します。テキストを変更するには、「フォーマット」、「フォント」の順に選択します。



ヒント:

テキスト・オブジェクトのサイズを変更するには、ハンドルをドラッグします。テキスト・オブジェクトを移動するには、テキスト・オブジェクトの枠線の内側をドラッグします。

テキスト・オブジェクトの保存

テキスト・オブジェクトを保存するときには、テキスト・オブジェクトとリポジトリ内のソース・オブジェクト間のリンクを作成できます。テキスト・オブジェクトはリポジトリに保存して、レポートを構築するときに再使用できます。リポジトリに保存したテキスト・オブジェクトは、リンク付きオブジェクトまたはリンクのないオブジェクトとしてレポートに挿入できます。



注:

リンク付きオブジェクトへの変更は、デザインを保存して閉じても保存されません。

▶ テキスト・オブジェクトをリポジトリに保存するには:

1. テキスト・オブジェクトをクリックし、「ファイル」、「オブジェクトの保存」の順に選択します。
2. フォルダを選択するか、または作成します。
3. 次のアクションを行います。
 - a. 「名前」テキスト・ボックスに、レポートのテキスト・オブジェクトの名前を入力します。大文字と小文字、スペースおよび数字を使用できます。¥ / %, ? + < > | ' " *などの特殊文字は使用できません。
 - b. 「説明」テキスト・ボックスに、テキスト・オブジェクトの説明を入力します。
4. 次のいずれかのアクションを行います:
 - レポート内のテキスト・オブジェクトからリポジトリ内のソース・オブジェクトへのリンクを作成するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。
 - レポート内のテキスト・オブジェクトからリポジトリ内の保存済のオブジェクトへのリンクを作成せずに保存するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。



注:

リンク付きオブジェクトの詳細は、[60ページのリンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの使用方法](#)を参照してください。

5. 「保存」をクリックして、テキスト・オブジェクトをリポジトリに保存します。テキスト・オブジェクトを保存した場合、指定したオブジェクトのみが保存され、レポート・デザイン全体は保存されません。

グリッドの追加

サブトピック

- [グリッドについて](#)
- [グリッドのディメンション・レイアウトの定義](#)
- [新しいグリッドの追加](#)
- [既存のグリッドの挿入](#)
- [グリッドの選択](#)
- [グリッド・オブジェクトのプロパティの変更](#)
- [グリッド・オブジェクトの保存](#)

グリッドについて

グリッドは、外部データベース接続からのデータを格納できる表です。グリッドをレポートに追加して、ディメンションのレイアウトを定義し、メンバーを選択して、グリッドをフォーマットできます。また、既存のグリッドを挿入して、あらかじめフォーマットされたグリッド・デザインを再使用できます。グリッドのコンテンツは、テキスト、ディメンション、メンバーお

よび式を使用して定義できます。グリッドは非表示にすることもできます。たとえば、レポート内にチャートを表示し、チャートに関連付けられているグリッドは表示しない場合などがあります。



注:

Microsoft Excelでは、左右に並ぶ2つのグリッドを含むレポートで、グリッドは並べて表示されません。かわりにグリッドは重ねて表示されます。

グリッドのディメンション・レイアウトの定義

グリッドのディメンション・レイアウトを定義するには、データベース接続を指定し、使用可能なディメンションを視点 (POV) フレームから行、列およびページ・フレームにドラッグします。行、列またはページ・フレームに配置されないディメンションは、そのグリッドのユーザーのPOVバーに表示されます。行、列またはページには、複数のディメンションを重ねて配置できます。たとえば、シナリオと時間のディメンションを同じ軸に配置し、ある期間の実際のデータと予算のデータを表示する場合などです。



注:

グリッドの選択したデータベース接続に属性ディメンションが含まれている場合は、視点フレームの上に表示されます。ディメンション同様、属性ディメンションは視点、行、列、ページのフレームにドラッグできます。

表6 ディメンション・レイアウトのオプション

アイテム	説明
グリッド	グリッド名。 このオプションは、グリッドがリポジトリ内のソース・グリッドにリンクされていない場合にのみ使用可能です。
属性ディメンション	解析を使用可能にするディメンションのタイプで、基本ディメンションのメンバーの属性または特質に基づきます。 属性ディメンションは、このフレームから視点、ページ、行または列のフレームにドラッグできます。 注意: 属性ディメンションはEssbaseに対してのみサポートされます。
視点(POV)	グリッドの視点(POV)を定義するディメンション。 視点(POV)によって、グリッド内で取得するデータが識別されます。ディメンションは、このフレームからページ、行または列のフレームにドラッグできます。
ページ	グリッドの3番目の軸。 ページ軸で使用するディメンションを、属性ディメンション・フレームや視点フレームからこのフレームにドラッグできます。
列	グリッドまたは表の情報の縦方向の表示。

アイテム	説明
	列で使用するディメンションをこのフレームにドラッグできます。
行	グリッドまたは表の情報の横方向の表示。 行の軸で使用するディメンションを属性ディメンション・フレームや視点フレームからこのフレームにドラッグできます。

ディメンション・レイアウトを定義した後、各ディメンションで使用するメンバーを選択できます。[24ページのデータの行と列のメンバーの割当て](#)および[24ページのページ軸のメンバーの割当て](#)を参照してください。

新しいグリッドの追加

▶ レポートに新しいグリッドを追加するには:

1. レポートを開き、「挿入」、「グリッド」の順に選択します。
2. グリッドの左上角になる場所をクリックし、適切なサイズになるまでドラッグします。
3. 「データベース接続の選択」で、データベース接続を選択して「OK」をクリックします。
4. ディメンション・レイアウト・ウィンドウで、属性ディメンション・フレーム(存在する場合)および視点(POV)フレームから、ページ、行または列フレームにディメンション・アイコンをドラッグし、「OK」をクリックします。



注:

行、列またはページ・フレームに、複数のディメンションを置くことができます。

新しいグリッドを追加すると、デフォルトの名前がグリッドに割り当てられます。グリッドの名前は、「ディメンション・レイアウト」ダイアログ・ボックスで変更するか、保存時に変更できます。割り当てられるデフォルトの名前は Grid*n*で、*n*はシステムによって割り当てられる識別番号です。たとえば、6番目にシステムによって名前を付けられ、レポートに保存されたグリッドを保存すると、デフォルトの名前はGrid6になります。

グリッド名は、関数やチャートによるグリッドの参照に使用されます。たとえば、グリッドからデータをグラフィカルに表示するチャートを設計した場合、チャートのプロパティはグリッドを名前で参照する必要があります。

既存のグリッドの挿入

▶ 既存のグリッドをレポートに挿入するには:

1. レポートを開き、「挿入」、「保存したオブジェクト」の順に選択します。
2. 「タイプ」で「グリッド」を選択します。
3. グリッド・オブジェクトを探すディレクトリを選択し、使用するグリッド・オブジェクトを選択します。
 - グリッド・オブジェクトをリンク付きオブジェクトとして使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。
 - グリッド・オブジェクトをリンクなしオブジェクトとして使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。

[60ページのリンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの使用方法](#)を参照してください。

4. 「挿入」をクリックします。

グリッドの選択

グリッドを選択するには、上左の灰色のセルをクリックして、グリッド・オブジェクト内の行または列を選択します。

グリッドを選択する場合、右クリックして次のショートカット・メニュー・オプションにアクセスできます。

- **ディメンション・レイアウト**—ページ、グリッドの行と列のディメンションを変更します。
- **グリッドPOV**—グリッドPOVバーの表示と非表示を切り替えます。
- **グリッドPOVの設定**—グリッドPOVのメンバーを選択します。
- **データ問合せ最適化設定**—データベース接続サーバーまたはレポート・サーバー上の行を抑制したり、Essbaseの疎のコマンドを含めるかどうかを指定したり、集計する非対称列の数を設定します。([92ページのデータ問合せ最適化オプションの設定](#)を参照してください。)

グリッド・オブジェクトのプロパティの変更

「グリッドのプロパティ」シートを使用してグリッド・オブジェクトをカスタマイズできます。シートには、選択したグリッドを変更するための「全般」、「抑制」および「位置」という3つの主要なカテゴリがあります。「全般」を使用して、見出しプリファレンスおよびグリッド・オプションを定義できます。「抑制」は、グリッドまたはグリッドのセル内の値を非表示にするために使用します。「位置」は、グリッド上のオブジェクトの縦方向または横方向の位置の変更で使用します。次の手順は、グリッド・オブジェクトのプロパティの変更方法を示しています。

▶ グリッド・オブジェクトのプロパティを変更するには:

1. レポートを開き、変更するオブジェクトを選択します。
2. 「グリッドのプロパティ」シートで、プロパティを変更します。
3. **オプション:** 「グリッドのプロパティ」シートの「ディメンション・レイアウト」ボタンをクリックして、グリッドの軸のディメンションを変更します。リンク付きグリッドの場合は、「グリッド」フィールドにグリッドの名前およびリポジトリ内のグリッドのパスが表示されます。



ヒント:

グリッド・オブジェクトのサイズを変更するには、ハンドルをドラッグします。グリッド・オブジェクトを移動するには、グリッドのタイトル・バーをドラッグします。

グリッド・オブジェクトの保存

グリッド・オブジェクトを保存するとき、そのグリッド・オブジェクトとリポジトリ内のソース・オブジェクト間のリンクを作成できます。リポジトリにオブジェクトを保存した場合は、他のレポートにリンクして再使用できます。



注:

この機能を実行するには、グローバル管理者またはレポート・デザイナーの役割が割り当てられている必要があります。

▶ グリッド・オブジェクトをリポジトリに保存するには:

1. グリッドをクリックして、次のいずれかの操作を行います。
 - 「ファイル」、「オブジェクトの保存」の順に選択します
 - 右クリックして「オブジェクトの保存」を選択します
2. グリッドの保管先フォルダを選択するか、新しいフォルダを作成します。
3. 「名前」テキスト・ボックスに、グリッド名を入力します。大文字と小文字、スペースおよび数字を使用できます。¥ / %, ? + < > | ' " *などの特殊文字は使用できません。
4. 「説明」テキスト・ボックスに、グリッドの説明を入力します。
5. 次のいずれかのアクションを行います:
 - レポート内のグリッド・オブジェクトからリポジトリ内のソース・オブジェクトへのリンクを作成するには、「ソース・オブジェクトにリンク」チェック・ボックスを選択します。
 - レポート内のグリッド・オブジェクトからリポジトリ内の保存されたソース・オブジェクトへのリンクを作成せずにグリッド・オブジェクトを保存するには、「ソース・オブジェクトにリンク」チェック・ボックスの選択を解除します。



注:

リンク付きオブジェクトの詳細は、[60ページのリンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの使用方法](#)を参照してください。

6. 「保存」をクリックして、グリッド・オブジェクトをリポジトリに保存します。グリッド・オブジェクトを保存した場合、指定したオブジェクトのみが保存され、レポート・デザイン全体は保存されません。

イメージの挿入

イメージ・オブジェクトは、レポート内で使用できるグラフィックまたはピクチャです。次のイメージ・フォーマットが使用できます。

- ビットマップ: .bmpおよび.dib
- Graphics Interchange Format (GIF): .gif
- Joint Photographic Experts Group (JPEG): .jpg
- アイコン: .icoおよび.cur

イメージは、レポートのヘッダー、フッターまたは本文に追加できます。イメージ・ファイルを持つイメージ・フレームをレポートに追加した後に、イメージ・オブジェクトをフォーマットできます。イメージのフォーマットの詳細は、[173ページのイメージのフォーマット](#)を参照してください。

Financial Reporting以外のファイル・システムに保管されているイメージ・ファイルをイメージ・フレームに挿入したり、Studioエクスプローラに保存されているイメージ・オブジェクト全体を挿入したりできます。



注:

イメージ・オブジェクトは、レポートとともに保存されます。そのため、イメージ・オブジェクトのサイズによってアプリケーションの速度に影響する場合があります。

▶ Studioエクスプローラ以外に保存されている新しいイメージ・オブジェクトを挿入するには:

1. レポートを開き、「挿入」、「イメージ」の順に選択します。
2. イメージ・フレームの左上角になる場所をクリックし、そのままドラッグします。フレームが適切なサイズになったらマウスのボタンを離します。
3. 「ファイルのタイプ」ドロップダウン・リストから、イメージのフォーマットを選択します。
4. Financial Reportingの**bin**ディレクトリ(デフォルト)からイメージ・ファイルを選択するか、「検索」ドロップダウン・リストをクリックして、任意のファイル・システムにあるイメージ・ファイルを見つけます。
5. イメージ・ファイルを選択して「開く」をクリックします。
6. 「イメージのプロパティ」シートで、イメージを変更します。



注:

リポジトリにイメージを追加したり、リンク付きオブジェクトとして保存したりするには、「ファイル」、「オブジェクトの保存」の順に選択します。詳細は、[69ページのイメージ・オブジェクトの保存](#)を参照してください。

▶ リポジトリに保存されているイメージ・オブジェクトを挿入するには:

1. レポートを開き、「挿入」、「保存したオブジェクト」の順に選択します。
2. 「タイプ」ドロップダウン・リストから、「イメージ」を選択します。
3. 挿入するイメージ・オブジェクトを選択します。
4. 次のいずれかのアクションを行います:
 - イメージ・オブジェクトをリンク付きオブジェクトとして使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。
 - イメージ・オブジェクトをリンクなしオブジェクトとして使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。これはデフォルトです。



注:

リンク付きオブジェクトの詳細は、[60ページのリンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの使用法](#)を参照してください。

5. 「挿入」をクリックします。

イメージ・オブジェクトの保存

イメージ・オブジェクトを保存するとき、イメージ・オブジェクトとリポジトリ内のソース・オブジェクト間のリンクを作成できます。レポート・オブジェクトをソース・オブジェクトにリンクすることで、時間と労力が節約されます。1つのソース・オブジェクトを更新すると、このソース・オブジェクトにリンクしているすべてのレポートが更新されます。

▶ イメージ・オブジェクトをリポジトリに保存するには:

1. イメージを選択し、「ファイル」、「オブジェクトの保存」の順に選択します。
2. イメージの名前と保存場所を指定します。
3. 次のいずれかのアクションを行います:

- ・ レポート・デザイン内のイメージ・オブジェクトからリポジトリ内のソース・オブジェクトへのリンクを作成するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。
 - ・ レポート・デザイン内のイメージ・オブジェクトからリポジトリ内に保存されているオブジェクトへのリンクを作成せずに保存するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。
4. 「保存」をクリックして、イメージ・オブジェクトをリポジトリに保存します。レポート内のイメージ・オブジェクトを保存した場合は、指定されたオブジェクトのみが保存され、レポート・デザイン全体は保存されません。

チャートの挿入

チャートを使用すると、グリッドのデータをレポートに表示できます。チャートをレポートに挿入すると、現在のレポート上で指定されたグリッドのデータがチャートによって取得されます。挿入できるチャートは、棒グラフ、円グラフ、折れ線グラフおよび複合チャート(棒グラフと折れ線グラフ)です。

各タイプのチャートの詳細は、[43ページのチャートについて](#)を参照してください。チャートの設計の詳細は、[43ページの第3章「チャートのカスタマイズ」](#)を参照してください。

▶ 新しいチャート・オブジェクトを挿入するには:

1. レポートを開き、「挿入」、「チャート」の順に選択します。
2. チャートの左上角になる場所をクリックし、そのままドラッグします。ボックスが適切なサイズになったらマウスのボタンを離します。
3. 「チャートのプロパティ」シートで、チャートのプロパティを変更します。

▶ リポジトリに保存されているチャート・オブジェクトを挿入するには:

1. レポートを開き、「挿入」、「保存したオブジェクト」の順に選択します。
2. 「タイプ」ドロップダウン・リストから、「チャート」を選択します。
3. 挿入するチャート・オブジェクトを選択します。
4. 次のいずれかのアクションを行います:

- ・ チャート・オブジェクトをリンク付きオブジェクトとして使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。
- ・ チャート・オブジェクトをリンクなしオブジェクトとして使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。これはデフォルトです。



注:

リンク付きオブジェクトの詳細は、[60ページのリンク付きオブジェクトとローカル・オブジェクトの使用方法](#)を参照してください。

5. 「挿入」をクリックします。

チャート・オブジェクトの保存

チャート・オブジェクトを保存するとき、チャート・オブジェクトとリポジトリ内のソース・オブジェクト間のリンクを作成できます。レポート・オブジェクトをソース・オブジェクトにリンクすることで、時間と労力が節約されます。1つのソース・オブジェクトを更新すると、このソース・オブジェクトにリンクしているすべてのレポートが更新されます。

▶ チャート・オブジェクトをリポジトリに保存するには:

1. チャートを選択し、「ファイル」、「オブジェクトの保存」の順に選択します。
2. チャートの名前と保存場所を指定します。
3. 次のいずれかのアクションを行います:
 - ・ レポート・デザイン内のチャート・オブジェクトからリポジトリ内のソース・オブジェクトへのリンクを作成するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。
 - ・ レポート・デザイン内のチャート・オブジェクトからリポジトリ内に保存されているオブジェクトへのリンクを作成せずに保存するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。
4. 「保存」をクリックして、チャート・オブジェクトをリポジトリに保存します。レポート内のチャート・オブジェクトを保存した場合、指定したオブジェクトのみが保存され、レポート・デザイン全体は保存されません。

保存したレポート・オブジェクトの挿入

保存したグリッド、グラフ、イメージおよびテキスト・オブジェクトをリポジトリからレポートに挿入できます。

▶ 保存したレポート・オブジェクトを挿入するには:

1. レポート・デザインから、次のいずれかの操作を行います。
 - ・ 「挿入」、「保存したオブジェクト」の順に選択します
 - ・ 右クリックして「オブジェクトの挿入」、「保存したオブジェクト」の順に選択します。
2. 「保存したオブジェクトの挿入」ダイアログ・ボックスで、挿入するオブジェクトを指定します。
 - ・ 名前 - オブジェクトの名前
 - ・ 説明 - オブジェクトの説明
 - ・ タイプ - グリッド、テキスト、イメージまたはグラフ
3. オプション: 「ソース・オブジェクトにリンク」を選択して、保存したオブジェクトをソース・オブジェクトにリンクします。
4. 「挿入」をクリックします。

ヘッダーとフッターの作成

レポートでは、カスタム・ヘッダーおよびカスタム・フッターを設計できます。ヘッダーおよびフッターの高さの単位として、インチまたはセンチを使用します。ヘッダーは、上部の余白のすぐ下に、フッターは、下部の余白のすぐ上に置かれます。ヘッダーとフッターは、説明やグラフィックを追加したり、GetCell、Date、Pageなどのテキスト関数を挿入したりするために使用できます。詳細は、[75ページのヘッダーとフッターの設計](#)を参照してください。

▶ ヘッダーとフッターを作成するには:

1. レポート・ページの未使用領域をクリックし、「レポートのプロパティ」シートにアクセスします。
2. 「ヘッダーの高さ」テキスト・ボックスで、次のいずれかのアクションを行います。
 - ・ レポートにヘッダーを含める場合は、ヘッダーの高さを入力します。

ヘッダーおよびフッターの高さを指定すると、「ページ設定」ダイアログ・ボックスで指定したページ・サイズと上下の余白に合わせて、余白の内側に自動的に配置されます。詳細は、[174ページのページ設定の変更](#)を参照してください。

- レポートからヘッダー除外する場合は、ゼロ(0)を入力します。
3. 「フッターの高さ」テキスト・ボックスで、次のいずれかのアクションを行います。
 - レポートにフッターを含める場合は、フッターの高さを入力します。

ヘッダーおよびフッターの高さを指定すると、「ページ設定」ダイアログ・ボックスで指定したページ・サイズと上下の余白に合わせて、余白の内側に自動的に配置されます。
 - レポートからフッターを除外する場合は、ゼロ(0)を入力します。
 4. 「注釈として表示」-「セル・テキスト」: Financial ManagementおよびPlanningで、注釈にセル・テキストを表示する場合に選択します。
 5. 「注釈として表示」-「プランニング・ユニットの注釈」: Planningで、注釈にプランニング・ユニットの注釈を表示する場合に選択します。
 6. 「注釈として表示」-「ドキュメントの添付」: Financial Managementで、注釈にドキュメントの添付ファイルを表示する場合に選択します。

余白、用紙サイズまたは表示サイズの指定の詳細は、[174ページのページ設定の変更](#)を参照してください。

レポート・オブジェクトの位置設定

レポート・オブジェクトの位置設定とは、レポート・デザイナのワークスペース内の希望する位置にオブジェクトを配置することです。たとえば、テキスト・ボックスをレポートの左上に配置し、グリッドをレポートの中央に配置できます。オブジェクトの配置の仕方によって、オンライン・レポートおよび印刷ページが影響を受けます。レポート・オブジェクトは、位置のプロパティの値を指定するか、またはルーラーを使用して手動で配置します。

オブジェクトを位置設定する機能により、レポート・オブジェクトに含まれるデータ量に応じてレポート・オブジェクトのサイズを変更できるので、レポートの外観に大きく影響します。レポート・オブジェクトは、上または左にある他のレポート・オブジェクトとの相対的な位置を設定できます。たとえば、特定のレポート・オブジェクトの上にあるレポート・オブジェクトのサイズを増減すると、下にあるレポート・オブジェクトは、他のレポート・オブジェクトとの距離を同じに保つために、必要に応じて移動します。

オブジェクトの相対的な配置を指定しないと、そのオブジェクトの上または左にあるオブジェクトのサイズが変わっても、元のオブジェクトが現在の位置に印刷されます。

オブジェクトは重ねて整理できますが、重ね合せはレポートのレイアウト時に選択します。重ねることのできるオブジェクトにはテキスト・ボックス、グリッド、チャートおよびイメージがあります。オブジェクトが重なっている場合は、レポート・オブジェクトを背面(別のオブジェクトの後ろ)または前面(別のオブジェクトの前)に移動できます。



注:

オブジェクトを重ねる機能は、設計の利便性のみを考えたものです。重なりが含まれるレポートを印刷するとき、デザイナで表示されるとおりに印刷されない場合は、レポート内のオブジェクトを再調整する必要があります。

重なった複数のオブジェクトをレポート・デザイナで操作する場合は、オブジェクトのレイアウトに無関係にレポートを印刷できます。たとえば、テキスト・ボックスの一部がチャートに重なっていたり、チャートのレイヤーが、互いの上部に

配置されているというような場合があります。レポートにオブジェクトがどのように配置されていても、レポートを印刷できます。

▶ レポート・オブジェクトの位置を設定するには:

1. レポートを開きます。
2. 次の1つ以上のアクションを行って、レポート・オブジェクトを位置を設定します。
 - グリッドの位置を設定するには、グリッドを選択し、「グリッドのプロパティ」シートの「位置」のカテゴリを選択します。「横方向」および「縦方向」ドロップダウン・リストで、レポート上でのグリッドの横および縦の位置を選択します。
 - チャートの位置を設定するには、チャートを選択し、「チャートのプロパティ」シートの「横方向」および「縦方向」ドロップダウン・リストで、レポート上でのチャートの横および縦の位置を選択します。
 - テキスト・ボックスの位置を設定するには、テキスト・ボックスを選択し、「テキストのプロパティ」シートの「横方向」および「縦方向」ドロップダウン・リストで、レポート上でのテキスト・ボックスの横および縦の位置を選択します。
 - イメージの位置を設定するには、イメージを選択し、「イメージのプロパティ」シートの「横方向」および「縦方向」ドロップダウン・リストで、レポート上でのイメージの横および縦の位置を選択します。
 - 重なり合ったオブジェクトの1つを、他のオブジェクトの前面に移動するには、オブジェクトを選択し、マウスを右クリックして、「前面へ移動」を選択します。
 - 重なり合ったオブジェクトの1つを、他のオブジェクトの背面に移動するには、オブジェクトを選択し、マウスを右クリックして、「背面へ移動」を選択します。



ヒント:

グリッドおよびチャート・オブジェクトの位置を手動で設定するには、ヘッダー領域の内側をクリックして、希望する位置にドラッグします。テキストおよびイメージ・オブジェクトの位置を手動で設定するには、オブジェクトをクリックして、希望する位置にドラッグします。



注:

テキスト・オブジェクトをクリックしたときにオブジェクトが少し移動し、「中央」などの一部の位置設定が変わる場合があります。これを修正するには、テキスト・オブジェクトの位置を再度適用します。

レポート・オブジェクトのサイズ変更

レポートをプレビューまたは印刷するときは、レポート・オブジェクトのサイズを変更して、最大限に拡大して表示したり指定した高さや幅で表示したりできます。また、すべての結果データを収めるためにより大きい領域が必要な場合にテキスト・ボックスおよびグリッドのサイズを自動的に増やすように設定できます。レポート・オブジェクトのサイズを変更してもオブジェクトのコンテンツのサイズは変更されませんが、コンテンツを囲むスペースが変わります。たとえば、グリッドの枠線のハンドルをドラッグして、グリッドの左にスペースを用意できます。グリッドを表示すると、グリッドの左の領域は空白のままになっています。



注:

オンライン・レポートのテキスト・ボックスやグリッドを小さくしすぎて、コンテンツ全体を表示しきれなくなると、オブジェクトの枠線にスクロール・バーが表示されます。

▶ レポート・オブジェクトのサイズを変更するには:

1. レポートを開きます。
2. レポート・オブジェクトのサイズを変更するには、次のいずれかを行います。
 - テキスト・ボックスのサイズを変更するには、テキスト・オブジェクトを選択し、「テキストのプロパティ」シートで「自動サイズ調整」を選択します。レポートをプレビューまたは印刷するとき、テキスト領域が最大に拡大します。



注:

テキストには27行という制限があります。テキストのすべての行を表示するには、「自動サイズ調整」の選択を解除します。

- グリッドを縦方向および横方向に拡張できるようにするには、グリッドを選択し、「グリッドのプロパティ」シートの「全般」を選択します。「自動サイズ調整」を選択します。



ヒント:

レポート・オブジェクトのサイズを手動で調整するには、レポート・オブジェクトのハンドルをドラッグします。レポート・デザイナーのワークスペースのガイドラインおよびルーラーを使用すると、レポート・オブジェクトのサイズを簡単に調整できます。

レポート・オブジェクトの保存

レポート・オブジェクトを保存するときには、そのソース・オブジェクトとリポジトリ内のソース・オブジェクト間のリンクを作成できます。レポート・オブジェクトをリポジトリに保存すると、同じものを再利用できます。これによって時間を節約でき、レポートの作成時にアクセスして使用するオブジェクトのライブラリを構築できます。

▶ レポート・オブジェクトを保存するには:

1. レポート・オブジェクトをクリックし、「ファイル」、「オブジェクトの保存」の順に選択します。
2. フォルダを選択するか、または新しいフォルダを作成します。
3. 「名前」テキスト・ボックスに、レポート・オブジェクトの名前を入力します。大文字と小文字、スペースおよび数字を使用できます。¥ / %, ? + < > | ' " *などの特殊文字は使用できません。
4. 「説明」テキスト・ボックスに、レポート・オブジェクトの説明を入力します。
5. 次のいずれかのアクションを行って、ローカルのレポート・オブジェクトをリポジトリに保存します。
 - レポート内のローカル・オブジェクトからリポジトリ内のソース・オブジェクトへのリンクを作成するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。

- ・ レポート・デザイン内のローカル・オブジェクトからリポジトリ内に保存されたオブジェクトへのリンクを作成せずに保存するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。
6. レポート・オブジェクトをリポジトリに保存するには、「保存」をクリックします。レポート内のレポート・オブジェクトを保存した場合、指定したオブジェクトのみが保存され、レポート・デザイン全体は保存されません。

レポートのオブジェクトの除去

リンク付きレポート・オブジェクトをレポートから除去した場合、オブジェクトはレポートから除去されるだけで、リポジトリからは除去されません。ソース・レポート・オブジェクトは、他のレポートでそのまま使用できます。サーバーからのレポート・オブジェクトの除去の詳細は、[257ページの第11章「エクスプローラのリポジトリの管理」](#)を参照してください。

レポートからレポート・オブジェクトを除去するには、レポート・オブジェクトを選択し、「編集」、「削除」の順にクリックします。

ヘッダーとフッターの設計

ヘッダーとフッターは、レポートの各ページの上と下に表示され、右揃え、左揃え、中央揃えに配置できます。ヘッダーとフッターには、テキスト、イメージおよびレポート名などのテキストを取得する式を含めることができます。また、ヘッダーまたはフッターにページ番号を含めることができます。

▶ ヘッダーとフッターを設計するには:

1. レポートを開きます。
2. レポート・オブジェクト以外の場所をクリックし、「レポートのプロパティ」シートを表示します。
3. ヘッダーとフッターに入っているオブジェクトをすべて除去し、次のいずれかまたは両方のアクションを行います。
 - ・ ヘッダーの高さを指定するには、「ヘッダーの高さ」テキスト・ボックスにインチまたはセンチ単位の値を入力します。
 - ・ フッターの高さを指定するには、「フッターの高さ」テキスト・ボックスに値を入力します。



ヒント:

ヘッダーまたはフッターを使用しない場合は、ヘッダーまたはフッターの高さにゼロ(0)を指定します。空白のレポート・レイアウトのヘッダーとフッターの高さのデフォルトはゼロ(0)です。

4. 次のいずれかのアクションを行います:
 - ・ ヘッダーとフッターにテキストを挿入するには:
 1. 「挿入」、「テキスト」の順に選択します。
 2. ヘッダーまたはフッター内で、テキスト・ボックスの左上角になる場所をクリックし、そのままドラッグします。ボックスが適切なサイズになったらマウスのボタンを離します。
 3. テキスト・ボックスの内側をクリックします。次に、テキスト・ボックスにテキストを正確に入力するか、ヘッダーまたはフッターの情報を動的に取得する式を指定します。式を指定したり、ページや日付などの関数

およびレポートの説明を追加したりする場合は、「テキストのプロパティ」シートの「関数の挿入」ボタンをクリックします。

• ヘッダーとフッターにイメージを挿入するには:

1. 「挿入」、「イメージ」の順に選択します。
2. ヘッダーまたはフッター内で、イメージの左上角になる場所をクリックし、そのままドラッグします。ボックスが適切なサイズになったらマウスのボタンを離します。

5. 「テキストのプロパティ」シートまたは「イメージのプロパティ」シートで、プロパティを設定します。

タイトル・ページの作成

タイトル・ページを作成すると、ユーザーが定義したテキストを含んでいる新しいページがレポートの先頭に挿入されます。

▶ タイトル・ページを作成するには:

1. タイトル・ページを追加するレポートを開き、レポート・デザイナのワークスペースの上部にテキスト・ボックスを追加します。
2. テキスト・ボックスの下にあるレポート・オブジェクトを選択し、そのオブジェクトのプロパティ・シートで、「前に改ページ」チェック・ボックスを選択します。
3. 「テキストのプロパティ」シートで、タイトル・ページのテキストを設計します。
4. 「ファイル」、「印刷プレビュー」の順に選択して、タイトル・ページを表示します。

レポート・オブジェクトの前への改ページの挿入

レポート・オブジェクトを次のページに移動するには、レポート・オブジェクトの前に改ページを挿入します。

▶ レポート・オブジェクトの前に改ページを挿入するには:

1. レポートを開き、その前に改ページを挿入するレポート・オブジェクトを選択します。
2. レポート・オブジェクトのプロパティ・シートで、「前に改ページ」チェック・ボックスを選択します。

レポートの要約の表示

レポートの要約には、レポートの名前、説明および作成者が表示されます。最終変更者と、レポートが最後に変更された日時も表示されます。

レポートを保存すると、要約情報が保存されます。次の表に、レポートの要約に表示できるオプションを示します。

表7 レポートの要約の表示オプション

オプション	説明
名前	レポートの名前
説明	レポートの説明、変更可能
作成者	レポートを作成したユーザー
作成日	レポートが作成された日時

オプション	説明
最終更新者	レポートを最後に変更したユーザー
最終更新日	レポートが最後に変更された日時
オブジェクト・タイプ	表示されているオブジェクトのタイプ
場所	オブジェクトが保存されている場所
データベース接続	このレポート・オブジェクトで使用されているデータベース接続を識別します

▶ レポートの要約を表示するには:

1. レポートを開きます。
2. 「ファイル」、「要約」の順に選択します。

サーバー情報の表示

サーバー情報を表示して、サーバーのアクティビティをモニターします。サーバー情報は、レポート・サーバーの様々な統計情報から構成されています。次の表に、レポート・サーバーの統計情報を示します。

表8 レポート・サーバーの統計情報

統計情報	説明
現在実行中のレポート	レポート・サーバーで現在実行しているレポートの合計数。
このセッションの合計要求数	レポート・サーバーが起動してから、処理を要求したレポートの合計数。
合計メモリ(バイト)	レポート・サーバーの仮想マシンで使用されるメモリの容量。
空きメモリ(バイト)	レポート・サーバーの仮想マシンで使用可能な残りのメモリの容量。 注: メモリは通常、仮想マシンに動的に割り当てられます。メモリの容量が少なくなると、システムによって追加のメモリが割り当てられ、サーバーで使用可能な空きメモリの容量が減ります。
スレッド - 実行中のレポート	この数値はJConsoleで変更できます。JConsoleの詳細は、 <i>Oracle Hyperion Financial Reporting</i> 管理者ガイドのプロパティ情報に関するトピックを参照してください。

▶ サーバー情報を表示するには:

1. レポートを開きます。
2. 「ファイル」、「レポート・サーバー情報」の順に選択します。
3. 「閉じる」をクリックします。

5

グリッドのカスタマイズ

この項の内容:

グリッドへの行と列の挿入	79
グリッドでの切り取り、コピー、貼付け	81
グリッドの行見出しと列見出しの指定	82
グリッドの行見出しと列見出しのオーバーライド	83
行と列のテンプレートの使用	85
データ問合せ最適化オプションの設定	92
Financial Managementのライン・アイテムの詳細の表示	94
Planningのサポート詳細の表示	94
グリッド視点の定義	96
改ページの挿入	98
ページ軸の見出しの定義	98
グリッドのデータベース接続の変更	100
グリッドへの複数のデータベース接続の割当て	100
データ行とデータ列の自動計算の追加	101
自動計算されたデータの行と列のフォーマット	104
式の行や列の定義	106
式バーの使用方法	114
プロパティ・シートの機能へのアクセス	119
セル・レベルでの計算	119
テキスト関数を使用した情報の表示	120
グリッド・ヘッダーの固定	121

データ行および列を計算して、グリッドをカスタマイズできます。関数を使用して、レポート・データを詳細に設定したり、レポートが作成された日付などの動的データを追加したりできます。グリッド内または複数のグリッド間で、行または列を切り取ったりコピーしたりして貼り付けることもできます。

グリッドのカスタマイズを始める前に、少なくとも1つのグリッドを挿入し、そのディメンション・レイアウトを定義する必要があります。レポートをカスタマイズするには、レポートにテキスト・ボックスまたはグリッドを挿入する必要があります。詳細は、[59ページのレポート・オブジェクトの追加](#)を参照してください。

グリッドへの行と列の挿入

行や列をグリッドに挿入して、グリッドにデータを追加します。

表9 行と列のタイプ

タイプ	説明
データ	データの行や列には、データベース接続によって取得されたディメンションのメンバーが含まれます。データの行や列のメンバーは、デフォルトでディメンションの最上位メンバーです。 注： グリッドのデータの行、列またはセルには、#という記号が付きます。
式	式の行や列には、指定された式に基づく値が表示されます。式の行や列は、一般にデータの行や列で合計、平均および差異を計算するときに使用します。 注： グリッドの式の行、列またはセルには、=#という記号が付きます。
テキスト	テキストの行や列には、主に、セルに入力したテキストまたはテキスト関数によって動的に追加されたテキストが含まれます。 注： テキストの行、列またはセルがグリッドに追加されても、記号は付きません。テキストが入力されるまで、最初は空白になっています。

デフォルトでは、グリッドをレポートに追加すると、データ行、アンカー行、データ列およびアンカー列の各コンポーネントのいずれかが含まれます。アンカー行やアンカー列は、行または列の最後に配置される空白の行または列です。グリッド内に行や列を1つ以上追加したり、アンカー行やアンカー列を使用して新しい行や列を追加したりすることができます。



ヒント:

レポートに追加したグリッドのフォーマットを設定するには、[147ページのグリッドのフォーマット](#)に記載されているフォーマット情報を参照してください。

グリッドの境界のサイズは、行や列を追加したときと変わりません。グリッドのサイズを変更する方法の詳細は、[73ページのレポート・オブジェクトのサイズ変更](#)を参照してください。

▶ 行や列をグリッドに挿入するには:

- セル、行または列を選択します。「挿入」、「行」または「列」の順に選択し、さらに「データ」、「式」または「テキスト」の順に選択します。新しい行は、選択した行の上に挿入されます。新しい列は、選択した列の左側に挿入されます。



ヒント:

複数の行や列を挿入する場合は、挿入する行または列と同じ数の行または列をグリッドで選択します。

- グリッドの最後に行や列を追加するには、グリッド、アンカー行またはアンカー列を選択し、次のいずれかのアクションを行います。

- ・ 行を追加する場合は、「挿入」、「行」の順に選択し、さらに「データ」、「式」または「テキスト」の順に選択します。
 - ・ 列を追加する場合は、「挿入」、「列」の順に選択し、さらに「データ」、「式」または「テキスト」の順に選択します。
3. 行や列に、データ、式またはテキストを入力するには、次のいずれかのアクションを行います。
- ・ データの行や列の場合は、行または列の見出しをダブルクリックし、行または列に含めるディメンション・メンバーを選択します。詳細は、[24ページのデータの行と列のメンバーの割当て](#)を参照してください。
 - ・ 式の行や列の場合は、行または列の見出しを選択し、式バーで式を作成します。
 - ・ テキストの行や列の場合は、行または列に直接テキストを入力します。テキストの行や列のフォーマットを設定する方法の詳細は、[145ページのテキスト・ボックスのフォーマット](#)を参照してください。



注:

行や列を削除するには、削除する行または列を選択し、「編集」、「削除」の順に選択します。

グリッドでの切り取り、コピー、貼付け

レポートの同じグリッド内または2つの異なるグリッド間で行と列および式の行と列をコピーして貼り付けることができます。行と列および式の行と列を切り取って貼り付ける場合は、同じグリッド内でのみ可能です。



注:

式の行や列を切り取る場合は、行または列全体を切り取る必要があります。

▶ グリッドで行や列を切り取る、コピーする、貼り付けるには:

1. Reporting Studioを開きます。
2. 「ファイル」、「新規」、「レポート」の順に選択して空白のレポートを開くか、または既存のレポートを選択します。
3. グリッドを作成します。
4. 行または列を選択し、次のいずれかのアクションを行います。
 - ・ 行または列を切り取って、情報をWindowsのクリップボードに置くには、「編集」、「切り取り」の順に選択します。
 - ・ 行または列をコピーして、情報をWindowsのクリップボードに置くには、「編集」、「コピー」の順に選択します。



ヒント:

連続した複数の行または列を選択するには、[Shift]キーを押しながら複数の行または列をクリックします。

5. 宛先の行または列をクリックします。
6. 選択した情報を宛先の行または列に貼り付けるには、「編集」、「貼付け」の順に選択します。



注:

列は、選択した宛先の列の左側に貼り付けられます。行は、選択した宛先の行の上に貼り付けられます。貼り付けると、列または行が挿入されますが、宛先の行または列のデータは上書きされません。

7. 「ファイル」、「保存」の順に選択して、レポートを保存します。

グリッドの行見出しと列見出しの指定

グリッドの行見出しと列見出しを定義すると、グリッド全体の行見出しと列見出しに表示する情報を指定できます。行見出しと列見出しには、次のメンバー・ラベルのいずれかを指定できます。

- メンバー名。見出しにメンバー名が表示されます。
- 別名または説明。見出しに別名または説明が表示されます。
- メンバー名と、別名または説明。見出しにメンバー名と、別名または説明が表示されます。



注:

別名または説明を指定するかどうかは、データベース接続のタイプによって異なります。Essbase データベース接続またはPlanningデータベース接続によってレポートを作成する場合は、「別名」を選択します。Financial Managementデータベース接続によってレポートを作成する場合は、「説明」を選択します。

行見出しと列見出しを指定するときは、列に対して行見出しを配置する位置を定義する必要があります。たとえば、列Aの前に行見出しを配置できます。



注:

ソートする列の前に行見出しを配置することはできません。

セグメント内で同じメンバーの見出しが繰り返されないように抑制することもできます。見出しを抑制すると、繰り返し表示されるメンバーの見出しの最初のインスタンスのみが表示されます。それ以降に繰り返されるメンバーの見出しは非表示になります。

Financial Managementデータベース接続を介したエンティティ・ディメンションを使用している場合は、関連するプロパティ・シートを使用して行、列またはグリッドの「エンティティのショート名」チェック・ボックスを選択できます。このオプションを選択すると、通常は表示されるエンティティの親の部分を除去して、レポートにエンティティのショート名を表示できます。

Financial Managementを使用したエンティティの標準の表示は親・子という形式になります。関連するプロパティ・シートで「エンティティのショート名」を選択すると、エンティティの表示は、親が除去されて、子として表示され

ます。たとえば、通常はUnitedStates.Connecticutと表示されるエンティティの場合、「エンティティのショート名」チェック・ボックスを選択すると、Connecticutと表示されます。

使用する別名表を選択することもできます。Essbaseデータベース接続またはPlanningデータベース接続では、別名表を選択できます。グリッド・レベルでは別名を指定できませんが、行または列に別名を表示する場合は、グリッド・レベルで選択した別名表が表示されます。

グリッドに指定した見出しのプロパティは、適用外として指定しないかぎり、すべての行および列に適用されます。

▶ グリッドの行見出しと列見出しを定義するには:

1. レポートを開き、グリッドを選択します。
2. 「メンバー・ラベル」で、次のいずれかのオプションを選択します。
 - 「メンバー名」は、見出しにメンバー名を表示します。
 - 「別名: デフォルト」は、Essbaseデータベース接続またはPlanningデータベース接続からメンバーの別名を表示します。または「説明」は、Financial Managementデータベース接続からメンバーの説明を表示します。
 - 「両方」は、見出しにメンバー名と、別名または説明を表示します。



注:

プロパティ・シートに表示されるオプションは、データベース接続のタイプによって異なります。たとえば、データベース接続のタイプとしてFinancial Managementを使用している場合は、「説明」オプションが表示されます。この場合、EssbaseまたはPlanningデータベース接続を使用していない場合は「別名: デフォルト」オプションは表示されません。

3. 列を選択します。行見出しは、選択した列の左側に配置されます。列は、列A、列B、列Cのようにアルファベット順に表示されます。
4. オプション: Financial Managementグリッドにエンティティのショート名を表示するには、「エンティティのショート名」チェック・ボックスを選択します。
5. オプション: セグメント内で同じメンバーの見出しが繰り返し表示されないようにするには、「繰り返しを抑制」チェック・ボックスを選択します。
6. オプション: 別名を表示するときに使用する別名表を選択します。デフォルトでは、このオプションは、データベース接続のタイプに応じたデフォルトの別名表に設定されます。



注:

グリッドに挿入したテキストを横向きまたは縦向きに配置できます。詳細は、[146ページのテキスト・ボックス内のテキストの配置](#)を参照してください。

グリッドの行見出しと列見出しのオーバーライド

行見出しと列見出しを定義すると、グリッドに設定した見出しのプロパティをオーバーライドできます。行や列に次のいずれかのタイプの見出しを指定できます。

- **メンバー・ラベル**
 - メンバー名。見出しにメンバー名が表示されます。
 - 別名または説明。見出しに別名または説明が表示されます。
 - メンバー名と、別名または説明。見出しにメンバー名と、別名または説明が表示されます。
- **カスタム見出し**
 - カスタマイズしたテキスト。見出しにユーザー定義のテキストが表示されます。
 - テキスト関数。テキスト関数を使用して、見出しに表示するデータを取得します。

セグメント内で同じメンバーの見出しが繰り返されないように抑制することもできます。見出しを抑制すると、繰り返し表示されるメンバーの見出しの最初のインスタンスのみが表示されます。それ以降に繰り返されるメンバーの見出しは非表示になります。

▶ グリッドの行見出しと列見出しをオーバーライドするには:

1. レポートを開き、グリッドの式の行または列を選択します。
2. 次のいずれかの操作を行います。
 - 「**メンバー・ラベル**」を選択し、次の**メンバー・ラベル・オプション**のいずれかを選択します。
 - 「**メンバー名**」は、見出しにメンバー名を表示します。
 - 「**別名: デフォルト**」は、EssbaseまたはPlanningデータベース接続からメンバーの別名を表示します。または「**説明**」は、Financial Managementデータベース接続からメンバーの説明を表示します。
 - 「**両方**」は、見出しにメンバー名と、別名または説明を表示します。



注:

プロパティ・シートに表示されるオプションは、データベース接続によって異なります。たとえば、データベース接続としてFinancial Managementを使用している場合は、「**説明**」オプションが表示されます。この場合、「**別名: デフォルト**」オプションは表示されません。

- 「**カスタム見出し**」を選択し、次のいずれか、または両方の操作を行います。
 - 見出しに表示するユーザー定義のテキストを入力します。



ヒント:

列見出しのテキストを改行する場合は、キーボードの改行キーを使用します。

- テキスト関数を入力するか、「**関数の挿入**」ボタン  をクリックして、見出しに表示するデータを取得するテキスト関数を選択します。



注:

行または列のプロパティ・シートに「**繰り返しを抑制**」オプションを表示するには、行または列全体を選択する必要があります。

3. オプション: Financial Managementグリッドにエンティティのショート名を表示するには、「エンティティのショート名」チェック・ボックスを選択します。

行と列のテンプレートの使用

サブピック

- [行と列のテンプレートについて](#)
- [行と列のテンプレートのフォーマットの継承](#)
- [行と列のテンプレートのプロパティ値](#)
- [行と列のテンプレートの作成](#)
- [行と列のテンプレートの挿入](#)
- [行と列のテンプレートのリンクの解除](#)
- [行と列のテンプレートの変更](#)
- [行および列テンプレートの保存](#)

行と列のテンプレートについて

行と列のテンプレートを使用すると、連続した一連の行または列を選択して、リポジトリにオブジェクトとして保存し、1つ以上のレポートで再利用できます。

行と列のテンプレートは、1つ以上の行または列の定義から構成されています。これらの行または列の定義には、次のコンポーネントが含まれている可能性があります。

- データベース接続、ディメンション、メンバー選択
- 式の行と式の列
- 展開機能
- 見出し(カスタマイズしたフォーマットを含む)
- テキストの行と列(見出しのセルのテキストのみが保存されます)
- セルのフォーマット
- 基本の抑制(#Missing、#Zero、#Error)

行と列のテンプレートを作成すると、次のものが破棄されます。

- セルの式
- セカンダリ・データベース接続の指定
- データ・セル領域のテキスト(見出しのセルのテキストは保持されます)
- 条件付きフォーマット
- 関連コンテンツ
- 条件付き抑制

作成した行と列のテンプレートは、リポジトリに保存できます。ただし、次の制限があります。

- 式は、テンプレートを構成する行や列に含まれている行と列を参照する必要があります。
- 行と列のテンプレートに含まれない式は、行と列のテンプレートを構成する列や行、またはその一部の列や行を参照することはできません。



注:

行と列のテンプレートを作成するには、その前にセル・フォーマットの継承を設定する必要があります。「セルのフォーマット」ダイアログ・ボックスを使用して、セルのフォーマットを設定できます。詳細は、[153ページのセルのフォーマットの継承](#)を参照してください。行と列のテンプレートでフォーマット設定を継承するとき、「行と列のテンプレートのプロパティ」シートの「フォーマットの継承元」オプションを使用する必要があります。このプロパティ・シートには、抑制、フォーマット、行の高さ、列の幅など、継承できるオプションが示されます。



注:

レポートに複数のテンプレートが含まれており、そのうちの1つのテンプレートに対してリポジトリからの移動、名前変更または削除が行われたか、テンプレートのデータ・ソースが変更されたために、そのテンプレートを取得できない場合、既存のテンプレートへのリンクは壊れた状態になります。壊れたリンクに関する警告は表示されません。ただし、ログ(FRWebApp.log、FRReportServer.logまたはFRClient.log)を表示することによって、孤立したリンクを確認できます。

行と列のテンプレートのフォーマットの継承

リンクされている行と列のテンプレートで継承が使用されている場合、フォーマットのオプションは動的で、レポートごとに異なります。リンクされている行または列のテンプレートがグリッド内で使用される場合、フォーマットの継承は、行テンプレートの上または列テンプレートの左にある最初に使用可能なテンプレート以外の行に自動的にリセットされます。行または列のテンプレートのフォーマットの一貫性を保つ場合、または継承のフォーマットと行または列のテンプレートのフォーマットに一貫性がない場合は、次のアクションを実行できます。

- 表示するフォーマットが含まれている非表示のテキスト行またはテキスト列を、行または列のテンプレートに挿入し、プロパティ・シートでフォーマットの継承元をその非表示の行または列に設定します。
- フォーマットを継承せずに、「フォーマット」ダイアログ・ボックスで行または列のテンプレートのフォーマットを設定します。

行と列のテンプレートのプロパティ値

次の表に、行と列のテンプレートを作成するときに保存、継承、破棄されるプロパティの値を示します。

表10 保存または継承されるプロパティ値(ユーザーが設定するオプション)

プロパティ値	説明
行と列のテンプレートのデータベース接続	行または列ごとに保存
見出し - 繰返しを抑制	行または列ごとに保存
ライン・アイテムの詳細を表示	行または列ごとに保存

プロパティ値	説明
見出し	行または列ごとに保存
展開を許可	行または列ごとに保存
計算式	行または列ごとに保存
常に非表示	行または列ごとに保存
正数のフォーマット	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
負数のフォーマット	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
小数点以下の桁数	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
スケール値	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
上の枠線	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
右の枠線	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
下の枠線	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
左の枠線	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
網掛け	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
水平方向の配置	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
垂直方向の配置	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
インデント	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
フォント	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
フォント・スタイル	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
フォント・サイズ	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
文字飾り	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
値の置換	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション
フォーマットの継承元	セルごとに保存またはセルごとに継承 - ユーザー・オプション 注: 参照が行と列のテンプレートへの内部参照の場合、行と列のテンプレートが挿入されるときに適用されます。参照が外部参照の場合、この参照は破棄され、「行と列のテンプレートのプロパティ」シートの「フォーマットの継承元」の設定が適用されます。詳細は、 85ページの行と列のテンプレートの使用 を参照してください。
行の高さ/列の幅	行または列ごとに保存されるか、別の行や列から継承されて、行と列のテンプレートにあるすべての行や列に適用されます(ユーザーが設定するオプション)。
抑制	行または列ごとに保存されるか、別の行や列から継承されて、行と列のテンプレートにあるすべての行や列に適用されます(ユーザーが設定するオプション)。
前に改ページ	行または列ごとに保存されます。

表11 破棄されるプロパティ値

プロパティ値	説明
テキスト・セルのテキスト	破棄 - 見出しのセルのテキストは保持されます

プロパティ値	説明
セルの式	破棄
調査	破棄
条件付きフォーマット	破棄
見出し以外のセルのテキスト	破棄
計算の順序	破棄 - グリッド外部とは無関係
セカンダリ・データベース接続	エラー。詳細は、 89ページのステップ 9.b を参照してください。
式にある外部参照(テキストまたは数値)	エラー

行と列のテンプレートの作成

行と列のテンプレートは、1つのグリッドの行と列に基づいて作成します。テンプレートに含める行と列を検討するときは、今後使用するのに適したメンバー、式およびフォーマットを含んでいる行と列を選択します。その後、行と列のテンプレートをインポートして、他のグリッドで使用できます。



注:

テンプレートを更新すると、そのテンプレートへのリンクを含んでいるすべてのグリッドが更新されます。



ヒント:

行と列のテンプレートには、データ行またはデータ列が少なくとも1つ含まれている必要があります。たとえば、テキストや式の行または列だけでテンプレートを構成することはできません。

▶ 行と列のテンプレートを作成するには:

1. グリッドを含んでいるレポートを開くか、新しいグリッドを作成して、テンプレート用の行や列を入れます。
2. テンプレートに含める行または列のセットを選択します。



注:

行または列の全体を選択する必要があります。

3. 「ファイル」、「オブジェクトの保存」の順に選択して、オブジェクトをリポジトリに保存します。

「オブジェクトの保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。または、選択した行または列で右クリックして、行および列テンプレートとして保存を選択します。

4. 「名前」テキスト・ボックスに、行と列のテンプレートの固有の名前(売上テンプレートなど)を入力します。
5. オプション: 「説明」テキスト・ボックスに簡単な説明を入力します。この説明は、リポジトリの「説明」の下に表示されます。
6. 「タイプ」ドロップダウン・リストでは、デフォルトで「行と列のテンプレート」が選択されています。

7. オプション: 行と列のテンプレートを現在のグリッドでリンク・オブジェクトとして保存するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。現在のグリッドへのリンクを含めずに行と列のテンプレートをグリッドに保存するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。



注:

グリッドのすべての行と列を行と列のテンプレートに含めるよう選択されている場合は、グリッドでこのオブジェクトをリンクできないので、「ソース・オブジェクトにリンク」は使用できません。「選択した行に基づいてリンクされた行と列のテンプレートを作成できません。グリッドには、行と列のテンプレートの一部ではないデータ行が少なくとも1つ必要です。」というエラー・メッセージが表示されます。

8. 「保存」をクリックしてグリッドに戻ります。行と列のテンプレートを、リンク・オブジェクトとして保存する場合は、次のいずれかの操作を行います:
 - 空白のデータ行またはデータ列をグリッドに挿入し、行や列のテンプレートから除外する
 - テンプレートから行または列の1つを選択解除する



注:

グリッドには、リンクされた行と列のテンプレートに割り当てられていない行または列が少なくとも1つ含まれている必要があります。

9. 「保存」をクリックします。行と列のテンプレートが検証され、サポートされていないプロパティがないかどうか確認されます。行と列のテンプレートのコンテンツによって、次のダイアログ・ボックスが1つ以上表示される場合があります。
 - a. 行と列のテンプレートに、外部参照(テンプレート用に選択した行や列以外のセルへの参照など)を含む式がある場合は、行と列のテンプレートを保存する前に、その式を変更するよう促すメッセージが表示されます。



注:

セルの式は破棄できるので、このようなセルの式を含む行と列のテンプレートも保存できます。詳細は、[89ページのステップ 9.c](#)を参照してください。

- b. 行と列のテンプレートにセカンダリ・データベース接続が指定されている場合は、引き続きテンプレートを保存するように促すダイアログ・ボックスが表示されます。テンプレートを保存すると、行と列のテンプレートに指定したセカンダリ・データベース接続は破棄されます。行と列のテンプレートには、プライマリ・データベース接続が使用されます。
 - c. サポートされていないプロパティが見つかったら、テンプレートを保存する前に、破棄されるプロパティのリストが「情報」ダイアログ・ボックスに表示されます。たとえば、行と列のテンプレートにセルの式が含まれている場合、式を含めずにテンプレートを保存するか、またはテンプレートを保存しないかを選択できます。
10. 破棄されるプロパティを確認し、次のいずれかの操作を行います:
 - サポートされていないプロパティを含んでいるテンプレートを保存する場合は、「はい」をクリックし、次の手順に進みます。



注:

「はい」を選択すると、グリッドは完全に変更されます。メッセージ・ボックスに表示されたアイテムは、グリッドから破棄されます。

- ・ 行と列を変更せずに(テンプレートは保存されません)グリッドに戻る場合は、「いいえ」をクリックします。
11. 抑制、行の高さおよび改ページのダイアログ・ボックスを使用して、行の設定を保存、継承または破棄するオプションを選択します。これらの選択には、次の定義が適用されます。
- ・ 抑制 - 選択した行と列の内部にあるどの非表示設定(ゼロの場合、データがない場合、エラーの場合)でも保存または継承できます。
 - ・ 行の高さ - テンプレート用に行を1つでも選択した場合は、行の高さのどのような設定でも保存または継承できます。行の高さを変更するには、選択した行や列内で「行のプロパティ」シートを開き、「行の高さ」テキスト・ボックスで値を選択するか、数値を直接入力します。
 - ・ 列の幅 - テンプレート用に列を1つでも選択した場合は、列の幅のどのような設定でも保存または継承できます。列の幅を変更するには、選択した行や列内で「列のプロパティ」シートを開き、「列の幅」テキスト・ボックスで値を選択するか、数値を直接入力します。
 - ・ 改ページ - 選択した行や列内にある、どのような改ページ設定でも保存または破棄できます。



注:

このダイアログ・ボックスに表示されるオプションは、グリッドで選択したものによって異なります。

12. 「OK」をクリックします。

行と列のテンプレートの挿入

行と列のテンプレートをオブジェクトとしてリポジトリに保存したら、互換性のあるグリッドに挿入できます。行または列のテンプレートをレポートに挿入すると、テンプレートの外部にある式は、必要に応じて調整されます。グリッド内の式のみが更新されます。テンプレートを含むグリッドを参照する、テキスト・オブジェクトや他のグリッドの外部式は更新されません。

▶ 行と列のテンプレートを挿入するには:

1. レポートを開き、行と列のテンプレートを挿入する場所の隣の行または列を選択します。



注:

行のテンプレートは、選択した行の下に挿入されます。列のテンプレートは、選択したセルの左側に挿入されます。

2. 「挿入」、「保存したオブジェクト」の順に選択します。「保存したオブジェクトの挿入」ダイアログ・ボックスが開き、エクスプローラのリポジトリが表示されます。
3. 挿入する行と列のテンプレートを選択します。

4. 行と列のテンプレートをオブジェクトとしてリポジトリにリンクする、またはリンクを解除するには、次のいずれかのアクションを行います。
 - ・リポジトリでレポートとテンプレート間にリンクを作成するには、「ソース・オブジェクトにリンク」を選択します。行と列のテンプレートを現在のグリッドにリンクすることで、リポジトリに保存されている行と列のテンプレートへの動的接続がグリッドで維持されます。



注:

グリッド内でリンクされているテンプレートは、フォーマットの継承によってのみ変更できます。詳細は、[153ページのセルのフォーマットの継承](#)を参照してください。

- ・エクスプローラのリポジトリでソース・オブジェクトへの動的リンクを維持しないでレポートでテンプレートを使用するには、「ソース・オブジェクトにリンク」の選択を解除します。詳細は、[91ページの行と列のテンプレートのリンクの解除](#)を参照してください。
5. 「挿入」をクリックします。



注:

レポートのグリッドで、行と列のテンプレートの見出しのセルは黄色で表示されます。動的リンクは、「行と列のテンプレートのプロパティ」シートに表示されます。

行と列のテンプレートのリンクの解除

行と列のテンプレートをグリッドに挿入した後、そのリンクを解除することもできます。リンクを解除すると、リポジトリで動的に接続された行と列のテンプレートの複製ではなく、構造的なテンプレートとして、行と列のテンプレートを使用できます。

行と列のテンプレートのリンクを解除すると、テンプレート内の行と列は、リンクされていない通常の行と列に変わります。

- ▶ 行と列のテンプレートのリンクを解除するには:
 1. 行と列のテンプレートを挿入したグリッドを含んでいるレポートを開きます。
 2. リンクを解除する行と列のテンプレートを選択します。
 3. 「行と列のテンプレートのプロパティ」シートで、「ソース・オブジェクトにリンク」チェック・ボックスの選択を解除します。
 4. このオブジェクトのリンクを解除するかどうかを確認するダイアログ・ボックスが表示されたら、「はい」をクリックします。

行と列のテンプレートの変更

行と列のテンプレートは、次のいずれかの方法を使用して変更できます。

- ・新しい行と列のテンプレートを作成し、リポジトリにある行と列のテンプレートと同じ名前で作成して保存します。詳細は、[88ページの行と列のテンプレートの作成](#)を参照してください。

- 既存の行と列のテンプレートとグリッドのリンクを解除し、必要な変更を加えて、リポジトリにあったテンプレートと同じ名前と同じフォルダに保存します。



注:

どちらの方法でも、リポジトリにあった元の行と列のテンプレートは置換されます。

▶ リンクを解除して行と列のテンプレートを変更するには:

1. レポートを開き、グリッドを作成します。
2. 行と列のテンプレートをリポジトリから選択してリンクを解除し、行と列をグリッドに挿入します。詳細は、[91ページの行と列のテンプレートのリンクの解除](#)を参照してください。



注:

テンプレートのリンクを解除すると、独立したテンプレートになり、テンプレートを構成していた行と列がグリッドに挿入されます。

3. 必要に応じて、行と列を変更します。
4. 行と列のテンプレートを、置換する行と列のテンプレートと同じ名前と同じフォルダを使用して、リポジトリに保存します。
5. 「OK」をクリックして、元の行と列のテンプレートを置換することを確認します。

行および列テンプレートの保存

▶ 行または列をオブジェクトとしてリポジトリに保存するには:

1. レポート・デザイナーで、目的の行または列を選択します。
2. 右クリックして「行および列テンプレートとして保存」を選択します。

データ問合せ最適化オプションの設定

グリッドで作業しているときに、データ問合せの最適化オプションを設定して、指定したデータ問合せの効率を最適化できます。

データ問合せはマルチディメンショナル・データベース接続から1つ以上の値を抽出するので、データ問合せ最適化設定を使用すると、このプロセスの処理速度を向上するのに役立ちます。

たとえば、サーバーで非表示オプションを指定し、EssbaseのSPARSEコマンドを含めるかどうかを指定できます。このコマンドは、ディメンション・メンバーのすべての組合せにデータが存在する可能性が低い場合に使用します。たとえば、データの交差が空である場合、ディメンションは疎です。



注:

最適化オプションを適用する際は、MDX(マルチ・ディメンション式)を使用してグリッド・ベースまたはレポート・スクリプトのEssbaseデータ・ソースを問合せできます。

▶ データ問合せの最適化オプションを設定するには:

1. グリッドを含んでいるレポートを開くか作成します。
2. 「タスク」、「データ問合せ最適化設定」の順にクリックします。



注:

「データ問合せ最適化設定」ダイアログ・ボックスに表示されるオプションは、使用しているデータベース接続のタイプによって異なります。たとえば、Essbase SPARSEコマンド・オプションは、Essbaseが接続先データベースの場合にのみ表示されます。



注:

行を抑制する機能は、どのデータ・ソース(Financial Management、PlanningおよびEssbase)にも適用できます。このダイアログ・ボックスの他のすべてのオプションは、Essbaseにのみ適用されます。

3. 行を抑制するサーバーを指定するには、「次の行を抑制」フレームで次のいずれかのオプションを選択します。
4. レポートの問合せにMDX (マルチディメンショナル式)またはレポート・スクリプトのどちらを使用するかを指定できます。「**Essbase問合せでMDXを使用**」チェック・ボックスでは、次のいずれかの操作を実行します:
 - a. レポート・スクリプト問合せを使用するには、チェック・ボックスを選択解除します。これにより、グリッドのドリル・スルーの表示設定が使用不可になります。
 - b. Essbaseデータ・ソースの問合せにMDXを使用する場合は、チェック・ボックスを選択して(デフォルト)、問合せの実行方法を次から選択します:
 - i. 「**WITH MEMBERを使用して問合せを組み合わせる**」(デフォルト)。この方法では、MDX WITH MEMBER構文を使用してMDX問合せを単一の問合せに結合します。問合せの数を最小限にすると、パフォーマンスが向上します。
 - ii. 「**別々の問合せを使用**」。この方法では、メンバー選択関数("Descendants of"や"Children of"など)を備えた各行に対して別々のMDX問合せが発行されます。
5. EssbaseのSPARSEコマンドを含めるかどうかを指定するには、「**Essbase SPARSEコマンド**」フレームで次のいずれかのオプションを選択します。
 - 含む
 - 除外



注:

SPARSEコマンドのオプションは、Essbaseをデータベース接続のデータ・ソースとして使用している場合のみ表示されます。

6. オプション:ここでの設定を最適化のデフォルトにする場合は、「**デフォルトに設定**」をクリックします。
7. 「**OK**」をクリックして、設定を適用します。
8. オプション:設定を適用せずにレポート・デザイナーのグリッドに戻る場合は、「**取消し**」をクリックします。

Financial Managementのライン・アイテムの詳細の表示

Financial Managementデータベース接続を使用している場合、Financial Managementユーザーは勘定科目ディメンションでのみ行のライン・アイテムの詳細を表示するかどうかを選択できます。また、ライン・アイテムの詳細の場所として、ライン・アイテムの詳細の親メンバーの前または後を選択することもできます。ライン・アイテムの詳細を表示するには、すべてのディメンションをレベル0のメンバーに設定する必要があります。

▶ Financial Managementのライン・アイテムの詳細を表示するには:

1. レポートを開き、グリッドの行を選択します。
2. 「行のプロパティ」シートで、「ライン・アイテムの詳細を表示」を選択します。
3. オプション: 「グリッドのプロパティ」シートで、「位置」カテゴリを選択し、「ライン・アイテムの詳細の位置」ボックスで次のいずれかの操作を行います。
 - ライン・アイテムの詳細を親メンバーの前に表示するには、「メンバーの前」をクリックします。
 - ライン・アイテムの詳細を親メンバーの後に表示するには、「メンバーの後」をクリックします。これはデフォルトです。

Planningのサポート詳細の表示

Planningデータベース接続を使用していて、行を選択すると、メンバーのサポート詳細を表示できます。選択した行の1つ以上のセルにサポート詳細がある場合は、サポート詳細を表示するための追加の行が挿入されます。さらに、サポート詳細の行の中で改ページを使用できるかどうかを制御できます。

▶ Planningデータベース接続のサポート詳細を表示するには:

1. レポートを開き、グリッドで、サポート詳細があるメンバーを含んでいる行を選択します。
2. 「行のプロパティ」シートで、「サポート詳細の表示」を選択します。
3. サポート詳細の行の中で改ページを使用できるようにするかどうかを指定します。
 - サポート詳細の行の中で改ページを使用できるようにする場合は、「改ページの挿入」チェック・ボックスを選択します。
 - 親メンバーとサポート詳細を同じページに表示するには、「改ページの挿入」チェック・ボックスの選択を解除します。サポート詳細が現在のページ内に入らない場合は、親メンバーとサポート詳細が次のページに移動します。



注:

サポート詳細が複数のページにわたる場合は、デフォルトで「改ページの挿入」が選択され、改ページが使用されます。

4. オプション: サポート詳細を親メンバーの前または後に配置するには、「グリッドのプロパティ」シートで「位置」カテゴリを選択し、「サポート詳細の位置」ボックスのオプションを選択します。
 - サポート詳細を親メンバーの前に表示する場合は、「メンバーの前」をクリックします。
 - サポート詳細を親メンバーの後に表示するには、「メンバーの後」をクリックします。これはデフォルトです。
5. オプション: サポート詳細の中で世代ごとにインデントするには:

- a. サポート詳細を表示するメンバーの見出しのセルを選択します。
- b. 「フォーマット」、「セル」の順に選択し、「配置」タブを選択します。
- c. 「世代ごとのインデントの幅」ボックスで、サポート詳細リストで世代ごとに右にインデントする幅として正数を選択します。または、サポート詳細リストで世代ごとに逆方向(左)にインデントする幅として負数を選択します。



注:

このプロパティは、行の見出しのセルにのみ適用されます。Planningデータベース接続で、「サポート詳細の表示」が選択されている場合にのみ使用できます。フォーマット方法の詳細は、[145ページの第9章「レポートのフォーマット」](#)を参照してください。

6. **オプション:** サポート詳細に追加のフォーマットを適用するには、条件付きフォーマットを使用します。サポート詳細には、次の2つのオプションが役立ちます。
 - サポート詳細。サポート詳細が実行時にセルから取得される場合に、サポート詳細のフォーマットを設定できます。
 - 相対的な世代。サポート詳細の様々な世代のフォーマットを個別に設定できます。たとえば、取得されたメンバーの階層に4世代のサポート詳細が含まれている場合、フォーマットに第3世代を指定できます。この条件は、次の例のようになります。



注:

すべてのタイプのデータベース接続で相対的な世代を使用するには、複数のレベルのメンバーを戻すメンバーの関係を選択する必要があります。たとえば、「...の子(含む)」、「...の子孫」、「...の子孫(含む)」、「...の親(含む)」、「...の祖先」、「...の祖先(含む)」、「すべてのメンバー」などです。Planningでは、サポート詳細が有効になっている場合、メンバーまたは動的メンバーで相対的な世代を使用できます。

Condition 1: If

Supporting Detail Is True And

Relative Generation (of) Market = 3



注:

詳細は、[157ページの条件付きフォーマットについて](#)を参照してください。

グリッド視点の定義

グリッド視点(POV)を使用すると、設計者は行、列またはページの交差にディメンションを配置しなくても、グリッドにディメンションのメンバーを指定できます。グリッドPOVに対してディメンションを指定したら、設計者は次のように、参照者がメンバーを選択する方法を決定します。

- 任意のメンバー。どのディメンションのメンバーでも選択できます。
- リストにあるメンバー。参照者は設計者があらかじめ定義したメンバー・リストから選択できます。
- なし、メンバー選択をロック。参照者はディメンションのメンバーを選択できません。



注:

レポートのパフォーマンスを向上するには、グリッド全体で行、列またはページ軸に1つのメンバーのみを選択した状態でディメンションを使用しないでください。セルの数が増える可能性はありませんが、問合せ全体のオーバーヘッドが増大します。変数であるディメンション、または1つのメンバーに設定されているディメンションは、POV内に保持してください。変数のメンバーの場合はユーザーPOVを指定し、固定メンバーの場合は、グリッドPOVを指定します。グリッドの各データベース接続のルールとして、ディメンションがグリッド軸(行、列またはページ)に対して設定されている場合は、そのディメンションに選択されたメンバーを使用します。ディメンションがグリッドPOVに対して設定されている場合は、グリッドPOVディメンションに選択されたメンバーを使用します。ユーザーPOVディメンションに選択されたメンバーを使用します。

グリッドPOVバーの表示と非表示の切替え

レポート設計者は、グリッドPOVバーの表示と非表示を切り替えることができます。グリッドPOVを非表示にすると、レポートを表示するときにグリッドPOVを変更できなくなります。デフォルトでは、グリッドPOVバーは非表示になっています。ただし、POVバーが非表示になっている場合でも、レポートの実行時に値を操作することはできます。



注:

グリッドのPOVはHTMLビューでのみ表示され、PDFビューでは表示されません。HTMLビューではレポートは対話型なので、グリッドのPOVメンバーを変更できますが、PDFビューは静的ドキュメントであるため、グリッドのPOVは変更できません。

▶ グリッドPOVバーの表示と非表示を切り替えるには:

1. レポートを開きます。
2. グリッドPOVバーを表示または非表示にするグリッドを選択します。
3. 「グリッドのプロパティ」シートで、次のいずれかのタスクを実行します:
 - グリッドPOVを表示するには、「グリッド視点」チェック・ボックスを選択します。
 - グリッドPOVを非表示にするには、「グリッド視点」チェック・ボックスの選択を解除します。



ヒント:

または、グリッドを選択してその内側を右クリックし、「グリッド視点」を選択することもできます。

グリッド視点のメンバーの選択

グリッド視点(POV)バーで、行、列またはページ軸で使用されていないディメンションのメンバーを選択できます。POVバーで定義されたメンバーは、グリッドにデータを取得するための基準を完全に満たしています。各POVディメンションには、メンバーを1つ含めることができます。



注:

Essbaseデータベース接続とPlanningデータベース接続の場合は、エンド・ユーザーに予期しない問題が発生する可能性があるため、セキュリティが設定されているディメンションをグリッドPOVに含めないでください。

▶ グリッドPOVのメンバーを選択するには:

1. レポートを開きます。
2. グリッドPOVを表示するには、「グリッドのプロパティ」シートの「グリッド視点」を選択します。
3. グリッドPOVで、ディメンションをクリックして「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスを表示します。
4. 「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスで、各ディメンションは別々のタブに表示されます。タブに表示されたディメンションを選択し、関連付けられたメンバーを選択します。各タブですべてのディメンションにこの手順を繰り返します。
5. グリッドPOVにディメンションがあるレポートに関連コンテンツがリンクしている際にグリッドPOVのメンバーを変更するには、「関連コンテンツのリンク中にメンバーが変更されました」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。選択したメンバーがグリッドPOVに表示されます。

グリッド視点の設定

設計者はグリッド視点(POV)を設定して、レポートを表示または印刷するエンド・ユーザーが使用できるメンバーを制御または制限できます。

詳細は、[23ページの第2章「メンバーの定義」](#)を参照してください

▶ グリッドPOVを設定するには:

1. グリッドPOVのディメンションに使用するメンバーが選択されたレポートを開きます。
2. グリッドを右クリックし、「グリッド視点の設定」を選択します。
3. ダイアログ・ボックスに表示された各ディメンションについて、エンド・ユーザーがメンバーを選択できるかどうかを指定できます。
 - 「任意のメンバー」 - すべてのメンバーを選択できます。
 - 「リストにあるメンバー」 - 指定したメンバーのみを選択できます。 「選択リスト」列のをクリックします。「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- ・「なし、メンバー選択をロック(特定のディメンション)」- メンバーは選択できません。
4. 「エンド・ユーザーが選択可能」列が「リストにあるメンバー」に設定されている場合、「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを選択し、「OK」をクリックします。メンバーの選択の詳細は、[23ページの第2章「メンバーの定義」](#)を参照してください
 5. ディメンション名とメンバー名を表示するには、「ディメンション名の表示」チェック・ボックスと「メンバー名の表示」チェック・ボックスを選択します。
 6. 別名を表示するには、「別名の表示」チェック・ボックスを選択します。
 7. 「OK」をクリックします。

改ページの挿入

「行プロパティ」シートおよび「列プロパティ」シートからグリッドの行または列の前に改ページを挿入できます。これにより、必要なライン・アイテムのまとまりを維持したまま、グリッド内の特定の場所でレポート・データを区切ることができます。改ページは太い破線で示されます。

▶ 改ページを挿入するには:

1. レポートを開き、グリッドを選択します。
2. 改ページを挿入する行または列を選択(ハイライト)します。



注:

レポートの1列目の前や1行目の上に改ページを挿入することはできません。

3. 「行プロパティ」シートまたは「列プロパティ」シートで、「前に改ページ」オプションを選択します。



注:

「ページ設定」で「ページ長に合わせる」を選択している場合は、行に改ページを適用できません。「ページ幅に合わせる」を選択している場合は、列に改ページを適用できません。「ページ設定」の詳細は、[265ページの第13章「ブックとスナップショット・ブックの操作」](#)を参照してください。

4. 次のいずれかのアクションを行います:
 - ・ 行を選択し、グリッドのその行より下の部分を新しいページの先頭に配置する場合は、「上端」を選択します。列を選択し、グリッドのその列より右の部分を新しいページの左余白に合せて配置する場合は、「左端」を選択します。
 - ・ グリッドを現在と同じ位置に配置する場合は、「同じ位置」を選択します。たとえば、グリッドをページの下半分に配置し、「同じ位置」を選択した状態で改ページを挿入すると、グリッドのその行より下の部分は、2ページ目の下半分に表示されます。

ページ軸の見出しの定義

ページ軸の見出しには、ページ・メンバーが変わるたびにメンバー名が印刷されます。ページ軸のメンバーには、固有のカスタム見出しを設定できます。

ページ・ディメンションの見出しを印刷する方法の詳細は、[143ページのページ・ディメンションの見出しの印刷](#)を参照してください。

表12 ページ・ディメンションの見出しを設定するオプション

オプション	説明
新規ページ、上端	次のページの上端に新しいページが印刷されます。グリッドにリンクされたチャートがあり、ページのメンバーが変わるたびにチャートとグリッドを隣り合せて印刷する必要がある場合に、このオプションを使用します。
新規ページ、同じ位置	指定したグリッドの場所でページが印刷されます。このオプションは、次のような状況で使用します。 <ul style="list-style-type: none"> グリッドに横方向または縦方向、あるいはその両方の配置プロパティが設定されており、各ページの同じ位置にグリッドを印刷する場合。たとえば、グリッドの位置を「中央」に設定すると、各ページの中央に印刷されます。 グリッドにリンクされたチャートがあり、ページのメンバーが変わるたびにチャートとグリッドを隣り合せて印刷する必要がある場合。
同じページ	前のページのデータに続けて新しいページを印刷します。 注： グリッドにリンクされたチャートがある場合、チャートは1回印刷されます。ページのメンバーが変わってもチャートは印刷されません。

▶ ページ・ディメンションの見出しを定義するには:

1. レポートを開き、グリッドの「ページ」ボックスを選択します。
2. 「ページのプロパティ」シートの「見出し」領域で、**ディメンション**を選択します。
3. 次のいずれかの操作を行います。
 - 「メンバー・ラベル」を選択し、次のメンバー・ラベル・オプションのいずれかを選択します。
 - 「メンバー名」は、見出しにメンバー名を表示します。
 - 「別名: デフォルト」は、EssbaseまたはPlanningデータベース接続からメンバーの別名を表示します。または「説明」は、Financial Managementデータベース接続からメンバーの説明を表示します。
 - 「両方」は、見出しにメンバー名と、別名または説明を表示します。



注:

プロパティ・シートに表示されるオプションは、データベース接続によって異なります。たとえば、データベース接続としてFinancial Managementを使用している場合は、「説明」オプションが表示されます。この場合、「別名: デフォルト」オプションは表示されません。

- 「カスタム見出し」を選択し、次のいずれか、または両方の操作を行います。
 - 見出しに表示するユーザー定義のテキストを入力します。



ヒント:

列見出しのテキストを改行する場合は、キーボードの改行キーを使用します。

- テキスト関数を入力するか、「関数の挿入」ボタン  をクリックして、見出しに表示されるデータを取得するテキスト関数を指定します。



注:

行見出しや列見出しにテキスト関数を追加する方法の詳細は、[120ページのテキスト関数を使用した情報の表示](#)を参照してください。

4. オプション: フォーマットのオプションを設定するには、「フォーマット」ボタンをクリックします。
5. ヘッダーの高さを指定します。
6. 「ページの印刷位置」で、次のいずれかのオプションを選択します。
 - 新規ページ - 上端
 - 新規ページ - 同じ位置
 - 同じページ



注:

「ページの印刷位置」オプションの定義については、[99ページの表 12](#)を参照してください。

グリッドのデータベース接続の変更

グリッドのデータベース接続は、ワークスペースで行います。グリッドのデータベース接続を変更すると、別のソースから取得したデータが表示されます。新しいデータベースのディメンション名がデフォルトのデータベースと異なる可能性があるため、管理者はデータ構造の整合性を維持するためにマッピング・スキーマを準備する必要があります。指定したデータベース接続の構造が現在のデータベース接続の構造と異なる場合は、レポートにデータを入力できません。

詳細は、『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace ユーザーガイド*』のFinancial Reportingデータベース接続の変更に関する項を参照してください。

グリッドへの複数のデータベース接続の割当て

データ行またはデータ列ごとに異なるデータベース接続からデータを取得して、そのデータベース接続を定義できます。

グリッドの行または列で、データベース接続についてグリッドで選択したメンバーを維持できます。グリッドの行または列に割り当てられているすべてのディメンションをマッピングする必要があります。視点(POV)のディメンションは、マッピングする必要がありません。



注:

データベース接続は、同じタイプ(両方ともEssbaseデータベース接続、両方ともFinancial Managementデータベース接続など)にする必要があり、1つのグリッドで異なるタイプの複数のデータ・ソース(Financial Management, Planning, Essbase)はサポートされません。異なるデータベース・タイプからデータを取得するには、2番目のグリッドをレポートに追加します。2番目のグリッドでは、異なるデータベース・タイプの接続からデータが取得されます。最初のグリッドでは、式を使用して2番目のグリッドのデータを参照します。テキスト関数を使用して式の正しいメンバー名を表示し、レポートの2番目のグリッドを非表示にします。

▶ グリッドに同じタイプの複数のデータベース接続を割り当てるには:

1. レポートを開きます。
2. グリッドで、データベース接続を変更するデータの1つ以上の行または列を選択します。
3. 「行プロパティ」シートまたは「列プロパティ」シートで、「データベース接続の選択」ボタンをクリックします。
4. 「データベース接続の選択」ダイアログ・ボックスの「データベース接続」ドロップダウン・リストでデータベース接続を選択し、「OK」をクリックします。



注:

同じタイプの別のデータベース接続を作成する場合は、別のデータ行またはデータ列を選択して「データベース接続」ボタンを再度クリックします。

5. 「ディメンションのマッピング」ダイアログ・ボックスで、デフォルトのデータベース接続のディメンションと選択したデータベース接続のディメンションをマッピングします。マッピングを行うには、左側の列の各ディメンションについて、右側の列のプルダウン・リストからディメンションを選択します。
6. オプション: 新しいデータベース接続で使用する別名表を選択します。
7. 「OK」をクリックします。

データ行とデータ列の自動計算の追加

グリッドのデータ行とデータ列に自動計算を追加できます。たとえば、展開され、複数のディメンションを含む行または列の合計を計算する場合があります。

データ行またはデータ列に自動計算を定義すると、計算結果を含む行または列が実行時に挿入されます。この計算は、行または列のすべてのメンバーに対して行われ、レポートの印刷またはプレビュー時に表示されます。

適用できるフォーマットのオプションがいくつかあります。自動計算ごとに、計算された行または列の見出しとグループ見出しを指定できます。メンバーに基づいて計算行または列の位置を指定したり、計算行やグループ見出しの後に空白の行を挿入することもできます。計算行の中および計算行の後に改ページを指定することもできます。

自動計算行に適用できるフォーマットのオプションがいくつかありますが、自動計算関数で計算するセル、行、列によっては、適用できないものがあります。

行や列の各ディメンションまたはメンバーで行う計算を定義するには、次の関数を使用します。

- 平均 - 実行時に、このディメンションのセグメントにある値の平均を求めます(数値以外は無視されます)。
- すべての平均 - 実行時に、このディメンションのセグメントにある値の平均を求めます(数値以外はゼロとみなされます)。
- カウント - 実行時に、このディメンションのセグメントにある値の個数を求めます(数値以外は無視されます)。
- すべてのカウント - 実行時に、このディメンションのセグメントにある値の個数を求めます(数値以外はゼロとみなされます)。
- 最大 - 実行時に、このディメンションのセグメントにある値の最大値を求めます。
- 最小 - 実行時に、このディメンションのセグメントにある値の最小値を求めます。
- 積 - 実行時に、このディメンションのセグメントにあるすべての数値または参照された値を掛け合せます。
- 合計 - 実行時に、このディメンションのセグメントにある値を合計します。
- 計算なし - 選択したセル、行または列で計算を行いません。ただし、自動計算で指定されたフォーマットは維持されます。「計算なし」は、自動計算の行、列またはセル、あるいは計算なしの行、列またはセルに適用できます。



注:

メンバーにエラーがある場合や、データがない場合は、前の計算の小計にそのメンバーの値が含まれていますが、値はゼロとみなされます。



ヒント:

計算を行わずにフォーマットのオプションを使用できます。これにより、合計などの計算を行わずに、メンバーのグループを維持できます。

▶ データ行やデータ列の自動計算を定義するには:

1. レポートを開きます。
2. 複数のメンバーを含んでいる行また列の見出しのセルを選択します。
3. 「見出し行プロパティ」シートまたは「見出し列プロパティ」シートで、「自動計算」、「設定」の順に選択します。
4. 「計算」領域で、実行する計算の関数を選択します。自動計算のフォーマットのみを追加する場合は、「計算なし」を選択します。
5. オプション: 計算行、計算列、グループ行またはグループ列に見出しを追加するには、「見出し」領域で次のいずれかのアクションを行います。
 - 「グループ見出し」チェック・ボックスを選択し、行または列を説明するカスタム見出しを入力します。見出しに式を挿入するには、「関数」ボタン  をクリックします。詳細は、[120ページのテキスト関数を使用した情報の表示](#)を参照してください。



注:

MemberName関数を使用する場合は、行、列またはページのパラメータを「current」に設定する必要があります。



注:

周囲のデータが非表示になっている場合は、ヘッダーは抑制されます。



ヒント:

「グリッドのプロパティ」シートの「全般」カテゴリで、「繰返しを抑制」チェック・ボックスを選択すると、同じ見出しが繰返し表示される場合に、2回目以降を非表示にすることができます。

- 「自動計算の見出し」テキスト・ボックスに、計算行または計算列を表すカスタム見出しを入力します。見出しに式を挿入するには、「関数」ボタン  をクリックします。詳細は、[120ページのテキスト関数を使用した情報の表示](#)を参照してください。
- 6. オプション: 計算行、計算列またはグループ見出しの前後に空白の行または列を挿入するには、「空白行の挿入」または「空白列の挿入」で適切なチェック・ボックスを選択します。
- 7. 挿入した行または列の高さや幅を変更するには、「行の高さ」テキスト・ボックスまたは「列の幅」テキスト・ボックスに値を入力します。



ヒント:

行または列の展開されたメンバーの前後に自動計算行または自動計算列を挿入するかどうかを指定できます。指定するには、「グリッドのプロパティ」シートを表示して、「位置」カテゴリを選択します。

8. 自動計算行内で改ページを使用できるようにするには、「改ページの挿入」を選択します。このオプションが選択されていない場合、見出しのセルと行はまとめて表示されます。行が長すぎてページに入らない場合、見出しのセルと行は次のページに移動します。自動計算行が1ページより長い場合は、デフォルトで「改ページの挿入」オプションが選択されます。
9. 計算行の後ろで改ページを使用できるようにするには、「自動計算後に改ページ」チェック・ボックスを選択します。
10. 「OK」をクリックします。
11. レポートを表示するには、「ファイル」、「印刷プレビュー」の順に選択します。レポートの例は、[104ページの図 2](#)と類似したものになります。



注:

同じレポートに条件付きフォーマットを適用した例については、[105ページの図 3](#)を参照してください。

図2 自動計算を適用したレポートの例

Sales	
Qtr1 Sales	
East	20,621
West	31,674
SubTotal	52,295
Qtr2 Sales	
East	22,449
West	33,572
SubTotal	56,021
GrandTotal	108,316

自動計算されたデータの行と列のフォーマット

条件付きフォーマット機能を使用すると、下線、太字、インデントなどの追加のフォーマットを自動計算の行と列に適用できます。条件付きフォーマット機能には、自動計算のために設計された次の2つの条件があります。

- 自動計算 - 自動計算されたセルと見出しにフォーマットを適用します。
- 自動計算のグループ見出し - セクション見出しにフォーマットを適用します。

条件付きフォーマットの詳細は、[160ページのグリッドへの条件付きフォーマットの適用](#)を参照してください。

[105ページの図 3](#)に、フォント、配置、枠線および網掛けの設定を指定する条件付きフォーマットを使用するレポート例を示します。EastとWestの見出しセルと計算済データ・セルを選択して、次の条件がレポート例に適用されています。

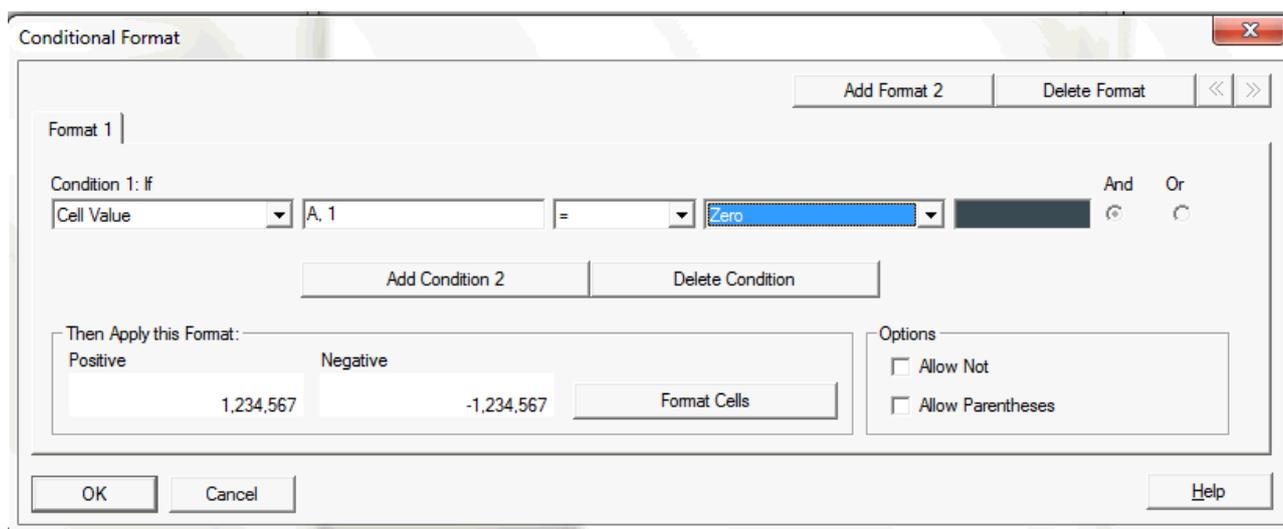
- フォーマット1: IF (Yearの自動計算がTrueのときに、セルをフォーマット(上に二重線の境界、Arielフォント、太字、サイズ12)
- フォーマット2: IF (Marketの自動計算がTrueのときに、セルをフォーマット(上に一重線の枠線)
- フォーマット3: IF (Marketの自動計算のグループ見出しがTrueのときに、セルをフォーマット(中央に配置、斜体)
- フォーマット4: IF (Yearの自動計算のグループ見出しがTrueのときに、セルをフォーマット(太字、サイズ12、青)

図3 条件付きフォーマットを適用したレポートの印刷プレビュー

Sales	
<i>Qtr1 Sales</i>	
East	20,621
West	31,674
<hr/>	
SubTotal	52,295
<i>Qtr2 Sales</i>	
East	22,449
West	33,572
<hr/>	
SubTotal	56,021
<hr/> <hr/>	
Grand Total	108,316

- ▶ 計算されたデータの行や列にフォーマットを適用するには:
1. レポートを開きます。
 2. 自動計算を設定しているセルを選択(複数可)します。
 3. 「フォーマット」、「条件付きフォーマット」の順に選択します。
 4. 「条件1:If」の下にあるプロパティのドロップダウン・リストで「自動計算」または「自動計算のグループ見出し」を選択してから条件を入力します。

図4 自動計算されたセルに適用する条件付きフォーマット



5. 「セルのフォーマット」ボタンをクリックし、計算済セルにフォーマットを適用します。
6. 「OK」をクリックして、計算済セルに指定したフォーマットを受け入れます。フォーマットの詳細は、[147ページのグリッドのフォーマット](#)を参照してください。



注:

条件付きフォーマットを使用して計算済セルのフォーマットを確立できます。詳細は、[160ページのグリッドへの条件付きフォーマットの適用](#)を参照してください。

7. レポートを表示するには、「ファイル」、「印刷プレビュー」の順に選択します。レポートの例は、[105ページの図 3](#)と類似したものになります。

式の行や列の定義

式は、グリッド参照、算術関数および算術演算子の組合せで構成されます。グリッド参照は、計算で現在のグリッドまたは別のグリッドからの値を使用します。グリッドの式の行、式の列、式のセル、または式のセルの範囲で算術式を定義できます。たとえば、1つ以上の行を追加する式を作成できます。あるいは、2つの行を乗算し、3番目の行を追加して結果を表示できます。式で使用できる算術関数のリストの詳細は、[177ページの算術関数](#)を参照してください。

式の行または列を定義するときは、次のことに注意してください。

- 式の結果は、指定された1つ以上のセルの基礎となるデータ値に基づいて計算されます。式で使用されるセルが、位取りを使用するようにフォーマットされている場合、式の結果がセルに表示されている値と異なることがあります。式では、基礎となるフォーマットされていないデータ値が使用されるためです。
- デフォルトでは、データなし(#MISSING)のセルは、IfNonNumberプロパティを使用して異なる値を指定しないかぎり、式でゼロ(0)とみなされません。除算を使用する式では、ERRORが戻されます。
- Financial Managementデータベース接続を使用した場合は、JConsole.exeファイルのMissingValuesAreZeroInFormulas (以前はMissingValuesAreZeroInFormulasInHFM) オプションの設定によって結果が異なります。JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting管理者ガイド*のプロ

パーティ情報に関するトピックを参照してください。プロパティを(1)に設定すると、#Missing値はゼロとみなされま
す。しかし、プロパティをゼロ(0)に設定すると、#Missing値はデータなしとみなされ、#missing値または#error値
が戻されます。デフォルトの設定は(1)です。

- 算術プロパティを指定するには、ドット表記を使用します。ドット表記は、グリッドのプロパティまたは別のプロパ
ティを指定する構文です。プロパティ名の後ろにピリオド(.)を使用してプロパティを指定します。

構文:

```
gridname  
.  
row\column[  
x  
]  
.property
```

引数	説明
gridname	グリッドの名前。グリッド名にはスペースを含めることはできません。グリッド参照の詳細は、 177ページの算術関数 を参照してください。
x%	行、列、番号およびプロパティ。

たとえば、mygrid1.row[3].sumは、mygrid1の行3のすべての要素を合計します。



注:

完全なグリッド名表記を使用する場合は、行、列またはセルも指定する必要があります。

次の例は、列Cの合計を戻します。

```
mygrid2  
.column[C].sum
```

現在のグリッド、行、列またはセルへの参照は省略できます。次の例は、現在のグリッドの行5と列Bの交差にあるセルの絶対値を戻します:

```
ABS([  
5, B  
])
```

➤ 式の行や列を定義するには:

- レポートを開きます。
- グリッドの行または列を選択します。
- 「挿入」、「行」、「式」の順に選択するか、「挿入」、「列」、「式」の順に選択します。
- 式の行または列、あるいはセルの範囲を選択します。
- 計算式バーのドロップダウン・メニューで関数を選択します。算術関数の一覧は、[177ページの算術関数](#)を参照してください。

6. 「式」テキスト・ボックスにカーソルを移動して、式の残りを入力します。
7. 必要に応じて、手順4から6を繰り返して式を作成します。
8. 式の結果を表示するには、「ファイル」、「印刷プレビュー」の順に選択します。

式の行と列の見出しの定義

行または列の見出しを定義できます。デフォルトで、式は行または列の見出しとして表示されます。行または列のカスタム見出しを作成することもできます。

▶ 式の行と列の見出しを定義するには:

1. 見出しセルを選択します。
2. 行または列のプロパティ・シートの見出し領域から、次のいずれかを行います。
 - 「式の表示」オプションを選択します。これはデフォルトです。
 - 「カスタム見出し」ボタンをクリックします。「カスタム見出し」テキスト・ボックス領域にテキストを入力します。

「カスタム見出し」に、テキスト関数を挿入することもできます。

行または列の展開

デザイナーでレポートを設計するときに、行、列およびセルで、計算された行、列またはセルを参照できます。

行または列の構文は、次のとおりです。

```
AXIS  
[  
  Segment  
  (  
    Range  
  )].  
Property
```

セルの構文は、次のとおりです:

```
CELL  
[  
  Row  
  
  Segment  
  (  
    Range  
  ),  
  Column  
  
  Segment  
  (  
    Range  
  )].  
Property
```

参照	定義
AXIS	指定された行および列のテンプレートによって識別される、展開セルを含む行または列。デフォルトの設定は行です。たとえば、[3]は行3を参照し、[C]は列Cを参照します。列の式で、参照[3].sumは行3の合計として計算されます。 オプション。
CELL	指定された行および列のテンプレートの座標によってそれぞれ指定された展開セルの交差。たとえば、参照[2,C]は行2が列Cと交わる1つのセルを指します。 オプション。
セグメント	デザイナーで行IDおよび列IDを表す値。参照されるセグメントは、設計時の行または列を参照し、ビューアでは展開される場合があります。表示時の行および列は、展開された行および列です。行IDには数字、列IDには文字を使用します。 注意: 展開された式の行を使用する場合、デフォルトのセグメントは行です。展開された式の列を使用する場合、デフォルトのセグメントは列です。たとえば、行[5]は展開された行5を参照します。セグメントの使用の詳細は、 109ページのセグメント引数の表記 を参照してください。 オプション。
範囲	関数の計算で使用される展開セル。 範囲は、表示時の展開された行および列を参照します。抑制された後に計算が実行されます。計算の後にソートが実行されます。ソートと非表示の詳細は、 167ページの条件付き抑制 および 156ページの行、列、ページのソート を参照してください。 展開された行または列の範囲を参照するには、コロンを使用します。たとえば、(3:6)は行3、4、5および6を示します。範囲の使用の詳細は、 111ページの範囲引数の表記 を参照してください。 オプション。
プロパティ	オプション。行、列またはセルの集約に適用される関数。プロパティの使用の詳細は、 180ページの集約プロパティ引数 を参照してください。

セグメント引数の表記

セグメント引数は、デザイナーで行IDまたは列IDを表す値です。参照されるセグメントは、設計時の行または列を参照し、ビューアでは展開される場合があります。表示時の行および列は、展開された行および列です。行IDには数字、列IDには文字を使用します。標準の式で1つ以上のセグメントを参照できます。次の表に、標準の式で複数のセグメントを表す際に使用される表記のタイプを説明します。

表13 セグメントの表記

タイプ	表記	説明	例
単一セグメント	[]	単一の(設計時の)セグメント	この式はセグメント2を指します: row[2] 注: この表記法は、旧リリースでサポートされています。
非連続セグメント	[;]	複数の独立した行や列のセグメントを示します。	次の式はセグメント行2、5、7、8、10を指します: row[2;5;7;8;10]

タイプ	表記	説明	例
			注: 行や列の参照を区切るには、カンマではなく、セミコロンを使用します。
セグメントの範囲	[:]	行または列のセグメントの範囲を示します。	次の式はセグメント行2、3、4、5を指します: row[2:5]

上の表記法を組み合わせて使用できます。

例:

セグメント行1、3、5、6、7、8、9、10、12、13、14、15、17を示します。

```
row[1; 3; 5:10; 12:15; 17]
```

例:

次の例は、セグメントの行4と20を参照していますが、グリッドに15行しかない場合は、行4のみが式で計算する対象になります。

```
row[4; 20]
```

開始セグメントを終了セグメントより大きくすると、システムの内部で、2つの値が入れ替わります。

例:

セグメントがシステムの内部で入れ替えられることを示します。

```
row[6:3] becomes row[3:6]
```

同じセグメントに対して複数の参照を使用できます。これにより、同じセグメントが式で複数回使用されます。

例:

行5を2回、合計に加えています。

```
row[2;3;
5
;7;
5
].sum
```

例:

行セグメント2, 3, 4, 5, 6, 7を参照し、もう一度セグメント5を参照します。この平均を求める計算では、セグメント5が2回含まれます。

```
row[2:7;5].avg
```

テキスト・セグメントは無視されます。

例:

行セグメント3がテキスト行の場合は無視されます。

```
row[1:5]
```

範囲引数の表記

範囲関数は、抑制された後に実行される計算で、表示時の展開された行および列を参照します。計算が完了した後にソートが実行されます。

表14 範囲の表記法

タイプ	表記	説明	例
なし		範囲引数は、オプションです。	row[2]は、行セグメント2で展開されるすべての行を指します。 注: この表記法は、旧リリースと互換性があります。
単一の範囲	[segment (range)]	展開された単一の行または列を参照します。	次の例は、セグメント2の展開された行5を示します。 row[2(5)]
連続した範囲の参照	[:]	展開された行または列の範囲を参照します。	次の式は、行セグメント2で展開される行5, 6, 7, 8, 9, 10を指します。 row[2(5:10)]
連続していない範囲の参照	[,]	連続していない複数の展開された行または列を参照します。	次の例は、行セグメント2の展開された行5, 7, 8および10を示します。 row[2(5,7,8,10)]

上の範囲の表記法を組み合わせで使用できます。

例:

設計時の行2の展開された行5から10を示します。

```
row[2(5:10)]
```



注:

たとえば、行セグメント2が15行に展開される場合は、展開された行5から10のみが関数の計算の対象になります。

例:

設計時の列Aの展開された列CからEを示します。

```
column[A(C:E)]
```

例:

設計時の行2の展開された行1、3、5、6、7、8、9、10、12、13、14、15、17を示します。

```
row[2(1, 3, 5:10, 12:15, 17)]
```



注:

グリッドに抑制プロパティが含まれる場合、展開された行および列が抑制される場合があります。データの抑制の詳細は、[167ページの条件付き抑制](#)を参照してください。

範囲引数がセグメントで展開される行の最大数より多い数を参照する場合、最大数を超える行が無視されます。

例:

次の例では、展開された行6から10が識別されますが、セグメント1には3つの展開された行しか含まれていません。この場合、関数の対象は展開された行6から8のみになります。

```
row[1(6:10)]
```

引数で指定した範囲に展開される行がない場合は、軸の参照全体が無視されます。

例:

セグメント3の展開される行が10行しかない場合は、行23の参照が無視されます。

```
row[3(23)]
```

例:

範囲の開始行または開始列を終了行または終了列より大きくすると、システムの内部で列や行が入れ替わります。

例:

範囲が入れ替わることを示します。

```
row[1(7:5)] becomes row[1(5:7)]
```

同じ展開された行または列に対して複数の参照を使用できます。ただし、複数の参照を使用すると、同じ行または列が式に2回含まれる場合があります。

例:

展開された行5を2回、合計に加えています。

```
row[2(3,  
5  
,7,  
5  
)].sum
```

例:

展開された行3、4、5、6、7および行5を指定します。したがって、平均値を求める計算に、行5が2回含まれています。

```
row[2(3:7,5)].ave
```

範囲と複数のセグメントの指定

引数とセグメントの範囲を指定する構文は、次のとおりです。

```
AXIS  
[  
  Segment Start  
  :  
  Segment End  
  (  
    Range Start  
    :  
    Range End  
  )  
]
```

開始セグメントと終了セグメントで、複数のセグメントを指定します。

例:

行セグメント1、2、3、4の展開された行5、6、7を示します。

```
row[1:4(5:7)]
```

例:

行セグメント1、2、3、4の展開された行5、7、9を示します。

```
row[1:4(5,7,9)]
```

セグメント引数で、軸に存在しないセグメントを参照している場合は、そのセグメントが無視されます。これには、抑制の行または列も含まれます。

例:

行セグメント1の展開された行4、6、7、8、9、10、行セグメント3の展開された行4、5、6、および行セグメント7の展開されたすべての行を示します。

```
row[1(4, 6:10); 3(4:6); 7]
```

計算の複数繰返し

すべてのグリッドとセルに対する計算の最大繰返し回数(MaximumCalculationIterations)を指定して、JConsole.exeファイルにある式の参照内の依存関係を解決できます。グリッドの計算プロセスでは、参照の優先順位により、セルを複数回評価する場合があります。これは通常、他のグリッドを参照するグリッドで生じます。最大繰返し回数プロパティは、式のセルを未解決とマークする前に評価する回数を示します。最大繰返し回数プロパティを設定することで、循環参照のセルが無制限に評価されるのを防止できます。循環参照は、1つのセルが別のセルを参照し、さらに参照先のセルが参照元のセルを参照する場合に生じます。



注:

JConsoleの詳細は、『Oracle Hyperion Financial Reporting管理者ガイド』のプロパティ情報に関するトピックを参照してください。

循環参照がないのに、計算のセルで#Errorが戻される場合は、最大繰返し回数プロパティの値を増加できます。

詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace管理者ガイド』を参照してください。

式バーの使用方法

式バーは、Financial Reportingでグリッドを設定するときに、式の管理やメンバーの選択を行う場所です。



注:

選択した関数を入力してメンバーを動的に選択できます。式バーで使用できる関数のリストの詳細は、[30ページの表 2](#)を参照し、式バーで使用できない関数のリストの詳細は、[30ページの表 2](#)を参照してください。

式バーには、式のエントリ用のテキスト・ボックスと、式を作成する際に選択する関数のドロップ・ダウン・リスト・ボックスが含まれています。グリッドのメンバーを選択すると、式バーでメンバー選択がアクティブになります。

式バーは、その機能に簡単にアクセスできるように、ツールバーの下に表示されます。グリッドを使用していないときも式バーは表示されますが使用できません。

Financial Reportingの式バーの機能と外観は、Excelの式バーに似ています。式バーを使用すると、グリッドで次のタスクを実行できます:

- セル、列、行の式を定義、編集、削除する
- 列や行のメンバー選択を変更する

式を含むレポートの例

式バーを使用して、データの合計や平均を求める式や、選択したその他の関数を実行する式を作成できます。たとえば、ある年のデータを合計する行の式を作成する場合、式バーを使用して、結果を戻す関数とディメンションを選択します。次の図に例を示します。

The screenshot shows the Oracle Hyperion Financial Reporting Studio interface. The title bar reads "Oracle Hyperion Financial Reporting Studio, Fusion Edition - [Totals]". The menu bar includes "File", "Edit", "View", "Insert", "Format", "Task", "Window", and "Help". The toolbar contains various icons for file operations and formatting. The formula bar shows "Sum()" and "Sum(Col[A,1])". The grid below has columns for months (Jan, Feb, Mar, Apr, May, Jun, Jul, Aug, Sep, Oct, Nov, Dec) and summary rows for "Total all months" and "Avg per month". The grid is titled "Grid1" and has a row labeled "1" with a cell containing "Product".

- Product(商品)ディメンションの月次合計。
- すべての月の合計。Sum関数で計算します。
- 1か月当たりの平均。Avg関数で計算します。



注:

Total列とAverage列のタイトルを作成するには、カスタム見出しを使用します。この詳細は、[59ページの第4章「レポートの作成」](#)を参照してください。

この例を作成するには、デザイナーで行にProductがあり列にYearがあるグリッドを作成します。Yearをダブルクリックすると、メンバー選択ウィンドウが表示されます。選択したペインに12か月すべての月を配置し、Yearを除去します。「OK」をクリックします。

メンバーを選択したら、年間の合計および月間の平均を求める2つの式の列を挿入します。

この例では、Yearメンバーの月の外側にある最初の式の列にはSum関数が含まれます。この関数は、各月の値を合計します。すべての月が1つのセルのみで定義されているので、参照はそのセルの位置になります。式は、式バーで作成します。

Sum(Cell [A,1])

2番目の式の列は、Yearメンバーの月の平均を計算します。1年には12か月あるので、Avg関数は月間のすべての合計を足した合計を12で割ります。式を次に示します。

Average(Cell [A,1])

一般に、グリッドでデータを計算する式を指定するには、行や列の式を指定する方法とセルの式を指定する方法の2つがあります。

- **行/列:** 行または列の各セルに対し、行全体または列全体に1つの式を適用します。式を定義するには、式の行または列ヘッダーをクリックして行全体または列全体をハイライトし、式バーに式を入力します。行/列の式を適用すると、パフォーマンスが向上します。
- **セル:** 式の行または式の列のセルだけに1つの式を適用します。式を定義するには、セルをクリックし、プロパティシートから「カスタム式を使用」を選択して、式バーに式を入力します。セルが式の行および式の列と交差する場合、セルの式として行の式または列の式を使用できます。詳細は、[119ページのセル・レベルでの計算](#)を参照してください。

このため、行または列の各セルで式が繰り返される場合は、行/列の式を使用します。各セルで異なる式が実行される場合は、セルの式を使用します。

▶ 式バーにアクセスするには:

1. レポートを開くか、作成します。
2. グリッドでディメンションの見出しまたは式の行/列を選択して式バーを使用可能にします。

式バーを使用した式の作成

式を入力できるセル、行または列を選択して、独自の式を適用できます。

たとえば、前述のカスタム式は、セルA,2の値とセルB,2の値を加算します。



ヒント:

式を作成するときは、次のことに注意してください。

- 可能なかぎり、セルの式ではなく行や列の式を使用します。
- 可能なかぎり、関数ではなく参照プロパティを使用します。行、列またはセルの参照は、それに関連付けられたプロパティを持つことができます。たとえば、行参照[1:5].sumでは、Sum関数Sum([1:5])と同じ結果が生成されます。しかし、最初の式は参照プロパティとして使用されるので、より迅速に実行されます。
- 可能なかぎり、軸の相互参照ではなく、セル参照を使用するようにします。
- 必要な場合のみカッコを使用します。カッコを間違っていると、計算エンジンの評価ルーチンで、不必要な評価が繰り返されることがあります。

▶ 式バーを使用して式を作成するには:

1. レポートを開くか、作成します。
2. グリッドを挿入します。
3. 式の行または式の列を挿入し、式のセルを選択します。また、式を選択して、列全体または行全体に式を適用することもできます。



注:

行または列の式内で式のセルを使用する場合は、行および列だけではなく、セル(交差)を正確に参照する必要があります。

4. 次のいずれかの方法で、セルの式を作成します。

- 式バーに式を直接入力します。
- 次に示す式バーのドロップ・ダウン・リストを使用して、式に使用する関数を選択します。式の作成方法の手順は、[106ページの式の行や列の定義](#)を参照してください。使用可能な算術関数の説明は、[177ページの算術関数](#)を参照してください。



ヒント:

式バーを使用するときに、「ヘルプ」ボタンをクリックすると、関数のヘルプにアクセスできます。

5. 式バーのチェックマーク・アイコン  をクリックし、式を検証します。

式バーを使用した式の編集

式バーを使用して、グリッドのセル内の式を変更できます。式の構文は、レポートの目的に応じて変更される可能性が高いため、式を簡単に編集する必要があります。

▶ 式バーを使用して式を編集するには:

1. グリッドを含むレポートを開きます。
2. 式を含むか、式を使用する式のセル、式の行または式の列を選択します。関連する式が式バーに表示されます。
3. 式バーで式を変更します。関数のドロップ・ダウン・リストを使用して式を選択できます。
4. 式バーのチェックマーク・アイコン  をクリックして、式を検証します。

検証された式が式バーに表示されます。

式の削除

使用しなくなった式を削除できます。

▶ 式を削除するには:

1. 式の行または列を選択します。
2. メニュー・バーから、「編集」、「削除」の順に選択します。



注:

「削除」ボタン  では式は削除されず、式の編集時に変更が取り消されます。

式バーを使用したメンバー選択の変更

グリッドのメンバーを操作するときに、式バーを使用して、選択されているメンバーを変更できます。

次に、メンバー選択の名前を変更している例を示します。



注:

式バーに入力するメンバー名の大文字と小文字は区別されません。

最初に、グリッドの見出しセルを選択します。ディメンションが式バーのボタンに表示されます。次に、式バーを使用して、選択したディメンションのメンバー関数を動的に入力できます。



注:

メンバー関数はデータの見出しセルに動的に入力できます。メンバー関数と構文の詳細は、[28ページの関数を使用したメンバーの割当て](#)を参照してください。

▶ 式バーを使用してメンバー選択を変更するには:

1. レポートを開くか、作成します。
2. グリッドのデータ行または列の見出しセルを選択します。
3. 式バーのディメンション・ボタンをクリックし、「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスで、メンバーを選択または除去します。

新しいメンバーがグリッドに表示されます。メンバー選択の使用の詳細は、[23ページの第2章「メンバーの定義」](#)を参照してください



注:

グリッドでメンバーを選択すると、式バーのディメンション・ボタンがアクティブになります。現在のディメンション内に存在するメンバーを指定する必要があります。

- 式バーのテキスト・ボックスでメンバー名を変更します。
- 式バーを使用してディメンションのメンバー関数を動的に入力します。



注:

Sum(Productの子(含む))のように、メンバー関数を数値関数と組み合わせることはできません。

4.  をクリックして入力したメンバーを受け入れます。

グリッドが、新しいメンバー/メンバー関数のデータを取得するように設定されます。

プロパティ・シートの機能へのアクセス

レポート・コンポーネントを選択すると、対応するプロパティ・シートがデザイン領域の右側に表示されます。別のコンポーネントを選択すると、カテゴリとプロパティ・シート機能が変わります。たとえば、セルを選択すると、「セルのプロパティ」シートが表示されます。プロパティ・シートを使用して、選択したコンポーネントに変更を加えることができます。

一般的に、プロパティ・シートでは、現在選択されているレポート・コンポーネントの様々なオプションを設定できます。詳細は、[13ページの第1章「Reporting Studioスタート・ガイド」](#)を参照してください。

セル・レベルでの計算

式の行または式の列のセルには式を含めることができます。式の行または式の列にあるセルにカスタムのセル・レベルの式を作成できます。式のセルを選択すると、「セルのプロパティ」シートで計算のプリファレンスを選択できます。

- 式の行と式の列の交差にあるセルでは、行の式、列の式、新しいカスタム式のどれに基づいて計算するかを選択できます。
- 式の行にあるセルでは、行の式と新しいカスタム式のどちらに基づいて計算するかを選択できます。
- 式の列にあるセルでは、列の式と新しいカスタム式のどちらに基づいて計算するかを選択できます。

次の表に、%差異を表示する計算済セルの例を示します。セルD4は、1月の合計と2月の合計の間の%差異(具体的には、 $((356-350)/350) * 100 = 1.71\%$)を表示します。カスタム式をセルD4に配置すると、セル・レベルの式により目的の結果が戻されます。正しい結果を取得するために必要な式は、 $(([B]-[A])/[A]) * 100$ です。

表15 セル・レベルの計算の例

		A	B	C	D
	商品群	1月	2月	差異	%差異
1	コーラ	100	105	5	5.00%
2	ルート・ビール	200	203	3	3.00%
3	ワイン	50	48	(2)	(4.00%)
4	[1].sum	350	356	6	1.71%

▶ セル・レベルで計算するには:

1. レポートを開きます。
2. 式を入力するセル(複数可)を選択します。
3. 「セルのプロパティ」シートの「計算の順序」で、次のいずれかを行います。
 - 行の計算をセルに適用する場合は、「**行の式を使用**」を選択します。
 - 列の計算をセルに適用する場合は、「**列の式を使用**」を選択します。
 - 新しい式を追加する場合は、「**カスタム式を使用**」を選択し、次のアクションを行います。
 - a. 式バーに移動し、関数のドロップダウン・リストで関数を選択します。
 - b. テキスト・ボックスにカーソルを移動して、式を完成します。
 - c. 式の結果を表示するには、「**ファイル**」、「**印刷プレビュー**」の順に選択します。



注:

式の行または式の列にある複数の連続する式のセルを選択して、計算の順序を変更できます。

テキスト関数を使用した情報の表示

レポートの情報を表示するには、テキスト関数を使用します。レポートの説明、グリッドのデータベースの情報、データベース接続にあるデータなど、レポートに関する様々な情報を表示できます。

テキスト・ボックス、データ行、データ列、式の行、式の列、またはページの見出しでテキスト関数を使用できます。式を2重の山カッコ(<<および>>)で囲んで、異なるテキスト関数を区別します。テキスト関数のフォントは、通常のテキストのようにフォーマットできます。テキスト関数とその構文は、[199ページのテキスト関数](#)で定義されています。



注:

テキスト関数の山カッコを含む関数全体のフォントのプロパティを、テキスト・ボックスのテキストと同じように設定する必要があります。

▶ テキスト関数を使用して情報を表示するには:

1. レポートを開き、次のいずれかを行います。
 - テキスト・ボックスを選択します。

- ・ 見出しセルを選択し、プロパティ・シートで「カスタム見出し」を選択します。
 - ・ グリッドで「ページ」ドロップダウン・リストを選択し、プロパティ・シートで「カスタム見出し」を選択します。
2. 「関数の挿入」ボタンをクリックします。「関数の挿入」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 3. 関数を選択するには、次のいずれかのアクションを行います:
 - ・ 「使用可能な関数」リストで関数をダブルクリックし、「選択した関数」リストに追加します。
 - ・ 「使用可能な関数」リストで関数を選択し、「追加」ボタン  をクリックして、「選択した関数」リストに追加します。
 4. 必要に応じて、「関数の選択」で関数のパラメータを変更し、「OK」をクリックします。



注:

レポート設計者には、グリッドまたはテキスト・オブジェクトに表示されるテキスト関数のエラー・メッセージを使用可能または使用不可にするオプションがあります。デフォルト設定では、エラー・メッセージが表示されます。この機能を使用不可にするには、「グリッドのプロパティ」シートまたは「テキストのプロパティ」シートの「テキスト関数のエラーの表示」オプションの選択を解除します。

5. レポートを実行し、関数で生成されたデータを表示するには、「ファイル」、「印刷プレビュー」の順に選択します。

グリッド・ヘッダーの固定

ワークスペースでHTMLレポートをスクロールしたときに行と列の見出しラベルを表示するグリッドを選択できます。

▶ グリッドの行見出しと列見出しを固定するには:

1. 行見出しと列見出しを固定するグリッドを選択します。
2. 「グリッドのプロパティ - 全般」カテゴリで「グリッド・ヘッダーを固定」を選択します。
3. 行および列のロックを解除するには、グリッドを選択し、「グリッド・ヘッダーを固定」の選択を解除します。



注:

領域全体でレポートを表示する場合、Reporting Studioでグリッドのサイズを大きくする必要があります。

グリッド・ヘッダーを固定したときのブラウザの動作

Internet ExplorerおよびFirefoxを使用した場合の動作です:

- ・ スクロール: Internet Explorerでは、行見出しと列見出しがロックされています。Firefoxでは、列見出しのみがロックされています。
- ・ グリッドの高さと幅: デザインによって設定された高さや幅は、Internet ExplorerおよびFirefoxの両方のHTMLプレビューで表示可能です。スクロールバーは、表示されない行または列がある場合にのみ表示されます。「グリッド・ヘッダーを固定」を選択すると、自動サイズ調整プロパティが無視されます。

- **水平スクロール:**グリッドの幅がデザインの幅を超える場合、水平スクロールバーが表示されます。ただし、水平スクロールバーの動作は、2つのブラウザで異なります。Internet Explorerでは、行見出しが常に表示されるように調整されます。Firefoxでは、水平スクロールバーで見出しを含むすべての列がスクロールされます。
- **垂直スクロールバーの位置:**Internet Explorerでは、垂直スクロールバーが表の右端に表示されます。Firefoxでは、スクロールバーは、最後の列見出しの下に表示され、最後の列に割り込みます。この動作に対応するには、最後の列の上にスクロールバーが重ならないように、グリッドに列を追加します。
- **スクロールの速度:**Firefoxでは、スクロールが組み込まれており、Internet ExplorerのようにJavaScriptを必要としないので、スクロールの速度は速くなります。

6

ユーザーのPOVの定義

この項の内容:

レポート・デザイナーでのユーザーのPOVの設定	123
レポート・デザイナーでのユーザーのPOVのメンバーの選択	124

レポートの各データ値は、Essbase、PlanningまたはFinancial Managementデータベース接続の各ディメンションのメンバーの交差から派生します。設計者はFinancial Reportingを使用して、これらのディメンションをレポート・グリッドまたはユーザーの視点(POV)に配置できます。レポート参照者はユーザーのPOVのディメンションに選択されたメンバーを変更できます。これで、レポート参照者はそのニーズに合わせてレポートをカスタマイズできるようになります。ユーザーのPOVはブックでも使用できます。ブックのPOVでメンバーとしてユーザーのPOVを選択する詳細は、265ページの第13章「ブックとスナップショット・ブックの操作」を参照してください。

レポートでは、ユーザーのPOVのディメンションに指定されたメンバーは、ユーザーのPOVのそのディメンションを持つすべてのグリッドで使用されます。たとえば、ScenarioディメンションにBudgetメンバーを選択した場合、データを取得するときはユーザーのPOVのシナリオを持つレポートのすべてのグリッドでBudgetが使用されます。すべてのディメンションがグリッドに配置されている場合、ユーザーのPOVは表示されません。

ユーザーのPOVバーには、次のディメンションが表示されます。

- 行、列またはページで現在定義されていないディメンション
- 現在のPOVに設定されている行、列またはページのディメンション
- グリッドのPOVで選択されているメンバーがないディメンション
- 「ディメンション・レイアウト」ダイアログ・ボックスのPOV領域にドラッグした属性ディメンション

レポート・デザイナーでのユーザーのPOVの設定

レポートを設計するときに、データベース接続のユーザーのPOVを設定できます。これにより、そのタイプのデータベース接続のユーザーのPOVで使用可能なメンバーが制限されます。指定されたユーザーのPOVの設定は、そのタイプのデータベース接続を使用するすべてのグリッドに適用されます。メンバー選択の詳細は、23ページの第2章「メンバーの定義」を参照してください

レポート・デザイナーのワークスペースのユーザーPOVの設定の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace管理者ガイド』を参照してください。

▶ レポート・デザイナーでユーザーのPOVを設定するには:

1. POVを設定するグリッドを含んだレポートを開きます。
2. 「タスク」、「ユーザーのPOVの設定」の順に選択します。

3. 「エンド・ユーザーが選択可能」列でディメンションに「任意のメンバー」または「リストにあるメンバー」を選択します。
4. 「エンド・ユーザーが選択可能」列を「リストにあるメンバー」に設定した場合は、「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを選択し、「OK」をクリックします。



注:

メンバーの選択の詳細は、[23ページの第2章「メンバーの定義」](#)を参照してください

6. ディメンション名とメンバー名を表示するには、「ディメンション名の表示」チェック・ボックスと「メンバー名の表示」チェック・ボックスを選択します。
7. 別名を表示するには、「別名の表示」チェック・ボックスを選択して、「別名表から」ドロップダウン・リストで別名表を選択します。



注:

Financial Managementデータベース接続の場合は、「別名の表示」ではなく、「説明の表示」が表示されます。

8. 「OK」をクリックします。

レポート・デザイナでのユーザーのPOVのメンバーの選択

ユーザーおよびグリッドのPOVにより、レポート参照者はディメンションのメンバーを選択して、レポートをカスタマイズできます。次のルールが適用されます:

- POVの1つのディメンションにつき、1つのメンバーのみを選択できます。
 - ディメンションのデフォルトのメンバーは最上位メンバーです。
 - 属性ディメンションには、「なし」を指定できます。この場合、属性ディメンションはレポートで使用されません。
- ▶ ユーザーのPOVのメンバーを選択するには:
1. ユーザーのPOVに表示されるディメンションが含まれているレポートを開きます。
 2. ユーザーのPOVで、メンバーを選択するディメンションをクリックします。「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 3. このレポートで実行するメンバーを選択し、「OK」をクリックします。メンバーがユーザーのPOVに表示されます。
 4. オプション: レポートで属性ディメンションを使用市内場合は「なし」を選択します。

7

レポートの詳細データ とドキュメントの表示

この項の内容:

レポートの詳細データにアクセスするための展開機能の設定	126
行と列を展開する位置	126
レポートへのセル・ドキュメントの添付	126
セル・ドキュメントの印刷	129
添付されているセル・ドキュメントのリストの印刷	130
関連コンテンツへのリンクの設定	130
関連コンテンツへのリンクの除去	134
関連コンテンツのプロパティの変更	135
Smart View for Officeの使用方法	136

ここでは、展開機能と関連コンテンツについて、次のトピックとタスクに分けて説明します。

展開機能と関連コンテンツを使用すると、設計者はレポートでデータの詳細なレベルを指定できます。エンド・ユーザーが同じレポート内にある詳細データを表示できるようにするには展開機能を使用し、リンクされたレポート内にある詳細データを表示できるようにするには関連コンテンツを使用して、レポートを設計します。

たとえば、市場を構成する東部、西部、北部、南部などの各地域を表示して、市場ディメンションの詳細なデータを表示するとします。

- **展開機能の使用。**要約行および列の展開機能を使用可能にして、同じレポートの詳細データの表示を設定できます。展開機能でレポートを設定した場合、エンド・ユーザーは要約レベルの行または列を選択して、同じレポートの関連する詳細データを表示できます。
- **関連コンテンツの使用。**セル、行または列ラベル、グリッド全体、チャート、イメージおよびテキスト・ボックスを選択し、Financial Reporting、Web AnalysisおよびURLのオブジェクトにリンクを設定できます。関連コンテンツでレポートを設定すると、ユーザーは別のアプリケーションのドキュメントに移動できます。

レポートの設計中に展開機能と関連コンテンツを使用可能にしたレポートを表示するには、「ファイル」、「Webプレビュー」の順に選択します。



注:

レポートのデザイナーは、関連コンテンツをレポート・デザイナーのワークスペースに表示するために、レポートをレポート・タイプとして保存する必要があります。スナップショットとして保存されたレポートにはこの機能はありません。

レポートの詳細データにアクセスするための展開機能の設定

エンド・ユーザーの要求によりグリッドの詳細行と詳細列を表示するようにレポートを設計できます。これを行うには、メンバー間に親子の関係を持つディメンションを展開できるようにします。たとえば、時間ディメンションを展開できるようにすると、ユーザーは四半期を表示する行を月に展開できます。

ユーザーは、表示されたレポートで要約データの入った行や列を選択して、詳細データの行や列を表示します。

▶ 同じレポートの詳細データへのアクセスを設定するには:

1. レポートを開きます。
2. 展開を使用可能にする行または列の見出しを選択します。
3. 見出し行または見出し列のプロパティ・シートの「展開を許可」チェック・ボックスを選択します。



注:

Essbaseで基本レベル・メンバーとしてハイブリッド・データを使用できる場合、展開のための矢印が基本レベル・メンバーの横に表示され、ハイブリッド・データに展開できます。ライン・アイテムの詳細またはサポート詳細を含む行、またはライン・アイテムの詳細を含む行を含む列では、展開を実行できません。

4. ディメンションをダブルクリックして、展開するメンバーを選択します。メンバーの選択の詳細は、[23ページの第2章「メンバーの定義」](#)を参照してください

行と列を展開する位置

ディメンションの要約レベルの行または列を展開したときに、その行または列の前と後ろのどちらに展開したアイテムを表示するかを指定できます。

▶ 行および列を展開する位置を設定するには:

1. レポートを開きます。
2. 展開する位置を指定するグリッドをクリックします。
3. 「グリッドのプロパティ」シートで、「位置」カテゴリを選択します。
4. 「展開する位置」ボックスで、次のいずれかの操作を行います。
 - 要約レベルの行または列の後ろに展開するには、「親の後」をクリックします。これはデフォルトです。
 - 要約レベルの行または列の前に展開するには、「親の前」をクリックします。

レポートへのセル・ドキュメントの添付

データ・ソースで添付されたセル・ドキュメントにアクセスして、レポートに印刷できます。添付されたドキュメント (Microsoft Word、Excel、PowerPointのドキュメント、PDF、または.txtドキュメント)は、PDFまたはスナップショット・レポートの最後に印刷されます。関連するコンテンツからセルにドリルダウンすると、HTMLクライアントでドキュメントにアクセスできます。また、プロパティ・シートでListOfCellDocumentsオプションを選択すると、添付されたセル・ドキュメントに関する情報がリストされているレポートのテキスト・オブジェクトまたはテキスト・セルに、脚注を挿入できます。

グリッドのレポートにセル・ドキュメントを含めるには、ドキュメントがEssbase (リンク・レポート・オブジェクト)またはFinancial Management (セルの添付文書)に存在する必要があります。データ・セルは、RetrieveCellDocumentオプションを使用して選択する必要があります。すべてのセル・ドキュメントには、ドキュメントが添付されるデータ・セルに関連付けられたPOVが含まれます。



注:

Essbaseでは、リンク・レポート・オブジェクトはExcelアドインを使用して添付されます。Financial Managementでは、セル・ドキュメントはFinancial Management Webクライアントを使用して添付されます。詳細は、各製品のドキュメントを参照してください。

データ・セルには、複数のセル・ドキュメントを含めることができます。Financial ManagementまたはEssbaseデータ・ソースのセル・ドキュメントがデータ・セルに含まれる場合、指定されたセルのPOVに基づいて、設計者はこれらのドキュメントを抽出できます。セル・ドキュメントは、ブックやスナップショット・ブックに含まれるレポートに添付できます。

サポートされているMicrosoft Officeファイル・タイプ

最新のサポート情報の動作保証マトリックス - http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/files/fusion_certification.html (Business Intelligence内)を参照してください。

- Microsoft Wordファイル(*.doc, *.docx, *.rtf)
- Microsoft Excelファイル(*.xls, *.xlsx)
- Microsoft PowerPointファイル(*.ppt, *.pptx)
- PDFファイル(*.pdf)
- テキスト・ファイル(*.txt)

印刷と印刷プレビューのオプション

次の表に、Reporting StudioとFinancial Reportingのセル・ドキュメントの出力を示します。

レポートの出力タイプ	サポート	コメント
Reporting Studioの「印刷」と「印刷プレビュー」	なし	<ul style="list-style-type: none"> • 「印刷」コマンドと「印刷プレビュー」コマンドでは、セル・ドキュメントは印刷されません。 • ListOfCellDocuments関数で、FileNameパラメータとDescriptionパラメータの値は戻されますが、PageNumberパラメータの値は戻されません。
Financial Reportingの「PDFにエクスポート」: ワークスペース	Microsoft Officeファイル・タイプ、PDFおよび.txtファイル	<ul style="list-style-type: none"> • PDFファイルが生成されます。サポートされているファイル・タイプのみが含まれます。サポートされていないセル・ドキュメントはPDFに含まれません。 • 無視されたドキュメントはFRPrintSrv.logファイルにログ出力されます。 • ListOfCellDocuments関数は、サポートされていないドキュメントを含むすべ

レポートの出力タイプ	サポート	コメント
		<p>セル・ドキュメントのFileNameパラメータとDescriptionパラメータを戻します。PageNumberパラメータは、サポートされているMicrosoft Officeドキュメントでのみ表示されます。</p>
Financial Reportingの「PDFプレビュー」: ワークスペース	Microsoft Officeファイル・タイプ、PDFおよび.txtファイル。	<ul style="list-style-type: none"> • PDFファイルは、ワークスペースEPM Workspaceに表示されます。 <p>注:</p> <p>Microsoft Windows 8を使用している場合は、PDFファイルの表示用にデフォルトでAdobe Readerが選択されていることを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • PDFファイルが生成されます。サポートされているファイル・タイプのみが含まれます。サポートされていないセル・ドキュメントはPDFに含まれません。 • 無視されたドキュメントはFRPrintSrv.logファイルにログ出力されます • ListOfCellDocuments関数は、サポートされていないドキュメントを含むすべてのセル・ドキュメントのFileNameパラメータとDescriptionパラメータを戻します。PageNumberパラメータは、サポートされているMicrosoft Officeドキュメントでのみ表示されます。
Financial Reportingの「HTMLプレビュー」: ワークスペース	すべてのタイプのファイル	<ul style="list-style-type: none"> • HTMLプレビュー内のすべてのセル・ドキュメントはハイパーリンクです。セル・ドキュメントのハイパーリンクをクリックすると、「関連コンテンツ」ダイアログが表示されます。対応するデータ・セルに関連付けられているすべてのセル・ドキュメントが表示されます。 • 「関連コンテンツ」ダイアログ・ボックスのドキュメントをクリックすると、ブラウザの「ファイルのダウンロード」ダイアログが表示され、ここでセル・ドキュメントを開いたり、保存したりできます。「開く」を選択すると、セル・ドキュメントが新しいブラウザで表示されます。セル・ドキュメントに関連付けられたファイル・タイプをユーザーのコンピュータにインストールする必要があります。 • セル・ドキュメントがブラウザの別のウィンドウで自動的に開きます(ただし、ユーザーのブラウザの設定によって異なります)。 • ListOfCellDocuments関数で、FileNameパラメータとDescriptionパラメータの値は戻されますが、PageNumberパラメータの値は戻されません。

セル・ドキュメントのコンテンツの印刷プレビューを表示する場合は、Reporting Studioで、まずレポートをスナップショットとして保存する必要があります。

セル・ドキュメントを含むレポートは、Reporting Studioでスナップショット出力として保存できます。「保存」オプションを使用して、リポジトリ内にスナップショットとしてレポートを保存できます。セル・ドキュメントはレポートの最後に添付されます。

ワークスペースで、PDFまたはHTML出力としてセル・ドキュメントを含むレポートを表示できます。

- PDF出力。「エクスポート」オプションを使用してリポジトリの外にあるPDFファイルにレポートを保存します。セル・ドキュメントはレポートの最後に添付されます。
- HTML出力。「保存」または「名前を付けて保存」オプションを使用してリポジトリにレポートを保存できます。セル・ドキュメントはレポートへのハイパーリンクとともに保管されます。

▶ セル・ドキュメントを添付するには:

1. Oracle Hyperion Financial Reporting Studioで、データベース接続のFinancial ManagementまたはEssbaseのデータ・ソースを使用するレポートを作成するか、既存のレポートを選択します。
2. グリッドでデータ型のセルを選択します。「セルのプロパティ」シートで、「セル・ドキュメントの取得」チェック・ボックスを選択します。



注:

パフォーマンスを最適化するために、レポートに含める添付ファイルを含むセルの「セル・ドキュメントの取得」チェック・ボックスのみを選択してください。

3. 選択したセルにセル・ドキュメントが添付されている場合は、印刷するときにレポートに添付されます。

考慮事項

セルの添付ファイルを使用する場合は、次のことに注意してください。

- サポートされている正しいファイル拡張子を使用します。
- ファイルが壊れていたり、ADMプロバイダに正しくアップロード(Financial ManagementクライアントまたはEssbaseのExcelアドインを使用)できなかった場合は、印刷されません。
- マクロを含むか、ユーザー入力が必要なUIコンポーネントをトリガするMicrosoftファイルはサポートされていません。ユーザー入力が必要なダイアログの起動を含むファイルが開くと、マクロを含む一部のMicrosoftファイルで操作が実行されます。ダイアログを表示するファイルまたはユーザー入力が必要なUIコンポーネントは印刷できない場合があります。また、PDFの生成プロセスの完了が中断される場合もあります。サーバーの管理者は、タスク・マネージャを使用してアプリケーションを終了し、印刷アクティビティを再開する必要があります。アプリケーションはSYSTEMアカウントで起動されるので、ログイン・アカウントでプロセスが開始された場合、アプリケーションが表示されない場合があります。
- 印刷用に登録されていない拡張子のファイルは、印刷されません。

セル・ドキュメントの印刷

「ページ設定」ダイアログ・ボックスの「ページ」タブを使用して、連続したページ番号を持つセル・ドキュメントを印刷できます。最初のセル・ドキュメントの開始ページは、レポートの長さによって決まります。各ドキュメントは新しいページに印刷されます。セル・ドキュメントに連続した番号を印刷しない場合、ページ番号は各ドキュメントの設定に戻ります。

セル・ドキュメントの印刷オプションの設定の詳細は、[174ページのページ設定の変更](#)を参照してください。



注:

実際の印刷が開始される前に、テキスト・ファイルがWordテンプレートに挿入されます。テンプレートのカスタマイズの詳細は、[267ページの第14章「Financial Reportingの管理情報」](#)を参照してください。



注:

Financial Managementでは、添付用のファイルをセルにアップロードすると、ファイル名は20文字に切り詰められて表示されます。ドキュメント名は変更できます。ファイル名の拡張子(.doc、.xlsなど)を保持してください。

添付されているセル・ドキュメントのリストの印刷

ListOfCellDocumentsテキスト関数を使用して、すべてのセル・ドキュメントと、レポートで取得された説明や開始ページ番号などの属性のリストを表示できます。関数は、テキスト・オブジェクト、テキスト・セルまたはテキスト・セル見出しに挿入できます。

関連コンテンツへのリンクの設定

関連コンテンツを使用すると、設計者はOracle Hyperion Interactive ReportingやOracle Hyperion Web Analysisのドキュメント、およびカスタムURLのリンクのみでなく、Financial Reportingのドキュメントにもリンクを設定できます。ワークスペースにおいてHTMLでレポートを表示している場合、ユーザーは関連コンテンツ・リンクヘッドリルして、リンクされたレポートまたはURLを実行できます。関連コンテンツは、動的およびスナップショットのレポートやブックでサポートされています。

関連コンテンツの適用

この領域に関連コンテンツを適用できます:

- Oracle Hyperion Financial Data Quality Managementに関連コンテンツを適用する手順: データ・ソースのデータが、FDMソース・データからERP (Oracle Applications用の統合アダプタ)によってロードされたPlanningデータ・ソースを作成する必要があります。次に、Financial Reportingレポートで、FDMのソース・データにドリルするデータ・セル/行/列に関連コンテンツ・リンクを作成します。
- Workspaceでレポートを実行すると、HTMLビューアにレポートが表示され、「関連コンテンツ」セルが下線付きで表示されます。リンクをクリックすると、ソース・データを参照可能なFDMのランディング・ページにドリルダウンできます。
- FDMに関連コンテンツを適用する手順: データ・ソースのデータが、FDMソース・データからERP (Oracle Applications用の統合アダプタ)によってロードされたFinancial Management、EssbaseまたはPlanningデータ・ソースに接続するFinancial Reportingレポートを作成する必要があります。次に、Financial

Reportingレポートで、FDMのソース・データにドリルするデータ・セル/行/列に関連コンテンツ・リンクを作成します。Workspaceでレポートを実行すると、HTMLビューアにレポートが表示され、「関連コンテンツ」セルが下線付きで表示されます。リンクをクリックすると、ソース・データを参照可能なOracle Hyperion Financial Data Quality Managementのランディング・ページにドリルダウンできます。



注:

関連コンテンツのドリルダウンは、FDMおよびFDMEEを使用して同様に実行できます

- 関連コンテンツは、グリッド・オブジェクト(データ・セル、テキスト・セル、式のセル、見出しセル)、テキスト・オブジェクト、イメージ・オブジェクトまたはチャート・オブジェクト内の任意のセルに指定できます。関連コンテンツがテキスト・セル以外のセルである場合、関連コンテンツ・リンクに含まれる視点(POV)は、そのセルの明白なメンバーに制限されます。グリッド内の関連コンテンツの結果の例は、[133ページのグリッド・セルに指定されている場合の関連コンテンツの結果の例](#)を参照してください。
- 関連コンテンツは、「条件付きフォーマット」ダイアログを使用して、任意のグリッド・オブジェクト・セルに条件付きで指定できます。「セルのフォーマット」ダイアログの「置換」タブで、関連コンテンツ・リンクを指定できます。たとえば、次のような条件を入力できます: if Market member name is "East", link to ReportABC; if Market member name is "West", link to ReportXYZ。 [160ページのグリッドへの条件付きフォーマットの適用](#)を参照してください
- 関連コンテンツは、イメージ、チャートおよびテキスト・オブジェクトに指定できます。リンクはオブジェクト全体に適用されます。関連コンテンツのあるチャートやイメージをマウスでクリックして、関連コンテンツ・リンクをポイントできます。関連コンテンツのあるテキスト・オブジェクトの場合は、テキスト・コンテンツ全体がハイパーリンクとしてマークされます。クリックすると、関連コンテンツ・リンクに移動します。
- セル・ドキュメントが原因でデータ・セルに関連コンテンツ・リンクがあり、そのセルが<<GetCell()>>または<<CellText()>>関数を介して参照されている場合、<<GetCell()>>または<<CellText()>>の値にも関連コンテンツ・リンクが含まれます。セル・ドキュメントにおける関連コンテンツ・リンクの動作は、Financial Reportingレポートに設定されている関連コンテンツ・リンクと同じです。<<CellText()>>の詳細は、[212ページのCellText](#)を参照してください。
- テキスト・オブジェクトおよびグリッド・オブジェクトのテキスト・セル内のURL文字列は、[Link]という、そのURLへのハイパーリンクで置き換えられます。URLが変換されるためには、URLがhttp、httpsまたはftpで開始されている必要があります。たとえば、This is a link to Google <http://www.google.com>と入力した場合、結果はThis is a link to Google [Link]になります。



注:

テキスト・オブジェクトおよびグリッド・オブジェクトのテキスト・セルは、<<CellText()>>および<<Annotation()>>関数の評価後に評価されます。そのため、セル・テキストまたは注釈関数にURLが含まれる場合、そのURLは必要に応じてハイパーリンクに処理されます。

- セル・ドキュメントの取得機能では、データソース、Financial ManagementおよびEssbaseからのドキュメントの添付がサポートされています。
- グリッドの関連コンテンツを選択したら、その関連コンテンツ・リンクのディメンションの説明も指定できます。テキスト情報は、ブックの目次およびナビゲーション・パス(ブレッドクラム)に表示されます。説明は、「関連コンテンツ

の追加」ダイアログ・ボックスの<<Value()>>関数を使用して定義します。135ページの[関連コンテンツのプロパティの変更](#)を参照してください。

別のレポートまたはハイパーリンク経由のURLにアクセスできるレポートを設計できます。レポート・デザインのデータ・セル、テキスト・セル、式のセルまたは見出しセルから複数のリンクを作成できます。Shared ServicesまたはRelatedContentURLSプロパティを使用して登録されている場合は、Reporting and Analysisサーバーからレポートへのリンクを作成できます。JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting*管理者ガイドのプロパティ情報に関するトピックを参照してください。エンド・ユーザーは、関連コンテンツ・リンクを含むWorkspaceのFinancial ReportingレポートのHTMLプレビュー内でセルをクリックし、「関連コンテンツ」メニューからリンク・レポートを選択できます。

レポートで関連コンテンツを使用すると、レポートの視点(POV)がレポートの選択したセルに設定されます。たとえば、Canada列のGross Margin行が選択されている場合、リンク・レポートが表示される前に、勘定項目のPOVがGross Marginに設定され、エンティティのPOVがCanadaに設定されます。



注:

関連コンテンツでブックにリンクする場合は、POVのコンテキストは渡されません。

行または列内のデータ・セルの関連コンテンツを定義できます。セルのグループに対して同じレポートを指定するには、グリッドで目的のセルを選択し、関連コンテンツを定義します。また、選択した関連コンテンツのタイプに基づいて、ラベル、URL、デフォルトの表示オプションなどのプロパティを変更できます。

関連コンテンツを選択すると、オブジェクト・レベルのセキュリティが適用されません。これにより、各リポジトリのコンテンツ全体で任意のレポートを選択できるようになります。ただし、レポートの表示を要求すると、オブジェクト・レベルのセキュリティが適用されます。

▶ 関連コンテンツへのリンクを作成するには:

1. 関連コンテンツを指定するレポートを選択します。
2. 関連コンテンツへのリンクを作成する行、列、セル・オブジェクト、グリッド、チャート、イメージまたはテキスト・オブジェクトを選択します。
3. プロパティ・シートで「**関連コンテンツの追加**」チェック・ボックスを選択し、「**設定**」ボタンをクリックします。「**関連コンテンツの追加**」ダイアログ・ボックスが表示されます。

Reporting and Analysisサーバーの各リポジトリが、ツリー・ビューのノードとしてリストされます。リモート・サーバーは、JConsole.exeファイルに設定可能なRelatedContentURLSプロパティから取得されます。



注:

JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting*管理者ガイドのプロパティ情報に関するトピックまたは「**アプリケーション管理**」を参照してください。

4. 関連コンテンツ用のフォルダにリンクできます。これにより、エンド・ユーザーはフォルダのコンテンツを選択したり、フォルダのコンテンツを展開してレポートを選択したりできます。選択するには、次のいずれかのアクションを行います。
 - フォルダを選択するには、「**使用可能**」リストでフォルダをハイライトし、矢印ボタンをクリックして、フォルダを「**選択済関連コンテンツ**」領域に移動します。

- ・レポート・オブジェクトを選択するには、ノードの横にあるプラス符号(+)をクリックしてフォルダを展開します。

次に、レポート・オブジェクトをハイライトし、「追加」ボタンをクリックして、そのレポートを「選択済関連コンテンツ」領域に移動します。

5. 選択したレポート・オブジェクトのプロパティを変更します。これは、リンクを追加するとき、または追加した後に行えます。

- ・レポート・オブジェクトを選択する際にプロパティを変更するには、「Hyperionのソースからコンテンツを追加する場合に「プロパティ」ダイアログを表示します。」チェック・ボックスを選択します。リンクするレポート・オブジェクトを選択すると、「関連コンテンツのプロパティ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- ・レポート・オブジェクトを選択した後にプロパティを変更するには、「選択済関連コンテンツ」リストでレポート・オブジェクトをハイライトし、「プロパティ」ボタンをクリックします。

プロパティの変更の詳細は、[135ページの関連コンテンツのプロパティの変更](#)を参照してください。

- ・Financial Reportingの「関連コンテンツ」ダイアログに、すべてのリポジトリ・オブジェクト・タイプを表示するには、「オブジェクト・タイプの表示」を選択します。このオプションを選択しない場合は、Financial Reportingのオブジェクトのみが表示されます。



注:

このオプションにより、ブック機能が簡略化されます

6. 必要に応じて、他のフォルダやレポートも同様にして追加します。



注:

リンクのプロパティの変更の詳細は、[135ページの関連コンテンツのプロパティの変更](#)を参照してください。

7. 「選択済関連コンテンツ」リスト内のレポート・オブジェクトの位置を変更するには、オブジェクトを選択し、上向き矢印または下向き矢印をクリックして、レポート・オブジェクトを上下に移動します。
8. 「OK」をクリックします。

グリッド・セルに指定されている場合の関連コンテンツの結果の例

次のレポート・イメージでは、すべてのセルに関連コンテンツがあります。MeasureおよびMarketは視点(POV)に、Product別名は行に、YearおよびScenarioは列1と2にあります。列3は式列で、列4はテキスト列です。

Measures:Market:

Profit East

	<u>First Qtr</u>	<u>Second Qtr</u>	<u>Formula B - A</u>
	<u>Actual</u>	<u>Actual</u>	
<u>Colas</u>	<u>2,747</u>	<u>3,352</u>	<u>605</u>
<u>Root Beer</u>	<u>562</u>	<u>610</u>	<u>48</u>
<u>Cream Soda</u>	<u>591</u>	<u>922</u>	<u>331</u>
<u>Fruit Soda</u>	<u>1,480</u>	<u>1,615</u>	<u>135</u>

[Click to Show PDF](#)

[Link to rc900](#)

- 行見出し(Colas、Root Beer、Cream SodaおよびFruit Soda)で関連コンテンツを実行すると、関連コンテンツ・リンクに含まれるPOVには、YearとScenarioを除くすべてのディメンションが含まれます。どのメンバーが必要であるかが不明なため、行見出しをクリックしても、YearまたはScenarioメンバーは指定できません。
- 式セルから関連コンテンツを実行すると、Product、MeasuresおよびMarketが含まれます。YearおよびScenarioは含まれません。
- 式見出しセル(式B-A)から関連コンテンツを実行すると、POVからMeasureおよびMarketのみが含まれます。
- "Link to rc900"というテキスト・セルから関連コンテンツを実行すると、POVからMeasureおよびMarketのみが含まれます。
- "Click to Show PDF"というテキスト・セルから関連コンテンツを実行すると、Product、MeasuresおよびMarketが含まれます。YearおよびScenarioは含まれません。

リポジトリの複数のレポートやグリッドの関連コンテンツ・サーバーの変更

別のサーバーからコンテンツを移動した後、ワークスペースを使用してリポジトリで選択したレポート、グリッドまたはその両方のサーバーを変更するには、新しいURLまたは代替変数を指定します。たとえば、開発サーバーにあるレポートとグリッドを本番サーバーに移動する場合、関連コンテンツ・サーバーを変更します。

リポジトリの関連コンテンツ・サーバーを変更する方法の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

関連コンテンツへのリンクの除去

エンド・ユーザーが関連コンテンツにアクセスできないようにするには、レポートから関連コンテンツへのリンクを除去します。

▶ 関連コンテンツへのリンクを除去するには:

1. 関連コンテンツへのリンクが含まれているレポートを選択します。
2. 関連コンテンツのリンクを除去する行、列またはデータ・セルを選択します。

3. プロパティ・シートで「**関連コンテンツの追加**」チェック・ボックスを選択し、「**設定**」ボタンをクリックします。「**関連コンテンツの追加**」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「**選択済関連コンテンツ**」リストで、リンクを除去するレポート・オブジェクトをハイライトし、「**除去**」ボタン  をクリックします。
5. 「**OK**」をクリックします。

関連コンテンツのプロパティの変更

選択したレポート・オブジェクトのプロパティを変更できます。選択したレポート・オブジェクトのタイプに基づいて、ラベルやURLなどのプロパティを変更し、デフォルトの表示オプションを設定できます。

▶ リンクされたオブジェクトのプロパティを変更するには:

1. 「**関連コンテンツの追加**」ダイアログ・ボックスで関連コンテンツへのリンクを作成します。リンクの作成の詳細は、[130ページの関連コンテンツの適用](#)を参照してください。
2. 「**関連コンテンツの追加**」ダイアログ・ボックスの「**選択済関連コンテンツ**」リストで、レポート・オブジェクトを選択して、「**プロパティ**」ボタンをクリックし、「**関連コンテンツのプロパティ**」ダイアログ・ボックスを表示します。

「関連コンテンツのプロパティ」ダイアログ・ボックス

編集用に表示される「**関連コンテンツのプロパティ**」ダイアログ・ボックスのアイテムは、選択したレポート・タイプに応じて異なります。たとえば、Financial Reportingでは、レポート、スナップショット、ブックおよびスナップショット・ブックに対してすべての表示オプションが表示されます。しかし、カスタム・リンクでは、ラベルとURLフィールドのみが表示されます。

次のアイテムを編集できます:

- **ラベル** - レポート・オブジェクト・リンクの名前を変更できます。<<Value()>>テキスト関数を適用して、関連コンテンツ・リンクのディメンション値の説明を指定できます。[135ページの関連コンテンツ・リンクの説明の指定](#)を参照してください。
- **URLタブ** - リンクされたオブジェクトのURLを示します。必要に応じて変更できます。
- **表示オプション**:
 - 「**出力**」リスト。Financial Reportingでは、エンドユーザーが表示可能なフォーマット(HTMLおよびPDF)を選択します。Web Analysisでは、レポートからJavaクライアントまたはワークスペース、あるいはその両方にアクセスできるかどうかを選択します。
 - 「**デフォルト**」リスト。プライマリ選択としてレポート名にリンクするフォーマットを選択します。選択されていないフォーマットは、セカンダリ選択としてリストされます。



ヒント:

「**デフォルトとして保存**」をクリックして現在の選択内容を更新します。

関連コンテンツ・リンクの説明の指定

ブックのhtml出力で、目次やナビゲーション・パス(ブレッドクラム)にある関連コンテンツの結果の説明を表示することが必要な場合があります。「**関連コンテンツのプロパティ**」ダイアログの「**ラベル**」フィールド

にテキスト関数<<Value()>>を指定して、表示する関連コンテンツの結果を指定できます。例として次のイメージを使用します。POVにはMeasureとMarket、行にはProduct (別名を表示)、1列目にYear (カスタム見出しテキスト付き)、レポート結果の2列目にScenarioがあります。関連コンテンツ・リンクの説明がrc900<<Value(Product)>><<Value(Year)>><<Value(Market)>>の場合、ブックの目次およびナビゲーション・パスの関連コンテンツの結果には次の内容が表示されます:

<u>Measures:Market:</u>				
<u>Profit East</u>				
	<u>First Qtr</u>	<u>Second Qtr</u>	<u>Formula B - A</u>	
	<u>Actual</u>	<u>Actual</u>		
<u>Colas</u>	<u>2,747</u>	<u>3,352</u>	<u>605</u>	Click to Show PDF
<u>Root Beer</u>	<u>562</u>	<u>610</u>	<u>48</u>	
<u>Cream Soda</u>	<u>591</u>	<u>922</u>	<u>331</u>	
<u>Fruit Soda</u>	<u>1,480</u>	<u>1,615</u>	<u>135</u>	
				Link to rc900

- セル3,B (値は922)をクリックすると、次のテキストが表示されます: rc900 CreamSoda, Second Qtr, East。
- セル1,A (値は2,747)をクリックすると、次のテキストが表示されます: rc900 Colas, First Qtr, East。
- "Fruit Soda"見出しセルをクリックすると、次のテキストが表示されます: rc900 Fruit Soda, East (不明であるためYearは含まれていません)。



注:

該当するディメンションの見出し値が表示されますが、メンバー名である必要はありません。たとえば、100ではなくColaが表示され、Qtr1ではなくFirst Qtrが表示されます。



注:

<<Value()>>関数で指定されたディメンションが関連コンテンツ・リンクのPOVに含まれていない場合、<<Value()>>のテキストは空の文字列(" ")に置き換えられます。

Smart View for Officeの使用方法

Smart Viewによって、Financial Reportingで共通のMicrosoft Officeインタフェースが使用できます

この一元化されたインタフェースを使用すると、複数のOracle製品を同時に使用することや、Microsoft Officeとの統合を向上させることが可能になります。Smart Viewの実装により、次のワークスペース機能が提供されます:

この一元化されたインターフェースを使用すると、複数のOracle製品を同時に使用することや、Microsoft Officeとの統合を向上させることが可能になります。Smart Viewインプリメンテーションでは、EPM Workspaceの次の機能を提供します。

- 現在のデータ・オブジェクトの現在のページをExcel、WordまたはPowerPointにエクスポートする。
- Financial Managementと Essbase機能がExcel、Word、PowerPointのコンテンツに表れます。
- Essbaseの機能をExcel、WordおよびPowerPointコンテンツで公開する。
- 新しいHyperion Smart Viewリリースへのアップグレードを通知する。
- 機能の使用の詳細は、『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド*』を参照してください。

8

レポートのプレビューと印刷

この項の内容:

プレビュー時のプロンプトへの応答	139
現在のユーザーのPOV設定のプレビュー	140
プレビュー・プリファレンスの設定	140
Webブラウザでのレポートのプレビュー	140
Reporting Studioでのレポートのプレビュー	141
スナップショット・レポートのプレビュー	141
レポートの印刷	141
レポート・デザイナーでの印刷について	142

Reporting StudioまたはEPM WorkspaceのWebブラウザから、レポートおよびスナップショット・レポートをプレビューして印刷できます。レポートをプレビューまたは印刷するとき、データは新しいデータ、計算およびフォーマットでリフレッシュされます。

スナップショット・レポートには、レポートをスナップショットとして保存した時点で取得されたデータが含まれます。スナップショット・レポートのデータはそのまま保持されます。つまり、スナップショットを前回保存した後で行われたデータベース接続に対する変更は、プレビューまたは印刷時に反映されません。



注:

表示および印刷のオプションがワークスペースにあります。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド』を参照してください。

プレビュー時のプロンプトへの応答

レポートをプロンプトを使用して設計した場合、これらのプロンプトは、レポートをプレビューすると表示されます。プロンプト・リストからメンバーを選択して、プロンプトに応答し、要求された情報を指定する必要があります。プロンプトを手動で編集することもできます。プロンプトに別名が含まれている場合は、メンバー名に変換してエイリアス名を編集できます。プロンプトの定義の詳細は、[23ページの第2章「メンバーの定義」](#)を参照してください

▶ プレビュー時にプロンプトに応答するには:

1. Studioエクスプローラで、プロンプトを含むレポートを開きます。
2. 「プロンプトに応答」ダイアログ・ボックスの「選択」列で、次のいずれかのアクションを行います。
 - メンバーが既知の場合は、それぞれのプロンプトのテキスト・ボックスにメンバー名を入力します。テキスト・ボックスを使用できない場合、プロンプトには別名が含まれています。テキスト・ボックスを編集するには、「メ

メンバー名の編集」チェック・ボックスを選択します。プロンプトに複数のメンバーを指定した場合、これらのメンバーをカンマで区切る必要があります。



注:

「メンバー名の編集」チェック・ボックスを選択すると、テキスト・ボックスに別名ではなくメンバー名が表示されます。そのエイリアスに関連付けられているメンバー名を編集します。

- ・ 「メンバー選択に移動」ボタンをクリックします。「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。デフォルトのメンバーは、右側のパネルの選択された領域にリストされます。ダイアログの中央パネルにある「選択した項目に追加」の矢印と「選択した項目から除去」の矢印をクリックして、パネル間でメンバーを移動します。

メンバーの定義の詳細は、[23ページの第2章「メンバーの定義」](#)を参照してください

3. 「OK」をクリックします。
4. オプション: プロンプトに加えた変更を元に戻すには、「プロンプトに応答」ダイアログ・ボックスの「リセット」をクリックします。
5. 「実行」をクリックします。レポートまたはブックが表示されます。

現在のユーザーのPOV設定のプレビュー

ワークスペースで、ユーザーはレポートを実行する前にユーザーのPOVをプレビューし、ユーザーのPOVを変更できます。たとえば、出力が表示された後ではなく、レポートを実行する前に、ユーザーのPOVのメンバーが適切であるかどうかを確認できるので、時間を節約できます。

レポートまたはブックのユーザーのPOV設定をワークスペースからプレビューする方法の詳細は、『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド*』を参照してください。

プレビュー・プリファレンスの設定

ワークスペースを使用すると、プレビュー・プリファレンスを設定できます。レポートまたはブックの表示方法をあらかじめ設定できます。レポートまたはブックを開く際のデフォルトの設定は、「PDFプレビュー」または「HTMLプレビュー」です。

このオプションの詳細は、『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド*』を参照してください。

Webブラウザでのレポートのプレビュー

StudioエクスプローラまたはデザイナのWebプレビュー機能を使用すると、ワークスペースでWebブラウザを使用してレポートをプレビューできます。

StudioエクスプローラまたはデザイナのWebプレビュー機能を使用すると、EPM WorkspaceでWebブラウザを使用してレポートをプレビューできます。

1. 任意のタイプのレポートを開きます
2. ツールバーで「**Webプレビュー**」ボタンをクリックします。



注:

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceには、プレビューおよび印刷オプションが用意されています。

ワークスペースによるレポートおよびブックの表示方法の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

Reporting Studioでのレポートのプレビュー

変更内容を保存または印刷する前に、レポートをプレビューしてコンテンツを表示できます。ズーム・イン、ズーム・アウト、レポートのスクロールまたは印刷を行うことができます。レポートをプレビューすると、レポート内のデータがリフレッシュされます。スナップショット・レポート内のデータはリフレッシュされません。

ワークスペースからWebブラウザを使用してブックをプレビューできます。ブックおよびレポートのプレビュー方法の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

▶ レポートをプレビューするには:

1. Studioエクスプローラで、レポートまたはスナップショットをハイライトします。
2. 「ファイル」、「PDFプレビュー」の順に選択します。

レポートはAdobe ReaderでPDF形式で起動します。

3. Adobe Readerを使用してPDFドキュメントを移動し、終了時にAdobe Readerを閉じます。

スナップショット・レポートのプレビュー

静的レポートを表示したり印刷したりするには、スナップショット・レポートを表示します。スナップショット・レポートは、Reporting Studioリポジトリから開くことができます。

▶ スナップショット・レポートをプレビューするには:

1. リポジトリから1つ以上のスナップショット・レポートを選択します
2. 「ファイル」、「印刷プレビュー」の順に選択します

レポートの印刷

レポートの任意のタイプを印刷できます。動的レポートを印刷する場合は、データがリフレッシュされます。スナップショット・レポート内のデータはリフレッシュされません。エクスプローラまたはデザイン領域のレポートを印刷できます。

ブックとスナップショット・ブックは、ワークスペースから印刷されます。ブックおよびスナップショット・ブックの印刷方法の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド』を参照してください。

▶ レポートを印刷するには:

1. Studioエクスプローラでレポートを開きます。

表示されるプロンプトに応答し、必要に応じて変更を加えます。

2. 「ファイル」、「印刷」を選択します。

レポート・デザイナーでの印刷について

サブトピック

- [位置設定](#)
- [テキスト・ボックスの印刷](#)
- [グリッドの印刷](#)
- [ページ・ディメンションの見出しの印刷](#)
- [ページのメンバーの印刷](#)
- [ヘッダーとフッターの印刷](#)

レポート・オブジェクトをレポート内の任意の場所に配置できます。ただし、印刷した結果は、レポート・プロパティおよびデータによって決まります。



注:

オブジェクトが重なっているレポートを印刷するとき、オブジェクトがデザイナーで表示されるとおりに印刷されない場合は、レポート内のオブジェクトを再調整する必要があります。詳細は、[59ページの第4章「レポートの作成」](#)を参照してください。

位置設定

自動サイズ調整されたレポート・オブジェクトの相対的な位置を設定できます。この高度な位置設定メカニズムにより、レポート・オブジェクトを相互に相対的に配置する方法を正確に制御できます。レポート内に自動サイズ調整されるレポート・オブジェクトがない場合、相対位置調整は無視されます。

1つのレポート・オブジェクトの位置を相対的に設定すると、デザイン内のすべてのレポート・オブジェクトが移動し、自動サイズ調整されるレポート・オブジェクトと固定サイズのレポート・オブジェクトとの距離が同じに保たれます。

たとえば、GridAは自動サイズ調整され、水平位置が中央に設定されるため、GridAはページの中央に印刷されます。ChartAは、GridAにリンクされており、垂直位置が「相対」に設定され、GridAの下端から1インチに配置されています。ChartAは、Grid Aの下端から1インチの位置に印刷されます。

ChartAの配置を相対的に設定しないと、ChartAはグリッド・レイアウトの絶対座標の位置に印刷されるので、GridAと重なる可能性があります。



注:

レポートに変更を行った場合、垂直位置と水平位置は維持されません。

テキスト・ボックスの印刷

テキスト・ボックスのプロパティの自動サイズ調整を設定できます。レポートを印刷すると、テキスト・ボックスに入力されるすべてのテキストに合わせてテキスト・ボックスの高さが増加または減少されます。テキスト・ボックスの幅は変更されません。



注:

自動サイズ調整されるテキスト・ボックスに表示される最大行数は27行です。テキストのすべての行を表示するには、「自動サイズ調整」の選択を解除します。

自動サイズ調整プロパティを設定しないと、レポートが次のように印刷されます。

- テキスト・ボックスの幅と高さが、グリッドのサイズに合せられます。
- テキスト・ボックスに収まらないテキストが切り捨てられます。

グリッドの印刷

グリッドの自動サイズ調整プロパティを設定できます。自動サイズ調整プロパティが設定されている場合に、グリッドを印刷すると、グリッド内のすべてのデータに合わせて、グリッドの高さと幅が調整されます。

自動サイズ調整プロパティを設定しない場合、グリッドは指定された高さで印刷されます。行または列がページに収まらない場合、後続のページに印刷されます。最初に列が必要なページ数を使用して印刷され、次に行が印刷されます。

グリッドの位置設定プロパティを使用してページにグリッドを配置できます。グリッドをページの右側または一番下に手動で位置設定しても、グリッドがレポートの右側または一番下に印刷されるとは限りません。

自動サイズ調整するように設定されたグリッドが、1ページに収まらない場合、後続のページに印刷されます。最初に列が次のページの左のマージンから印刷され、次に行が次のページの一番上から印刷されます。

ページ・ディメンションの見出しの印刷

「ページのプロパティ」シートを使用してグリッドのページ・ディメンションの見出しを指定できます。レポートを印刷すると、ページ・ディメンションの見出しは、ページのメンバーが変わるたびに印刷されます。

次に、ページ・ディメンションの見出しが印刷される方法を示します。

- テキストは、グリッドの左端に揃えて印刷されます。

- ・ テキストの高さが自動サイズ調整され、幅はグリッドの幅に設定されます。
- ・ ページのメンバーが変わるたびに、見出しがグリッドの1行目の上に印刷されます。

ページのメンバーの印刷

レポートを印刷すると、ページのメンバーが変わるたびに新しいページが生成されます。「ページのプロパティ」シートを使用すると、次のいずれかのオプションを使用してページを印刷する方法を指定できます。

- ・ **新規ページ - 上端:** 新しいページはページの一番上に印刷されます。たとえば、グリッドにリンクされたチャートがあり、ページのメンバーが変わるたびにチャートとグリッドを並べて印刷する場合に、このオプションを使用します。
- ・ **新規ページ - 同じ位置:** 新しいページは指定されたグリッド位置に印刷されます。このオプションは、次のような場合に使用されます。
 - グリッドに横方向または縦方向、あるいはその両方の配置プロパティが設定されており、各ページの同じ位置にグリッドを印刷する場合。たとえば、グリッドの位置を中央に設定した場合、グリッドは各ページの中央に印刷されます。
 - チャートがグリッドにリンクされていて、ページのメンバーが変わるたびにチャートとグリッドを並べて印刷する場合。
- ・ **同じページ:** 前のページのデータに続けて新しいページが印刷されます。



注:

グリッドにリンクされているチャートは、ページのメンバーが変わるたびに印刷されるのではなく、一度のみ印刷されます。

ヘッダーとフッターの印刷

自動サイズ調整されたテキスト・ボックスをヘッダーに配置できます。ただし、テキスト・ボックスの高さがヘッダーを超える場合、ヘッダーの枠の外に印刷されます。

自動サイズ調整されたテキスト・ボックスをフッターに配置できます。ただし、テキスト・ボックスの高さがフッターを超える場合、テキストが切り詰められます。



注:

ページの上端や下端の近くにあるオブジェクトが、ヘッダーやフッターに重なる可能性があります。

9

レポートのフォーマット

この項の内容:

テキスト・ボックスのフォーマット	145
条件付きフォーマットについて	157
条件付き抑制	167
イメージのフォーマット	173
ページ設定の変更	174

レポートをフォーマットすると、テキスト・ボックス、グリッド、イメージ、チャートなどのレポート・コンポーネントのレポート内での表示方法を指定できます。たとえば、フォントを指定したり、枠線を追加したりできます。レポートをフォーマットする場合は、コンポーネントのプロパティを定義します。適用したフォーマットは、レポートの印刷時やオンラインでの表示に影響を与えます。



注:

各オブジェクトにはデフォルトのフォーマットのプロパティがあります。レポートをフォーマットしない場合は、デフォルトのフォーマットのプロパティを使用できます。

重なり合ったオブジェクトを含む、レポート・オブジェクトの一般情報は、59ページの第4章「レポートの作成」を参照してください。チャートのフォーマットの詳細は、43ページの第3章「チャートのカスタマイズ」を参照してください。

テキスト・ボックスのフォーマット

サブトピック

- テキスト・ボックスのフォントの指定
- テキスト・ボックス内のテキストの配置
- テキスト・ボックスの枠線と網掛けの設定
- グリッドのフォーマット
- グリッドの拡大表示
- フォーマットのヒント
- グリッド内の数値のフォーマット
- 行、列、グリッドの非表示
- 非表示の行や列での抑制の評価の制御
- 行、列、ページのソート

テキスト・ボックスのフォントの指定

- ▶ フォントを指定するには:

1. レポートを開き、テキスト・ボックス内のテキストを選択します。
2. 「フォーマット」、「フォント」の順に選択します。
3. フォント、スタイル、サイズ、および色を指定します。
4. 選択されているテキスト上に取消し線を配置するには、「取消し線」を選択します。
5. 選択されているテキストの下に線を配置するには、「下線」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。

テキスト・ボックス内のテキストの配置

テキスト・ボックス内のテキストの横方向の配置を設定できます。インデントのオプションを使用して、テキスト・ボックス内のテキストのマージンを増加または減少することもできます。

表16 テキストの配置とインデントのオプション

設定	タスク
配置	「左」、「中央」、または「右」を選択すると、テキスト・ボックス内のテキストの横方向の配置を指定できます。たとえば、「中央」を選択すると、テキスト・ボックスの中央にテキストが配置されます。
インデント	左揃えのテキストを右にインデントする文字数を選択します。 注： インデントは、左揃えのテキストのみで設定できます。

▶ テキスト・ボックス内でテキストを配置するには:

1. レポートを開き、テキスト・ボックスを作成するか、既存のテキスト・ボックスを選択します。
2. 「テキストのプロパティ」プロパティ・シートで、「レポート上のオブジェクトの位置」の「横方向」ドロップダウン・リストで次のいずれかのオプションを選択します。
 - ・「なし」- テキストの上または左側のレポート・オブジェクトのサイズが変更されても、テキストは現在の位置に印刷されます。
 - ・「相対」- 印刷時のテキストは、左側にあるレポート・オブジェクトに対して相対的な位置に配置されます。
 - ・「左」- レポートの左側にテキスト・ボックスを配置します。
 - ・「中央」- レポートの中央にテキスト・ボックスを配置します。
 - ・「右」- レポートの右側にテキスト・ボックスを配置します。
3. 「レポート上のオブジェクトの位置」の「縦方向」ドロップダウン・リストで次のいずれかのオプションを選択します。
 - ・「なし」- テキストの上または左側のレポート・オブジェクトのサイズが変更されても、テキストは現在の位置に印刷されます。
 - ・「相対」- 印刷時のテキストは、その上にあるレポート・オブジェクトに対して相対的な位置に配置されます。
 - ・「上」- テキスト・ボックスをレポートの一番上に配置します。
 - ・「中央」- テキスト・ボックスをレポートの中央に配置します。
 - ・「下」- テキスト・ボックスをレポートの一番下に配置します。

テキスト・ボックスの枠線と網掛けの設定

▶ 枠線または網掛け、あるいはその両方をテキスト・ボックスに設定するには:

1. レポートを開き、テキスト・ボックスを選択します。
2. 「テキストのプロパティ」シートで次の手順に従います：
 - テキスト・ボックスの周りに枠線を付けるには、「**枠線の表示**」チェック・ボックスを選択します。
 - テキスト・ボックスに網掛けを追加するには、「**網掛け**」ドロップダウン・リストから網掛けを選択します。

グリッドのフォーマット

Oracle Hyperion Financial Reporting Studioには、グリッドで作業する際の様々なフォーマットのオプションが用意されています。

グリッドの拡大表示

グリッドの表示をレポート・デザイナのワークスペースのサイズに拡大できます。この機能は、多数の行および列のあるグリッドで特に便利です。拡大表示することで、より簡単にセルを探せます。

- ▶ グリッドを拡大表示するには：
1. グリッドのタイトル・バーを右クリックします。
 2. 「**ズーム**」を選択します。
 3. 元の表示に戻すには、グリッドのタイトル・バーを右クリックし、「**ズーム**」の選択を解除します。

フォーマットのヒント

セルのフォーマットは、行/列のフォーマットおよびグリッドのフォーマットより優先されます。セルのフォーマットを使用すると、行/列のフォーマットおよびグリッドのフォーマットに例外を設定できます。行/列のフォーマットは、グリッドのフォーマットより優先されます。行/列のフォーマットを使用すると、グリッドのフォーマットに例外を設定できます。したがって、レポートをフォーマットする場合は、最初にグリッドをフォーマットし、次に行/列の異なるフォーマット、最後に特定のセルのフォーマットという順番で設定します。



注：

条件付きフォーマットは、他のすべてのフォーマットより優先され、グリッド、行/列、またはセルのレベルで設定されていたフォーマットのかわりに使用されます。たとえば、セルの色を変更する条件付きフォーマットを使用する場合に、小数点以下の桁数の標準フォーマットを維持するには、セルの色の変更と小数点以下の桁数の両方を条件付きフォーマットを使用して指定する必要があります。

グリッド内の数値のフォーマット

サブトピック

- [特殊な通貨フォーマットの使用](#)
- [グリッド内でのテキストの配置](#)
- [フォントのオプションの変更](#)

- カスタムの色の作成
- 枠線と網掛けの設定
- テキストの置換
- セルのフォーマットの継承
- セルのフォーマットのコピー

グリッド内での数値の表示方法をフォーマットできます。次のオプションは、グリッド全体、またはセル、行、列に個別に適用できます。

- 正数の符号(接頭辞、接尾辞、通貨)
- 負数の符号(接頭辞、接尾辞、通貨および負数を赤で表示するオプション)
- 桁区切りと小数点(グリッド・セルの定義に、明示的にユーザーのプリファレンスを使用)

▶ グリッドの数値をフォーマットするには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. セルを選択します。
3. 「フォーマット」、「セル」の順に選択します。
4. 「数値」タブを選択します。

「数値」タブの下端にある「サンプル」セクションに、選択した数値フォーマット・オプションを適用した結果が表示されます。

5. オプション: 正数に接頭辞または接尾辞を指定するには、「接頭辞」または「接尾辞」ドロップダウン・リストで符号を選択するか、「接頭辞」または「接尾辞」フィールドにユーザー定義の符号を入力します。接頭辞符号は、各正の値の左側に配置されます。接尾辞符号は、各正の値の右側に配置されます。



注:

接頭辞または接尾辞を使用すると、勘定科目メンバーの符号を別の行または列に挿入せずに逆転できます。条件付きフォーマットを使用している場合は、勘定科目行を指定し、条件を設定します。その後、「正の符号」の「接頭辞」フィールドに負の符号(-)を入力し、「OK」を2回クリックします。負の符号(-)がその行の数値の前に表示されます。

6. オプション: 負数に接頭辞または接尾辞を指定するには、「接頭辞」または「接尾辞」ドロップダウン・リスト・ボックスで符号を選択するか、「接頭辞」または「接尾辞」フィールドにユーザー定義の符号を入力します。接頭辞符号は、各負の値の左側に配置されます。接尾辞符号は、各正の値の右側に配置されます。
7. オプション: 負の値を赤で表示するには、「赤で表示」オプションを選択します。デフォルトでは、このオプションは選択されていません。
8. 「小数点以下の桁数」ドロップダウン・リスト・ボックスで数値に表示する小数点以下の桁数を選択します。デフォルト範囲は、0から9までです。
9. 桁区切りと小数点オプションの次のいずれかを選択します。

- **プリファレンスで定義:** ユーザーの「プリファレンス」ダイアログ・ボックスで指定されている記号を使用する場合。使用する記号を指定できます。
- **レポートで定義:** 現在のレポートで使用する桁区切りと小数点を指定する場合。

○3桁ごとに数値を区切る文字は、「3桁ごとの区切り文字」ドロップダウン・リストで選択します。たとえば、カンマ(,)を選択して値を「1,000」と表示するか、ピリオド(.)を選択して値を「1.000」と表示します。オプションには、カンマ(,)、ピリオド(.)、アンダースコア(_)、スペースがあります。また、フィールドをハイライトし、別の記号を入力して、ドロップダウンの記号とは別の記号を指定することもできます。

○900.06のように小数点に使用する文字は、「小数点」ドロップダウン・リスト・ボックスで選択します。オプションには、カンマ(,)、ピリオド(.)、アンダースコア(_)、スペースがあります。また、フィールドをハイライトし、その記号を入力して、ドロップダウンの記号とは別の記号を指定することもできます。

10. 「スケール値」ドロップダウン・リスト・ボックスのオプションを選択するか、数値を入力すると、スケールの乗算に使用する値を指定できます。デフォルトのスケール・オプションは1で、値をスケールしません。.001を選択すると、値2,000は2と表示されます。オプションには、パーセント、十、百、千、万、十万、百万、十億があります。また、ドロップダウン・ボックスで値を指定することもできます。
11. 「適用」をクリックして、選択したセルに指定した数値のフォーマットを適用し、「OK」をクリックして数値のフォーマット設定を保存し、ダイアログ・ボックスを閉じます。

特殊な通貨フォーマットの使用

一部の通貨では、通貨記号に専用のフォーマットを使用します。このトピックでは、これらの特殊文字をレポートに挿入するための情報を提供します。



注:

特殊な通貨記号、たとえばトルコ・リラ記号をレポートに追加するには、この記号に使用されるフォントがローカル・マシンと接続先サーバーにインストールされている必要があります。フォントのインストール手順については、Oracle Enterprise Performance Managementシステム・インストールおよび構成ガイドを参照してください。

▶ レポートに特殊な通貨記号を追加するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. セルを選択します。
3. 「フォーマット」、「セル」の順に選択します。
4. 「フォント」タブを選択し、通貨記号のフォントを選択します:

- トルコ・リラ記号の場合はAbakuTLSymSans
- インド・ルピー記号の場合はRupee

5. 「適用」をクリックし、フォントの選択を適用します。
6. 「数値」タブを選択します。

「数値」タブの下端にある「サンプル」セクションに、選択した数値フォーマット・オプションを適用した結果が表示されます。

7. 「接頭辞」または「接尾辞」に、必要な通貨記号の文字またはキーストローク・シーケンスを入力します。

- [Ctrl] + [Alt] + [T]: トルコ・リラ記号を数値の接頭辞または接尾辞として追加する場合
- アクサン・グラヴ記号(˘): インド・ルピー記号を数値の接頭辞または接尾辞として追加する場合

8. 「適用」、「OK」の順にクリックして、通貨記号を選択したセルの接頭辞または接尾辞として適用し、フォントおよび記号のフォーマット設定を保存してダイアログを閉じます。

グリッド内でのテキストの配置

選択したセルにあるテキストの配置とインデントのオプションを指定できます。配置のオプションには、横方向と縦方向の配置があります。また、選択したセルのマージンからテキストをインデントする文字数を指定することもできます。

▶ グリッド内のテキストを配置するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. フォーマットするセルを選択します。
3. 「フォーマット」、「セル」の順に選択して、「セルのフォーマット」ダイアログ・ボックスにアクセスします。
4. 「配置」タブを選択して、選択したセルの配置を指定します。
5. 「横方向」ドロップダウン・リストで配置オプションを選択します。オプションは、「左」、「中央」、および「右」です。
6. 「縦方向」ドロップダウン・リストで配置オプションを選択します。オプションは、「上」、「中央」、および「下」です。
7. 見出しとその関連テキスト、データ、または式のセルを行内でインデントするには、「インデント」の値ボックスで、セルの左マージンから値をインデントする文字数を選択します。



注:

このコントロールは、「横方向」ドロップダウン・リストで「左」を選択した場合にのみ使用可能です。

8. 選択したメンバーの世代ごとに行見出しをインデントするには:
 - a. 目的の見出しセルのある行が「世代ごとのインデントの幅」値ボックスで選択されていることを確認します。



注:

フォーマットのプロパティで負数を使用すると、逆インデント(右から左へ)を指定できます。

- b. テキストをインデントするスペース数を選択します。この数値が「インデント」値ボックスの数値に追加されます(値が含まれる場合)。



注:

Planningで詳細なアイテムを表示するには、「サポート詳細の表示」を選択します。また、Planningを含むすべてのデータベース接続で、複数のレベルのメンバーを戻すメンバーの関係を選択します。たとえば、「...の子(含む)」、「...の子孫」、「...の子孫(含む)」、「...の親(含む)」、「...の祖先」、「...の祖先(含む)」、「すべてのメンバー」などです。このコントロールは、「横方向」ドロップダウン・リストで「左」を選択した場合にのみ使用可能です。

9. 「適用」をクリックして、テキストの配置のオプションをセルに適用します。
10. 「OK」をクリックして、指定したテキストの配列オプションを確認し、ダイアログ・ボックスを終了します。

フォントのオプションの変更

選択したセルのテキストにフォント、フォント・スタイル、フォント・サイズ、フォントの色、取消し線、下線を指定できます。テキストのプレビューが、フォントのオプションを変更するダイアログ・ボックスに表示されます。

▶ フォントのオプションを変更するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. フォーマットするセルを選択します。
3. 「フォーマット」、「セル」の順に選択して、「セルのフォーマット」ダイアログ・ボックスにアクセスします。
4. 「フォント」タブを選択し、次の1つ以上のアクションを行います。

- ・「**フォント**」リスト・ボックスでフォントを選択します。
- ・「**フォント・スタイル**」リスト・ボックスでフォント・スタイルを選択します。オプションは、「標準」、「太字」、「斜体」、「太字斜体」です。
- ・「**サイズ**」リスト・ボックスでフォント・サイズを選択します。
- ・取消し線を適用するには、「**効果**」セクションにある「**取消し線**」チェック・ボックスを選択します。たとえば、「小計」という語句のあるセルに取消し線を適用すると、文字の中央に線が入って表示されます。
- ・テキストに下線を追加するには、「**効果**」セクションにある「**下線**」チェック・ボックスを選択します。たとえば、「小計」という語句のあるセルに下線を適用すると、文字の下に線が入って示されます。
- ・選択したセルに適用する色を選択するには、「**効果**」セクションの「**選択**」ボタンをクリックします。

「基本の色」パレットまたは「カスタムの色」パレットから色を選択できます。カスタムの色を定義するには、[151ページのカスタム色の作成](#)を参照してください。

5. 「**適用**」をクリックして、選択したフォントのオプションを適用します。
6. 「**OK**」をクリックして、指定したフォントのオプションを確認し、ダイアログ・ボックスを終了します。

カスタム色の作成

Financial Reportingには、レポートや他のアーティファクトのテキスト用の基本色のパレットが用意されています。Financial Reportingでは、カスタム色を定義して、このパレットに追加できます。



注:

カスタム色はStudioセッション間で保存されません。

▶ カスタム色を定義するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. フォーマットするセルを選択します。
3. 「**フォーマット**」、「**セル**」の順に選択して、「セルのフォーマット」ダイアログ・ボックスにアクセスします。
4. 「**フォント**」タブを選択し、「**効果**」セクションで「**選択**」をクリックすると「色」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. **カスタム色の定義**を選択し、色相、彩度、明度および赤、緑、青の割合を指定します。

色のプロパティを指定すると、「色/実線」ボックスに色の現在の状態が表示されます。

6. 終了したら「**カスタム色に追加**」を選択し、「色」ダイアログ・ボックスで「**OK**」をクリックしてから「セルのフォーマット」ダイアログでもう一度「**OK**」をクリックして、色の定義を保存します。

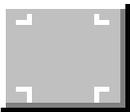
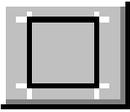
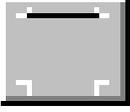
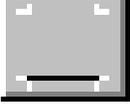
色の定義を破棄するには、「色」および「セルのフォーマット」のダイアログ・ボックスで「**取消し**」をクリックします。

枠線と網掛けの設定

レポートのグリッド内で選択したセル、行または列に枠線や網掛けを適用して強調できます。枠線のスタイルを指定して、選択した領域の任意の辺に適用できます。また、選択した領域に適用する網掛けの色を選択することもできます。

次の表に、セルの枠線の配置を表すボタンを示します。

表17 枠線の配置のオプション

ボタン	タスク
	選択したグリッド、セル、行または列の枠線を削除します。
	選択したグリッド、セル、行または列の周りに枠線を引きます。
	選択したグリッド、セル、行または列の上の枠線を引きます。
	選択したグリッド、セル、行または列の下の枠線を引きます。
	選択したグリッド、セル、行または列の左の枠線を引きます。
	選択したグリッド、セル、行または列の右の枠線を引きます。

▶ グリッド内のセルに枠線または網掛けを設定するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. グリッド、またはグリッド内の1つ以上のセル、行、列からフォーマットするアイテムを選択します。
3. 「フォーマット」、「セル」の順に選択して、「セルのフォーマット」ダイアログ・ボックスにアクセスします。
4. 「枠線と網掛け」タブを選択します。
5. 枠線のオプションを指定するには:
 - a. 「スタイル」ボックスで、枠線に使用する線スタイルをクリックします。
 - b. 1つ以上の枠線の配置ボタンをクリックします。枠線の配置ボタンの詳細は、[152ページの表 17](#)を参照してください。
6. 網掛けを追加するには、「選択」ボタンをクリックし、網掛けに適用する色を選択します。
7. 「適用」をクリックして、選択した枠線と網掛けのオプションを適用します。
8. 「OK」をクリックして、選択した枠線と網掛けのオプションを確認し、ダイアログ・ボックスを終了します。

テキストの置換

グリッド内のセルの作業時に、セル内の値を異なるテキストに置換できます。この機能では、選択したすべてのセルのすべてのテキストを、指定した置換用テキストと置換します。また、特定の条件が満たされた場合に表示される関連コンテンツ・リンクを含めることを指定できます。

▶ グリッドのセルの値を置換するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. フォーマットするセルを選択します。
3. 「フォーマット」、「セル」の順に選択して、「セルのフォーマット」ダイアログ・ボックスにアクセスします。
4. 「置換」タブを選択します。
5. 「置換後の値」チェック・ボックスを選択して、テキスト・ボックスを使用可能にし、置換テキストを入力します。



注:

チェック・ボックスを選択し、テキスト・ボックスにテキストを入力しない場合、選択したセルはレポートに空白で表示されます。

6. 「適用」をクリックして、選択したセルにテキストの置換を適用します。
7. 「OK」をクリックして、指定したテキスト文字列での置換を確認します。

セルのフォーマットの継承

グリッド内のセルのフォーマット時に、セルのフォーマットを継承して別のセルに適用できます。グリッド内の継承できるフォーマット・オプションは、数値、配置、フォント、枠線と網掛け、および置換です。



注:

現在のグリッドの行と列のテンプレートで作業している場合は、行と列のテンプレートを保存する前にフォーマットの継承オプションを設定する必要があります。詳細は、[88ページの行と列のテンプレートの作成](#)を参照してください。

▶ セルのフォーマットを継承するには:

1. グリッドを含むレポートを開くか、新しいグリッドを作成して行または列のフォーマットを設定します。
2. フォーマットの継承先のセルを選択します。
3. 「フォーマット」、「セル」の順に選択します。
4. 「フォーマットの継承」タブをクリックします。
5. 「次のフォーマット・オプションを継承」領域で、プラス記号(+)を展開し、継承するフォーマット・オプションのボックスをクリックして選択します。継承できるフォーマット・オプションには、数値、配列、フォント、枠線と網掛け、テキストの置換があります。



注:

すべてのフォーマット・オプションを選択するには、「すべて選択」をクリックします。すべてのフォーマット・オプションの選択を解除するには、「すべて選択解除」をクリックします。



ヒント:

フォーマットの継承元の行または列を指定するには、継承するオプション(数値、配置、フォント、枠線と網掛け、置換)を最初に指定しておく必要があります。

6. 「フォーマットの継承元」領域で、上下の矢印ボタンを使用してフォーマットの継承元の行または列を選択します。次の継承オプションから選択してください:

- 現在の行と別の列を選択する



ヒント:

上矢印キーおよび下矢印キーを使用して選択します。

- 現在の列と別の行を選択する
- 別の行と別の列を選択する



注:

継承元のセルには、以前に継承が定義されていないセルのみを使用できます。たとえば、列Aをフォーマットし、列Bにそのフォーマットを継承した場合、列Bから列Cにはフォーマットを継承できません。ただし、列Aをフォーマットし、列Bおよび列Cを選択して、列Bと列Cに列Aのフォーマットを継承できます。

7. 「適用」をクリックします。
8. 「OK」をクリックします。



注:

フォーマットを継承した後で継承先のセルのフォーマットを変更すると、継承は適用されなくなります。たとえば、セルA4にセルB4からフォント名プロパティを継承した場合にセルA4のフォント名を変更すると、フォーマット継承は存在なくなります。変更によって、2つのセル間で確立されたフォーマットのリンクは破棄されます。

セルのフォーマットのコピー

フォーマット・ペインタを使用すると、1つのセルまたはセル範囲のフォーマットをコピーし、グリッド内の宛先のセルまたはセル範囲に適用できます。



注:

ただし、継承したフォーマットや条件付きフォーマットは、フォーマット・ペインタではコピーできません。

- ▶ セルのフォーマットをコピーするには:
1. レポートにグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
 2. セルまたはセルの範囲にグリッドのフォーマットを使用してフォーマットを設定します。詳細は、[147ページのグリッドのフォーマット](#)を参照してください。

3. コピーするフォーマットを含むセルまたはセルの範囲を選択します。
4.  をクリックします。
5. コピーしたフォーマットを適用するセルまたはセル範囲を選択します。マウスを放すとフォーマットが変更されま
す。

行、列、グリッドの非表示

行、列、またはグリッド全体を非表示にして、印刷時またはレポートの表示時にその値が表示されないようにできま
す。たとえば、グリッド・データを使用したチャートがある場合、グリッドを非表示にして、レポートにチャートのみを表示
できます。グリッドを非表示にすると、そのグリッドのタイトル・バーが青から灰色に変わります。

ただし、行や列のデータと計算は、適用しているフォーマットに関係なく評価されます。

▶ グリッドを非表示にするには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. グリッドを選択します。
3. 「グリッドのプロパティ」プロパティ・シートで「抑制」カテゴリを選択します。
4. 「グリッドを非表示」チェック・ボックスを選択します。

▶ 行または列を非表示にするには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. 行または列を選択します。
3. 「常に非表示」チェック・ボックスを選択します。



注:

非表示の行と列にあるデータ値を抑制時に考慮するかどうかを指定できます。このオプションの詳細は、[155ページの非表示の行や列での抑制の評価の制御](#)を参照してください。

非表示の行や列での抑制の評価の制御

抑制の評価時に、非表示の行や列にある値および計算を含めるか、無視するかを指定できます。このオプションは、
行や列の「常に非表示」チェック・ボックスが選択されている場合にのみ使用可能です。

▶ 抑制時に非表示の行や列を考慮するかどうかを指定するには:

1. 非表示の行または列を選択します。
2. 次のいずれかのアクションを行います:
 - 値と計算を含めるには、「抑制時に行を無視」、または「抑制時に列を無視」チェック・ボックスの選択を解除
します。これはデフォルトの設定です。
 - 値と計算を除外するには、「抑制時に行を無視」または「抑制時に列を無視」チェック・ボックスを選択しま
す。



注:

非表示のセルは、特別に条件付き抑制として指定されないかぎり、抑制の評価時に除外されません。詳細は、[167ページの条件付き抑制](#)を参照してください。

行、列、ページのソート

グリッドにある連続する複数の行または列の範囲を特定の列または行にある値に基いてソートできます。また、列、行およびページを、その見出しに基いてソートすることもできます。列の範囲を選択した場合、指定された行にある値に基づいて列がソートされます。行の範囲を選択した場合、指定した列にある値に基いて行がソートされます。ソートの基準となる列または行に複数のメンバーが含まれている場合、ソートには、最初のメンバーの値のみが使用されます。

列または行のソートには、昇順または降順を使用できます。昇順でソートする場合、最小値、アルファベット順の最初の文字、または最も古い日付がソート済リストの最初に表示されます。降順でソートする場合、最大値、アルファベット順の最後の文字、または最新の日付がソート済リストの最初に表示されます。

ソートが実行できるのは、複数の列範囲または行範囲のみです。抑制の行または列はソートされません。

▶ 一定の範囲の行や列をソートするには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. グリッドのソートを設定します:
 - a. グリッドを選択して、「グリッドのプロパティ」シートを表示します。
 - b. 「全般」カテゴリを選択します。
 - c. 「ソート」を選択し、「設定」をクリックして「ソート」ダイアログ・ボックスを表示します。
3. 「ソートの対象」で、「行」、「列」または「ページ」を選択します。



注:

「ページ」オプションでは、「ソート基準」ドロップダウン・メニューで見出しのみを選択できます。それ以外のオプションは使用できません。

4. 「行」または「列」では、「開始」および「終了」を選択して、ソートの対象となる列または行の範囲を選択します。



注:

自動計算が使用可能になっている場合は、最も外側のレイヤーに計算に使用されたすべての行の総計があります。ソートでは、最も外側のレイヤーは無視されます。また、自動計算が設定されている複数のレイヤーをソートする場合、自動計算のあるすべての見出しレイヤーでソートする必要があります。

5. 「ソート基準」領域で次の手順に従います:
 - a. 最初のドロップダウン・リストで、ソートの基準とする見出し、行、列を選択します。次に、「昇順」または「降順」からソート順を選択します。
 - b. オプション: 「ソート基準」領域で、次のように1つまたは2つの追加のソートを設定します。

- i. 追加のソートごとに、「次の基準」チェック・ボックスを選択します。
 - ii. 2番目または3番目、あるいはその両方のドロップダウン・リストで、ソートの基準にする見出し、行または列を選択します。
 - iii. 追加のソートごとに「昇順」または「降順」のソート順を選択します。
6. オプション: 追加のソートを設定するには:
 - a. 「ソートの追加」をクリックします。「ソート」ダイアログ・ボックスにタブが追加されます。
 - b. このタブで、上の手順3から5を繰り返して、ソートの設定を追加します。
7. オプション: ソートを削除するには:
 - a. 「ソートの削除」をクリックします。
 - b. ドロップダウン・リストで、削除するソートを選択します。
8. 「OK」をクリックします。

条件付きフォーマットについて

条件付きフォーマットを使用すると、特定のフォーマットをグリッド内のセルに適用できます。たとえば、current cell value = 0という選択条件を定義し、この条件に一致した場合にセル・フォントの色を青に変更するフォーマットを定義します。このセルに戻された値が0の場合、フォントの色が青に変わります。



注:

条件付きフォーマットは、他のすべてのフォーマットより優先され、グリッド、行または列、セルのレベルで事前に設定されていたフォーマットを置換します。たとえば、セルの色を変更する条件付きフォーマットを使用する場合に、小数点以下の桁数の標準フォーマットを維持するには、セルの色の変更と小数点以下の桁数の両方を条件付きフォーマットを使用して指定する必要があります。



注:

複数のセルを選択した場合は、選択したセル範囲の左上のセルのフォーマットがデフォルトとみなされます。

条件とフォーマットを定義したら、レポートに戻ります。

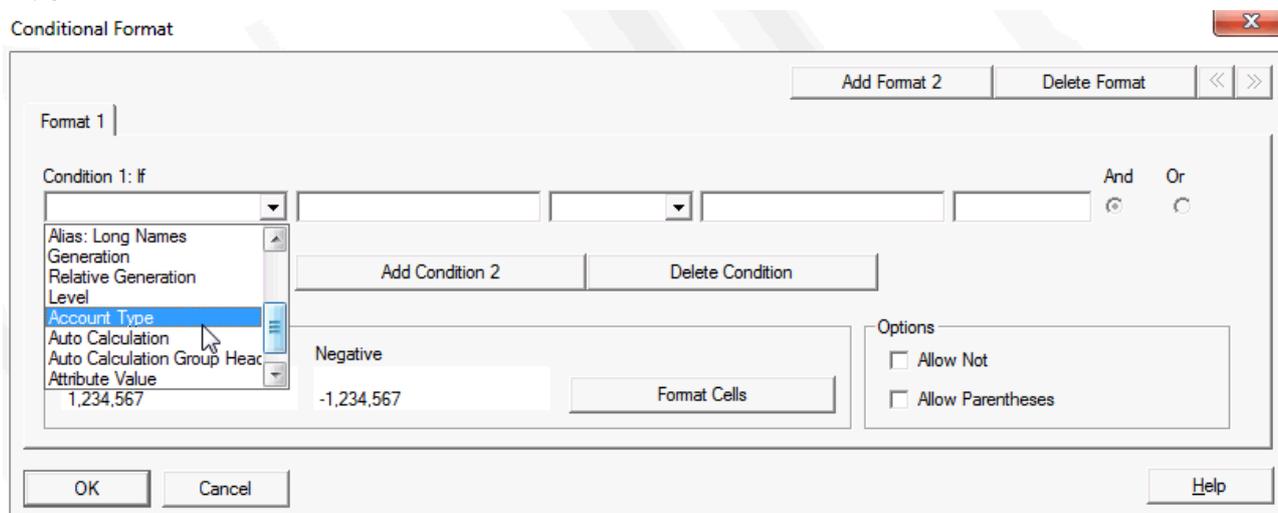
現在のグリッドが表示されます。条件付きフォーマットのあるセルは、色付きのダッシュ(下のセルD2を参照)が表示され、条件付きのフォーマットが適用されているセルであることを示します。

Grid1													
		A	B	C	D	E	F						
		Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec
1	100	#	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #
2	100	#	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #
3		= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #
4	Product	#	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #	= #

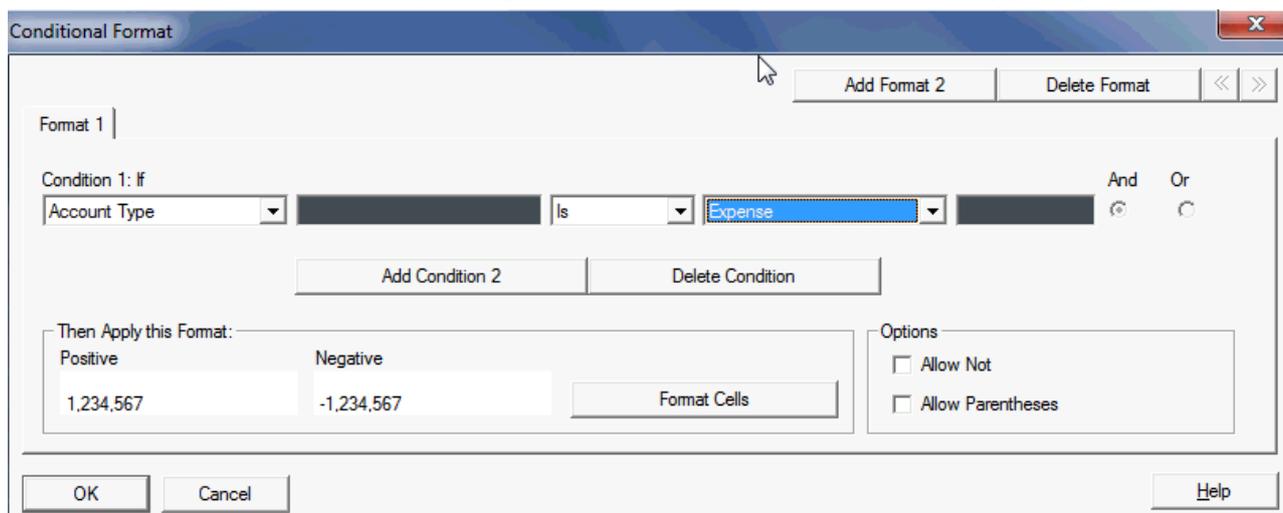
条件付きフォーマットを適用するとレポートを改善できます。たとえば、1000より大きいすべての値に下線を適用できます。また、より複雑な条件付きフォーマットを設定することもできます。たとえば、勘定科目の種別が費用の場合に、現在の値が1000より大きなセルに太字を適用できます。また、製品セルの値が1000より小さい場合に、セルの背景色を黄緑色に設定することもできます。このようなフォーマットは、次の例で示すように、追加の条件とフォーマットを指定することで設定できます：

任意のグリッド・オブジェクト・セルの関連コンテンツに条件付きフォーマットを指定できます。たとえば、Marketメンバー名がEastの場合はReportAにリンクし、MarketメンバーがWestの場合はReportBにリンクさせます。関連コンテンツ・リンクは、「セルのフォーマット」ダイアログで指定できます。[152ページのテキストの置換](#)を参照してください。

「条件付きフォーマット」ダイアログ・ボックスの「条件1: If」ドロップダウン・リスト・ボックスで「会計タイプ」を選択します。



次に、比較オプション・ドロップダウン・リスト・ボックスで「支出」を選択します。「セルのフォーマット」をクリックし、選択しているセルに太字のフォーマットを適用します。太字以外のフォント・プロパティはそのままにします。



次に、選択しているセルに2番目の条件を追加します。「条件2の追加」ボタンをクリックし、「条件2: If」文を「現在のセル値」に設定します。演算子の値を「>(次より大きい)」に、比較値を「数値」に設定します。次に示すように、数値を1000に設定します。



注:

「条件の削除」をクリックして、条件を削除します。

次に、「フォーマット2の追加」ボタンをクリックして別のフォーマットを追加します。次のように、3つの条件を設定することで、「コーラ」のセル値が1000より小さいときに背景色を黄緑に変更するように設定します。



注:

条件を結合するには「AND」を、区別するには「OR」を使用します。

条件を設定すると、「オプション」の「カッコを使用」チェック・ボックスを使用できるようになります。

次のシナリオでは、次の演算が行われます。

Condition 1 and Condition 3

or

Condition 2 and Condition 3

この例では、別名にデフォルトを使用し、「コーラ」というラベルが関連付けられたセルがあり、そのセルの値が1000より小さい場合、背景が黄緑色に設定されます。メンバー名に「コーラ」が含まれ、セルの値が1000より小さい場合、背景が黄緑色に設定されます。



注:

レポートのサイズによっては、条件付きフォーマットの使用がパフォーマンスに多大な影響を及ぼすことがあります。パフォーマンスは、使用される基準、および全セルへの適用など使用頻度によって変化します。これらの各要因またはその組合せがパフォーマンスに影響を及ぼす可能性があります。データ値の比較は、最も高速で実行できます。データ値、メンバー名、メンバーの別名や説明などの基準はメタデータまたはデータ問合せの一部であるため、高速で実行できます。世代、レベル、計勘定科目の種別、属性値などは、基準として使用することをできるかぎり回避することをお勧めします。これらの基準は、標準のメタデータまたはデータ問合せの一部ではないためパフォーマンスの低下の原因となります。

グリッドへの条件付きフォーマットの適用

条件付きフォーマットは、レポート・デザイナーでグリッドを使用して作業している場合に適用できます。まず、選択したセルに条件を設定します。次に、その条件に値が一致した場合に適用するフォーマットを指定します。

任意のグリッド・オブジェクト・セルの関連コンテンツに条件付きフォーマットを指定できます。たとえば、Marketメンバー名がEastの場合はReportAにリンクし、MarketメンバーがWestの場合はReportBにリンクさせます。関連コンテンツ・リンクは、「セルのフォーマット」ダイアログで指定できます。[152ページのテキストの置換](#)を参照してください。

▶ 条件付きフォーマットを適用するには:

1. レポートにグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. 条件付きフォーマットを適用するセルを選択します。
3. 「フォーマット」、「条件付きフォーマット」の順に選択します。

右クリックして、ショートカット・メニューから「条件付きフォーマット」を選択することもできます。

4. 「プロパティの選択」からプロパティを選択します。



注:

選択したプロパティによって、他のドロップダウン・リストで選択できるオプションが異なります。

次の表に、各条件付きフォーマット・プロパティと使用可能なデータ・ソースを示します。

プロパティ	使用できるデータ・ソース
セルの値	Essbase Planning Financial Management
行の値	Essbase Planning Financial Management
列の値	Essbase Planning Financial Management
現在のセルの値	Essbase Planning Financial Management
メンバー名	Essbase Planning Financial Management
配置	Essbase Financial Management Planning 「配置」プロパティを使用すると、複数のメンバーまたは1つのメンバー関数があるデータ・セグメントの最初または最後の行/列のフォーマットをデザイナーで設定できます。たとえば、複数メンバー行または列の一番上の行に条件を設定する場合、次の例のような条件になります。 条件1: If Position Within Row Is Top Row, then Format Cells = \$.
説明	Financial Management
別名	Essbase Planning
世代	Essbase Planning
相対的な世代	Essbase

プロパティ	使用できるデータ・ソース
	Planning
レベル	Essbase Planning
勘定科目の種別	Essbase Planning Financial Management
自動計算	Essbase Planning Financial Management
自動計算のグループ見出し	Essbase Planning Financial Management
属性値	Essbase
ライン・アイテムの詳細	Financial Management
サポート詳細	Planning
レベルの展開 — 行または列ディメンションのレベルの展開(ディメンションが何回展開されるか)に依存する条件を指定します。	Essbase Planning Financial Management

5. 参照値ドロップダウン・リスト・ボックスで、「プロパティの選択」ドロップダウン・リスト・ボックスで選択したプロパティ値に対応する値を選択します。

6. 演算子を選択します:

- = (等しい)
- <>(次より小さい、または次より大きい)
- > (次より大きい)
- < (次より小さい)
- > = (次と等しいか大きい)
- < = (次と等しいか小さい)
- 等しい(次と等しい)
- 等しくない(次と等しくない)
- 次で始まる
- 次で終わる
- 次を含む
- 次である



注:

先に選択したフォーマットの対象によって使用できる演算子が異なるので、これらの演算子がすべてリストに表示されるとは限りません。

7. 次の比較する値のオプションのいずれかを選択します。

- 数値 - セルに特定の値を割り当てます。
- セル値 - A, 3などセルの位置を戻します。
- 行値 - 行の番号を戻します。
- 列値 - 列の文字を戻します。
- ゼロ - 条件にゼロ値を割り当てます。
- データなし - 選択に対するデータ値がないことを示します。
- エラー - エラーとして条件を割り当てます。
- 文字列 - 条件の文字列を定義します。
- 0、1、2 - 選択されたディメンションのレベル数または世代数を示します。



注:

選択したプロパティによって、ドロップダウン・リストに表示されるオプションが異なります。

8. 条件を追加するには、「フォーマット2の追加」ボタンをクリックします。160ページのステップ 4から163ページのステップ 7を繰り返して条件を追加します。



注:

このボタンに表示される番号は、条件を追加するたびに増加します。最大値は7です。

9. 現在の条件と次の条件を結合するには「**And**」を選択し、区別するには「**Or**」を選択します。
10. 「セルのフォーマット」をクリックして、条件にフォーマットを割り当てます。詳細は、147ページのグリッドのフォーマットを参照してください。
11. 「条件付きフォーマット」ダイアログ・ボックスの「オプション」セクションにある「**NOTを使用**」チェック・ボックスおよび「**カッコを使用**」チェック・ボックスを使用すると、条件の論理を次のように設定できます。
- 「**NOTを使用**」を選択すると、条件を否定できます。
 - 「**カッコを使用**」を選択すると、計算の優先順位や条件を評価する順序を定義し、一連の条件を必要に応じて指定できます。
12. フォーマット1の条件を追加したら、次のいずれかのアクションを行います。
- レポートのグリッドに戻るには、「**OK**」をクリックします。
 - 選択内容に別のフォーマットを追加するには、「フォーマット2の追加」をクリックします。詳細は、164ページの条件付きフォーマットの追加を参照してください。

条件の削除

グリッド、セル、行または列に適用しない条件は削除できます。この機能を使用すると、フォーマット全体を削除せずに単一の条件のみを削除できます。フォーマットには最大7つの条件を含めることができます。フォーマットの削除の詳細は、[165ページの条件付きフォーマットの削除](#)を参照してください。

▶ 条件を削除するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、条件付きフォーマットを適用したグリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. 条件付きフォーマットを適用しているグリッド、1つ以上のセル、行または列を選択します。
3. 「フォーマット」、「条件付きフォーマット」の順に選択します。
4. 「条件付きフォーマット」ダイアログ・ボックスで、「フォーマットの削除」ボタンをクリックします。ドロップダウン・リストを使用して削除する条件を選択します。
5. 「OK」をクリックします。

条件付きフォーマットの追加

条件付きフォーマットを適用する場合、最大7つのフォーマットを指定できます。また、各フォーマットには、最大7つの条件を作成できます。

フォーマットを追加することで、異なる条件が満たされた場合に適用する複数のフォーマットを使用できます。1つまたは複数の条件にフォーマットを設定してから、そのセルに別のフォーマットを追加できます。

たとえば、選択されたセルに適用する行と列の数値の条件を含むフォーマットを作成します。次に、同じセルのテキストの色、網掛け、配置を指定するフォーマットを別に作成できます。

▶ フォーマットを追加するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. フォーマットするセルを選択します。
3. 「フォーマット」、「条件付きフォーマット」の順に選択して、「条件付きフォーマット」ダイアログ・ボックスにアクセスします。
4. [160ページのグリッドへの条件付きフォーマットの適用](#)の説明に従って、セルに条件を追加します。
5. 「フォーマット#の追加」をクリックします。ここで、#は、追加する次のフォーマットの番号です。
6. フォーマットに含める条件を指定します。
7. 条件およびフォーマットをさらに追加するには、[164ページのステップ 4](#)から [164ページのステップ 6](#)を必要に応じて繰り返します。
8. 完了したら、「OK」をクリックします。

条件付きフォーマットの順序の変更

複数のフォーマットを追加してから、選択しているセルでの条件の評価とフォーマットの適用が実行される順序を変更できます。たとえば、最初にゼロ値を含むセルに青いフォントを使用するフォーマットを指定したとします。2番目のフォーマットでは、セルの値に等しい列値、特定の値に等しい行値を指定しました。その後、選択しているセルに対して3番目のフォーマットを指定しました。

「条件付きフォーマット」ダイアログ・ボックスの右上隅にある矢印を使用すると、選択しているセルにフォーマットを適用する順序を変更できます。フォーマットは絶対的であるため、フォーマットの順序は重要です。最初のフォーマットで作成された条件が、他のフォーマットおよび条件より優先されます。

▶ 条件付きフォーマットの順序を変更するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. フォーマット適用の順序を変更するセルを選択します。
3. 「フォーマット」、「条件付きフォーマット」の順に選択します。
4. [164ページの条件付きフォーマットの追加](#)の説明に従って、3つのフォーマットを追加します。
5. 順序を変更するフォーマットのタブを選択します。
6. 次のいずれかを行います。

- フォーマット済のタブを左に移動するには、「左へ移動」ボタン  をクリックします。

- フォーマット済のタブを右に移動するには、「右へ移動」ボタン  をクリックします。

7. 「OK」をクリックしてグリッドに戻ります。

条件付きフォーマットの削除

使用しなくなった条件を含むフォーマットは削除できます。たとえば、6つの条件を含むフォーマットを削除すると、フォーマットに含まれている6つの条件がすべて削除されます。

▶ フォーマットを削除するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. 条件付きフォーマットを設定している数値を含むセルを選択します。



注:

条件付きフォーマットを設定しているセルは、色付きのバーで示されます。

3. 「フォーマット」、「条件付きフォーマット」の順にクリックします。
4. 「フォーマットの削除」をクリックします。ドロップダウン・リストから、削除するフォーマットの番号を選択します。
5. 「OK」をクリックしてグリッドに戻ります。

行の高さと列の幅の変更

グリッドの行の高さと列の幅は変更できます。変更は、グリッド全体に適用することも、特定の行または列に適用することもできます。

▶ 行の高さや列の幅を変更するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. フォーマットする行または列を選択します。
3. 次のいずれかのアクションを行います:

- 行の高さを指定するには、行を選択し、「行プロパティ」プロパティ・シートの「行の高さ」フィールドに値を入力します。



ヒント:

矢印ボタンをクリックして値を増減することもできます。

- 列の幅を指定するには、列を選択し、「列プロパティ」プロパティ・シートの「列の幅」フィールドに値を入力します。



ヒント:

グリッド内で行または列のハンドルを目的のサイズになるまでドラッグすることもできます。行または列を縮小しすぎて表示不可能になると、ポインタが点線になります。この場合、行または列が表示されるまでハンドルをドラッグしてください。

複数のセルのマージ

グリッドの複数のセルを1つのセルにマージできます。たとえば、複数のセルを組み合わせ、1つのデータ・セル、テキスト・セルまたは式のセルを作成できます。セルをマージすると、マージ後のセルにはマージ前に左上にあったセルの値とフォーマットが配置されます。マージしたセルを個別のセルに分割すると、分割したすべてのセルにマージ時のセルのフォーマットが継承されます。



注:

テキストは、グリッドのセル内で自動的に折り返されます。PDFレポートのワークスペース内での印刷プレビュー時には、長いテキストのあるセルは、その右側のセルが空白の場合、自動的に右側にあるセルにマージされます。HTMLレポートのプレビュー時には、テキスト・セルの自動マージは行われません。列の幅を広げるとともに、マージ機能を使用して、テキストの表示領域を拡大する必要があります(行の高さは、テキスト全体が表示されるように自動的に調整されます)。

▶ セルをマージするには:

1. グリッドを含むレポートを開きます。
2. マージするセルを選択します。
3. 選択しているセルを右クリックし、「マージ」を選択します。



ヒント:

配置やフォント選択の変更など、マージされたセルのフォーマットを変更するには、「フォーマット」、「セル」の順に選択します。

▶ マージしたセルを個別のセルに分割するには:

1. グリッドを含むレポートを開きます。
2. マージされたセルを選択します。
3. 選択しているセルを右クリックし、「マージ」を選択します。分割されたすべてのセルが、マージ時のセルのフォーマットを継承します。

条件付き抑制

サブトピック

- [条件付き抑制の動作](#)
- [条件付き抑制の基本オプションの使用](#)
- [条件付き抑制の詳細設定オプションの使用方法](#)
- [条件付き抑制の削除](#)

行、列、またはグリッドを抑制するには、次のいずれかまたは両方を行います。

- 基本オプションを使用して、If Zero、If Missing、およびIf Errorに基づいて行、列またはグリッドを抑制します。手順は、[169ページの条件付き抑制の基本オプションの使用](#)を参照してください。
- 詳細設定オプションを使用して、様々な属性に基いて、行、列またはグリッドを抑制します。たとえば、行に100より小さい値のセルがある場合にその行全体を抑制するように指定できます。このタイプの条件付き抑制の詳細は、[169ページの条件付き抑制の詳細設定オプションの使用方法](#)を参照してください。

条件付き抑制の動作

条件付き抑制は次のように動作します。

- 行全体または列全体が、条件付き抑制に指定した条件を満たした場合に、その行または列全体が非表示になります。行または列の一部のセルのみが条件付き抑制の条件を満たしても、行や列は非表示にはなりません。
- 抑制されたデータは、計算に含まれません。たとえば、行23と行24を抑制した場合に、行10から行30までを合計しても、行23と行24の値はこの合計に含まれません。



注:

抑制を評価する場合、非表示にした行および列の値および計算を含むか、無視するかを選択できます。このオプションは、行や列の「常に非表示」チェック・ボックスが選択されている場合にのみ使用可能です。このオプションの詳細は、[155ページの非表示の行や列での抑制の評価の制御](#)を参照してください。選択した設定にかかわらず、条件付き抑制に詳細設定オプションを使用してセルを特別に参照している場合は非表示のセルに基いて抑制を評価できます。

- 特別に参照されていない行または列の抑制の評価時には、非表示のセルは無視されます。レポートは、使用されている条件に基いて出力されます。次に、非表示の列のあるレポートの例を示します。

		A	(Hidden B Column)	C
		East	West	South
1	Cola	Missing	Missing	Missing
2	Root Beer	Missing	61	Missing
3	Diet	61	Missing	Missing

前述のレポート・デザインは、条件付き抑制の3つのシナリオを説明するために使用されています。



注:

これらの例では、列Bが手動で非表示にされ、行1、2、3には条件付き抑制が設定されています。

最初の例は、欠落データを基準に抑制するかどうかを指定したときの結果を示しています。条件が非表示の列または非表示の列内の特定のセルを参照していないため、非表示の列は無視されます。

Suppress Row If: Data Values in Current Row = No Data

	East	South
Diet	61	Missing

次の例は、非表示の列Bのデータ・セルに基づいて抑制するかどうかを指定したときの結果を示しています。条件で非表示になっている列Bを指定しており、セルB2にデータがあるため、Root Beer行は抑制されません。

Suppress Row If: Data Values in Column B = No Data

	East	South
Root Beer	Missing	Missing
Diet	61	Missing

- 条件付き抑制を属性を基準に使用した場合、他のデータ行または列の抑制ステータスに基づいて式の行または列を抑制できます。他の行または列の抑制ステータスに基づいてテキスト行または列を抑制できます。



注:

式の行や列の値に基づいて、データの行や列を抑制することはできません。

次の表に、他の抑制されたデータ、式またはテキストの行や列を参照する場合に、抑制が有効であるかどうかを示します。

抑制する行や列のタイプ	行や列のタイプに基づく抑制		
データ	式	テキスト	
データ	使用可能	使用不可	使用不可
式	使用可能	使用不可	使用不可

抑制する行や列のタイプ	行や列のタイプに基づく抑制		
データ	式	テキスト	
テキスト	使用可能	使用可能	使用不可

条件付き抑制の基本オプションの使用

基本的な条件付き抑制を使用すると、If Zero、If Missing、Is Errorに基づいて行または列にあるデータを抑制できます。基本的な条件付き抑制は、抑制の詳細設定オプションと組み合わせて使用できます。[169ページの条件付き抑制の詳細設定オプションの使用方法](#)を参照してください。

▶ データを抑制するには:

1. レポート・デザイナーでグリッドを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. 抑制を適用するグリッド、行、または列を選択します。
3. 「行のプロパティ」または「列のプロパティ」シートで、「基本オプション」ボタンをクリックします。



注:

グリッドを選択した場合は、「グリッドのプロパティ」プロパティ・シートの「抑制」カテゴリを最初に選択します。

4. 次の1つ以上のオプションを選択します。
 - 「ゼロの場合に抑制」を選択すると、すべてのセルの値がゼロである行または列を非表示にします。
 - 「欠落の場合に抑制」を選択すると、すべてのセルが空欄である行または列を非表示にします。
 - 「エラーの場合に抑制」を選択すると、エラーによりデータの取得または計算ができない行または列を非表示にします。
5. オプション: 非表示にできない行または列内の#ZERO、#MISSINGまたは#ERRORの値を置換するには、次の1つ以上のアクションを行います。



注:

グリッドを選択して、「グリッドのプロパティ」シートの「抑制」カテゴリを選択している必要があります。

- セル内のゼロ(#ZERO)値を置換するには、「ゼロ値」テキスト・ボックスに値を入力します。
 - セル内の欠落データ(#MISSING)を置換するには、「データなし」テキスト・ボックスに値を入力します。
 - セル内のエラー・データ(#ERROR)を置換するには、「エラー」テキスト・ボックスに値を入力します。
6. すべてのオプションを選択し、カスタマイズされた抑制の基準を指定するには、「詳細設定オプション」を選択します。

条件付き抑制の詳細設定オプションの使用

詳細設定オプションを使用すると、特定の属性または値に基づいてグリッド内の行または列を抑制できます。条件付き抑制は、単純にすることも、複雑にすることもできます。また、最大7つの条件を含めることができます。条件付き抑

制の詳細設定は、基本抑制オプションと組み合わせて使用できます。169ページの条件付き抑制の基本オプションの使用を参照してください。

条件の定義時に、Not演算子を使用すると条件に一致しない(falseを戻す)行または列を抑制できます。また、他の条件と区別するには、カッコで囲みます。条件付き抑制は、データ値または式の値に基づいて実行される場合もあります。

▶ 条件付き抑制を設定するには:

1. レポートを作成するか、グリッドを含む既存のレポートを開きます。
2. 抑制を設定する行、列、またはグリッドを選択します。
3. プロパティシートで、「詳細設定オプション」、「設定」ボタンの順にクリックすると、「条件付き抑制」ダイアログボックスが表示されます。



注:

グリッドを選択した場合は、まず、「グリッドのプロパティ」プロパティシートで「抑制」カテゴリを選択します。

「条件付き抑制」の抑制オプションの上部に「基本オプション」ラベルが表示されます。基本オプションでは、次のようにOR演算子が使用されます。

- 基本オプション: なし - 基本オプションは、詳細設定オプションと併用するようには選択されていません。
 - ゼロの場合は抑制または - ゼロの場合に詳細設定オプションと併用されます。
 - ゼロまたは欠落の場合は抑制または - 値がゼロの場合または欠落の場合に詳細設定オプションと併用されます。
 - ゼロまたはエラーの場合は抑制または - 値がゼロの場合またはエラーの場合に詳細設定オプションと併用されます。
 - ゼロ、欠落またはエラーの場合は抑制または - 値がゼロ、欠落、またはエラーの場合に詳細設定オプションと併用されます。
 - 欠落の場合は抑制または - 欠落の場合に詳細設定オプションと併用されます。
 - 欠落またはエラーの場合は抑制または - 欠落またはエラーの場合に詳細設定オプションと併用されます。
 - エラーの場合は抑制または - エラーの場合に詳細設定オプションと併用されます。
4. 「行を抑制する条件」または「列を抑制する条件」で、プロパティを選択します。

選択したプロパティによって、式のドロップダウン・リストで使用できるオプションが異なります。次の表に、各プロパティと、そのデフォルトの参照、演算子、および比較値を示します。デフォルト値は、自動的に表示され、変更することもできます。

プロパティ	使用できるデータソース
行のデータ値	Essbase Financial Management Planning
列のデータ値	Essbase Financial Management

プロパティ	使用できるデータ・ソース
	Planning
現在の行のデータ値	Essbase Financial Management Planning
メンバー名	Essbase Financial Management Planning
説明	Financial Management
別名 - デフォルト	Essbase Planning
世代	Essbase Planning
レベル	Essbase Planning
勘定科目の種別	Essbase Financial Management Planning
自動計算	Essbase Financial Management Planning
ライン・アイテムの詳細	Financial Management
属性値	Essbase
サポート詳細	Planning

5. 参照値ドロップダウン・リスト・ボックスで、「行/列を抑制する条件」ドロップダウン・リスト・ボックスで選択したプロパティの値に対応する値を選択します。
6. 必要に応じて、次の演算子のいずれかを選択します。



注:

選択したプロパティによって、使用できる演算子が異なります。

- <>(次より小さい、または次より大きい)
- > (次より大きい)
- > = (次と等しいか大きい)
- < (次より小さい)
- < = (次と等しいか小さい)
- 等しくない(次と等しくない)

- ・ 次で始まる
- ・ 次で終わる
- ・ 次を含む
- ・ 次である

7. 必要に応じて、次の比較オプションのいずれかを選択します。



注:

選択したプロパティによって、使用できる比較オプションが異なります。

- ・ **数値** - セルに特定の値を割り当てます。
- ・ **セル値** - A, 3など、セルの位置を戻します。
- ・ **行値** - 行の番号を戻します。
- ・ **列値** - 列の文字を戻します。
- ・ **ゼロ** - 条件にゼロ値を割り当てます。
- ・ **データなし** - 選択に対するデータ値がないことを示します。
- ・ **エラー** - エラーとして条件を割り当てます。
- ・ **文字列** - 条件の文字列を定義します。
- ・ **1, 2, 3...** - 選択したディメンションのレベルまたは世代の数を示します。
- ・ **支出外** - 支出外として条件を割り当てます。
- ・ **支出** - 支出として条件を割り当てます。
- ・ **TRUE** - 条件にTrue値を割り当てます。

8. 別の条件を追加するには、「**条件2の追加**」ボタンをクリックします。



注:

このボタンに表示される番号は、条件を追加するたびに増加します。最大値は7です。

9. 現在の条件を後続の条件と組み合わせるには、次の演算子のいずれかを選択します。

- ・ 両方の条件が一致する必要がある場合は、「**And**」を選択します。
- ・ 組み合わせた条件のいずれかが一致する必要がある場合は、「**Or**」を選択します。

10. オプション:「**オプション**」領域で、次のいずれかの論理オプションを条件に追加できます。

- ・ 「**NOTを使用**」を選択すると、条件が満たされない場合にのみ抑制されます。
- ・ 「**カッコを使用**」を選択すると、計算の優先順位や条件を評価する順序を定義し、一連の条件を必要に応じて指定できます。

11. 別の条件を追加するには、「**条件3の追加**」ボタンをクリックします。

12. 「**OK**」をクリックすると、レポート内のグリッドに戻ります。

条件付き抑制の削除

使用しない条件付き抑制は削除できます。この機能を使用すると、最大7つの条件を1つずつ削除できます。

▶ 条件付き抑制を削除するには:

1. 条件付き抑制を設定したグリッドを含むレポートを開きます。
2. 条件付き抑制が適用されている行、列またはグリッドを選択します。プロパティ・シートの「詳細設定オプション」ボタンを選択します。
3. そのプロパティ・シートで、「設定」をクリックすると、「条件付き抑制」ダイアログ・ボックスが表示されます。



注:

グリッドを選択した場合は、「グリッドのプロパティ」プロパティ・シートの「抑制」カテゴリを最初を選択します。

4. 「条件付き抑制」ダイアログ・ボックスで、「条件の削除」をクリックします。ドロップダウン・リストで削除する条件をクリックします。別の条件を削除するには、この手順を繰り返します。
5. 「OK」をクリックします。

イメージのフォーマット

レポート内に表示されたイメージをフォーマットできます。たとえば、イメージを配置してから、そのイメージを拡大縮小したり、イメージの前に改ページを挿入したり、イメージの横方向および縦方向の配置を指定したりできます。

▶ レポート内のイメージをフォーマットするには:

1. レポートを開き、フォーマットするイメージを選択します。
2. レポート・デザイナのワークスペースのイメージの枠線に合わせてイメージを拡大または縮小するには、「イメージのプロパティ」プロパティ・シートの「パネルに合わせる」を選択します。
3. オプション: 印刷時のイメージの横方向の位置を設定するには、「横方向」ドロップダウン・リスト・ボックスで次のいずれかを行います。
 - 印刷時のイメージを左側にあるオブジェクトに対して相対的な位置に配置するには、「相対」を選択します。
 - 印刷時のイメージをレポートの左端に配置するには、「左」を選択します。
 - 印刷時のイメージをレポートの中央に配置するには、「中央」を選択します。
 - 印刷時のイメージをレポートの右端に配置するには、「右」を選択します。
 - 左側にあるレポート・オブジェクトのサイズの変化にかかわらず、印刷時のイメージを現在の位置に配置するには、「なし」を選択します。
4. オプション: 印刷時のイメージの縦方向の位置を設定するには、「縦方向」ドロップダウン・リスト・ボックスで次のいずれかを行います。
 - 印刷時のイメージを上オブジェクトに相対的な位置に配置するには、「相対」を選択します。
 - 印刷時のイメージをレポートの一番上に配置するには、「上」を選択します。
 - 印刷時のイメージをレポートの中央に配置するには、「中央」を選択します。
 - 印刷時のイメージをレポートの一番下に配置するには、「下」を選択します。
 - 印刷時のイメージを、上にあるオブジェクトのサイズの変化にかかわらず現在の位置に配置するには、「なし」を選択します。
5. 印刷時のイメージを次のページの先頭に配置するには、「前に改ページ」チェック・ボックスを選択します。
6. イメージを移動するには、イメージをクリックしてすべての枠線をアクティブにし、別の場所にドラッグします。



注:

イメージの枠線をクリックしてドラッグすると、イメージが縦方向または横方向に引き伸ばされます。必ずイメージ全体をクリックしてドラッグしてください。

ページ設定の変更

レポートの印刷方法または表示方法を制御するページ設定を変更できます。用紙サイズ、用紙の向き、見出し表示の設定、レポートのデフォルトの幅および長さを変更したり、作業領域にカスタム・サイズを作成したりできます。また、セル・ドキュメントに連続したページ番号を印刷するか、ドキュメントごとのページ設定を印刷するかも指定できます。

▶ ページ設定を変更するには:

1. レポートを開き、「ファイル」、「ページ設定」の順に選択します。
2. 「ページ」タブを選択します。
3. 「レター」、「リーガル」、「元帳」、「A4」または「A3」を選択し、用紙サイズを指定します。
4. セル・ドキュメントの添付を使用可能なレポートを印刷する場合、添付ファイルのページ番号は、レポートのページ番号を反映するように付け直すことができます。たとえば、9ページのレポートに5ページのWord文書が添付されている場合、出力されるWord文書のページ番号を10から15ページとなるように付けなおすことができます。セル・ドキュメントに連続したページ番号を印刷するには、「連続したページ番号」を選択します。セル・ドキュメントごとに指定されているページ番号を印刷するには、「連続したページ番号」の選択を解除します。

セル・ドキュメントの詳細は、[126ページのレポートへのセル・ドキュメントの添付](#)を参照してください。

5. 「縦長」または「横長」を選択して、向きを設定します。
6. レポートの行見出しと列見出しの表示は、次のように設定します。
 - a. レポートの各ページに行見出しを表示するには、「各ページに行見出しを表示」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスの選択を解除すると、行見出しは、レポートの最初のページにのみ、1回表示されます。
 - b. レポートの各ページに列見出しを表示するには、「各ページに列見出しを表示」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスの選択を解除すると、列見出しは、レポートの最初のページにのみ、1回表示されます。



注:

デフォルトでは、各ページに行見出しと列見出しが印刷されます。

7. オプション: 次のオプションを使用すると、レポートの長さまたは幅を1ページに収めることができます。
 - レポートの幅を調整して1ページに収めるには、「ページ幅に合わせる」チェック・ボックスを選択します。この設定を解除すると、デザイン・モードで指定されている元のサイズに維持されます。
 - レポートの長さを調整して1ページに収めるには、「ページ長に合わせる」チェック・ボックスを選択します。この設定を解除すると、デザイン・モードで指定されている元のサイズに維持されます。



注:

「ページ幅に合わせる」を選択した場合、列に改ページは挿入できません。「ページ長に合わせる」を選択した場合、行に改ページは挿入できません。

8. 「マージン」タブを選択し、マージンのテキスト・ボックスに値を入力します。上下左右のマージンの値を設定できます。マージンを調整するには、次のいずれかの方法を使用できます。
- 上下の矢印ボタンを使用して、レポートのマージンを1/100インチ単位で調節します。
 - レポートのマージン設定をインチ単位で入力します。



注:

「マージン」タブには、指定したマージンを示すレポートのプレビューが表示されます。

9. オプション: 「ワークスペース・サイズ」タブを選択し、「カスタム・ワークスペース・サイズを使用」チェック・ボックスを選択すると、「ページ」タブで指定した用紙サイズとは異なるサイズのワークスペースを指定できます。ワークスペース・サイズを指定するには、次のいずれかの方法を使用できます。
- 上下の矢印ボタンを使用して、レポートのワークスペースのサイズを1/100インチ単位で調節します。
 - ワークスペースの幅と高さをインチ単位で入力します。



注:

幅と高さは、どちらも20インチを超えることはできません。

10. 「ページ設定」オプションの変更が終了したら、「OK」をクリックします。

10

関数の使用方法

この項の内容:

算術関数	177
テキスト関数	199
条件関数	246
財務関数	250

算術関数

サブトピック

- 算術関数
- Abs
- Average
- AverageA
- CountA
- Count
- Difference
- Eval
- Max
- Min
- Mod
- PercentOfTotal
- Pi
- Product
- Random
- Round
- Sqrt
- Sum
- Truncate / Trunc

算術関数

サブトピック

- 算術関数の引数
- 式での算術演算子の使用
- 式での算術オペランドの使用
- 計算の順序

算術関数は、グリッドの数値またはデータで計算を実行します。算術関数、式、構文では、大文字と小文字は区別されません。

算術関数の構文は、次のとおりです:

FunctionName(arguments)

ここで:

FunctionNameは、算術関数の名前です。

argumentsは、数値、または行、列、セルの参照、あるいは埋め込まれた関数です。

算術関数の引数

サブトピック

- [数値引数](#)
- [行、列、セルの参照引数](#)
- [集約プロパティ引数](#)
- [参照プロパティ引数](#)
- [引数への関数の埋込み](#)

数値引数

数値引数の構文は次のとおりです:

(numeral1, numeral2, ... numeraln)

この場合、数値1からnは、小数および負数を含む任意の数字です。たとえば、Average(10, 20, 30)は、値20を戻します。

行、列、セルの参照引数

行、列またはセルの引数の構文は次のとおりです:

FunctionName(GridName.GridElement[segment(range)].Property)

表18 引数のコンポーネント

引数	説明
GridName	(オプション)グリッドの名前。 たとえば、Difference (grid1.row[5], grid2.row[5])は、グリッド1の行とグリッド2の行の差を戻します。 GridNameを指定しない場合、デフォルトは式を挿入した現在のグリッドになります。
GridElement	(オプション)キーワードrow, col, columnまたはcellのいずれかです。

引数	説明
	<p>たとえば、<code>Max(row[1], row[2], row[3])</code>は、これらの3行の最大値を返します。(キーワード<code>row</code>、<code>column</code>、<code>col</code>はオプションです。)</p> <p>行および列のセグメントIDを指定する必要があります。たとえば、<code>cell[2, A]</code>は、行2と列Aの交差であるセルを参照します。</p> <p>キーワード<code>cell</code>は、オプションです。たとえば、<code>[5, B]</code>は、行5と列Bの交差であるセルを参照します。セルの参照には、<code>[row, col]</code>構文または<code>[col, row]</code>構文を使用できます。</p> <p><code>GridElement</code>が指定されている場合、文字は列を、数字は行を示します。たとえば、<code>Max([1,A], [2,A], [3,A])</code>という構文が使用できます。</p>
segment	<p>(必須)グリッド内の行、列またはセルの参照番号。展開される行または列に対しては、セグメントを指定する必要があります。たとえば、<code>row[2]</code>は、行セグメント2を指します。セグメントは、角カッコ<code>[]</code>で囲んで示します。</p>
range	<p>(オプション)指定されたセグメントから展開される行、列またはセル。<code>range</code>が指定されている場合は、指定された範囲のみを使用して式が計算されます。たとえば、<code>row[2(3:5)]</code>では、展開されたセグメント2の3番目から5番目までの行のみが使用されます。<code>range</code>が指定されていない場合、展開されるセルのすべてが使用されます。</p> <p>注:</p> <p>セグメントが1行または1列のみの場合は、<code>range</code>引数を使用しないでください。</p>
property	<p>(オプション)キーワード<code>average</code>、<code>averageA</code>、<code>count</code>、<code>countA</code>、<code>max</code>、<code>min</code>、<code>product</code>または<code>sum</code>のいずれかです。プロパティは、指定済みの展開される行、列またはセルを集約するために使用されます。</p> <p>参照が引数の場合にはプロパティを指定しないでください。プロパティを指定しないと、関数による参照の計算が最適な方法で実行されます。たとえば、次の式は、行1と行2にあるセルの平均を返します。</p> <p><code>Average(row[1], row[2])</code></p> <p>一方、次の式は、最初に<code>row[1]</code>の平均を計算してから<code>row[2]</code>の平均を計算し、次にこれらの2つの値を足して2で割ります。</p> <p><code>Average(row[1].average, row[2].average)</code></p> <p>関数の引数として使用されていない行、列またはセル参照のデフォルトのプロパティは、<code>sum</code>プロパティです。たとえば、次の式のデフォルトのプロパティは<code>sum</code>です。</p> <p><code>row[2]</code>。</p> <p>180ページの集約プロパティ引数および 181ページの参照プロパティ引数を参照してください。</p>

segmentのみが参照の必須コンポーネントなので、次の参照は同じになります。

```
Grid1.row[1].sum
```

[1]

AverageAとCountAの計算には、#missingおよび#errorのセルも含まれます。たとえば、行1が、Qtr1 = 100、Qtr2 = 200、Qtr3 = #missing、Qtr4 = 400と展開するセグメント行の場合、次の関数は4という結果を返します。

```
row[1].CountA
```

これ以外のすべての関数は、#missingデータまたは#errorセルを計算から除外します。たとえば、前述のQtr1 = 100、Qtr2 = 200、Qtr3 = #missing、Qtr4 = 400と展開する行1で、次の例は3という結果を返します。

```
row[1].Count
```

集約プロパティ引数

集約行、集約列、集約セルは、それぞれ複数の行、列、セルを含んでいます。集約プロパティ引数は、次の算術関数の構文の最後にある引数です。

```
FunctionName(GridName.Gridelement[segment(range)].  
property)
```

集約プロパティは、行、列またはセルの参照に適用します。集計プロパティには次が含まれます：

- [185ページのAverage](#)
- [186ページのAverageA](#)
- [188ページのCount](#)
- [187ページのCountA](#)
- [191ページのMax](#)
- [192ページのMin](#)
- [194ページのProduct](#)
- [197ページのSum](#)

算術関数引数として使用される場合は、プロパティのデフォルトはその関数と同じになります。次の例では、デフォルトのプロパティはAverageです。

```
Average(row[2])
```

算術関数引数として使用されない場合は、プロパティのデフォルトはsumになります。次の例では、デフォルトのプロパティは集約行のsumです。

```
row[2]
```

参照プロパティ引数

参照プロパティ引数は、式の参照結果の処理方法を指定します。この引数は、他のプロパティとともに使用します。

参照プロパティ引数には、IfNonNumber/IFFNがあります。

IfNonNumberは、#Missing値および#Error値のかわりに使用する特定の数値を指定します。

構文は、次のとおりです。

```
AXIS[
  segment
  (
    range
  )].IfNonNumber(
  arg
  ).
AggregateProperty
```

表19 引数のコンポーネント

引数	説明
AXIS	(オプション) row、columnまたはcellのキーワード。
Segment(range)	行番号または列の文字などの軸の参照。
IfNonNumber	AxisRef内でのデータがない場合やエラーの場合の処理方法。
(arg)	AxisRef内での欠落データやエラー・データのかわりに使用する数値。
AggregateProperty	(オプション)集約セグメントで使用される集約関数。180ページの集約プロパティ引数を参照してください。

次に例を示します。

cell[1,A] = 3およびcell[1,B] = #Missingの場合、

次の式は#Errorを戻します。

```
cell[1,A] / cell[1,B]
```

次の式は、cell[1,B]を1に置換し、3を戻します。

```
cell[1,A] / cell[1,B].ifNonnumber(1)
```



注:

グリッドの#Missingや#Errorを抑制している場合にグリッドの行や列にIfNonNumberプロパティを含む式がある場合は、#Missingや#Errorは抑制されたままになります。



注:

Financial Managementデータベース接続を使用しているときに JConsoleのMissingValuesAreZeroInFormulas (formerly MissingValuesAreZeroInFormulasInHFM) オプションが(1)に設定されている場合、#Missing値は、IfNonNumberプロパティの設定にかかわらず0になります。ただし、このファイルでの設定が0の場合は、前述のようにIfNonNumberプロパティによる置換を行います。(JConsoleの詳細は、Oracle Hyperion Financial Reporting管理者ガイドのプロパティ情報に関する項を参照してください。

引数への関数の埋込み

関数の引数に、関数を埋め込むことができます。次の例では、Average関数がSum関数に埋め込まれています。

```
sum(row[3:5], avg(row[4:6], 40, 50), row[7; 9], 70, 80)
```

- 行セグメント3、4、5
- 行セグメント4、5、6と、数値40と50の平均
- 行セグメント7と9
- 数値70と80

式での算術演算子の使用

演算子は、演算タスクや比較を実行するための記号です。また、列、行、セルなどの範囲を参照する場合があります。データ行やデータ列で計算を実行する式に演算子を使用します。

表20 標準的な式の演算子

タイプ	演算子	説明	例
算術	+	加算	行4と行5の値を加算します。[4] + [5] 加算の演算子(+)の後ろにはスペースが必要です。 <ul style="list-style-type: none"> • 誤: 5+4 • 正: 5 + 4 • 正: 5+ -4
算術	-	減算	行4の値から3を減算します。[4]- 3。減算の演算子(-)の後ろにはスペースが必要です。 <ul style="list-style-type: none"> • 誤: 5-4 • 正: 5 - 4 • 正: 5 - -4
算術	*	乗算	行4の絶対値を150で乗算します。 Abs([4])* 150
算術	/	除算	行4の値を行5の値で除算します。

タイプ	演算子	説明	例
			[4] / [5]
算術	%	パーセンテージ	行4の値を加算してそれに10を乗算します。 row[4].Sum*10%
算術	^	指数	行4の値を6乗します。 [4]^6
算術	小数点	10進数	行4の値を5.67で乗算します。 [4] * 5.67
参照	[]	グリッド内の行、列またはセルを指定します。行には番号、列には文字を使用します。	行4と行12の値を加算します。 Sum ([4],[12])
単項マイナス	-	値の符号を逆転します。	列4の値を12で除算した結果の符号を変更します。 (/[4] / 12)



ヒント:

Eval関数を使用すると、関数パラメータの一部として算術演算を実行できます。[190ページのEval](#)を参照してください。



ヒント:

式に複数の演算子がある場合、通常の優先順位に従って演算が実行されます。[184ページの計算の順序](#)を参照してください。

式での算術オペランドの使用

オペランドは、演算子が計算に使用する値を指定します。

表21 Financial Reportingでサポートされているオペランド

オペランド	例
リテラル	3, 0.0, 27.5, 65.334, -841
行や列の参照番号	[1], [4], [8], [A], [C:D]
セルの参照番号	[2, E], [E, 2] 注: この参照は、行2、列Eのセルを指します。

オペランド	例
関数	Average, Min, Max
範囲	Grid1.row[3]

次の行の式では、行3の値に100を乗算しています。行の参照[3]と100は、いずれもオペランドです。

```
[3] * 100
```

計算の順序

式に複数の演算子がある場合、計算の順序は、通常の計算順序と同じです。

次に、複数の演算子を含む式が計算される順序を示します。

1. 単項マイナス(-#)。#は、任意の数値です。



注:

単項マイナスの演算子(-)の後ろには、スペースを追加しないでください。

2. 乗算(*)と除算(/)
3. 減算(-#)と加算(+#)。#は、任意の数値です。



注:

減算と加算の演算子(+と-)の後ろには、必ずスペースを追加します。

たとえば、行10の値が8とすると、次の式は、通常の順序どおり計算されて、 $3 * 4 + 8 = 20$ になり、列の値20を戻します。

```
[10] + 3 * 4
```

Abs

Absは、数値、行、列、またはセルの絶対値を戻す算術関数です。数値の絶対値は、負の符号のない数値です。正数が正数のまま維持される一方、負数は正数に変化します。

構文:

Abs(argument)

ここで、argumentは、次のいずれかです:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Abs(-20)</code> は、値20を返します。 数値には、小数と負数も使用できます。 178ページの数値引数 を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> です。 178ページの行、列、セルの参照引数 を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数 を参照してください。

例:

値30を返します。

```
Abs(-30)
```

行1の値の絶対値を返します。

```
Abs(row[1])
```

列Eの合計の絶対値を計算します。

```
Abs(column[E].sum)
```

グリッド1のデザイン・セグメント3の展開された行1-3を示します。

```
Abs(Grid1.row[3(1:3)])
```

Average

`Average`は、数値、行、列またはセルの集合の平均を返す算術関数です。`Average`では、平均を求めるときに `#Missing` および `#Error` のセルは除外されます。



注:

欠落値は、その値が抑制されるかどうかにかかわらず計算には含まれません。

構文:

`Average(arguments)`

または

Avg(arguments)

ここで、argumentsは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Average(10, 20, 30)は、値20を返します。 数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。たとえば、Avg(Grid1.row[4(3:5)])は、グリッド1、行セグメント4、3から5までの範囲の平均値を返します。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Propertyです。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。

例:

値20を返します。

```
Avg(10, 30, 20)
```

3つの集約行に含まれるすべての数値の平均を返します。

```
Average(row[1], row[6], row[8])
```

3つの集約列E、G、Iの平均値を求めます。(まず、各列の平均値を求め、その3つの値を平均します。)

```
Avg(column[E]avg, column[G]avg, column[I].avg)
```

現在のグリッドのEとグリッド2のEの2つの列の平均を計算します。(この計算には、すべての展開される列が含まれます。)

```
Avg(column[E], grid2column[E])
```

集約行3の平均値を求め、その値を100で割ります。

```
Avg(row[3])/100
```

AverageA

AverageAは、数値、行、列またはセルの集合の平均を返す算術関数です。AverageAの計算には、#Missingおよび#Errorのセルも含まれます。これらのセルは、平均を求める際にゼロ値として処理されます。



注:

#Missingのセルと#Errorのセルは、抑制されていない行または列にある場合にのみ、計算に含まれます。

構文:

AverageA(arguments)

または

AvgA(arguments)

ここで、argumentsは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、AverageA(10, 20, 30)は、値20を返します。 数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Propertyです。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。 たとえば、AvgA(Grid1.row[4(3:5)])は、グリッド1、行セグメント4、3から5までの範囲の平均値を返します。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。

例:

グリッドに値10、20、30、および#errorのある4つの行がある場合、5行目の次の式は値15を返します。

```
AverageA([1:4])
```

CountA

CountAは、数値、行、列またはセルの集合内の値の個数を返す算術関数です。個数の取得時には、CountAでは、抑制されていない行または列の#Missingセルおよび#Errorセル内の値のみの個数を返します。

構文:

CountA(arguments)

ここで、argumentsは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、CountA(10, 20, 30, 50)は、値4を返します。 数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、CountA(GridName.GridElement[segment(range)].property)です。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。

例:

グリッドに値10、20、30、および#errorのある4つの行がある場合、5行目の次の式はこれらの4行にある値の個数を返します。

```
CountA([1:4])
```

4つの行にある値の個数を返します。

```
CountA(row[1], row[6], row[8] row[where data yields  
#error  
])
```

Count

Countは、数値、行、列またはセルの集合にある値の個数を返す算術関数です。Countでは、個数の取得時に#Missing値および#Error値は除外されます。

構文:

Count(arguments)

ここで、argumentsは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Count(10, 20, 30)は、値3を返します。 数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Propertyです。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。算術関数の一覧については、 177ページの算術関数を参照してください。

例:

3つの行1、6および8にある値の個数を戻します。

```
Count(row[1], row[6], row[8])
```

3つの列にある値の個数を戻します。

```
Count(column[E], column[G], column[I])
```

異なるグリッドにある2つの列の値の個数を計算します。

```
Count(grid1.column[E], grid2.column[E])
```

行4と列Dが交差するセルにある値の個数を計算します。

```
Count(cell[D,4])
```

グリッド5の集約行3にある値の個数を計算します。

```
Count(grid5.row[3])
```

Difference

Differenceは、数値、行または列から別の数値、行または列を減算した差異の絶対値を戻す算術関数です。この関数は、Varianceとも呼ばれます。

構文:

```
Difference(arg1, arg2)
```

ここで、arg2はarg1から減算され、次の1つまたは複数の値になります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Difference(3,5)は、絶対値2を戻します。 数値には、小数と負数も使用できます。 178ページの数値引数 を参照してください。
行、列または参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Propertyです。 178ページの行、列、セルの参照引数 を参照してください。 次の例は、グリッド1の行とグリッド2の行の差を戻します。

引数	説明
	Difference(grid1.row[1], grid2.row[6])
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数 を参照してください。



注:

Differenceは、arg1からarg2を差し引いた値の絶対値を返します。引数のマイナス符号は、負数を示します。

例:

絶対値8を返します。

```
Difference(3, -5)
```

2つの集約列の差を計算します。

```
Difference(column[E], column[G])
```

異なるグリッドにある2つの列、グリッド1およびグリッド2の差を計算します。

```
Difference(grid1.column[E], grid2.column[E])
```



注:

テキスト・ラベルには、"Difference"と"Variance"のいずれでも入力できます。

Eval

Evalは、式を評価する算術関数です。Evalを埋込み関数の引数として使用して1つの式に複数の式を結合できます。

構文:

```
Eval(expression)
```

ここで、expressionは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。

引数	説明
	数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列または参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> です。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。
演算子	サポートされている算術演算子(+、-、*、/、^、%)。

例:

行1を行2で割り、そのデータを4桁に丸めます。

```
Round(Eval([1]/[2]),4)
```

Max

Maxは、数値、行、列またはセルの集合内の最大値を戻す算術関数です。

構文:

Max(arguments)

ここで、argumentsは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Max(10, 20, 30)は、値30を戻します。 数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> です。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。

例:

行1、行6および行8の最大値を戻します。

```
Max(row[1], row[6], row[8])
```

集約行の合計の最大値を計算します。

```
Max(row[1].sum, row[2].sum, row[3].sum)
```

Min

Minは、数値、行、列またはセルの集合の最小値を戻す算術関数です。

構文:

Min(arguments)

ここで、argumentsは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Min(10, 20, 30)は、値10を戻します。 数値には、小数と負数も使用できます。 178ページの数値引数 を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Propertyです。 178ページの行、列、セルの参照引数 を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数 を参照してください。

例:

行1、行6および行8の最小値を戻します。

```
Min (row[1], row[6], row[8])
```

集約行の合計の最小値を計算します。

```
Min(row[1].sum, row[2].sum, row[3].sum)
```

Mod

Modは、除算した余り(モジュラス)を戻す算術関数です。

構文:

Mod(arg1, arg2)

ここで、arg2は除数で、arg1およびarg2は次のいずれかの値です。

引数	説明
数値	数値。たとえば、Mod(6, 4)は、値2を返します。 数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Propertyです。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。

例:

10を5で割った余り0を返します。

```
Mod(10, 5)=0
```

PercentOfTotal

PercentOfTotalは、ある数値、行、列またはセルを、別の数値、行、列またはセルで割った値に100を掛けた値を返す算術関数です。

構文:

PercentOfTotal (arg1, arg2)

ここで:

- arg1は、現在高(arg2)のコンポーネントで、通常は行または列を参照します。
- arg2は、arg1に対する現在高で、通常は総計を含むセル参照です。
- arg1は、arg2で除算され、その結果に100が掛けられます。Arg1およびarg2は、次の1つまたは複数の値になります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、PercentofTotal(100, 20)は、値500を返します。 数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Propertyです。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。

例:

値5パーセントを戻します。

`PercentofTotal(20,400)`

列Aの各セルの値をセルA5の「市場合計」の値で割り、100を掛けた結果PercentOfTotalを列Bに示します。

```
PercentOfTotal ([A],[A,5])
```

次の表に、前述の例を使用したPercentOfTotalの結果を列Bに示します。

		A	B
1		販売	合計(%)
2	Mkt1	60	20%
3	Mkt2	120	40%
4	Mkt3	120	40%
5	市場合計	300	100%



ヒント:

列Bのヘッダーをクリックし、式バーを使用して式を挿入します。

Pi

Piは、算術定数3.14159265358979を15桁で戻す算術関数です。Piは、円周の直径に対する比率です。

構文:

`PI()`

例:

行3を、Piと2の積で割った値を戻します。

```
row[3] / (PI()* 2)
```

Product

Productは、すべての数値または参照の積を戻す算術関数です。

構文:

`Product(arguments)`

ここで、argumentsは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Product(2, 20)</code> は、値40を返します。 数値には、小数と負数も使用できます。 178ページの数値引数 を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code> です。 178ページの行、列、セルの参照引数 を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数 を参照してください。

例:

40を返します:

```
Product(2, 20)
```

Random

Randomは、0.0と1.0の間の乱数を返す算術関数です。

構文:

```
Random()
```

例:

0.0と1.0の間の乱数を返し、それに1000を掛けます:

```
Random() * 1000
```

Round

Roundは、指定された桁数で数値を切り上げまたは切り下げる算術関数です。

構文:

```
Round (arg1, integer)
```

ここで、arg1は次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Round(81.3987, 3)</code> は、値81.399を戻します。 数値には、小数と負数も使用できます。178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code> です。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。

`Integer`は、数値を丸める桁数を指定します。

- `integer`がゼロより大きい場合、小数点以下の指定した桁数に丸められます。
- `integer`がゼロの場合は、最も近い整数に丸められます。
- `integer`がゼロより小さい場合は、小数点より左側の桁数に丸められます。

例:

小数点以下3桁に丸められます:

```
Round(3594.5567, 3)=3594.557
```

最も近い整数に丸められます:

```
Round(3594.5567, 0)=3595
```

1000の桁に丸められます(スケールとも呼ばれます):

```
Round(3594.5567, -3)=4000
```

Sqrt

`Sqrt`は、数値、行、列またはセルの平方根を戻す算術関数です。

構文:

`Sqrt(argument)`

ここで、`argument`は、次のいずれかです:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Sqrt(100)</code> は、値10を戻します。

引数	説明
	数値には、小数と負数も使用できます。 178ページの数値引数 を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code> です。 178ページの行、列、セルの参照引数 を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数 を参照してください。

例:

値4を戻します。

```
Sqrt(16)
```

Sum

Sumは、数値、または行、列、セルにある値の和を戻す算術関数です。

構文:

Sum(arguments)

ここで、argumentsは次の1つまたは複数の値です:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Sum(10, 20, 30)は、値60を戻します。 数値には、小数と負数も使用できます。 178ページの数値引数 を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code> です。 178ページの行、列、セルの参照引数 を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数 を参照してください。

例:

値30を戻します。

```
sum(10, 20)
```

3つの行の和を戻します。

```
sum(row[1],row[6],row[8])
```

3つの集約列の和を計算します。

```
sum(column[E], column[G], column[I])
```

異なるグリッドにある2つの列の和を計算します。

```
sum(grid1.col[E],grid2.colmn[E])
```

Truncate / Trunc

Truncateは、指定した桁で数値を除去する算術関数です。

構文:

Trunc(arg1, integer)

ここで、arg1は、次のいずれかです:

引数	説明
数値	数値。たとえば、234.567。 178ページの数値引数を参照してください。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。 参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code> です。 178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。
関数	埋込み関数。 177ページの算術関数を参照してください。

Integerは、除去する桁数を指定します。

- 正のintegerは、小数点の右側の桁数を決定します。
- integerにゼロ(0)を指定すると、小数点の左側にある整数を戻します。
- 負のintegerは、小数点の左側の桁数を示します。

例:

次の文では、正の整数2を指定しています。小数点以下2桁で除去されます。

```
Trunc(234.567, 2) = 234.56
```

次の文ではゼロ(0)を整数値として指定しています。小数点以下の数字はすべて除去されます。

```
Trunc(234.567, 0) = 234
```

次の文では、負の整数-2を指定しています。小数点以下と、整数の2桁まで除去されます。

```
Trunc(234.567, -2) = 200
```



注:

セル、列または行に事前に適用されているフォーマットは、Trunc関数を使用した場合でも維持されます。たとえば、事前に小数点以下3桁まで表示するようにフォーマットされているセルでTrunc関数を使用すると、 $\text{Trunc}(234.567, 0) = 234.000$ のようになります。

テキスト関数

サブトピック

- [テキスト関数](#)
- [Annotation](#)
- [CalcStatus](#)
- [CellText](#)
- [Date](#)
- [DataSource](#)
- [DPDescription](#)
- [DPJustification](#)
- [DPNotesAndAttachments](#)
- [Footnote](#)
- [GetCell](#)
- [GetHeading](#)
- [GridDimension](#)
- [HFMCurrency](#)
- [ListOfCellDocuments](#)
- [MemberAlias](#)
- [MemberDescription](#)
- [MemberName](#)
- [MemberProperty](#)
- [MemberQualifiedName](#)
- [Page](#)
- [PageCount](#)
- [PlanningAnnotations](#)
- [注釈の区切りの指定](#)
- [ProcessManagementStatus](#)
- [ReportAuthor](#)
- [ReportCreated](#)
- [ReportDesc](#)
- [ReportFolder](#)
- [ReportModified](#)
- [ReportModifiedBy](#)

- [ReportName](#)
- [ReportRunBy](#)
- [RetrieveValue](#)

テキスト関数

サブトピック

- [テキスト関数に関する考慮事項](#)
- [テキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)
- [意思決定パッケージ情報を取得するためのテキスト関数の使用](#)

テキスト関数は、レポート名やレポートの説明などのレポート情報を戻します。テキスト関数は、グリッド内またはテキスト・オブジェクト内で使用します。

テキスト関数に関する考慮事項

- テキスト関数はカッコで囲みます。

```
<<TextFunction (arguments)>>
```

- 引数と引数の間にはスペースを挿入できます。
- 数値引数以外のすべての引数は引用符で囲まれます。

たとえば、<<MemberName("Grid1", NYC, New York)>>という関数内にあるNYC, New Yorkというパラメータは、<<MemberName("Grid1", "NYC, New York")>>とする必要があります。

- 日付のフォーマットに関連する引数は、大文字と小文字が区別されます。
- グリッドでテキスト関数を適用するには、テキスト行や列、または見出しセルを作成してから、テキスト関数を挿入します。

テキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用

currentキーワードを特定のテキスト関数で使用すると、重複が少なく、より動的で役立つ式を作成できます。currentキーワードは、テキスト関数内で要求されたパラメータを置換します。ハードコードされたパラメータでも同じ結果を得られますが、currentキーワードでは動的な値が結果として戻されます。たとえば、currentを複数ページのグリッドにあるPageパラメータで使用すると、ページごとに該当する値を生成できます。

currentまたはcurのいずれの形式もcurrentキーワードとして使用できます。Currentキーワードでは、大文字と小文字は区別されません。



注:

currentキーワードは、次のテキスト関数を使用している場合のみ、テキスト・オブジェクトでサポートされます: MemberName、MemberAliasおよびMemberDescription。currentはページ・ディメンション・パラメータを指定します。ただし、グリッド名、行および列が定義されている必要があります(該当する場合)、currentキーワードは使用できません。

例1:

GetCell関数では、パラメータの多くは、関数が挿入されている現在のセルに対して相対的である可能性があります。このため、currentキーワードがこの関数に適用できます。GetCell関数の構文は、次のとおりです。

```
<<GetCell ("GridName", Row, Column, Page)>>
```

次の例では、GetCellのパラメータがハード・コードされています。そのため、複数のページに関数を挿入しても、同じグリッド1、セル1A、ページ1にあるセルの値が戻されます:

```
<<GetCell ("Grid1", 1, A, 1)>>
```

次に示す例では、GetCell関数でcurrentキーワードを使用しています。関数が挿入されているセルには、ページごとに異なる値が表示されます。currentキーワードが、グリッド名にも適用されていることに注意してください。グリッド名が変わっても、テキスト式は適正なまま維持されます。

```
<<GetCell ("current", 1, current, current)>>
```

例2

展開されるセルでcurrentキーワードを使用すると、展開されたセルに基づいた値が戻されます。

次の例では、展開されるセルでGetCell関数が使用されています(列Aが、列「第1四半期」、「第2四半期」、「第3四半期」に、行1が行「東部」と行「西部」に展開します)。テキスト行1では、Columnパラメータとしてcurrentキーワードが、テキスト行2では、Columnパラメータにハードコードされた値が使用されています。

名前	説明
	第1四半期、第2四半期、第3四半期
East, West	#
テキスト行1	<<GetCell(cur, 1, cur, cur)>>
テキスト行2	<<GetCell(current, 1, A, 1)>>

次の表に結果を示します。

名前	第1四半期	第2四半期	第3四半期
East	5,120	4,502	7,304
West	3,405	2,300	4,462
テキスト行1	5,120	4,502	7,304
テキスト行2	5,120	5,120	5,120

- テキスト行1では、currentキーワードを列パラメータで使用しています。このキーワードは、展開される各セル(第1四半期、第2四半期、第3四半期)の現在の列で更新を実行します。また、currentキーワードがページ・パラメータで使用されているので、テキスト行1の値は、グリッドの現在のページに相当するページで更新されます。
- テキスト行2では、列パラメータ(A)にハードコードされた値を使用しています。この結果、すべての四半期に対して同じ値5,120が戻されます。列パラメータでのハードコードされた参照は、列値と行値の両方に一番左上の値を戻します。

表22 Currentキーワードをサポートするテキスト関数

テキスト関数	例
<p data-bbox="161 383 756 416"><<DataSource("GridName.Axis[ID]", InfoType)>></p> <p data-bbox="145 479 264 512">パラメータ:</p> <ul data-bbox="145 546 703 618" style="list-style-type: none"> • GridName: すべてのセルでサポートされています。 • InfoType: 適用なし。 	<p data-bbox="788 344 1362 416"><<DataSource(current, "App")>></p> <p data-bbox="772 479 1139 577">注: 現在のグリッド名が使用されます。</p>
<p data-bbox="161 719 667 752"><<GetCell("GridName", Row, Col, Page)>></p> <p data-bbox="145 815 264 848">パラメータ:</p> <ul data-bbox="145 882 703 1043" style="list-style-type: none"> • GridName: すべてのセルでサポートされています。 • Row: すべてのセルでサポート • Col: すべてのセルでサポート • Page: すべてのセルでサポート 	<p data-bbox="788 680 1378 752"><<GetCell(cur, 1, cur, current)>></p> <p data-bbox="788 860 1347 931"><<GetCell(cur, 1(3), cur, current)>></p> <p data-bbox="772 994 1299 1093">注: 行1の3番目の(展開された)行の値を表示します。</p> <p data-bbox="788 1160 1378 1232"><<GetCell(cur, cur, A, current)>></p> <p data-bbox="788 1339 1331 1411"><<GetCell(cur, cur, A(B), current)>></p> <p data-bbox="772 1473 1299 1572">注: 列Aの2番目の(展開された)列の値を表示します。</p>
<p data-bbox="145 1592 667 1626">データ行または列の見出しでは、次を使用します:</p> <p data-bbox="161 1727 512 1760"><<MemberName("DimName")>></p> <p data-bbox="145 1823 699 1856">データ以外の行や列の見出しでは、次を使用します:</p>	<p data-bbox="1059 1626 1394 1659"><<MemberName(current)>></p> <p data-bbox="788 1805 1267 1912"><<MemberName("current", Row/Col/Page, "current")>></p>

テキスト関数	例
<pre><<MemberName("GridName", Row/Col/ Page, "DimName")>></pre> <p>該当する場合は、次のパラメータを使用します。DimName: 見出しセルのみ</p>	<p>注:</p> <p>見出しセルがあるディメンションに相当するデータ行、列、またはページのメンバー名を戻します。このパラメータは、<<MemberDimension>>関数で、グリッドのカスタム見出しを作成するために使用できます。</p>
<p>データ行または列の見出しでは、次を使用します: Essbaseの場合:</p> <pre><<MemberAlias("DimName")>></pre> <p>Financial Managementの場合:</p> <p>注:</p> <p>次の構文は、Oracle Fusion General Ledger製品では使用できません。</p> <pre><<MemberDescription("DimName")>></pre> <pre><<MemberDesc("DimName")>></pre> <p>データ以外の行や列の見出しでは、次を使用します:</p> <pre><<MemberAlias("GridName", Row/Col/ Page, "DimName")>></pre> <p>該当する場合は、次のパラメータを使用します。DimName: 見出しセルのみ</p>	<pre><<MemberAlias(cur)>></pre> <pre><<MemberDescription(current)>></pre> <pre><<MemberDesc(cur)>></pre> <pre><<MemberAlias("current", Row/Col/Page , "current")>></pre> <p>注:</p> <p>見出しセルがあるディメンションに相当するデータ行、列、またはページの説明(HFM)または別名(Essbase)を戻します。このパラメータは、<<MemberName>>関数で、テキスト・ボックス・オブジェクト内のカスタマイズされたテキスト、グリッドのカスタム見出しを作成するために使用できます。</p>
<pre><<CalcStatus("GridName", Row, Col, Page)>></pre>	<pre><<CellText("GridName", Row, Column, Page)>></pre>

テキスト関数	例
<p>注:</p> <p>currentキーワードを使用できるパラメータは太字でハイライトされます。</p>	<pre><<CellText("GridName", Row, Column, Page, MemberOverride)>></pre>
<pre><<GridDimension("GridName", "Axis", index)>></pre>	<pre><<MemberAlias("DimName")>></pre>
<pre><<HFMCurrency("GridName", Row, Col, Page)>></pre>	<pre><<MemberAlias(" GridName ", " DimName ")>> <<MemberAlias(" GridName ", Row Col Page , " DimName ")>></pre>
<p>注:</p> <p>currentキーワードを使用できるパラメータは太字でハイライトされます。</p>	<pre><<MemberDesc(" DimName ")>></pre>
	<pre><<MemberDesc(" GridName ", " DimName ")>></pre>
	<pre><<MemberDesc(" GridName ", Row Col Page , " ")>></pre>

テキスト関数	例
	<pre>DimName ">></pre>
	<pre><<MemberName(" DimName ">></pre>
	<pre><<MemberName(" GridName ", " DimName ">></pre>
	<pre><<MemberName(" GridName ", Row Col Page , " DimName ">></pre>
	<pre><<MemberQualifiedName(" DimName ">></pre>
	<pre><<MemberQualifiedName(" GridName ", " DimName ">></pre>
	<pre><<MemberQualifiedName(" GridName ", Row Col Page , "</pre>

テキスト関数	例
	<pre data-bbox="1066 248 1166 315">DimName ")>></pre> <pre data-bbox="1066 427 1305 533"><<MemberProperty(DimensionName , Property)>></pre> <pre data-bbox="1066 645 1321 824"><<MemberProperty(" GridName ", DimensionName , Property)>></pre> <pre data-bbox="1066 936 1321 1189"><<MemberProperty(" GridName ", Row Col Page , DimensionName , Property)>></pre> <p data-bbox="778 1261 1393 1391">注: 次の値は、Oracle Fusion General Ledgerでは使用できません。</p> <pre data-bbox="1066 1462 1393 1798"><<PlanningAnnotations(" GridName ", Row , Column , Page , Attributes)>></pre> <pre data-bbox="1066 1910 1393 1973"><<PlanningAnnotations(" GridName</pre>

テキスト関数	例
	<pre> ", Row , Column , Page , Attributes, Range)>> </pre>
<pre> <<ProcessManagementStatus(" GridName ", Row , Column , Page)>> </pre> <p>注:</p> <p>currentキーワードを使用できるパラメータは太字でハイライトされます。</p>	
<pre> <<ListOfCellDocuments(" GridName ", Information)>> </pre> <p>注:</p> <p>currentキーワードを使用できるパラメータは太字でハイライトされます。</p>	
<pre> <<GridDimension("GridName", "Axis", Index)>> </pre> <p>パラメータ:</p> <ul style="list-style-type: none"> • GridName: すべてのセルでサポートされています。 • Axis: 見出しセルのみ • Index: 見出しセルのみ 	<pre> <<GridDimension(cur, "Page", 1)>> </pre> <pre> <<GridDimension(cur, cur, cur)>> </pre>

テキスト関数	例
	<p>注:</p> <p>見出しセルに対応するディメンション名が表示されます。</p>
<pre><<GetHeading("GridName", Page, Ref, Offset)>></pre>	<pre><<GetHeading(cur, cur, A, " - ")>></pre>
<pre><<GetHeading("GridName", Page, Ref, "Delim")>></pre>	<pre><<GetHeading(cur, cur, 1, " - ")>></pre>
<p>パラメータ:</p> <ul style="list-style-type: none"> • GridName: すべてのセルでサポートされています。 • Page: すべてのセルでサポート • Ref: すべてのセルでサポートされているが、見出しセルでは使用できない* • Offset: 見出しセルのみ • Delim: 適用なし 	<p>注:</p> <p>上の例では、現在のページの列Aと行1のすべての見出しが表示されます。</p> <pre><<GetHeading(cur, cur, A, cur)>></pre> <p>注:</p> <p>式を含む見出しセルの位置に対応するディメンションの列Aの見出しが表示されます。</p> <pre><<GetHeading(cur, cur, cur, " - ")>></pre> <p>注:</p> <p>行のテキスト・セルで使用した場合、現在の列にあるすべての見出しが「-」で区切られて戻されます。この結果を使用すると、手動で改ページを実行した場合に、列見出しを繰り返すことができます。</p>
<p>*参照パラメータでのcurrentキーワードの使用には制限があります。GetHeading関数がカスタム見出しとして行また列に挿入されている場合には、currentキーワードは使用できません。これは、循環参照が生成されるためです。currentキーワードは、グリッドの見出し領域にないテキスト行またはテキスト列の一部であるセル内の3番目のパラメータとして使用できます。たとえば、行3がテキスト行であるセルA3で式<<GetHeading(cur, cur, cur, 1)>>を追加すると、列Aの最初の見出しが戻されます。GetHeading関数は、見出しセル内で使用できます。しかし、referenceパラメータにはcurrentキーワードは使用できません。たとえば、列Bの見出しセル内に<<GetHeading(cur, cur, A, cur)>>を入力すると、列Aの見出しが戻されます。</p>	

意思決定パッケージ情報を取得するためのテキスト関数の使用

Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting意思決定パッケージは、財務情報と、特定のアクションまたは提案済ポリシーのサポートされている理由を連結します。意思決定パッケージは、資金調達の要求を、その理由を示す説明とサポート情報とともに表し、確認および承認プロセスを通じて送信可能です。たとえば、治安の向上が自治体の意思決定パッケージとなり、その意思パッケージには消防署や警察署が定義する予算要求が含まれるというような例が考えられます。予算要求は、意思決定パッケージを実現するためのライン・アイテムのコストや合計金額を表します。

意思決定パッケージは、Planningのアプリケーション・レベルで、プランニング・ユニット階層(シナリオ、エンティティおよびバージョン・メンバーの組合せ)に対して作成されます。各意思決定パッケージは複数の予算要求を作成できます。意思決定パッケージ・レベルまたは予算要求レベルで説明、理由や、ノートおよび添付ファイルを取得できます。

次のテキスト関数をFinancial Reporting Studioで使用することで、財務レポートに使用する説明、理由や、ノートおよび添付ファイルなどの意思決定パッケージ情報を取得できます。適用可能な場合は、テキスト・ボックス、グリッドのテキスト行、列またはセル、もしくはカスタム見出しに次の関数を挿入できます。

- [220ページのDPDescription](#)
- [221ページのDPJustification](#)
- [222ページのDPNotesAndAttachments](#)

これらの関数は、PlanningでBSOキューブまたはASOキューブのいずれかから意思決定パッケージ情報を取得するために使用できます。BSOキューブとは異なり、ASOキューブでは意思決定パッケージ・アイテムはディメンションとして使用できます。ユーザーがASOキューブを使用してFinancial Reporting Studioでレポートを設計する際、意思決定パッケージ・アイテムはグリッド行、列、ページまたはユーザーのPOVで使用するディメンションとして使用できます。



注:

Financial Reportingブックへの意思決定パッケージの追加の詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reportingユーザー・ガイド*のFinancial Reportingブックへの意思決定パッケージ・レポートの追加に関する項を参照してください。意思決定パッケージの詳細は、*Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgetingユーザー・ガイド*を参照してください。

Annotation

Annotationは、グリッド・オブジェクト内の注釈について要求された情報を戻します。どの情報を戻すかを定義できます。

構文:

```
<<Annotation("GridName", 行, 列, ページ, 属性, 参照, 添付ファイル)>>
```

```
<<Annotation("GridName", 行, 列, ページ)>>
```

<<Annotation("GridName", 行, 列, ページ, 属性, 参照)>>

<<Annotation("GridName", 行, 列, ページ, 属性, 添付ファイル)>>

<Annotation("GridName", AllRows, AllCols, ページ, 属性, 添付ファイル)>>

ここで:

- GridNameは、注釈のあるグリッドの名前です。グリッドのテキスト・セルまたはカスタム見出しに属性が使用されている場合、currentキーワードの使用がサポートされています。
- 行は、グリッド上の行番号です。グリッドのテキスト・セルまたはカスタム見出しに属性が使用されている場合、currentキーワードの使用がサポートされています。



注:

すべての行を選択するには、rowをキーワードAllRowsで置き換えます。

- 列は、グリッドの列の参照(文字)です。グリッドのテキスト・セルまたはカスタム見出しに属性が使用されている場合、currentキーワードの使用がサポートされています。



注:

すべての列を選択するには、ColをキーワードAllColsで置き換えます。

- ページは、グリッドのすべてのページ・ディメンションのメンバーの組合せのインデックスを表す数値です。グリッド内の最初のページ・ディメンションにおける組合せのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションにおける組合せのインデックスは2、以降、同様に続きます。
- 属性は、注釈から戻す情報を指定します。キーワード**All** (デフォルト値)またはキーワード**Title & Description & Author & Date & Category**のいずれか、またはその組合せを取ります。属性のキーワードの出力順序は自由に設定できます。各属性は、アンパサンド(&)で区切る必要があります。
- 参照は、どの注釈を戻すかを示す次のキーワードです。
 - All (デフォルト)は、最初の注釈とすべての結果を戻します。
 - Top <n>は、最初の注釈と最初の<n>個の結果を戻します。
 - Bottom <n>は、最初の注釈と最後の<n>個の結果を戻します。最初の注釈は常に表示されるので、個数<n>には、最初の注釈は含まれません。
 - BottomOnly <n>は、最後の<n>個の結果を戻します。最初の注釈は、<n>が4以下の場合に表示されますが、<n>が5以上の場合には表示されません。
 - Firstは、最初の注釈のみを戻します。
 - Repliesは、すべての結果を戻します。最初の注釈は表示されません。
- 添付ファイルは、ブール(true/false)値です。この値は、注釈に関連付けられた添付ファイルをレポートとともに印刷するかどうかを次のように示します。
 - Trueの場合は、レポートの最後に添付ファイルを印刷します。
 - Falseの場合は、添付ファイルを印刷しません。

例:

```
<<Annotation("Grid1", cur, A, cur, All, All, true)>>  
  
<<Annotation("Grid1", cur, A, cur, Title & Description & Author & Date & Category, Top  
10, true)>>  
  
<<Annotation("Grid10", 284, AB, cur, Title & Description & Date & Category, Bottom 10,  
false)>>  
  
<<Annotation("Grid1", cur, A, cur, Title & Description & Author, BottomOnly 4,  
false)>>  
  
<<Annotation("Grid Name", 1, A, 1, All)>>  
  
<<Annotation("Grid Name", "AllRows", "AllCols", 1, All)>>  
  
<<Annotation("Grid Name", 1, A, 1, All, First)>>  
  
<<Annotation("Grid Name", 1, cur, cur, All, Replies)>>  
  
<<Annotation("Grid Name", 1, cur, cur)>>  
  
<<Annotation("Grid Name", 1, cur, cur, Desc, Replies)>>  
  
<<Annotation(cur, cur, A, cur, Desc)>>  
  
<<Annotation(cur, 3, ABC, cur, title & Desc, true)>>  
  
<<Annotation("folder1\folder2\Grid2", 3, A, cur, Title & Description, true)>>  
  
<<Annotation("current", 294, AB, cur, Title & Description, Top 19)>>  
  
<<Annotation(current, 39, AB, cur, Title & Description & Author, Bottom 40)>>
```

CalcStatus

CalcStatusは、Financial Managementデータベース接続でセルの算出ステータスを戻すテキスト関数です。CalcStatusは、レポート・ヘッダー、行および列で使用できます。

構文:

```
<<CalcStatus("GridName", Row, Col, Page)>>
```

引数	説明
GridName	Financial Managementのグリッドの名前。この値は、引用符で囲まれている必要があります。
Row	グリッド内の行番号を表す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。
Col	グリッドの列IDを示す文字。最初の列IDがA、2番目の列IDがB、以降、順番に続きます。
Page	グリッドのページ・ディメンション・インデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションのインデックスは2、以降、同様に続きます。

Oracle Fusion Forecast Managementから次の算出ステータス値が戻されます。

- OK
- OK - データなし
- OK - システムの変更
- 計算のサブルーチンが必要
- 換算が必要
- 連結が必要
- 連結が必要 - データなし
- ロック済

例:

グリッド1のページ1の行21、列Bのセルの算出ステータスを表示します。

```
<<CalcStatus("Grid1", 21, B, 1)>>
```



注:

CalcStatusは、currentキーワードをサポートしています。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

CellText

サブトピック

- [AllRows/AllColsを使用したCellText](#)
- [MemberOverrideを使用したCellText](#)
- [LabeledCellText](#)

CellTextは、次のデータベース接続からテキスト・コンテンツを取得するテキスト関数です。

- Financial Managementのセル
- Planningのセルの注釈
- Essbaseセルのリンク・レポート・オブジェクト(LRO)

CellTextは、セル・ノートLROのみに適用されます。『[Oracle Essbaseデータベース管理者ガイド](#)』を参照してください。

行、列、およびページ引数で、グリッド内の、リンクされたテキストまたはノートを含む交差を示します。

構文:

```
<<CellText("GridName", Row, Column, Page)>>
```

CellTextは、グリッドにセルが存在しない場合に、グリッドの通常のPOVでメンバー選択を上書きすることもできます。

構文:

```
<<CellText("GridName", Row, Column, Page, MembeOverride)>>
```

詳細は、[214ページのMemberOverrideを使用したCellText](#)を参照してください。

引数	説明
GridName	グリッドの名前。この値は、引用符で囲まれている必要があります。
Row	グリッド内の行番号を表す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。
Column	グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。
Page	グリッドのページ・ディメンション・インデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションのインデックスは2、以降、同様に続きます。
MemberOverride	ディメンションの文字列で、CellText POVを上書きするために使用されるメンバー選択に対応します。 214ページのMemberOverrideを使用したCellText を参照してください。
AllRows/AllCols	すべての行または列の参照を許可するキーワードです。 214ページのAllRows/AllColsを使用したCellText を参照してください。



注:

行または列のパラメータが展開するセグメントを参照している場合は、一番左上の展開されたセルが使用されます。範囲の表記法を使用すると、任意の展開されるセルが参照できます。

例:

最初のページ・ディメンションにあり、グリッドの行21、列Bのセルにあるリンク・テキストのあるレポートを作成します。

```
<<CellText("mygrid", 21, B, 1)>>
```



ヒント:

実行時の行と列を表示するには、「表示」、「Webプレビューの行と列のヘッダー」の順に選択し、「Webプレビュー」をクリックして、レポートをプレビューします。



注:

CellTextは、テキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターなどではなくグリッド・セル内で使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

AllRows/AllColsを使用したCellText

表23 AllRows/AllColsを使用したCellTextの例

例	説明
<<CellText("Grid1", 3, AllCols, 1)>>	ページ1、行3にある任意の列のセル・テキストが含まれます。
<<CellText("Grid1", Curr, Allcols, 1)>>	ページ1の現在行("Curr")にある任意の列のセル・テキストが含まれます。
<<CellText("Grid1", Curr, Allcols, Curr)>>	現在のページの現在行("Curr")にある任意の列のセル・テキストが含まれます。
<<CellText("Grid1", AllRows, C, 1)>>	ページ1、列Cにある任意の行のセル・テキストが含まれます。
<<CellText("Grid1", AllRows, Allcols, 2)>>	ページ2にある任意のセルのセル・テキストが含まれます。任意のセルは、AllRows/AllColsが行と列の両方に指定されているため、任意の行/列を意味します。
<<CellText("Grid1", AllRows, Allcols, Curr)>>	現在のページにある任意のセルのセル・テキストが含まれます。

MemberOverrideを使用したCellText

MemberOverrideは、1つ以上のディメンションで構成されます。フォーマットは、次のとおりです。

DimensionName = MemberName, DimensionName = MemberName

ここで:

DimensionNameは、オーバーライドするディメンションの名前です。

MemberNameは、ディメンションのオーバーライドするメンバーの名前です。

次に、メンバーのオーバーライドを指定する場合のガイドラインを説明します。

- 複数のメンバーのオーバーライドを指定する場合は、次の例のように、各メンバーとディメンションを二重引用符(" ")で囲み、ディメンションとメンバーの対をカンマ(,)またはセミコロン(;)で区切ります。

```
"Entity"="Acme", "Period"="Q1"
```

- 1つのメンバーのオーバーライドを指定する場合、区切り文字は必要ありません。
- ディメンション名とメンバー名に; , = () < >などの文字が使用されている場合は、名前全体を二重引用符(" ")で囲みます。
- 1つのメンバーのオーバーライドで、パラメータを二重引用符(" ")で囲むこともできます。たとえば、次のメンバーをオーバーライドする文で使用するとCellTextが適切に評価されます。

```
"Scenario=Budget"
```

表24 MemberOverrideを使用したCellTextの例

例	説明
<<CellText(cur, cur, A, cur)>>	ディメンションのオーバーライドのない元の構文
<<CellText(cur, cur, A, cur, Scenario=Budget)>>	1つのディメンションをオーバーライドする新しい構文
<<CellText("Grid Name", 1, A, current, Value = "Entity Currency")>>	メンバー名を二重引用符で囲んで、1つのディメンションのオーバーライド
<<CellText("Grid Name", 1, A, cur, Value = Entity Currency)>>	スペースを含むメンバー名に二重引用符を使用しない
<<CellText("Grid Name", 1, A, cur, "Value=\$USD" = Entity Currency)>>	等号を含むディメンション名を二重引用符で囲む
<<CellText(Grid1, 1, cur, cur, Value = Entity Currency, Scenario=Actual)>>	カンマ区切りによる、2つのディメンションのオーバーライド
<<CellText(Grid1, 1, cur, cur, Value = Entity Currency; Scenario=Actual)>>	セミコロン区切りによる、2つのディメンションのオーバーライド
<<CellText("Current", 34, BB, cur, "Value"= Entity Currency, Scenario=Actual; Period = Qtr3)>>	カンマおよびセミコロン区切りによる、3つのディメンションのオーバーライド
<<CellText(cur, 1(3), A(B), cur, 300 = ABC , "Americas, Value=(in \$USD);" = "Entity Currency (USD)" , Scenario=Actual)>>	4つのディメンションのオーバーライド

LabeledCellText

LabeledCellTextは、Financial Managementデータベース接続からADMドライバを介してテキスト・コンテンツを取得します。

構文:

LabeledCellText("GridName", Row, Column, Page, "Label", [Attachments], [MemberOverride])

引数	説明
GridName	グリッドの名前。この値は、引用符で囲まれている必要があります。
Row	グリッド内の行番号を表す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。ALLROWSキーワードとCURキーワードがサポートされています。
ColumnまたはCol	グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。ALLCOLSキーワードとCURキーワードがサポートされています。
Page	グリッドのページ・ディメンション・インデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションのインデックスは2、以降、同様に続きます。
Label	目的のセル・テキスト(およびオプションで添付ファイル)に対応するFinancial Managementセル・ラベルを指定します。この値は、引用符で囲まれている必要があります。
Attachments	(オプション)セル・テキストに関連付けられた添付ファイルを取得するかどうかを示すtrue値またはfalse値。

引数	説明
MemberOverride	(オプション)アクティブなPOVをオーバーライドするディメンションとそれに対応するメンバー選択のカンマで区切られた文字列。 214ページのMemberOverrideを使用したCellText を参照してください。

例:

```
LabeledCellText("Grid1", CUR, A, 1, "MATURITYDATE")
```

```
LabeledCellText("Grid1", 3, CUR, 1, "RATING", TRUE)
```

```
LabeledCellText("Grid1", 3, CUR, 1, "RATING", TRUE, Year=Quarter1)
```

Date

Dateは、オンライン・レポートにデータが挿入された日付と時刻、またはスナップショット・レポートが保存された日付と時刻を戻すテキスト関数です。これらの日付と時刻は、レポート・サーバーから取得され、レポート・サーバーがある国の日付と時刻に対応します。Dateは、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用できます。

構文:

```
<<Date("format", "TimeZoneId")>>
```

引数	説明
format	デフォルトで日付/時刻のユーザー・プリファレンスに設定されます。有効な値は、Java SimpleDateFormat、userまたはempty ("user")で使用される値です。 日付と時刻のformat文字では、大文字と小文字が区別されます。
TimeZoneId	デフォルトでタイムゾーンのユーザー・プリファレンスに設定されます。有効な値は、Java TimeZone.getTimeZone()、またはサーバーのタイムゾーンで使用される値です。たとえば、TimeZone.getTimeZone()の場合、東海岸を指定するには次のように入力します: "America/New_York"。 TimeZoneIDを使用している場合は、formatパラメータを引用符で囲む必要があります。これは、TimeZoneIdが示されている場合にのみ適用します。TimeZoneIdを増加させる前のレポートを更新する必要はありません。

表25 日付と時刻のフォーマット用の文字

フォーマット用の文字	意味	データ型	例
G	紀元	テキスト	AD
M	月	テキストまたは数値	7月の場合、Mでは7、MMでは07、MMMではJul、MMMMではJulyと表示されます。
d	日	数値	10
h	時(午前/午後1-12時)	数値	11
H	時(0-23時)	数値	22
m	分	数値	30

フォーマット用の文字	意味	データ型	例
s	秒	数値	25
S	ミリ秒	数値	978
E	曜日	テキスト	E: Tue EE: Tuesday
D	元旦から数えた日数	数値	189
F	月の初めから数えた曜日	数値	<<Date("dd-MMM-yy"は'MMM'の"第'F E")>> は、次のような値を戻します。 24-Dec-02はDecの第4 Tue
w	元旦から数えた週の数	数値	27
W	月の初めから数えた週	数値	2
a	午前または午後	テキスト	PM
k	時(1-24時)	数値	23
K	時(午前/午後0-11時)	数値	午後3時37分の場合は、3を 戻します。
z	タイム・ゾーン	テキスト	太平洋標準時
y	年	数値	2002,02
'	リテラル・テキスト	テキスト	<<Date("yyyy'年'D'日 目'")>>は、「2002年の105 日目」となります。
''	2つ続けた一重引用符で、1 つの一重引用符を示す	テキスト	<<Date("k:mm 'O'Clock' a")>>は、「6:15 O'Clock PM」となります。 注: O'Clockのように、一重引 用符やアポストロフィを表 示するには、一重引用符 を2つ続けて使用します (O'Clock)。

format文字を使用する際の考慮事項:

- format文字の個数によって、フォーマットが決まります。
 - テキストでは、パターンを示す文字が4文字未満の場合は、短縮形または略号を使用することを意味します。
 - 4文字以上は、完全な形式を使用することを意味します。
 - MとMMは、月の数字を使用することを意味します。
 - MMMは、月の3文字の短縮形(英語)を使用することを意味します。
 - MMMMは、月の完全な名前(英語)を使用することを意味します。

たとえば、4月24日の場合は、次のようになります。

`<<Date("dd-M-yy")>>`は、24-4-02となります。

`<<Date("dd-MM-yy")>>`は、24-04-02となります。

`<<Date("dd-MMM-yy")>>`は、24-Apr-02となります。

`<<Date("dd-MMMM-yy")>>`は、24-April-02となります。

- 数字の場合は、数字のパターンを示す文字の個数は最小の桁数を示します。それより桁数の短い数字には足りない桁にゼロが挿入されます。年は特別な例です。"yy"では年数の最後の2桁が表示され、"yyyy"では4桁で年が表示されます。

たとえば、2月の場合は、次のように表示されます。

`<<Date("MM-yyyy")>>`は、02-2002となります。

- すべて大文字で示されたアルファベット、またはすべて小文字で示されたアルファベットは、特別なformat文字であるかどうかにかかわらず、パターンとしてみなされます。
- リテラル・テキストは一重引用符で囲みます。一重引用符(アポストロフィ)をリテラル・テキストで使用する場合は、テキスト全体を一重引用符で囲んだ上で、アポストロフィのかわりに一重引用符を2つ続けて使用します。

たとえば、4 o'clockと出力するためのフォーマットは、次のとおりです。

`<<Date("hh 'o''clock' ")>>`

例:

日付フォーマット	結果
<code><<Date("d/M/yy")>></code>	23/3/02
<code><<Date("d-MMM-yy")>></code>	23-Mar-02
<code><<Date("EEEE, MMMM dd, yyyy")>></code>	Tuesday, March 23, 2002
<code><<Date("h:mm:ss a")>></code>	12:52:05 PM
<code><<Date("h:mm:ss a zzzz")>></code>	12:52:05 PM 東部標準時
<code><<Date("EEEE, MMMM dd, yyyy G 'time:' h:mm:ss a zzzz")>></code>	Tuesday, March 23, 2002 AD 時刻: 12:52:05 PM 東部標準時
<code><<Date("hh 'o''clock' a, zzzz")>></code>	12:00 PM 東部標準時 注: テキスト内に1つの一重引用符が表示されるようにするには、一重引用符を2つ続けて入力する必要があります。

DataSource

DataSourceは、アプリケーション名、データベース、またはグリッドの別名表名を戻すテキスト関数です。DataSourceは、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<DataSource("GridName.Axis[ID]", InfoType)>>
```

引数	説明
GridName	(必須)レポート内の任意のグリッド。引用符で囲みます。
Axis[]	(オプション)グリッドのデザイン・セグメントへのポインタ。軸は、大文字と小文字を区別しないキーワードrow, col, columnを取ります。 たとえば、 <<DataSource("Grid1.Row[1]", DB)>> Axisがない場合には、グリッドのデフォルトの情報が戻されます。グリッドに複数のデータベース接続がある場合にAxisを使用します。
ID	(Axisを使用する場合は必須)データベース接続情報を取得する場所を示す設計時、行番号または列文字を示します。IDが、無効または存在しない行IDまたは列IDを示している場合は、グリッドのデフォルトの設定が使用されます。また、グリッドにセカンダリ・データベース接続がない場合にも、グリッドのデフォルト設定が使用されます。 たとえば、 <<DataSource("Grid1.Col[A]", DB)>>
InfoType	(必須)次のいずれかのキーワード: <ul style="list-style-type: none">• App: アプリケーション名を戻します。• DB: データベース名を戻します。• Alias: 別名表名を戻します。別名を戻すには、グリッドの別名表が使用可能になっている必要があります。デフォルトでは、別名表は使用不可です。• Name: 指定されたグリッドに関連付けられているデータベース接続名を戻します。 注: ServerはInfoTypeの引数としてはサポートされません。



注:

どの引数も、大文字と小文字は区別されません。

例1:

データ・ソース情報をレポートに挿入します。

```
<<DataSource("Grid1", App)>>
```

例2:

関数を挿入した見出しのデータ・ソースのデータベース名を表示します。

```
<<DataSource(cur, DB)>>
```



注:

DataSourceは、currentキーワードをサポートしています。200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用を参照してください。

DPDescription

DPDescriptionは、意思決定パッケージ・メンバーの説明を取得するテキスト関数です。



注:

209ページの意思決定パッケージ情報を取得するためのテキスト関数の使用を参照してください。

構文:

DPDescription("GridName", Row, Column, Page, DPLevel/BRLevel)

引数	説明
GridName	グリッドの名前。この値は、引用符で囲まれている必要があります。
Row	グリッド内の行番号を表す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。CURキーワードがサポートされています。
ColumnまたはCol	グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。CURキーワードがサポートされています。
Page	グリッドのページ・ディメンション・インデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションのインデックスは2、以降、同様に続きます。CURキーワードがサポートされています。
DPLevel/BRLevel	DPLevelは意思決定パッケージの説明に関する情報を取得します。BRLevelは意思決定パッケージの予算要求に関する情報を取得します。

例:

予算要求の説明を取得します。

```
<<DPDescription("Grid1", 1, B, 2, BRLevel)>>
```

現在のページに対する意思決定パッケージの説明を取得します。

```
<<DPDescription("Grid1", 1, B, Curr, DPLevel)>>
```

現在の行と列に対する意思決定パッケージの説明を取得します。

```
<<DPDescription("Grid1", Curr, Curr, 2, DPLevel)>>
```

エンティティ: "California", シナリオ: "Budget"およびバージョン: "Stage 4"の組合せであるプランニング・ユニット階層に対する意思決定パッケージを作成します。

```
<<DPDescription("Grid1", 1, B, 2, DPLevel)>>
```

グリッドで行1に"California"、列Bに"FY13"、ページ2に"Stage 4"がある場合は、ユーザーPOVで"Budget"、ページで"Stage 4"を選択している場合のみ、上の構文は意思決定パッケージ情報をテキスト・ボックスまたはグリッドのセル・テキストで取得します。

DPJustification

DPJustificationは、意思決定パッケージの理由を取得するテキスト関数です。



注:

209ページの意思決定パッケージ情報を取得するためのテキスト関数の使用を参照してください。

構文:

```
DPJustification("GridName", Row, Column, Page, DPLevel/BRLevel,  
QuestionOption, CategoryName, QuestionName)
```

引数	説明
GridName	グリッドの名前。この値は、引用符で囲まれている必要があります。
Row	グリッド内の行番号を表す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。CURキーワードがサポートされています。
ColumnまたはCol	グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。CURキーワードがサポートされています。
Page	グリッドのページ・ディメンション・インデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションのインデックスは2、以降、同様に続きます。CURキーワードがサポートされています。
DPLevel/BRLevel	DPLevelは意思決定パッケージの説明に関する情報を取得します。BRLevelは意思決定パッケージの予算要求に関する情報を取得します。
QuestionOption	次のいずれかの値です。 <ul style="list-style-type: none">1 - 必須の質問のみを取得します2 - 回答済の質問のみを取得します3 - 特定のカテゴリのみを取得します 1を指定してすべての必須の質問を取得する場合や、2を指定してすべての回答済の質問を取得する場合は、カテゴリ名または質問名を指定する必要はありません。必須の質問や回答済の質問を特定のカテゴリにフィルタ処理する場合は、カテゴリ名または質問名のパラメータで指定する必要があります。オプション3を使用する際は、カテゴリ名および質問名の詳細を指定する必要があります。
CategoryName	(オプション)カテゴリ名の詳細。QuestionOptionが3である場合のみ使用します。

引数	説明
QuestionName	(オプション)質問名の詳細。QuestionOptionが3である場合のみ使用します。

例:

行1、列A、ページ1のすべての必須の質問に対する予算要求の理由を取得します。

```
<<DPJustification("Grid1", 1, A, 1,BRLevel, 1)>>
```

カテゴリ名および質問名が"Current Row","Column B"および"Page 1"に指定されたテキストに一致する、すべての回答済の質問に対する意思決定パッケージの理由を取得します。

```
<<DPJustification("Grid2", CURR, B, 1,DPLLevel, 2,"Monorail construction" ,"Justify the need for monorail on BG road" )>>
```

カテゴリ名および質問名が指定されたテキストに一致する、すべての回答済の質問に対する意思決定パッケージの理由を取得します。

```
<<DPJustification("Grid2", All, B, 1,DPLLevel, 2,"Monorail construction" ,"Justify the need for monorail on BG road",Curr )>>
```

DPNotesAndAttachments

DPNotesAndAttachmentsは、意思決定パッケージに関連付けられたノートおよび添付ファイルを取得するテキスト関数です。



注:

[209ページの意思決定パッケージ情報を取得するためのテキスト関数の使用](#)を参照してください。

構文:

```
DPNotesAndAttachments("GridName", Row, Column, Page, DPLevel/BRLevel Attributes, Range, Notes/Attachments)
```

引数	説明
GridName	グリッドの名前。この値は、引用符で囲まれている必要があります。
Row	グリッド内の行番号を表す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。CURキーワードがサポートされています。
ColumnまたはCol	グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。CURキーワードがサポートされています。

引数	説明
Page	グリッドのページ・ディメンション・インデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションのインデックスは2、以降、同様に続きます。CURキーワードがサポートされています。
DPLevel/BRLevel	DPLevelは意思決定パッケージの説明に関する情報を取得します。BRLevelは意思決定パッケージの予算要求に関する情報を取得します。
Attributes	次のいずれかの値です。 <ul style="list-style-type: none"> すべて タイトル 作成者 Date テキスト <p>たとえば、作成者または特定のタイトルで、送信されたノートおよび添付ファイルをフィルタリングする属性を使用できます。注意: 出力の優先順序で属性を調整し、各属性をアンパサンド(&)で区切ります。</p>
Range	All、TopまたはBottomキーワードを使用して、出力の先頭または末尾からの特定の数のノートおよび添付ファイル、あるいはすべてのノートおよび添付ファイルを選択します。次に例を示します。 <ul style="list-style-type: none"> Allは、すべての注釈を戻します。 Top 5は、先頭の5個の注釈を戻します。 Bottom 10は、末尾の10個の注釈を戻します。 Bottom 1は、最後の注釈を戻します。
Notes/Attachments	次のいずれかの値です。 <ul style="list-style-type: none"> 1 - ノート 2 - 添付ファイル

例:

行1、列Bおよび現在のページに対する上位3つの意思決定パッケージのノートを取得します。

```
<<DPNotesAndAttachments("Grid1", 1,B,CURR,DPLevel,All,Top 3, 1)>>
```

現在の行、現在の列および現在のページに対するすべての予算要求のノートを取得します。

```
<<DPNotesAndAttachments("Grid1", Curr,Curr,Curr,BRLevel,All,All,1)>>
```

現在の行、現在の列および現在のページに対するすべての意思決定パッケージの添付ファイルを取得します。

```
<<DPNotesAndAttachments("Grid1", Curr,Curr,Curr,DPLevel,All,All,2)>>
```

Footnote

Footnoteテキスト関数。テキスト・オブジェクトでのみ使用できます。特定のレポート・オブジェクト内の脚注に関して要求された情報を戻します。Footnoteは、指定されたオブジェクトや、最初のパラメータが"all"に設定されているレポート内のすべてのオブジェクトにある脚注を出力します。グリッドが参照されている場合、そのグリッド上のすべ

での脚注が出力されます。まず、部分的なPOV脚注が出力され、続いて、完全なPOV脚注が出力されます。完全なPOV脚注は、ページごとに左上から右下の順序でセルの位置に基づいて出力されます。複数の構文がサポートされています。

構文:

Footnote("ObjectName", Attributes, Reference, Attachments)

Footnote("ObjectName")

Footnote("ObjectName", Attributes)

Footnote("ObjectName", Attributes, Reference)

Footnote("ObjectName", Attributes, Attachments)

引数	説明
ObjectName	脚注のあるレポート・オブジェクトの名前。allの場合、この関数は、レポート内のすべてのオブジェクトにあるすべての脚注を戻します。ObjectNameパラメータは、グリッド・オブジェクトの名前の変更時に更新されません。
Attributes	脚注から戻される情報。属性には、次のキーワードを含めることができます。 <ul style="list-style-type: none"> All (デフォルト値) Title, Description (Desc), Author, Date, Categoryのキーワードのいずれかまたは複数の組み合わせ Attributesキーワードは、出力の優先順位で並べ替えることもできます。各属性は、アンパサンド(&)で区切ります。
Reference	どの注釈を戻すかを示すキーワード。 <ul style="list-style-type: none"> All (デフォルト値) - 最初の注釈とすべての結果 Top <n> - 最初の注釈と最初の応答。(最初の注釈は常に表示されるので、個数には、最初の注釈は含まれません。) Bottom - 最初の注釈とBottom <n>で指定された最終の番号の応答。(最初の注釈は常に表示されるので、個数には、最初の注釈は含まれません。) BottomOnly <n> - 最後の応答。BottomOnly <n>のnで指定された個数より応答数が少ない場合以外、最初の注釈は表示されません。たとえば、注釈に5つの応答がある場合、BottomOnly 5で最初の注釈は表示されません。ただし、注釈が4つの場合は、最初の注釈が表示されます。 First - 最初の注釈のみ。 Replies - 最初の注釈を除くすべての応答。
Attachments	添付ファイルを脚注とともに出力するかどうかを示すブール(true/false)値。 <ul style="list-style-type: none"> True - 添付ファイルは、レポート出力時にその末尾に出力されます。 False (デフォルト値) - 添付ファイルは出力されません。

例:

```
<<Footnote("Grid1", All, All, true)>>
```

```
<<Footnote(All, All, All, true)>>
```

```
<<Footnote(All, All, Bottom 2, true)>>
<<Footnote(All, All, BottomOnly 20, true)>>
<<Footnote(All, All, First, true)>>
<<Footnote(All, All, Replies, true)>>
<<Footnote("Grid1", Title & Description & Author & Date & Category, All, true)>>
<<Footnote("Text1", Title & Description & Date & Category, Top 10, false)>>
<<Footnote("Image1", Title & Description & Author, Bottom 4, false)>>
<<Footnote("Text1", Title&Description&Author, BottomOnly 12)>>
<<Footnote("Image1", Title&Description&Author, First)>>
<<Footnote("Grid2", Title&Description&Author, Replies)>>
<<Footnote("Grid Name")>>
<<Footnote(all, All)>>
<<Footnote(cur, Description)>>
<<Footnote(cur, title & Description, true)>>
<<Footnote(cur, title & Author & Description, false)>>
<<Footnote("folder1\folder 2\Grid1", title & Description&Category, Top20)>>
<<Footnote("folder1\folder 2\Grid1", title & Description&Category, Bottom 2)>>
<<Footnote("folder1\folder 2\Chart2", title & Description, Top 20, False)>>
<<Footnote("current", title & Description, All)>>
<<Footnote("current", title & Description, first)>>
<<Footnote(All, Title&Description&author, Top 40, true)>>
```

GetCell

GetCellは、グリッドのデータ値を戻すテキスト関数です。



注:

PlanningまたはFinancial Managementデータを含むセルを参照すると、GetCellが数値ではなく文字列値を返します。

構文:

```
<<GetCell("GridName", Row, Column, Page)>>
```

引数	説明
GridName	グリッドの名前またはCurrentキーワード。
Row	グリッド内の行番号を表す数値。グリッド内の最初の行がインデックス1、2番目の行がインデックス2、以降、順番に続きます。Currentキーワードを使用することもできます。
Column	グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。
Page	グリッドのページ・ディメンション・インデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションがインデックス1、2番目のページ・ディメンションがインデックス2、以降、順番に続きます。

GetCellを使用する際の考慮事項:

- 行または列のパラメータが展開するセグメントを参照している場合は、一番左上の展開されたセルが使用されません。範囲の表記法を使用すると、任意の展開されるセルが参照できます。
- GetCellは、テキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターなどではなくグリッド・セル内で使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。Currentキーワードをパラメータで使用すると、関数がさらに動的になります。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

例:

複数の四半期の純利益を示すグリッドを設定します。この値を、レポートの要旨を含むテキスト・ボックスに表示します。

```
The grand total for the period was <<GetCell("mygrid",21,B,1)>>
```

最初のページ・ディメンションにあるグリッドの行21、列Bにある値がセルに表示されたレポートが作成されます。

GetHeading

GetHeadingは、指定したグリッドのテキスト見出しを取得するテキスト関数です。

構文:

```
<<GetHeading("GridName", Page, Reference, Offset)>>
```

```
<<GetHeading("GridName", Page, Reference, "Delimiter")>>
```

引数	説明
GridName	抽出する見出しを含むグリッドの名前。Currentキーワードを使用することもできます。
Reference	取得する見出しの表示時の参照。Currentキーワードを使用することもできます。 178ページの行、列、セルの参照引数 を参照してください。

引数	説明
Offset	複数のディメンションのある行見出しまたは列見出しで、ディメンションを表す数値。 数値オフセットは、1つのディメンション見出しを戻します。たとえば、3つのディメンションのある行見出しで、1を指定すると(左から右の順序で)最初のディメンション、2を指定すると2番目のディメンション、3を指定すると3番目のディメンションが戻されます。
"Delimiter"	行または列のすべての見出しを区切る引用符で囲まれた文字列。区切り記号を使用すると、指定した区切り記号で区切られた参照内のすべての見出しが取得できます。

例:

GetHeadingを使用して、次の列見出しと行見出しを戻します。

		A(A)	A(B)	A(C)
		Actual	Actual	Actual
		Jan	Feb	Mar
1(1)	Georgia	112	67	73
1(2)	East	5,864	3,322	3,789
1(3)	Market	15,904	9,277	10,640

次の構文を使用して前のサンプル・グリッドのデータを戻します。

GetHeading関数の例	戻される値
GetHeading("Grid1",1,A,2)	1月
GetHeading("Grid1",1,A(B),2)	2月
GetHeading("Grid1",1,A(C),"-")	実績 - 3月
GetHeading("Grid1",1,1,1)	Georgia
GetHeading("Grid1",1,1(2),1)	East
GetHeading("Grid1",1,1(2),2)	<error> (無効な参照です。)
GetHeading("Grid1",1,1(3),"-")	Market



注:

GetHeadingは、テキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターなどではなくグリッド・セル内で使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

GridDimension

GridDimensionは、グリッドのページ、列または行軸のディメンション名を戻すテキスト関数です。

構文:

```
<<GridDimension("GridName", "Axis", index)>>
```

引数	説明
GridName	引用符で囲まれた、レポート内のグリッドの名前。Currentキーワードを使用することもできます。
Axis	ディメンションが配置されているページ、行、または列を示すグリッド軸。キーワードを使用する必要があります。Currentキーワードを使用することもできます。
index	特定の軸上のディメンションのオフセットまたはインデックスを示す数値。軸上の最初のディメンションがインデックス1、2番目のディメンションがインデックス2、以降、順番に続きます。 ページ、行、列の見出しセルのみで、Currentキーワードを使用できます。

例:

行、列およびページの各軸に複数のディメンションがあるmygridという名前の共有グリッド。行軸にある最初のディメンションの名前をテキスト・ボックスに表示します。将来このディメンションは変更される可能性があるため、テキスト・ボックス内でGridDimension関数を使用します。テキスト・ボックスに次のように入力します。

```
This report is based on the <<GridDimension("mygrid","Row",1)>> dimension.
```



注:

[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

HFMCurrency

HFMCurrencyは、Financial Managementデータベース接続でセル用の通貨のプロパティのIDを戻すテキスト関数です。

構文:

```
<<HFMCurrency("GridName", Row, Col, Page)>>
```

引数	説明
GridName	Financial Managementのグリッドの名前。この値は、引用符で囲まれている必要があります。
Row	グリッドの行インデックスを示す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。
Col	グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。
Page	グリッドのすべてのページ・ディメンションのメンバーの組合せのインデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションにおける組合せのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションにおける組合せのインデックスは2、以降、同様に続きます。

設計者は、プロパティ・ファイルを変更して、Financial Managementから戻された文字列を別の文字列にマッピングできます。マッピングは、JConsoleファイルで定義されます。たとえば、設計者は、次の行をHFMエンティティ通貨セクションに追加できます:

```
EntityCurrency_USD=$
```

```
EntityCurrency_EUR=_
```



注:

JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reportingユーザーガイド*のプロパティ情報に関する項を参照してください。

Financial ManagementがUSDを戻した場合、ドル記号(\$)が表示され、Financial ManagementがEURを戻した場合、ユーロ記号(_)が表示されます。プロパティ・ファイルには、前述の例とその他の例がコメントとして含まれています。

例:

グリッド1のページ1、行21、列Bのセルの通貨のプロパティを表示します。

```
<<HFMCurrency("Grid1", 21, B, 1)>>
```



注:

HFMCurrencyは、テキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターなどではなくグリッド・セル内で使用された場合は、`Current`キーワードのみをサポートします。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

ListOfCellDocuments



注:

ListOfCellDocumentsは、Financial Managementデータベース接続とEssbaseデータベース接続のみで使用できます。

ListOfCellDocumentsは、デザイナーでレポート内のセルから取得するように事前に選択したすべてのセル・ドキュメントおよびそのファイル属性のリストを返すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、またはテキスト・セル見出しで使用できます。

Financial ManagementまたはEssbaseでは、ドキュメントはレポートのデータ・ソース・セルに挿入されます。Financial Reportingのデザイナーで、これらのセルを選択し、プロパティ・シートの「セル・ドキュメントの取得」を選択します。セル・ドキュメントがある場合は、スナップショットまたはPDFとして印刷時または保存時にレポートに添付されます。既存のセル・ドキュメントのリストを表示するには、デザイナーで、レポートのテキスト・ボックス、テキスト・セル、またはテキスト・セル見出しにListOfCellDocumentsを追加します。

構文:

```
<<ListOfCellDocuments ("GridName", FileName&Description&PageNumber)>>
```

引数	説明
GridName	レポートのグリッドの名前。
FileName	セル・ドキュメントの名前を返します。 注: Financial Managementデータベース接続から抽出したドキュメントの名前は、20文字まで(ドキュメント名16文字、ファイル名拡張子4文字)に切り取られます。
Description	各セル・ドキュメントの説明を返します。
PageNumber	レポート内のセル・ドキュメントの連続するページ番号の開始ページ番号を返します。この番号は、そのドキュメント上で指定されているページ番号と一致するとは限りません。 注: ページ番号は、印刷およびWebプレビューのためPDFフォーマットを選択した場合にのみ表示されます。

例:

次の例では、セル・ドキュメントの情報を印刷する2つのグリッドがレポートで選択されています。グリッド1では、抽出されるセル・ドキュメントのファイル名、説明、および連続するページ番号の開始ページ番号が、グリッド2では、ファイル名と開始ページ番号のみが要求されます。

```
<<ListOfCellDocuments  
("Grid1", FileName&Description&PageNumber)>>
```

```
<<ListOfCellDocuments ("Grid2", FileName&PageNumber)>>
```

表示されるリストは次のようになります。グリッド1には2つの添付文書が、グリッド2には1つの添付文書があります。

添付文書:

April Variance High Volume Page3

April Variance Low Volume Page9

May Variance Page 18



注:

ListofCellDocumentsは、Currentキーワードをサポートしています。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

MemberAlias



注:

この関数は、Essbaseデータベース接続またはPlanning詳細データベース接続のみで使用できません。

MemberAliasは、テキスト関数です。使用される構文に基づき、行、列、ページまたは視点(POV)内のディメンションに割り当てられたメンバーの別名を戻します。

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページの別名を戻します。構文は、任意の見出しセル、テキスト・セル、またはテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポートのすべてのグリッドを参照できます。

```
<<MemberAlias("GridName", Row/Col/Page, "DimName")>>
```

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページ内の別名を戻します。この構文は、カスタム見出しとして指定されているグリッド内の任意の行見出し、列見出し、ページ見出しからデプロイできます。カスタム見出しを指定するには、ページ、行見出しまたは列見出しをクリックし、プロパティ・シートで「カスタム見出し」を選択します。カスタム見出しの下にあるスペースに関数を追加できます。

```
<<MemberAlias("DimName")>>
```

- 次の構文は、グリッドまたはユーザーのPOVの別名を戻します。この構文は、任意のテキスト・セルおよびテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポート内のすべてのグリッドおよび該当するPOVを参照できます。

```
<<MemberAlias("GridName, "POV DimName")>>
```

引数	説明
GridName	グリッドの名前
Row/Col/Page	グリッドのすべてのページ・ディメンションのメンバーの組合せのインデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションにおける組合せのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションにおける組合せのインデックスは2、以降、同様に続きます。
DimName	グリッドの行、列またはページ内のディメンションの名前。
POV DimName	グリッドまたはユーザーPOVのディメンションの名前。

例:

Grid1、列Aの製品ディメンションに割り当てられた、「Diet Root Beer」という別名を表示します。

```
<<MemberAlias("Grid1", A, "Product")>>
```

```
<<MemberAlias(current, A, "製品")>>
```

年ディメンションの別名を表示します。構文は、グリッドのカスタム見出しに配置されます:

```
<<MemberAlias("Year")>>
```

```
<<MemberAlias(current)>>
```

Grid1に関連するPOVのシナリオ・ディメンションの別名を表示します。

```
<<MemberAlias("Grid1", "Scenario")>>
```

```
<<MemberAlias(current, "Scenario")>>
```



注:

MemberAliasは、ページ・ディメンション・パラメータを指定する際に、グリッド・セルまたはテキスト・ボックス・オブジェクトで使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。その他のパラメータ(グリッド、行、列)はテキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターではサポートされません。200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用を参照してください。

MemberDescription



注:

MemberDescriptionは、Financial Managementデータベース接続のみで使用されます。

MemberDescriptionは、テキスト関数です。使用される構文に基づいて、行、列、ページまたは視点(POV)のディメンションに割り当てられたメンバーの説明を戻します。

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページの説明を戻します。構文は、任意の見出しセル、テキスト・セル、またはテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポートのすべてのグリッドを参照できます。

```
<<MemberDescription("GridName", Row/Col/Page, "DimName")>>
```

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページ内の説明を戻します。この構文は、カスタム見出しとして指定されているグリッド内の任意の行見出し、列見出し、ページ見出しからデプロイできます。カスタム見出しを指定するには、ページ、行見出しまたは列見出しをクリックし、プロパティ・シートで「カスタム見出し」を選択します。カスタム見出しの下にあるスペースに関数を追加できます。

```
<<MemberDescription("DimName")>>
```

- 次の構文は、グリッドまたはユーザーのPOVの説明を戻します。この構文は、任意のテキスト・セルおよびテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポート内のすべてのグリッドおよび該当するPOVを参照できます。

```
<<MemberDescription("GridName", "POV DimName")>>
```

引数	説明
GridName	グリッドの名前。
Row/Col/Page	行のID(数値)、列のID(英字)、またはページのID(数値)。
DimName	グリッドの行、列またはページ内のディメンションの名前。
POV DimName	グリッドまたはユーザーPOVのディメンションの名前。

例:

Grid1、列Aの製品ディメンションに割り当てられた説明を戻します。

```
<<MemberDescription("Grid1", A, "Product")>>
```

```
<<MemberDescription(current, A, "Product")>>
```

年ディメンションの説明を表示します。構文は、グリッドのカスタム見出しに配置されます:

```
<<MemberDescription("Year")>>
```

```
<<MemberDescription(Current)>>
```

Grid1に関連するPOVのシナリオ・ディメンションの説明を戻します。

```
<<MemberDescription("Grid1", "Scenario")>>
```

```
<<MemberDescription(current, "Scenario")>>
```



注:

MemberDescriptionは、ページ・ディメンション・パラメータを指定する際に、グリッド・セルまたはテキスト・ボックス・オブジェクトで使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。その他のパラメータ(グリッド、行、列)はテキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターではサポートされません。200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用を参照してください。

MemberName

MemberNameは、テキスト関数です。使用される構文に基づいて、行、列、ページまたは視点(POV)のディメンションに割り当てられたメンバーの名前を戻します。

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページの名前を戻します。構文は、任意の見出しセル、テキスト・セル、またはテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポートのすべてのグリッドを参照できます。

```
<<MemberName("GridName", Row/Col/Page, "DimName")>>
```

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページにある名前を戻します。この構文は、カスタム見出しとして指定されているグリッド内の任意の行見出し、列見出し、ページ見出しからデプロイできます。カスタム見出しを指定するには、ページ、行見出しまたは列見出しをクリックし、プロパティ・シートで「カスタム見出し」を選択します。カスタム見出しの下にあるスペースに関数を追加できます。

<<MemberName("DimName")>>

- 次の構文は、グリッドまたはユーザーのPOVの名前を戻します。この構文は、任意のテキスト・セルおよびテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポート内のすべてのグリッドおよび該当するPOVを参照できます。

<<MemberName("GridName", "POV DimName")>>

引数	説明
GridName	グリッドの名前。
Row/Col/Page	行のID(数値)、列のID(英字)、またはページのID(数値)。
DimName	グリッドの行、列またはページ内のディメンションの名前。
POV DimName	グリッドまたはユーザーPOVのディメンションの名前。

例:

Grid1、列Aの製品ディメンションに割り当てられた名前を戻します。

<<MemberName("Grid1", A, "Product")>>

<<MemberName(current, A, "Product")>>

年ディメンションの名前を戻します。構文は、グリッドのカスタム見出しに配置されます:

<<MemberName("Year")>>

Grid1に関連するPOVのシナリオ・ディメンションの名前を戻します。

<<MemberName("Grid1", "Scenario")>>

<<MemberName(current, "Scenario")>>



注:

MemberNameは、ページ・ディメンション・パラメータを指定する際に、グリッド・セルまたはテキスト・ボックス・オブジェクトで使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。その他のパラメータ(グリッド、行、列)はテキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターではサポートされません。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

MemberProperty



注:

MemberPropertyは、Planning詳細データベース接続およびEssbaseデータベース接続で使用できます。

MemberPropertyは、テキスト関数です。使用される構文に基づき、行、列、ページまたは視点(POV)内のディメンションのメンバーのプロパティ値を戻します。この関数を使用すると、テキスト行またはテキスト列のメンバーのプロパティを表示できます。

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページのメンバーのプロパティを戻します。構文は、任意の見出しセル、テキスト・セル、またはテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポートのすべてのグリッドを参照できます。

```
<<MemberProperty("GridName", Row/Col/Page, DimName, Property)>>
```

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページ内のメンバーのプロパティを戻します。この構文は、カスタム見出しとして指定されているグリッド内の任意の行見出し、列見出し、ページ見出しからデプロイできます。カスタム見出しを指定するには、ページ、行見出しまたは列見出しをクリックし、プロパティ・シートで「カスタム見出し」を選択します。カスタム見出しの下にあるスペースに関数を追加できます。

```
<<MemberProperty("DimName", Property)>>
```

- 次の構文は、グリッドまたはユーザーのPOVのメンバー・プロパティを戻します。この構文は、任意のテキスト・セルおよびテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポート内のすべてのグリッドおよび該当するPOVを参照できます。

```
<<MemberProperty("GridName", POV DimName, Property)>>
```

引数	説明
GridName	グリッドの名前。
Row/Col/Page	行のID(数値)、列のID(英字)、またはページのID(数値)。
POV DimName	グリッドまたはユーザーPOVのディメンションの名前。
Property	任意のカスタム・プロパティ(属性ディメンション)。

例:

Grid1、列Aの製品ディメンションに割り当てられたメンバーのプロパティを戻します。

```
<<MemberProperty("Grid1", A, Product, Pkg Type)>>
```

```
<<MemberProperty(current, A, Product, Pkg Type)>>
```

市場ディメンションのメンバーのプロパティを戻します。構文は、グリッドのカスタム見出しに配置されます:

```
<<MemberProperty("Market", Population)>>
```

```
<<MemberProperty(current, Population)>>
```

Grid1に関連するPOVの市場ディメンションのメンバーのプロパティを戻します。

```
<<MemberProperty("Grid1", Market, CurrencyCategory)>>
```

```
<<MemberProperty(current, Market, CurrencyCategory)>>
```

カスタム見出し内の製品のメンバーの別名プロパティとオンス・プロパティを取得します。(この取得を実行するには、見出しを選択してから、行見出しのプロパティ・シートで「カスタム見出し」オプションを選択し、「関数」をクリックします。)

```
<<MemberAlias(current, current, Product)>>:  
<<MemberProperty(current, current, Product, Ounces)>>
```

レポートには、次のよう出力されます:

	Qtr 1
Cola : Ounces_12	5,096
Diet Cola : Ounces_12	1,359
Caffeine Free Cola : Ounces_16	593



注:

MemberPropertyは、テキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターなどではなくグリッド・セル内で使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

MemberQualifiedName

MemberQualifiedNameは、Essbaseデータ・ソース用のテキスト関数です。使用される構文に基づいて、行、列、ページまたはPOVのディメンションに割り当てられた固有でないメンバーの修飾名を戻します。一意でないメンバーは、複数の親の子です。

たとえば、100という名前のメンバーが製品1のメンバーと製品2のメンバーの子である場合、100は固有でないメンバー名です。MemberQualifiedNameには、レポート内の修飾名が表示されます。この例での修飾メンバー名は、[Product1].[100]および[Product2].[100]です。

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページの名前を戻します。構文は、任意の見出しセル、テキスト・セル、またはテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポートのすべてのグリッドを参照できます。

```
<<MemberQualifiedName("GridName", Row/Col/Page, "DimName")>>
```

- 次の構文は、行見出し、列見出しまたはページ内の修飾名を戻します。この構文は、カスタム見出しとして指定されているグリッド内の任意の行見出し、列見出し、ページ見出しからデプロイできます。カスタム見出しを指定するには、ページ、行見出しまたは列見出しをクリックし、プロパティ・シートで「カスタム見出し」を選択します。カスタム見出しの下にあるスペースに関数を追加できます。

```
<<MemberQualifiedName("DimName")>>
```

- 次の構文は、グリッドまたはユーザーのPOVの名前を戻します。この構文は、任意のテキスト・セルおよびテキスト・ボックス・オブジェクトからデプロイでき、現在のレポート内のすべてのグリッドおよび該当するPOVを参照できます。

```
<<MemberQualifiedName("GridName", "POV DimName")>>
```

引数	説明
GridName	グリッドの名前。
Row/Col/Page	行のID(数値)、列のID(英字)、またはページのID(数値)。

引数	説明
DimName	グリッドの行、列またはページ内のディメンションの名前。
POV DimName	グリッドまたはユーザーPOVのディメンションの名前。

例:

Grid1、列Aの製品ディメンションに割り当てられた固有ではない修飾名を戻します。

```
<<MemberQualifiedName("Grid1", A, "Product")>>
```

```
<<MemberQualifiedName(current, A, "Product")>>
```

年ディメンションの名前を戻します。構文は、グリッドのカスタム見出しに配置されます:

```
<<MemberQualifiedName("Year")>>
```

Grid1に関連するPOVのシナリオ・ディメンションの固有ではない修飾名を戻します。

```
<<MemberQualifiedName("Grid1", "Scenario")>>
```

```
<<MemberQualifiedName(current, "Scenario")>>
```



注:

MemberQualifiedNameは、テキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターなどではなくグリッド・セル内で使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

Page

Pageは、印刷レポートでの現在のページ番号を戻します。この関数をテキスト・オブジェクトで使用します。

構文:

```
<<Page()>>
```

例:

現在のページ番号が8の場合、8ページと表示されます。

```
Page<<PAGE()>>
```



注:

Pageは、印刷レポートのみに有効です。オンライン・レポートでは、ページ番号の表示に[[PageCount()]]を使用します。グリッドのページ軸は、印刷するレポートのページ番号とは異なります。

PageCount

PageCountは、印刷レポートでのページの総数を戻すテキスト関数です。この関数をテキスト・オブジェクトで使用します。

構文:

```
<<PageCount()>>
```

例:

現在のページ数が6の場合は、合計ページ数は6という結果になります。

The total number of pages is: <<PageCount()>>



注:

PageCountは、印刷レポートのみに有効です。オンライン・レポートでは、ページ番号の表示に[[PageCount()]]を使用します。

PlanningAnnotations

PlanningAnnotationsは、Planningデータベース接続からセルのPlanningUnitに関連付けられた重要な注意書きやコメントを取得するテキスト関数です。PlanningUnitは、シナリオ、バージョンおよびエンティティの組合せで、グリッド内のセル参照を使用してOracle Hyperion Financial Reportingに表示されます。

構文:

```
<<PlanningAnnotations("GridName", Row, Column, Page, Attributes, Range)>>
```

```
<<PlanningAnnotations("GridName", Row, Column, Page, Attributes)>>
```

引数	説明
GridName	(必須)グリッドの名前。
Row	(必須)グリッドの行番号を表す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。
Column	(必須)グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。
Page	(必須)グリッドのすべてのページ・ディメンションのメンバーの組合せのインデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションにおける組合せのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションにおける組合せのインデックスは2、以降、同様に続きます。
Attributes	All、Title、Author、Date、Text、PlanningUnitのいずれかの値。(PlanningUnitは、シナリオ、バージョンおよびエンティティの組合せで、GridName、Row、ColumnおよびPageから派生します。)

引数	説明
	出力の優先順序で属性を調整し、各属性をアンパサンド(&)で区切ります。
Range	All, TopまたはBottomキーワードを使用して、出力の先頭または末尾からの特定の数の注釈、あるいはすべての注釈を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • Allは、すべての注釈を戻します。 • Top 5は、先頭の5個の注釈を戻します。 • Bottom 10は、末尾の10個の注釈を戻します。 • Bottom 1は、最後の注釈を戻します。

例1:

"All"がRangeパラメータの前提とされています。

```
<<PlanningAnnotations("Grid Name", 1,a,1,All, All)>>
<<PlanningAnnotations("Grid Name", 100,AB,10,All, All)>>
<<PlanningAnnotations(cur, cur,a,cur,Text & Title & Author, Top 5)>>
<<PlanningAnnotations(cur, 315, AB, 255, Text&Title&Author, Top 5)>>
<<PlanningAnnotations(cur, cur A, Cur, PlanningUnit, Top5)>>
<<PlanningAnnotations("cur, 123, ABC, 101, PlanningUnit, Top5)>>
<<PlanningAnnotations("Grid1, 1, current, cur, Title & Text, Bottom 10)>>
<<PlanningAnnotations("Grid1, 105, ABC, cur, Title & Text, Bottom 10)>>
<<PlanningAnnotations("Current", 34, BB, cur, "All", Top 40)>>
<<PlanningAnnotations(cur, cur, A cur, "Text & Title & Author", Top 5)>>
<<PlanningAnnotations(cur, cur, A, cur, "Text&Title&Author, "bottom15")>>
<<PlanningAnnotations(cur, 1(3), A(B), cur, Title&Author&Date&Text, "All")>>
<<PlanningAnnotations(cur, 1(3), A(B), cur, "Title&Author&Date&Text, "All")>>
```

例2:

現在のページのグリッドの行1、列Aの注釈テキストを取得します。最後の3個の注釈、およびタイトル、作成者、日付、テキスト、およびプランニング・ユニットなどのその注釈に関連付けられたすべての属性を表示します。

テキスト・セルで次の構文を使用します。

```
<<PlanningAnnotations(Current, 1, A, Current, All, Bottom 3)
```

注釈は、日付を基準として降順で戻されます(上から新しい日付の順に並びます)。出力される注釈のテキストは、次のようになります。

Title: Status - Under Review

Author: John Smith

Date: Mar 25, 2003 10:32:49 AM

Planning Unit: Budget, 1st Draft, East

Text: Please review and approve

Title: Status - Not Signed Off

Author: Mary Brown

Date: Mar 21, 2003 2:59:11 PM

Planning Unit: Budget, 1st Draft, West

Text: Sorry, Try Again

Title: Status - Under Review

Author: Admin

Date: Mar 21, 2003 2:54:16 PM

Planning Unit: Budget, 1st Draft, South

Text: Please review and approve budget for 1st draft



注:

PlanningAnnotationsは、テキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターなどではなくグリッド・セル内で使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。[200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用](#)を参照してください。

注釈の区切りの指定

Planning詳細ユニットの注釈を区切るデフォルトの区切り文字は、連続する全角ダッシュです。

JConsoleファイルのPUASeparatorを構成して別の区切り文字を指定できます。JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting管理者ガイド*のプロパティ情報に関する項を参照してください。



注:

次の手順は、Planning Detailsユニットの注釈を取得するすべてのレポートに反映されます。

▶ 注釈を区切る別の記号を設定するには:

1. Financial Reportingからログオフします。
2. JConsoleファイルを開いて編集します。
3. PUASeparatorに移動し、次の例のように使用する区切り記号を適切な回数入力します。

PUASeparator=

4. ファイルを保存して閉じます。

5. Report Serverサービスを再開し、Financial Reportingにログオンします。

ProcessManagementStatus

ProcessManagementStatusは、Financial Managementデータベース接続のセルのステータスを返すテキスト関数です。プロセス・レベルには、「開始していません」、「最初のパス」、「送信済」、「承認済」、「発行済」、「サポートされていません」、および「確認レベル」の1から10があります。ProcessManagementStatusは、テキスト・ボックス、テキスト・セル、またはテキスト行見出しとテキスト列見出しで使用します。ProcessManagementStatusは、Financial Managementデータベース接続のみで使用されません。

構文:

```
<<ProcessManagementStatus("GridName", Row, Col, Page)>>
```

引数	説明
GridName	Financial Managementのグリッドの名前。GridNameは引用符で囲む必要があります。
Row	グリッドの行インデックスを示す数値。グリッド内の最初の行のインデックスは1、2番目の行のインデックスは2、これ以降同様に続きます。
Col	グリッドの列を示す文字。グリッド内の最初の列がインデックスA、2番目の列がインデックスB、以降、順番に続きます。
Page	グリッドのページ・ディメンション・インデックスを表す数値。グリッド内の最初のページ・ディメンションのインデックスは1、2番目のページ・ディメンションのインデックスは2、以降、同様に続きます。

例1:

グリッド1のページ1の行21、列Bのセルのステータス:

```
<<ProcessManagementStatus("Grid1", 21, B, 1)>>
```

```
<<ProcessManagementStatus(Current, 21, B, 1)>>
```

例2:

現在のグリッドのページ1、列Bのすべてのセルのステータスを表示します。

```
<<ProcessManagementStatus(Current, Current, B, 1)>>
```



注:

ProcessManagementStatusは、テキスト・ボックス・オブジェクト、ヘッダー、フッターなどではなくグリッド・セル内で使用された場合は、Currentキーワードのみをサポートします。200ページのテキスト関数でのCurrent/Curキーワードの使用を参照してください。

ReportAuthor

ReportAuthorは、レポートの作成者であるユーザー名を戻すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<ReportAuthor()>>
```

例:

レポートの作成者の名前を戻します。

```
<<ReportAuthor()>>
```

ReportCreated

ReportCreatedは、レポートが作成された日付を戻すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<ReportCreated("format", "TimeZoneId")>>
```

引数	説明
format	文字は引用符に囲まれて、日付と時刻のフォーマットを定義します。Formatは、デフォルトで日付/時刻のユーザー・プリファレンスに設定されます。有効な値は、Java SimpleDateFormat、userまたはempty ("user")で使用される値です。 日付と時刻のフォーマットの詳細は、 216ページの表 25 を参照してください。
TimeZoneId	デフォルトでタイムゾーンのユーザー・プリファレンスに設定されます。有効な値は、Java TimeZone.getTimeZone()、またはサーバーのタイムゾーンで使用される値です。 たとえば、TimeZone.getTimeZone()の場合、東海岸を指定するには次のように入力します: America/New_York。



注:

日付と時刻のフォーマットを定義する文字は、大文字と小文字が区別されません。ReportCreatedは、レポートが保存済の場合のみに値を戻します。

例:

レポートの本文にレポートの作成日を挿入します。

<<ReportName()>> - 作成日 <<ReportCreated("d-MM-yy")>>

ReportDesc

ReportDescは、現在のレポートの説明を戻すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<ReportDesc()>>
```

例:

レポートの本文にレポートの説明を挿入します。

```
<<ReportDesc()>>
```



注:

レポートの説明は、レポートの保存時に定義できます。保存後は、リポジトリ内で説明を変更するか、「名前を付けて保存」コマンドを使用してレポートを再度保存するときに変更できます。

ReportFolder

ReportFolderは、レポートが保存されているフォルダへのパスを戻すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<ReportFolder()>>
```

例:

レポートが保存されているフォルダのパスを挿入します。

```
<<ReportFolder()>>
```

ReportFolderを使用する際の考慮事項:

- レポートは、ルート・フォルダ以外のフォルダに配置する必要があります。ルート・フォルダはレポート・フォルダとみなされないため、空の文字列が戻されます。

- 正しい文字列を戻すには、レポートをフォルダに保存する必要があります。保存されていないレポートに対しては、空の文字列が戻されます。
- ReportFolder関数を含むレポートを開いた場合は、新規フォルダに保存します。印刷プレビューを使用してレポートをプレビューすると、フォルダの元の場所が表示されます。これは、パフォーマンス上の理由によるものです。レポートを再評価するには、グリッドまたはレポート・オブジェクトを変更してから印刷プレビューを実行すると新しいフォルダの場所が表示されます。

ReportModified

ReportModifiedは、現在のレポートが最終変更された日付を戻すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<ReportModified("format", "TimeZoneId")>>
```

引数	説明
format	文字は引用符に囲まれて、日付と時刻のフォーマットを定義します。Formatは、デフォルトで日付/時刻のユーザー・プリファレンスに設定されます。有効な値は、Java SimpleDateFormat、userまたはempty ("user")で使用される値です。 日付と時刻のフォーマットの詳細は、 216ページの表 25 を参照してください。
TimeZoneId	デフォルトでタイムゾーンのユーザー・プリファレンスに設定されます。有効な値は、Java TimeZone.getTimeZone()、またはサーバーのタイムゾーンで使用される値です。 たとえば、TimeZone.getTimeZone()の場合、東海岸を指定するには次のように入力します: America/New_York。



注:

日付と時刻のフォーマットを定義する文字は、大文字と小文字が区別されます。ReportModifiedは、レポートが保存済の場合のみに値を戻します。

例:

「Jan 19, 2013」という日付を挿入します。(これは、レポートの最終変更日です。)

```
Report Modified: <<ReportModified("MMM dd, yyyy")>>
```

ReportModifiedBy

ReportModifiedByは、レポートを最後に保存したユーザーの名前を戻すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<ReportModifiedBy()>>
```

例:

レポートを最後に保存したユーザーの名前を挿入します。

```
<<ReportModifiedBy()>>
```

ReportName

ReportNameは、現在のレポートの名前を戻すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<ReportName()>>
```

例:

レポート名を挿入します。

```
<<ReportName( )>>
```

ReportRunBy

ReportRunByは、レポートを実行しているユーザーの名前を戻すテキスト関数です。この関数は、テキスト・ボックス、テキスト・セル、行見出し、列見出しで使用します。

構文:

```
<<ReportRunBy()>>
```

例:

レポートを実行しているユーザーの名前を挿入します。

RetrieveValue

既存のレポート内のRetrieveValue関数はサポートされなくなったため、GetCell関数を使用するよう手動で更新する必要があります。

条件関数

サブトピック

- [IfThen、If](#)
- [条件演算子](#)
- [複合条件](#)

IfThen、If

IfThenは、条件が真であるか偽であるかに応じて異なる値を戻す条件関数です。

構文:

IfThen(Condition, TrueParameter, FalseParameter)

- 条件は、trueまたはfalseを評価する論理式です。ブール演算子(And、Not、およびOr)と同様に、完全な条件論理を使用できます。条件は、#Missing値および#Error値に対するテストの実行にも使用できます。
- TrueParameterとFalseParameterは、条件の結果に基づいて評価される式です。

条件演算子

[247ページの表 26](#)の条件演算子を使用する場合は、次の点を考慮してください。

- Expressionには、有効な式であれば任意の式を使用できます。式には、定数(整数または実数)の任意の組合せ、参照、またはそれ以外の関数を使用できます。
- Referenceには、有効であれば任意の参照を使用できます。つまり、IFNN参照プロパティを参照の一部として使用できます。
- Conditionは、有効な条件であれば、複合条件And、Not、またはOrに適用される任意の条件を使用できます。これらの演算子は、埋込み条件を持つことができます。(And、NotおよびOr演算子は、カッコで囲まれている必要があります。)

- 条件内のexpressionのいずれかが#Error値または#Missing値を戻す場合、If関数は#Missingまたは#Errorを戻します。ただし、IsMissing条件、IsError条件またはIsNonNumeric条件を使用している場合にはこの規則は適用されません。

表26 条件演算子

条件演算子	構文	論理
次と等しい	expression = expression	<p>左の式が右の式に等しいかどうかを調べます。</p> <p>注:</p> <p>丸め処理が必要な場合は、Round関数を使用します。</p> <p>例:</p> <p style="text-align: center;">1 = 4</p> <p style="text-align: center;">Falseを戻します</p>
次より大きい	expression > expression	<p>左の式が右の式より大きいかどうかを調べます。</p> <p>例:</p> <p style="text-align: center;">1 > 4</p> <p style="text-align: center;">Falseを戻します</p>
次以上	expression >= expression	<p>左の式が右の式より大きい、または等しいかどうかを調べます。</p> <p>注:</p> <p>正しい構文は>=です。構文=>はサポートされていません。</p> <p>例:</p> <p style="text-align: center;">1 >= 4</p> <p style="text-align: center;">Falseを戻します</p>
次より小さい	expression < expression	<p>左の式が右の式より小さいかどうかを調べます。</p> <p>例:</p> <p style="text-align: center;">1 < 4</p> <p style="text-align: center;">Trueを戻します</p>
次より小さい、または次と等しい	expression <= expression	<p>左の式が右の式より小さい、または等しいかどうかを調べます。</p> <p>注:</p> <p>正しい構文は<=です。構文=<は、サポートされていません。</p> <p>例:</p>

条件演算子	構文	論理
		$1 \leq 4$ Trueを返します
次と等しくない	<code>expression <> expression</code> <code>expression != expression</code>	左の式が右の式に等しくないかどうかを調べます。 注: 丸め処理が必要な場合は、Round関数を使用します。 例: $1 <> 4$ Trueを返します $1 != 4$ Trueを返します
IsMissing	<code>IsMissing (reference)</code> <code>IsMiss (reference)</code>	参照先に#Missingの値があるかどうかを調べます。 注: 展開される行や列を参照する場合に条件がTrueになるためには、すべての結果セルの値が#Missingである必要があります。 例: <code>IsMissing([1])</code> 行1の値が#Missingのときに、Trueを返します。
IsError	<code>IsError (reference)</code> <code>IsErr (reference)</code>	参照先に、#Errorの値があるかどうかを調べます。 注: 展開される行や列を参照する場合に条件がTrueになるためには、すべての結果セルの値が#Errorである必要があります。式行および式列のみ結果として#Errorを返すことができます。 例: <code>IsError([2])</code> 行2の値が#Errorのときに、Trueを返します。
IsNonNumeric	<code>IsNN (reference)</code> <code>IsNonNumerid (reference)</code> <code>IfNN (reference)</code>	参照先に、#Missingまたは#Errorの結果が含まれているかどうかを調べます。

条件演算子	構文	論理
	IfNonNumber (reference)	注: 展開される行や列を参照する場合に条件がTrueになるためには、すべての結果セルの値が#Errorまたは#Missingである必要があります。 例: IsNN([3]) 行3の値が#Missingか#Errorのときに、Trueを戻します。
カッコ	(condition)	条件をグループ化します。 例: (1 > 4) Falseを戻します

複合条件

表27 複合条件

複合条件	構文	論理
And	(condition AND condition) (condition & condition)	2つの条件を比較します。すべての条件がTrueの場合にTrueを戻します。 例: (1 > 4 AND 5 > 2) Falseを戻します
Not	NOT (condition) !(condition)	条件の結果を逆転(否定)します。 例: Not (1 > 4) Trueを戻します
Or	(condition OR condition) (condition condition)	2つの条件を比較します。いずれかの条件がTrueの場合にTrueを戻します。 例: (1 > 4 OR 5 > 2) Trueを戻します

複合条件And、OrおよびNotは完全にサポートされています。ただし、カッコで囲まれている必要があります。

有効な例:

```
If ( ([A] > [B] and [A] > 1000), [A], [B])
```

無効な例:

```
If ( [A] > [B] and [A] > 1000, [A], [B])
```

財務関数

サブトピック

- [ランク](#)
- [Variance / Var](#)
- [VariancePercent/VarPer](#)

ランク

Rankは、指定された範囲内の値に対するランク値を算出する財務関数です。Rankは、Financial Reportingで処理され、データベース接続には依存しません。

構文:

```
Rank([Reference], Order)
```

```
Rank([Reference], Order, Unique)
```

引数	説明
Reference	<p>列を識別する文字と行を識別する数字を使用して、ランク付けするセル、行または列の範囲を示します。たとえば、列Aの行1から行5の値をランク付けするには、[A,1:5]と指定します。</p> <p>セル範囲のある.ifNNプロパティを使用して、非数値の値を持つ任意のセルに数値を割り当ててランク付けできます。たとえば、.ifNN(-1)を指定すると、値の欠落したセルすべてに値-1を割り当てます。</p>
Order	<p>値をランク付けする順序を示します。昇順でランク付けする場合の最小値は1です。降順でランク付けする場合の最大値は1です。順序は、次のキーワードまたは値のいずれかで表します。</p> <ul style="list-style-type: none">• Ascending• Descending• Asc• Des• Desc• 1 (数値1は"昇順"と同義)• 0 (ゼロは"降順"と同義) <p>キーワードの大文字と小文字は区別されません。</p> <p>注:</p> <p>順序を指定する数値やキーワードは、引用符で囲みません。</p>

引数	説明
Unique	<p>(オプション)参照パラメータで次のように同等の値を処理する方法を示すブール・キーワード。</p> <ul style="list-style-type: none"> • false(または省略) - 同等の値には、同じランクが付けられます。ランク付けの結果が重複する場合があります。 • true - 同等の値には個別のランクが付けられ、ランクは重複しません。参照パラメータの値は、出現順にランク付けされます。たとえば、行2と行5の値が同じ場合には、行2の値が行5の値より先にランク付けされます。

例:

列Bの式は、列Aの行1から行5にある値を降順でランク付けします。

```
Rank([A,1:5], descending)
```

次のような結果になります。

	East	ランク
Cola	16	2
Fruit Drinks	23	1
Beer	16	2
Diet	欠落	欠落
Root Beer	0	4

2つの値が同じ場合、同じランク値が付けられます。上の例では、ColaとBeerが同じ値であるため、同じランク値が付けられます。

次の列Bの式は、数値でないものに-1という値を割り当て、ランク付けできるようにしています。

```
Rank([A,1:5].ifNN(-1), descending)
```

次のように、欠落値のランクは5になります。

	East	ランク
Cola	16	2
Fruit Drinks	23	1
Beer	16	2
Diet	欠落	5
Root Beer	0	4

例:

次の例では、前述の例の結果に、新しく追加された一意パラメータがどのように影響するかを示します。

次の列Bの式は、非数値に-1という値を割り当て、ランク付けできるようにしています。また、ランクはそれぞれ一意であることも示しています。

```
Rank([A,1:5].ifNN(-1), descending, true)
```

次の結果では、欠落値に5のランクが割り当てられ、コーラと同じデータ値であってもビールには3のランクが割り当てられています。

	East	ランク
Cola	16	2
Fruit Drinks	23	1
Beer	16	3
Diet	欠落	5
Root Beer	0	4

Variance / Var

Varianceは、現在の勘定科目の種別に基づいて、指定された値の差異を評価する財務関数です。収益、フロー、資産、または残高勘定科目での正の結果は増加を示すので、結果は正数として表示されます。支出または負債の勘定科目では、正の結果は減少を示すため、負数で表示されます。

この関数は、標準のOracle Essbase、Oracle Hyperion Planning詳細およびOracle Hyperion Financial Managementデータベース接続に使用できます。

- Essbase: 支出または支出外という勘定科目の種別のディメンションのメンバーを使用できます。
- 資産、負債、資本、収入、支出として定義されている次のUDA(ユーザー定義属性)の勘定科目の種別を使用できます。
- Financial Management: 資産、負債、収益、支出、フロー、残高、経常残高などの勘定科目の種別を使用できません。

構文:

Var(reference1, reference2)

reference1とreference2は、差異を計算するための、同じ勘定科目ディメンションのメンバーの行、列またはセルの参照です。

Essbaseを使用した場合の計算結果

表28 EssbaseでVarianceを使用した場合の計算結果

列A	列B	Var ([A], [B])=0	Var ([A], [B])>0	Var ([A], [B])<0
支出外	支出外	0	正の値を戻します	負の値を戻します
支出	支出	0	負の値を戻します	正の値を戻します

Planningを使用した場合の計算結果

表29 PlanningでVarianceを使用した場合の計算結果

列A	列B	Var ([A], [B])=0	Var ([A], [B])>0	Var ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を返します	負の値を返します
負債	負債	0	負の値を返します	正の値を返します
資本	資本	0	正の値を返します	負の値を返します
収益	収益	0	正の値を返します	負の値を返します
支出	支出	0	負の値を返します	正の値を返します

Financial Managementを使用した場合の計算結果

表30 Financial ManagementでVarianceを使用した場合の計算結果

列A	列B	Var ([A], [B])=0	Var ([A], [B])>0	Var ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を返します	負の値を返します
負債	負債	0	負の値を返します	正の値を返します
収益	収益	0	正の値を返します	負の値を返します
支出	支出	0	負の値を返します	正の値を返します
フロー	フロー	0	正の値を返します	負の値を返します
残高	残高	0	正の値を返します	負の値を返します
経常残高	経常残高	0	正の値を返します	負の値を返します

Variance関数の仕組み

Varianceは、同じ勘定科目の種別での比較を要求します。販売と支出など、2つの異なる勘定科目の種別を比較する場合、Varianceは、勘定科目の種別の論理を適用せず、単純な計算を実行します。次に例を示します。

販売	支出	結果
-400	100	-500

- EssbaseやPlanningを使用している場合に、Variance関数を勘定科目の種別以外のディメンションに適用すると、実行時に#Errorを返します。
- Essbaseで、Variance関数を勘定科目の種別以外のディメンションに適用すると、実行時に#Errorを返します。
- #Missingのセルは、IfNonNumberプロパティを指定していないかぎり、ゼロ(0)として扱われます。
- #Errorのセルは、IfNonNumberプロパティを指定していないかぎり、#Errorの結果を返します。

例

Varianceで使用できる参照は、セル、列または行のみです。詳細は、[178ページの行、列、セルの参照引数](#)を参照してください。

構文	例
列を参照する構文の例:	Var ([A], [B])
行を参照する構文の例:	Var ([3], [4])
セルを参照する構文の例:	Var (Cell [3,A], [3,B])

次に、列A(実績)と列B(予算)の差額を計算する例を示します:

Var ([A], [B])

レポートは、次のようになります。

	Year	Product	Market
	Actual	Budget	Variance
	=====	=====	=====
Sales (Income)	400,855	373,080	27,775
COGS (Expense)	179,336	158,940	-20,396

VariancePercent/VarPer

VariancePercentは、現在の勘定科目の種別に基づいて指定された値の差異をパーセントで評価する財務関数です。収益、フロー、資産、または残高勘定科目での正の結果は増加を示すので、結果は正数として表示されます。支出または負債の勘定科目では、正の結果は減少を示すため、負数で表示されます。

この関数は、標準のEssbaseデータベース接続、Planningデータベース接続およびFinancial Managementデータベース接続で使用できます。

- Essbaseでは、支出または支出外という勘定科目の種別のディメンションのメンバーを使用できます。
- Planningでは、EssbaseをUDA(ユーザー定義属性)の勘定科目の種別(資産、負債、資本、収入、支出としても定義されている)とともに使用できます。
- Financial Managementでは、資産、負債、収益、支出、フロー、残高、経常残高などの勘定科目の種別を使用できます。

構文:

VarPer(reference1, reference2)

ここで、reference1とreference2は、VariancePercentの結果を計算する勘定科目ディメンションと同じディメンションのメンバーである行、列またはセルへの参照です。

Essbaseを使用した場合の計算結果

表31 支出または支出外というEssbase勘定科目のメンバーをVariancePercentで計算した結果。

列A	列B	VarPer ([A], [B])=0	VarPer([A], [B])>0	VarPer ([A], [B])<0
支出外	支出外	0	正の値を戻します	負の値を戻します
支出	支出	0	負の値を戻します	正の値を戻します

Planningを使用した場合の計算結果

表32 UDAというPlanning勘定科目をVariancePercentで計算した結果。

列A	列B	VarPer ([A], [B])=0	VarPer ([A], [B])>0	VaPer ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を戻します	負の値を戻します
負債	負債	0	負の値を戻します	正の値を戻します
資本	資本	0	正の値を戻します	負の値を戻します
収益	収益	0	正の値を戻します	負の値を戻します
支出	支出	0	負の値を戻します	正の値を戻します

Financial Managementを使用した場合の計算結果

表33 Financial Managementの勘定科目をVariancePercentで計算した結果

列A	列B	VarPer ([A], [B])=0	VarPer ([A], [B])>0	VarPer ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を戻します	負の値を戻します
負債	負債	0	負の値を戻します	正の値を戻します
収益	収益	0	正の値を戻します	負の値を戻します
支出	支出	0	負の値を戻します	正の値を戻します
フロー	フロー	0	正の値を戻します	負の値を戻します
残高	残高	0	正の値を戻します	負の値を戻します
経常残高	経常残高	0	正の値を戻します	負の値を戻します

VariancePercentの仕組み

VariancePercentは、同じ勘定科目の種別での比較を要求します。販売と支出など、2つの異なる勘定科目の種別を比較する場合、VariancePercent関数は、勘定科目の種別の論理を適用せず、単純な計算を実行します。次に例を示します。

販売	支出	結果
-400	100	-5.

- EssbaseおよびPlanningでは、VariancePercentを勘定科目以外のディメンションに適用すると、実行時に #Errorを戻します。
- #Missingのセルは、IfNonNumberプロパティを指定していないかぎり、ゼロ(0)として扱われます。
- #Errorのセルは、IfNonNumberプロパティを指定していないかぎり、#Errorの結果を戻します。

例:

VariancePercentで使用できる参照は、セル、列または行のみです。178ページの行、列、セルの参照引数を参照してください。

構文	例
列を参照する構文の例:	VarPer ([A], [B])
行を参照する構文の例:	VarPer ([3], [4])
セルを参照する構文の例:	VarPer (Cell [3,A], [3,B])

次に、列A(実績)と列B(予算)のVariancePercentを計算する例を示します。

VarPer([A],[B])

レポートは、次のようになります。

Year Product Market			
	Actual	Budget	VariancePercent
=====			
Sales(Income)	400,855	373,080	7%
COGS (Expense)	179,336	158,940	-13%

11

エクスプローラのリポジトリの管理

この項の内容:

フォルダの作成	257
リポジトリ内のオブジェクトの複製	258
レポート・オブジェクトのフィルタ	258
リポジトリの項目の切り取り、コピー、貼付け	258
データベース接続の管理	258
リポジトリのオブジェクトとレポート・オブジェクトのエクスポート	259
レポート・オブジェクトのリポジトリへのインポート	259
電子メールによるレポートへのリンクの送信	259
リポジトリのアイテムの削除	259
リポジトリ内のレポートとレポート・オブジェクトのデータベース接続の変更	260
レポートのデータベース接続の変更	260
リポジトリのオブジェクトのセキュリティの管理	260

エクスプローラのリポジトリにはFinancial Reportingオブジェクト(レポート、スナップショット、グリッド、チャート、イメージ・オブジェクト、テキスト・オブジェクト、行、行と列のテンプレート)が保管されます。また、レポートの印刷と印刷プレビューを行ったり、列フィールド・ヘッダーをクリックしてアイテムをソートすることもできます。

リポジトリに保存されたアイテムは何度も使用できます。たとえば、他のレポートに基づいてレポートを設計したり、イメージ・オブジェクトなどのレポート・オブジェクトを複数のレポートで使用することもできます。

ワークスペースで使用できるすべての機能にアクセスするには、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

この章は、次のトピックで構成されています:

フォルダの作成

フォルダを作成および使用すると、リポジトリ内のアイテムの整理に役立ちます。リポジトリ内での作業中や、レポートやレポート・オブジェクトを保存する際に、複数の階層にフォルダを追加できます。オブジェクトがリポジトリに追加された場合、そのオブジェクトにアクセスできるのは、デフォルトでは、そのオブジェクトの追加を行ったユーザーと管理者のみです。

他のユーザーによるオブジェクトの表示を許可するには、作成者またはレポート・デザイナーが他のユーザーまたはグループにアクセス権を割り当てる必要があります。フォルダを作成するには、レポート・デザイナーまたはグローバル管理者の役割が必要です。

- ▶ リポジトリ内にフォルダを作成するには:

1. Financial Reportingを起動します。

リポジトリが表示されます。

2. フォルダを配置する場所をクリックします。
3. 「ファイル」、「新規」、「フォルダ」の順に選択します。デフォルトのフォルダ名は、「新規フォルダ」です。
4. フォルダ名を「新しいフォルダ名の入力」テキスト・ボックスに入力します。名前には、大文字、小文字、数字およびスペースを使用できます。
5. 「OK」をクリックして、フォルダをアクティブにします。

リポジトリ内のオブジェクトの複製

ワークスペースを使用してリポジトリにオブジェクトを複製します。

詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド』を参照してください。

レポート・オブジェクトのフィルタ

レポート、スナップショット、保存したレポート・オブジェクトなどのリポジトリ・オブジェクトをフィルタして、オブジェクトの検索に役立てることができます。検索するオブジェクトのタイプによってレポート・オブジェクトをフィルタします。リポジトリのすべてのフォルダで、一致するオブジェクト・タイプが検索され、ツリー階層にフォルダごとに表示されません。様々なフィルタの組合せを使用できます。

▶ オブジェクト・タイプごとにソートするには:

1. 「表示」、「表示するアイテムのタイプ」の順に選択します。
2. リポジトリに表示するオブジェクトのタイプ(すべて、レポート、スナップショット、ブック、スナップショット・ブック、バッチ、保存したレポート・オブジェクト)を選択します。
3. オプション: 別のオブジェクト・タイプを追加するには、手順1と2を繰り返します。

リポジトリ内のすべてのオブジェクト・タイプを再度表示するには、「表示」、「表示するアイテムのタイプ」、「すべて」の順に選択します。

列見出しをクリックしても、オブジェクトをソートできます。たとえば、「変更日時」見出しをクリックするとレポートが古い順または新しい順に表示され、「名前」見出しをクリックするとレポート・オブジェクトがアルファベット順に表示されます。

リポジトリの項目の切取り、コピー、貼付け

ワークスペースでは、リポジトリ内のフォルダ間でレポート・オブジェクトを移動するために切取りと貼付け機能を使用できます。切取りと貼付け機能を使用できるかどうかは、アクセス権によって異なります。

詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド』を参照してください。

データベース接続の管理

データベース接続マネージャは、ワークスペースにあります。これにより、レポート、ブック、スナップショット、スナップショット・ブック、保存したレポート・オブジェクト(行/列テンプレート、グリッド)、バッチ、スケジュール済バッチを管理で

きます。レポートとレポート・オブジェクトを開発環境から本番環境に移動したり、本番用サーバーの間で移動したりできます。

ワークスペースを使用してデータベース接続を管理します。データベース接続の追加、編集および削除の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。



注:

Financial Reportingデータベース・マネージャでは、Web Analysisデータベースは管理されません。

リポジトリのオブジェクトとレポート・オブジェクトのエクスポート

ワークスペース・エクスプローラでは、保存したオブジェクト、レポート・オブジェクトおよびフォルダを、コンピュータの特定ディレクトリにエクスポートできます。

エクスポート時に、エクスポートするオブジェクトのフォーマットを指定できます。オブジェクトとレポート・オブジェクトのエクスポートの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

レポート・オブジェクトのリポジトリへのインポート

ワークスペース・エクスプローラでは、以前にファイル・システムにエクスポートしたオブジェクト、レポート、フォルダおよび圧縮ファイルをインポートできます。

オブジェクトのインポートの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

電子メールによるレポートへのリンクの送信

ワークスペース・エクスプローラを使用すると、電子メール・リンク機能を使用して、電子メールによりオブジェクトまたはフォルダのURLリンクを送信できます。Financial Reportingユーザーは、このリンクをワークスペースで開くことができます。電子メールを送信するときに、頻繁に使用する電子メール・アドレスのリストを追加し、保管することもできます。

電子メールによるレポートへのリンクの送信の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

リポジトリのアイテムの削除

不要になったアイテムをリポジトリから削除します。アクセス権を持つアイテムは完全に削除できます。

▶ リポジトリのアイテムを削除するには:

1. リポジトリのリストから、削除するアイテムを選択します。



ヒント:

「表示」、「表示するアイテムのタイプ」の順に選択すると、リポジトリをフィルタできます。レポート、スナップショット、保存したレポート・オブジェクトのいずれかのタイプを選択します。



ヒント:

リポジトリで連続する複数のアイテムを選択するには、[Shift]を押します。リポジトリで連続しない複数のアイテムを選択するには、[Ctrl]を押します。

2. 「編集」、「削除」の順に選択します。
3. 「はい」をクリックして削除を確認します。



注:

フォルダを削除する前に、その中に含まれているすべてのオブジェクトを削除する必要があります。非表示オブジェクトを含むフォルダは、十分なセキュリティ権限がないため、削除できません。

リポジトリ内のレポートとレポート・オブジェクトのデータベース接続の変更

ワークスペースを使用すると、リポジトリ内のレポートとブックのデータベース接続を変更できます。開発環境のサーバーから本番環境のサーバーに移動する場合などにデータベース接続を変更できます。

データベース接続の変更の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

レポートのデータベース接続の変更

レポートのデータベース接続をEssbaseからPlanningへ、またはその逆に変更する場合は、データ・ソースの参照のみが変更されるので、いくつかの制限があります。変換は行われません。

- レポートのデータベース接続をPlanningに変更する場合の考慮事項のリストは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。
- レポートのデータベース接続をPlanningから変更する場合の考慮事項のリストは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

リポジトリのオブジェクトのセキュリティの管理

ワークスペースを使用すると、リポジトリのオブジェクト(レポート、スナップショット・レポート、ブック、スナップショット・ブックおよびバッチ)、フォルダ、およびレポート・オブジェクト(チャート・オブジェクト、グリッド・オブジェクト、テキスト・

オブジェクト、グリッド、イメージ・オブジェクトおよびグラフィック)にセキュリティを適用できます。特定ユーザーおよびグループに対してオブジェクト、フォルダおよびレポート・オブジェクトのアクセス権を制限するか、許可することで、これらのセキュリティを確保します。このため、特定の設計者またはユーザーのみがFinancial Reportingからリポジトリのオブジェクトを表示できます。リポジトリのアクセス権が制限されているかどうかは、管理者がユーザーまたはグループに割り当てる役割と権限によって決まります。

役割とアクセス権の詳細は、『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザー・ガイド*』を参照してください。

12

バッチ処理の使用方法

管理者権限または設計者権限がある場合、ワークスペースを使用してバッチを作成、編集および保存できます。バッチ・スケジューラの機能を使用してバッチのスケジュールを設定することもできます。バッチは、レポートやブックのセットをグループ化したり処理したりするために使用します。バッチを実行して生成した出力をプリンタやリポジトリに送信でき、HTMLファイルおよびPDFファイルとしてエクスポートできます。また、エクスポートされた出力をユーザーに電子メールで送信できます。

バッチ・エディタでバッチを定義および保存したり、リポジトリのバッチをコピーおよび削除したりできます。リポジトリからバッチを削除するには、バッチへのアクセス権が必要です。デフォルトでは、スケジュールしたユーザーのみに、リポジトリに保存されているスナップショットおよびスナップショット・ブックへのアクセス権が割り当てられます。バッチへのアクセス権があり、スケジュールされている場合はバッチの各レポートを実行できます。スケジュールしたユーザーはスケジュール時に他のユーザーおよびグループにアクセス権を割り当てることができます。

バッチには、スケジュール時に変更できるバッチのPOVがあります。また、バッチのプロンプト情報を指定することもできます。指定されたPOVおよびプロンプト情報に従って、バッチに含まれている各ブックおよびレポートに指定されたPOVとプロンプトの値が指定されます。スケジュールを設定して、バッチをすぐに処理することも、後で処理することもできます。

バッチ処理の詳細は、『*Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド*』を参照してください。

13

ブックとスナップ ショット・ブックの操作

ワークスペースを使用すると、レポートとスナップショットを組み合わせてブックを作成できます。これにより、1回のセッションでこれらのレポートの出力を生成できます。また、様々なメンバーに合わせて実行する、様々なバージョンのレポートを生成するようにブックを構成できます。これらのレポートを含んでいるブックを作成することによって、すべてのレポートを一度に実行できます。このブックに含まれているレポートの印刷および表示は、個別に行うことも、ブック全体として行うこともできます。

定義してエクスプローラ・リポジトリに保存できるブックのタイプは次の2つです。

- **ブック**。レポートおよびスナップショットをブックに追加できます。レポートおよびスナップショットをブックに追加できます。ブックを実行すると、レポート内のデータはデータベースから動的に取得されます。スナップショット内のデータは静的なままです。
- **スナップショット・ブック**。ブックをスナップショット・ブックとして保存できます。すべてのレポートはその期間の静的データを含んでいるスナップショットに変換されます。レポートに含まれるデータおよび目次は、ブックをスナップショット・ブックとして保存したときに作成されます。スナップショット・ブックを表示したとき、データレベルのセキュリティは適用されません。データレベルのセキュリティは、スナップショット・ブックが作成されたときに適用され、スナップショット・ブックを保存したユーザーに対して設定されているデータ・レベル・セキュリティに基づきます。

ワークスペースを使用すると、Financial Reportingからブックとスナップショット・ブックに次のタスクを行うことができます。

- バッチを使用して、一連のブックをグループ化し、処理する。
- リポジトリのブックまたはスナップショット・ブックへのリンクを電子メールで送信する。
- リポジトリにあるブックのデータ・ソースを変更する。
- リポジトリのブックまたはスナップショット・ブックの正確なコピーを作成する。
- ブックまたはスナップショット・ブックを完全に削除する。
- リポジトリの外のファイル・システムからブックとスナップショット・ブックをインポートする。ブックをインポートすると、エクスポート・リポジトリ内に保存されます。その後、ブックに対してタスクを実行できます。
- ブックおよびスナップショット・ブックをエクスポートする。

前述のトピックの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceユーザーガイド』を参照してください。

14

Financial Reportingの管理情報

この項の内容:

非ASCIIユーザー・アカウントのサポート	267
POVの管理	267
ユーザーのPOVユーティリティの使用法	268
Financial Reportingの初期ユーザー・プリファレンスの定義	271
レポート・サーバーのタスク	272
Essbaseのポート	275
スケジューラのコマンド・ライン・インタフェース	278
バッチ入力ファイルのXMLタグ・リファレンス	282
ADMプロパティ値の最大長の増加	285
Microsoft Wordテンプレート	285
注釈でのセル・テキスト、Planningユニットの注釈、およびFinancial Reportingドキュメントの表示	287
Linux/UNIXサーバー環境でのFinancial Reportingのフォントの更新	287

非ASCIIユーザー・アカウントのサポート

Financial Reporting Studioのログオン・ページでは、Windowsのデフォルト・フォントに合わせてページの文字を表示することが要件です。そのため、たとえば、日本語のオペレーティング・システムで韓国語の文字が正しく表示されるようにするには、日本語のマシンのデフォルトのシステム・フォントを韓国語に変更する必要があります。共通のシステム・ダイアログには、デフォルト言語を使用して表示されるものがあります。これらは、フォントの元がFinancial Reportingのユーザー言語ではなく、デフォルト言語であるWindowsダイアログです。そのため、ユーザーが望む言語に適した外国語のオペレーティング・システムを使用するか、Windowsのデフォルト言語を望ましい言語に設定することをお勧めします。

POVの管理

ユーザーのPOVの管理ユーティリティは、管理者が1人以上のユーザーのFinancial Reporting POVを作成、表示、更新および削除するときに使用するコマンド・ライン・ユーティリティです。このユーティリティは、Reporting Studioとともに、ManageUserPov.cmdとしてEPM_ORACLE_HOME\Products\financialreporting\binディレクトリにインストールされ、ManageUserPOV.propertiesというサンプル構成ファイルが提供されています。

ユーティリティを実行するには、EPM_ORACLE_HOME\Products\financialreporting\binディレクトリでコマンド・プロンプトを開き、ManageUserPov.cmdを実行します:

```
ManageUserPOV<Mode> <ConfigFileName>
```

ここでModeはImport、ExportまたはDelete (大文字と小文字を区別)です。

ここでConfigFileNameは構成ファイルの名前(デフォルト名はEPM_ORACLE_HOME\Products\financialreporting\binディレクトリのManageUserPov.properties)です。

例: ManageUserPOV Export ManageUserPov.properties

POVユーティリティを実行する前に、構成ファイル(ManageUserPov.propertiesなど)、およびインポート用のインポートファイル(ManageUserPovImport.xmlなど)の2つのファイルをあらかじめ定義しておく必要があります。<financialreporting>\binディレクトリには、サンプルファイルが提供されています。

- ManageUserPov.propertiesファイル。このファイルを使用すると、レポート・サーバーの定義、管理者とデータ・ソースの資格証明の割当て、インポートとエクスポート・ファイル名の指定、およびユーザーとデータ・ソース・フィルタ、ドライ・ランの実施、ユーザーのPOVの削除の確認などの各種オプションの設定を行うことができます。詳細はサンプルのManageUserPov.propertiesファイルを参照してください。
- ManageUserPovImport.xmlファイル。ManageUserPovImport.xmlなどのImportFileName。エクスポート中に作成されたXMLファイルも編集してインポートできます。

インポート動作のガイドライン

- リポジトリに存在しないデータベース接続は、TYPE、SERVER、APPNAMEおよびDBNAME属性が提供されている場合は作成されます。有効なデータ・ソースのタイプは、Essbase、Financial ManagementおよびPlanningです。
- すべてのディメンションおよびメンバーは、有効なユーザーPOVのみを作成または更新するために、データ・ソースに対して検証されます。
- メンバーに対する個々のユーザーのアクセスは検証されません。管理者は、表示するためのアクセス権を持つユーザーのみにユーザーPOVを割り当てる必要があります。
- ユーザーPOVは、プロビジョニングされたユーザーのみに作成されます。
- 部分ユーザーPOVも有効です。インポート・ファイルに指定されたディメンションのみが更新されます。

ユーザーのPOVユーティリティの使用方法

ここでは、ユーザーのPOVユーティリティの使用方法について説明します。

ユーザーのPOVのエクスポート

▶ すべての既存のユーザーのPOVをエクスポートするには:

1. ManageUserPov.propertiesファイルを編集し、ReportServerを指定します。
2. financialreporting\binディレクトリでコマンド・プロンプトを開き、ManageUserPov.cmd Export ManageUserPov.Propertiesと入力します。
3. メッセージが表示されたら、管理ユーザーとパスワードを入力します。

システム内の現在のすべてのユーザーのPOVを含むManageUserPovExport.xmlファイルが作成されます。
コンソールとの対話のサンプル:

```
EPM_ORACLE_HOME\Products\financialreporting\binManageUserPov.cmd Export
ManageUserPov.properties
```

```
Please enter AdminUser : AdminUser
```

```
Please enter AdminPassword :*****
```

```
INFO : Starting Hyperion Financial Reporting ManageUserPOV Utility
```

```
INFO : Ending Hyperion Financial Reporting ManageUserPOV Utility
```

ユーザーのPOVのインポート

▶ 既存のユーザーのPOVを更新するには:

1. 手順に従って、すべての既存のユーザーのPOVをエクスポートします。
2. `ManageUserPovExport.xml`ファイルを開き、ファイルで必要なユーザーのPOVを更新します。たとえばMarketディメンションでメンバー名に「East」、ユーザー・ログインIDに「TestUser」、`DATASOURCE_NAME`に「Essbase Sample Basic on TestServer」を指定します。
3. `ManageUserPov.properties`ファイルを開き、次のフィルタを指定して、1つのユーザーとデータソースの更新を実行します:

```
Users = TestUser
```

```
Datasources = Essbase Sample Basic on TestServer
```



注:

データソースの資格証明が管理者の資格証明と異なる場合、`DatasourceUser=*`、`DatasourcePassword=*`のように、アスタリスク(*)を指定して、これらの入力を個別に求める必要があります。

4. `ManageUserPovImport.xml`という名前でファイルを保存します。
5. `financialreporting\bin`ディレクトリでコマンド・プロンプトを開き、`ManageUserPov.cmd Import ManageUserPov.properties`と入力します。
6. メッセージが表示されたら、管理ユーザーとパスワード、および必要に応じてデータソース・ユーザーとパスワードを入力します。

ユーザーのPOVがMarketの新しい値で更新されます。コンソールとの対話のサンプル:

```
C:\Hyperion\financialreporting\bin>ManageUserPov.cmd Import
ManageUserPov.properties
```

```
Please enter AdminUser : AdminUser
```

```
Please enter AdminPassword :*****
```

```
Please enter DataSourceUser : TestUser
```

```
Please enter DataSourcePassword :*****
```

```
INFO : Starting Hyperion Financial Reporting ManageUserPOV Utility
INFO : Setting POV for user: TestUser
INFO : Processing DataSource: Essbase Sample Basic on TestServer
INFO : Processing Year = Year
INFO : Processing Measures = Measures
INFO : Processing Product = Product
INFO : Processing Market = East
INFO : Processing Scenario = Scenario
INFO : Processing Caffeinated = Caffeinated
INFO : Processing Ounces = Ounces
INFO : Processing Pkg Type = Pkg Type
INFO : Processing Population = Population
INFO : Processing Intro Date = Intro Date
INFO : Processing Attribute Calculations = Attribute Calculations
INFO : Ending Hyperion Financial Reporting ManageUserPOV Utility
```

ユーザーのPOVの削除

▶ 既存のユーザーのPOVを削除するには:

1. `ManageUserPov.properties` ファイルを編集し、`ReportServer` と必要なフィルタを指定します。たとえば、`Essbase Sample Basic on TestServer` データソースの1つのユーザー `TestUser` のPOVを削除するには、次のように指定します:

```
Users = TestUser
```

```
Datasources = Essbase Sample Basic on TestServer
```

2. `EPM_ORACLE_HOME\Products\financialreporting\bin` ディレクトリでコマンド・プロンプトを開き、`ManageUserPov.cmd Delete ManageUserPov.properties` と入力します。
3. メッセージが表示されたら、管理ユーザーとパスワードを入力します。

ユーザーのPOVが削除されます。コンソールとの対話のサンプル:

```
EPM_ORACLE_HOME\Products\financialreporting\binManageUserPov.cmd Delete
ManageUserPov.properties
```

```
FR_Studio_Installation_Directory\Products\financialreporting\binManageUserPov.cmd
Delete ManageUserPov.properties
```

Please enter AdminUser : AdminUser

Please enter AdminPassword :*****

INFO : Starting Hyperion Financial Reporting ManageUserPOV Utility

This action will delete 1 POV's

Are you sure you want to proceed? Press 1 to Proceed and 0 to Cancel : 1

INFO : Ending Hyperion Financial Reporting ManageUserPOV Utility

Financial Reportingの初期ユーザー・プリファレンスの定義

JConsole.exeファイルの設定を使用すると、すべてのユーザーに対するFinancial Reportingの初期ユーザー・プリファレンスを定義できます。これらの設定は、エンド・ユーザーがEPM Workspaceに初めてログインしたときに表示されます。設定は、必要に応じて「ユーザー・プリファレンス」ダイアログ・ボックスで変更できます。

JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting* 管理者ガイドのプロパティ情報に関するトピックを参照してください。

定義可能な設定は、次のとおりです:

Specify a default user preference value for ruler unit.

Value can be either Inches or Centimeters.

#com.hyperion.reporting.HRPrefs.Units=

Specify a default user preference value for grid line color.

Value is in the format of #RRGGBB where RR is hex value for red, GG is hex value for green and BB is blue as specified by HTML specifications.

#com.hyperion.reporting.HRPrefs.glcolor=

Specify a default user preference value for grid line style.

Value can be either Line or Dot.

#com.hyperion.reporting.HRPrefs.glstyle=

Specify a default user preference value for grid line snapping.

Value can be either True or False.

#com.hyperion.reporting.HRPrefs.glsnap=

Specify a default user preference value for MS Office version.

#com.hyperion.reporting.HRPrefs.office_format=
Specify a default user preference value for location of User POV bar.
Value can be either above or viewpane.
#com.hyperion.reporting.HRPrefs.locationuserpov=
Specify a default user preference value for user's language.
Value can be any ISO language code for supported languages.
#com.hyperion.reporting.HRPrefs.language=
Specify a default user preference value for user's country.
Value can be any ISO country code for supported country.
#com.hyperion.reporting.HRPrefs.country=
Specify a default user preference value for view type.
Value can be html or pdf
#com.hyperion.reporting.HRPrefs.viewtype=
Specify a default user preference value for digit grouping.
Value can be , . or _
#com.hyperion.reporting.HRPrefs.digitgroup=
Specify a default user preference value for showing Preview User POV dialog.
#com.hyperion.reporting.HRPrefs.previewuserpov=
Value can be 0 or 1
Value of 1 will display Preview User POV dialog whereas 0 will not.
Specify a default user preference value for decimal symbol.
Value can be , . or _
#com.hyperion.reporting.HRPrefs.decimalsymbol=

レポート・サーバーのタスク

サブトピック

- [計算の最大繰返し回数の指定](#)
- [ファイアウォール環境またはポート競合を解決するためのFinancial Reporting TCPポートの割当て](#)
- [NATを実行するデバイスからのサーバー・コンポーネントへのアクセス](#)

インストール・プロセスで、Financial Reportingサーバーの構成を実行できます。ここでは、実行可能な他のタスクについて説明します。

計算の最大繰返し回数 の指定

JConsole.exeファイルのMaximumCalculationIterationsプロパティに、すべてのグリッドとセルに対する計算の最大繰返し回数を指定して、式の参照内の依存関係を解決できます。グリッドの計算プロセスでは、参照の優先順位により、セルを複数回評価する場合があります。これは通常、他のグリッドを参照するグリッドで生じます。最大繰返し回数プロパティは、式のセルを未解決とマークする前に評価する回数を示します。最大繰返し回数プロパティを設定することで、循環参照のセルが無制限に評価されるのを防止できます。循環参照は、1つのセルが別のセルを参照し、さらに参照先のセルが参照元のセルを参照する場合に生じます。

循環参照がないのに、計算のセルで#errorが戻される場合は、最大繰返し回数プロパティの値を増加できます。計算のデフォルト最大繰返し回数は5です。このファイルには、必要に応じてこの値を変更する際に役立つコメントが含まれています。



注:

JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting管理者ガイド*のプロパティ情報に関するトピックを参照してください。

ファイアウォール環境またはポート競合を解決するためのFinancial Reporting TCPポートの割当て

Financial Reportingのコンポーネントは、デフォルトで動的に割り当てられたTransmission Control Protocol (TCP)ポートのRMI (リモート・メソッドの呼出し)により相互に通信します。ファイアウォールを通して通信する場合は、ファイアウォールによって隔てられたFinancial Reportingの各コンポーネントのポートをJConsole.exeファイルに指定し、ファイアウォールの必要なポートを開く必要があります。

また、レポート・サーバーのRDBM、レポートを実行するデータソース、およびLDAPやNTMLMでの外部認証用のポートを開かなければならないこともあります。



注:

ポートは、ファイアウォールを通して通信する必要があるFinancial Reportingの各コンポーネントのみに対してファイアウォールで開く必要があります。Financial Reportingのコンポーネントがファイアウォールで隔てられていない場合は、デフォルトの動的ポート設定を使用できます。

スケジューラ・サーバーのデフォルト値は8299で、この値はSchedulerServerプロパティを変更して再起動すると変更できます。印刷サーバーのデフォルト値は8297で、この値はPrintServersプロパティを変更して再起動すると変更できます。一度接続すると、すべてのRMIサービスでは通信用に匿名ポートをデフォルトで使用できます。かわりに、Financial Reporting構成内でRMIPortRangeLowerおよびRMIPortRangeUpperを設定することで通信用のポート範囲を構成することもできます。Financial Reportingプロパティは、HITレジストリに格納され、JConsoleまたはEnterprise Managerを使用して変更できるようになりました。JConsole.exeファイル

でRMIPortRangeUpperおよびRMIPortRangeLowerを使用して、ポート割当てをサーバーのファイアウォール環境で使用するように変更できます。



注:

JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting* 管理者ガイドのプロパティ情報に関するトピックを参照してください。



注:

ファイアウォールの外側からインストールされたFinancial Reporting StudioからNetwork Address Translatedサーバーに接続できない場合、回避策としてDuseHostname=true JVMパラメータを基礎サーバーに追加し、policies:iiop:server_address_mode_policy:publish_hostname="true"プロパティをdefault-domain.cfgに追加します。

NATを実行するデバイスからのサーバー・コンポーネントへのアクセス

サブトピック

- [ネットワーク・アドレスの変換\(NAT\)](#)
- [リモート・メソッドの呼出し\(RMI\)](#)
- [NATを実行するデバイスでRMIを使用する場合の問題点](#)
- [UNIXシステムにおける必須のJava引数の追加](#)

次に、ネットワーク・アドレスの変換(Network Address Translation:NAT)を使用してサーバー・コンポーネントにアクセスする方法について説明します。

ネットワーク・アドレスの変換(NAT)

NATは、ルーターなどのデバイスが2つのネットワークの間でエージェントとして動作できるようにします。1つのIPアドレスでコンピュータのグループ全体を指す必要があります。

リモート・メソッドの呼出し(RMI)

Financial Reportingでは、クライアントとサーバー間の通信は、Javaのリモート・メソッドの呼出し(RMI)プロトコルによって行われます。RMIサーバー・プログラムは、デフォルトで実行するコンピュータのIPアドレスを使用してクライアントと通信します。

NATを実行するデバイスでRMIを使用する場合の問題点

Java RMIとNATの両方を使用する環境では、Javaがクライアントの要求をNATで指定された仮装アドレスにではなく、RMIサーバーを実行しているコンピュータのIPにルーティングしようとする問題が発生します。

この問題を防ぐには、Java仮想マシン(JVM)に2つの引数を渡します。RMIサーバー・プログラムが、NATを行うルーターなどの別のコンピュータやデバイスのIPアドレスを使用してクライアントと通信できるようになります。

レポート・クライアントのコンピュータが、NATで送信パケットをマスクするデバイスからレポート・サーバー・コンポーネントにアクセスする場合は、次に説明する操作を行う必要があります。

UNIXシステムにおける必須のJava引数の追加

次の手順では、ファイアウォール使用時にUNIXシステムにJavaの引数を追加する方法について説明します。

▶ WebLogic Webサーバーの場合:

1. /…/Oracle/Middleware/user_projects/epmsystem1/bin/deploymentScripts/setCustomParamsFinancialReporting.shをテキスト・エディタで開いて、JAVA_OPTIONS変数宣言に-Djava.rmi.server.hostname=<IP or hostname of NAT device> -Djava.rmi.server.useLocalHostname=falseを追加します。
2. コンポーネントを起動または再起動します。

Essbaseのポート

サブトピック

- [現在のEssbase接続の確認](#)
- [Essbaseの構成ファイルの設定の変更](#)
- [Essbaseポートの最大数の式の計算](#)

ここでは、Financial Reportingのこのリリースを実行する場合のEssbaseポートと接続の違いについて説明します。

重要な考慮事項:

- ライセンスは、Essbaseポートごとに供与されます。
- Essbaseの100同時ユーザーライセンスとは、100のEssbaseポートがライセンス供与されていることを意味します。
- 各ポートの接続数には制限がありません。
- Essbaseに対して開く接続数は、ライセンス供与において重要ではありません。重要なのは、Essbaseポートの数です。

ユーザーがFinancial Reportingのレポートを実行すると、Essbaseに対する接続が開きます。これらの接続は、パフォーマンスを最適化するためにキャッシュされます。接続がアイドル状態になると、アイドル状態の接続を閉じるプロセスが定期的に行われます。

システム管理者は、接続がアクティブでないとみなされるまでの時間(MinimumConnectionInactiveTime、デフォルトは5分)と、アクティブでない接続を閉じるまでの時間(CleanupThreadDelay、デフォルトは5分)を、JConsole.exeファイルで変更できます。



注:

JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting管理者ガイド*のプロパティ情報に関するトピックを参照してください。

Financial Reportingが使用するポートの数は、次のように構成によって異なります:

- WindowsのUIなどのレポート・クライアントがレポートを実行する場合は、2つのEssbase接続(レポート・クライアントとレポート・サーバーに1つずつ)が確立されます。
- レポート・クライアントとレポート・サーバーが同じコンピュータにある場合は、1つのEssbaseポートを使用して2つのEssbase接続が確立されます。
 - レポート・クライアントは、レポートを表示しているウィンドウを閉じるまで、Essbase接続を維持します。
 - レポート・サーバーは、開いているアイドル状態の接続を閉じるプロセスが実行されるまで、このEssbase接続を維持します。
 - 両方の接続が閉じているときは、ポートは解放されています。
- レポート・クライアントとレポート・サーバーが別々のコンピュータにある場合は、2つのEssbaseポートを使用して2つのEssbase接続が確立されます。
 - レポート・クライアントは、レポートを表示しているウィンドウを閉じるまで、Essbase接続を維持します。
 - レポート・サーバーは、開いているアイドル状態の接続を閉じるプロセスが実行されるまで、このEssbase接続を維持します。
 - レポート・クライアントの接続を閉じると、その接続のポートが解放されます。
 - Financial Reportingの接続を閉じると、その接続のポートが解放されます。

ブラウザのUIなどのReporting Studioユーザーがレポートを実行する場合は、2つのEssbase接続(Webサーバーとレポート・サーバーに1つずつ)が確立されます。

- Webサーバーとレポート・サーバーが同じコンピュータにある場合は、1つのEssbaseポートを使用して2つのEssbase接続が確立されます。
 - Webサーバーは、開いているアイドル状態の接続を閉じるプロセスが実行されるまで、このEssbase接続を維持します。
 - レポート・サーバーは、開いているアイドル状態の接続を閉じるプロセスが実行されるまで、このEssbase接続を維持します。
 - 両方の接続が閉じているときは、ポートは解放されています。
- Webサーバーとレポート・サーバーが別々のコンピュータにある場合は、2つのEssbaseポートを使用して2つのEssbase接続が確立されます。
 - Webサーバーは、開いているアイドル状態の接続を閉じるプロセスが実行されるまで、このEssbase接続を維持します。
 - レポート・サーバーは、開いているアイドル状態の接続を閉じるプロセスが実行されるまで、このEssbase接続を維持します。
 - Webサーバーの接続を閉じると、その接続のポートが解放されます。
 - レポート・サーバーの接続を閉じると、その接続のポートが解放されます。

推奨構成は次のとおりです:

- レポート・サーバーとWebサーバーを同じコンピュータにインストールします。
- レポート・クライアントを他の数台のコンピュータにインストールします。この場合、レポート・クライアントを使用するユーザーにのみ2つのEssbaseポートを使用する必要があります。Webサーバーとレポート・サーバーが同じコンピュータにあるので、EPM Workspaceのレポートを表示するために接続するすべてのユーザーは、Essbaseユーザーごとに1つのEssbaseポートを使用します。

現在のEssbase接続の確認

Essbaseサーバーのコマンド・ウィンドウで現在の接続を確認するには、コマンド・ウィンドウにUSERSと入力します。現在の接続と現在使用中のポートが表示されます。

Essbaseの構成ファイルの設定の変更

essbase.cfgファイルで次のEssbaseクライアント設定を追加または増加すると、Essbase接続タイムアウトが減少します。

- NETDELAY 1000
- NETRETRYCOUNT 1000

Essbaseポートの最大数の式の計算

Financial Reportingに必要なEssbaseポートの最大数を計算する基本的な式は次のとおりです。

- EPM Workspaceとレポート・サーバーが同じコンピュータにある場合:

Essbaseポートの数 = 2 X レポート・クライアントの数

+ EPM Workspaceユーザーの数

- EPM Workspaceとレポート・サーバーが異なるコンピュータにある場合:

Essbaseポートの数 = 2 X レポート・クライアントの数

+ 2 X EPMワークスペースの数



注:

この式はFinancial Reporting用で、アプリケーション・マネージャ、Oracle Hyperion Web Analysis、Excelのアドインなど、他の手段でEssbaseに接続するユーザーには適用されません。このような潜在的なポート利用者については、個別に考慮する必要があります。Financial Reportingコンポーネントの一部として同じコンピュータ上で使用する場合、同じEssbaseユーザーIDを使用するかぎり、他に追加のポートは利用されません。

データ・ソースの考慮事項は次のとおりです:

- 2つのデータ・ソースを使用するレポートを実行する場合は、接続数は2倍になりますが、前述のように、ポートの数は変わりません。
- 同様に、3つのデータ・ソースを使用するレポートを実行する場合も、接続数は3倍になりますが、ポートの数は変わりません。
- 2つのデータ・ソースを使用するレポートを閉じてから3つ目のデータ・ソースを使用するレポートを実行すると、接続数は増えますが、ポートの数は変わりません。

ユーザー接続は、少なくとも5分間は開いています。新規のアクティビティが発生しない場合、最大10分間はそのまま開いています。Essbaseポートの数に制限があり、多数のユーザーがFinancial Reportingにアクセスする場合は、これら両方の値を30秒(30000)まで小さくすることができます。

スケジューラのコマンド・ライン・インタフェース

サブトピック

- [バッチ入力ファイルの作成](#)
- [コマンド・ラインからのバッチの起動](#)
- [外部スケジューラを使用したバッチのスケジュール](#)
- [パスワードのエンコード](#)
- [属性の変更](#)

スケジューラのコマンド・ライン・インタフェースは、コマンド・ラインからFinancial Reportingのバッチ入力ファイルを起動するプロセスです。外部スケジューラを使用したバッチ入力ファイルの起動プロセスや、集計の完了などの外部イベントが発生した後のバッチ入力ファイルの起動プロセスを自動化できます。



注:

Financial Reportingスケジューラが正常に電子メールによる通知を送信するには、有効なSMTPメール・サーバーをJConsole.exeファイルに指定する必要があります。

バッチ入力ファイルの作成

バッチ入力ファイルでは、スケジュールを設定するバッチのオプション(スケジュールを設定するバッチ名、出力先、電子メール通知情報、POV設定など)を指定します。

▶ バッチ入力ファイルを作成するには:

1. 「バッチ・スケジューラ」ダイアログ・ボックスで前にスケジュールしたバッチを右クリックし、「コマンド・ラインでのスケジュール用にエクスポート」を選択します。
2. mybatch.xmlファイルを開きます。ここで、mybatchは、バッチ入力ファイルの名前です。
3. 必要に応じて、このファイルのタグの間にある値を編集します。よく使用する属性の詳細は、[280ページの属性の変更](#)を参照してください。

コマンド・ラインからのバッチの起動

financialreporting\binディレクトリのScheduleBatch.cmdコマンド・ファイルを使用して、Financial Reportingスケジューラ・サーバーに対し、バッチ入力ファイルに指定されたバッチを起動できます。

- ▶ financialreporting¥binディレクトリにあるコマンド・ライン・プロンプトを使用してバッチを起動するには、バッチ入力ファイルの完全修飾名と、バッチをスケジュールするスケジューラ・サーバーのコンピュータ名またはIPアドレスを指定してコマンドを入力します。次に例を示します。

```
ScheduleBatch
c:\DailyReports\mybatch.xml

MySchedulerServer
```

ここで、MyBatch.xmlはバッチ入力ファイルの名前で、MySchedulerServerは、スケジューラ・サーバー(通常、レポート・サーバーと同じコンピュータにあります)の名前またはIPアドレスです。

これにより、指定したスケジューラ・サーバーでバッチがすぐに実行されます。

外部スケジューラを使用したバッチのスケジュール

外部スケジューラから定期的にバッチを起動できます。それには、独自のコマンド・ファイルを設定して、外部スケジューラから呼び出します。

たとえば、次のラインを含んでいるNightlyBatch.cmdファイルを準備します。

```
call ScheduleBatch MgtSummaryBatch.xml hr_Server
```

```
call ScheduleBatch MgtDetailBatch.xml hr_Server
```

パスワードのエンコード

バッチ入力ファイルをエクスポートした場合、ユーザー名とパスワードは存在しません。バッチ入力ファイルにユーザーIDまたはデータ・ソースIDを指定するには、次のファイルを使用してバッチ入力ファイル用にエンコードされたパスワードを作成します：

- Windows - EncodePassword.cmd
- UNIX - EncodePassword



注：

この手順が必要です。

- ▶ パスワードをエンコードするには：

1. バッチ入力ファイルを開いて、データ・ソース・パスワードやユーザーIDパスワードを変更します。
2. コマンド・ラインからEncodePassword.cmdファイルを実行します。
3. 「**EncodePassword**パスワード」と入力します。ここで**パスワード**は**新パスワード**です。
4. 生成されたエンコード済パスワードを、バッチ入力ファイルに入れます。

属性の変更

通常のバッチ入力ファイルには、変更する属性はほとんどありません。ほとんどの属性は、スケジュールしたバッチに基づいて適切に設定されています。次の表に、関連XMLタグのために変更する可能性がある属性を示します。

表34 よく使用する属性

カテゴリ	属性	説明
全般	AUTHOR	バッチ・スケジューラの「ユーザーID」列に表示されます。バッチで生成するXMLファイルのコメントや名前を入れるのに便利です。
電子メール	ATTACH_RESULTS	生成されたPDFまたはHTMLファイルを電子メールに添付する場合は「Yes」、添付しない場合は「No」に指定します。
<i>FAILURE_RECIPIENTS</i>	スケジュール・バッチが失敗した場合の電子メールの受信者。	
<i>FAILURE_SUBJECT</i>	スケジュール・バッチが失敗した場合のテキスト。	
<i>RECIPIENTS</i>	カンマで区切られた、受信者の電子メール・アドレスのリスト。	
	<i>SENDER</i>	送信者の電子メール・アドレス。
	<i>SUBJECT</i>	電子メールの件名。
資格証明	<i>DS_PASSWD</i>	データ・ソースの暗号化されたパスワード。既存のバッチで指定するか、コマンド・ライン・ユーティリティで生成します。
<i>DS_USER_NAME</i>	バッチ内のレポートやブックを実行するために使用される資格証明を持つデータ・ソース・ユーザー。	
<i>HR_PASSWD</i>	暗号化されたFinancial Reportingユーザーのパスワード。既存のバッチで指定するか、コマンド・ライン・ユーティリティで生成します。	
<i>HR_USER_NAME</i>	バッチ内のレポートやブックを実行するための資格証明を持つFinancial Reportingユーザー。	
HTML出力とPDF出力	<i>HTML VALUE</i>	バッチのHTML出力を生成するかどうかにより、「Yes」または「No」の値を入力します。
<i>PDF VALUE</i>	バッチのPDF出力を生成するかどうかによって、「Yes」または「No」を入力します。	

カテゴリ	属性	説明
	HTML EXPORT_HTML_FOLDER_LABEL	HTML(値=Yes)としてエクスポートする場合は、外部ディレクトリのパスとフォルダ。
	PDF EXPORT_HTML_FOLDER_LABEL	PDF(値=Yes)としてエクスポートする場合は、外部ディレクトリのパスとフォルダ。
スナップショット出力	SAVE_AS_SNAPSHOT VALUE	リポジトリにスナップショット出力を保存するかどうかによって、「Yes」または「No」の値を入力します。
SAVE_NAME	スナップショットが保管されるフォルダ名。これは、ReportStore:\ \ formatで指定する必要があります。SAVE_NAME = ""の場合、スナップショット出力は元のオブジェクトとして同じフォルダに保存されます。	
USER_NAMES	スナップショット出力にアクセスできるFinancial Reportingユーザー名。カンマで区切って指定します。	
GROUP_NAMES	スナップショット出力にアクセスできるFinancial Reportingグループ名。カンマで区切って指定します。Everyoneというシステム定義の特別なグループには、Financial Reportingユーザーがすべて含まれ、このグループを指定すると、すべてのユーザーがスナップショット出力にアクセスできます。	
印刷出力	PRINT NAME	PRINT VALUE属性を「Yes」に設定した場合のプリンタ名。 注: スケジューラ・サーバーでプリンタを使用できることを確認する必要があります。
PRINT VALUE	バッチの印刷出力を生成するかどうかによって、「Yes」または「No」の値を入力します。	



注:

XMLファイルのUSER_POVセクションにあるHIDDEN="0"は、POVにあるディメンションを表します。従って、XMLファイルで設定される候補または値になります。この例で変更される値は「_」です。

バッチ入力ファイルのXMLタグ・リファレンス

サブトピック

- BATCH_JOB_OBJECT - ノード・タグ
- RUN_OPTIONS - 子ノード・タグ
- NOTIFICATION/EMAIL - 子ノード・タグ
- JOB_STATUS - 子ノード・タグ
- JOB_OBJECT - 子ノード・タグ
- DATA_SOURCE_USER_CREDENTIALS - 子ノード・タグ
- HR_USER_CREDENTIALS - 子ノード・タグ
- OUTPUT_OPTIONS - 子ノード・タグ
- CHILD NODE - HTML
- CHILD NODE - PDF
- CHILD NODE - SAVE_AS_SNAPSHOT
- CHILD NODE - PRINT
- USER_POV - 子ノード

次のトピックでは、関連付けられた属性のタグおよび値の詳細なリストを示します。XMLファイルの構造は、ツリー・レベルまたはディレクトリ構造と似ています。基本的には1つの親レベルのノード・タグがあり、後続のタグは子ノード・タグです。

BATCH_JOB_OBJECT - ノード・タグ

属性	説明
AUTHOR	バッチ・スケジューラの「ユーザーID」列に表示されます。バッチで生成するXMLファイルのコメントや名前を入れるのに便利です。
BATCH_JOB_ID	バッチに割り当てられた任意の番号
BATCH_NAME	バッチの名前。例: ReportStore:¥¥SchdApi¥¥Batches¥¥TestBatch3
REPORT_SERVER_NAME	バッチのあるレポート・サーバーの名前
UNSAVED_BATCH	常に「No」に設定します。

RUN_OPTIONS - 子ノード・タグ

属性	説明
FREQUENCY	この属性の値は「1」である必要があります。

属性	説明
<i>RUN_IMMEDIATELY</i>	この属性の値は「Yes」である必要があります。

NOTIFICATION/EMAIL - 子ノード・タグ

属性	説明
<i>ATTACH_RESULTS</i>	生成されたPDFまたはHTMLファイルを電子メールに添付する場合は「Yes」、添付しない場合は「No」に指定します。
<i>RECIPIENTS</i>	カンマで区切られた、受信者の電子メール・アドレスのリスト。
<i>SENDER</i>	送信者の電子メール・アドレス。
<i>SUBJECT</i>	電子メールの件名。

JOB_STATUS - 子ノード・タグ

これは次の例のようにコピーする必要があります: `JOB_STATUS CURRENT_STATUS="Pending"`

JOB_OBJECT - 子ノード・タグ

属性	説明
<i>OBJECT_ID</i>	空白のままにしておきます。

DATA_SOURCE_USER_CREDENTIALS - 子ノード・タグ

属性	説明
<i>DS_PASSWD</i>	データ・ソースの暗号化されたパスワード。既存のバッチで指定するか、コマンド・ライン・ユーティリティで生成します。
<i>DS_USER_NAME</i>	バッチ内のレポートやブックを実行するために使用される資格証明を持つデータ・ソース・ユーザー。

HR_USER_CREDENTIALS - 子ノード・タグ

属性	説明
<i>HR_PASSWD</i>	暗号化されたFinancial Reportingユーザーのパスワード。既存のバッチで指定するか、コマンド・ライン・ユーティリティで生成します。
<i>HR_USER_NAME</i>	バッチ内のレポートやブックを実行するための資格証明を持つFinancial Reportingユーザー。

OUTPUT_OPTIONS - 子ノード・タグ

このXMLタグを使用すると、バッチ出力のフォーマットを選択できます。

CHILD NODE - HTML

属性	説明
<i>HTML VALUE</i>	バッチのHTML出力を生成するかどうかにより、「Yes」または「No」の値を入力します。

CHILD NODE - PDF

属性	説明
<i>PDF VALUE</i>	バッチのPDF出力を生成するかどうかによって、「Yes」または「No」を入力します。

CHILD NODE - SAVE_AS_SNAPSHOT

属性	説明
<i>SAVE_AS_SNAPSHOT VALUE</i>	リポジトリにスナップショット出力を保存するかどうかによって、「Yes」または「No」の値を入力します。
<i>SAVE_NAME</i>	スナップショットが保管されるフォルダ名。これは、 <code>ReportStore:\ \ format</code> で指定する必要があります。 <code>SAVE_NAME = ""</code> の場合、スナップショット出力は元のオブジェクトとして同じフォルダに保存されます。
<i>USER_NAMES</i>	スナップショット出力にアクセスできるFinancial Reportingユーザー名。カンマで区切って指定します。
<i>GROUP_NAMES</i>	スナップショット出力にアクセスできるFinancial Reportingグループ名。カンマで区切って指定します。Everyoneというシステム定義の特別なグループには、Financial Reportingユーザーがすべて含まれ、このグループを指定すると、すべてのユーザーがスナップショット出力にアクセスできます。
<i>SUBJECT_TOKENS</i>	空白にするか、テキスト・ファイルから除去できます。 注： USER_NAMESまたはGROUP_NAMESを使用した場合は、この属性は無視されます。

CHILD NODE - PRINT

属性	説明
<i>PRINT NAME</i>	PRINT VALUE属性を「Yes」に設定した場合のプリンタ名。 注： スケジューラ・サーバーでプリンタを使用できることを確認する必要があります。
<i>PRINT VALUE</i>	バッチの印刷出力を生成するかどうかによって、「Yes」または「No」の値を入力します。

USER_POV - 子ノード

このノードは、オプションです。ここでユーザーのPOVを指定しないと、テキスト・ファイルで指定したデータ・ソース・ユーザーのUSER POVが使用されます。



注意

これは、グローバル管理者のみが変更できます。部分的なUSER POVを指定することはできません。



注:

XMLファイルのUSER_POVセクションにあるHIDDEN="0"は、POVにあるディメンションを表します。従って、XMLファイルで設定される候補または値になります。この例で変更される値は「_」です。

ADMプロパティ値の最大長の増加

まれに、Financial Reportingによってデータソースからメンバー情報が取得される際に、戻される情報容量が大きすぎて取得できない場合があります。これにより、エラー・メッセージが発生したり、Financial Reportingサーバーがシャットダウンする場合があります。容量の大きい取得の例を次に示します:

- Financial Managementセル・テキスト
- Essbaseアウトライン・メンバー式

受信するエラー・メッセージは次のようになります。ここで"xxxx"は、取得される情報のサイズ(KB単位)です。

エラー・メッセージ: プロパティ値が長すぎます "xxxx" > 4,096。ADM.PropertiesのMAX_PROPERTY_VALUE_LENGTHを大きくすることを検討してください。

この状況を修正するには、大きな容量の情報を取得できるようにADM.propertiesファイルを調整する必要があります。

▶ ADM.propertiesファイルを調整するには:

1. ADM.propertiesファイルをテキスト・エディタで開きます。ファイルは通常、次の場所にあります。

```
<HYPERION_HOME>\common\ADM\<BI+ VERSION>\lib\ADM.properties
```

2. MAX_PROPERTY_VALUE_LENGTHという行を探します。
3. デフォルト設定の4 (4k)を大きくします。たとえば、「プロパティ値が長すぎます9503 > 4096」というエラー・メッセージが発生した場合、値を10にすると問題が解決します。

デフォルト値4Kと前述のエラー・メッセージは、プロパティ・サイズ9503がデフォルト値4096より大きいことを示しているため、10Kにすることで、新しいプロパティ値のサイズは、式に対して十分なサイズになります。

Microsoft Wordテンプレート

Microsoft Wordテンプレートを使用すると、テキスト(.txt)ファイルを印刷できます。「印刷」を選択すると、Word文書を印刷する既存のルーチンが使用され、テキスト・ファイルが印刷されます。印刷ジョブが終了すると、ファイルは

保存されずに閉じられ、次のテキスト・ファイルのためにテンプレートが保持されます。テキスト・ファイルの印刷出力は、PDFプレビューで表示した場合のルック・アンド・フィールが維持されます。

WordテンプレートFR_TextTemplate.docは、Financial Reporting印刷サーバーの`#{home.reports}/bin/`フォルダ内にあります。テンプレートには、カスタマイズ可能なフォーマット済コンテンツが含まれています。

テンプレート設定

デフォルトでは、Wordテンプレートは次のように設定されています：

- ・「`<<FR_content>>`」文字列は、文書の本文の唯一のコンテンツです。
- ・テキストのフォントは、Courier New、10ポイントにフォーマットされています。
- ・印刷オプションは縦長で、マージンは1インチです。
- ・フッターは、「日付と時刻の印刷」および現在のページ番号に設定されています。これらの設定は、Financial Reporting印刷サーバーを介して印刷時にすべてのテキスト・ファイルで更新され、表示されます。

カスタマイズ可能なテンプレートの要素は次のとおりです：

- ・フォント、タブ、マージンなどデフォルトのフォーマットをカスタマイズできます。
- ・テンプレートのページ設定を制御できます。たとえば、常に横長に印刷したり、用紙サイズをA4に設定したりできます。
- ・ヘッダーとフッターもカスタマイズできます。たとえば、フッターにページ番号を表示できます。これはブックとレポートでPDFプレビューを生成すると、自動的に更新されます。
- ・テンプレートの既存のコンテンツをカスタマイズできます。たとえば、各印刷出力の終わりに標準の機密保持条項を挿入できます([286ページのテンプレートのカスタマイズ](#)を参照)。
- ・イメージや背景をテンプレートに追加できます。たとえば、会社のロゴなどです。

テンプレートのカスタマイズ

Word文書の破損を防ぐために、テンプレートをカスタマイズする前にバックアップを作成します。テンプレートはMicrosoft Wordで開くことができます。次回テキスト・ファイルをFinancial Reportingサーバーで印刷する際に、保存した変更が適用されます。印刷するテキスト・ファイルを選択すると、Financial Reporting印刷サーバーはFR_TextTemplate.docファイルを開き、文字列`<<FR_content>>`を探します。見つかった場合、テキスト・ファイルのコンテキストはその場所に挿入され、文字列と置き換えられます。文字列が見つからない場合、テキスト・ファイルのコンテンツは、Word文書の終わりに挿入されます。テンプレートに既存のコンテンツが存在する場合、テキスト・ファイルのデータの前に表示されます。

テンプレートには常に`<<FR_content>>`文字列を含めてください。これにより挿入されるテキスト・ファイルのコンテンツのフォントおよびパラグラフ設定を制御できます。コンテンツには、`<<FR_content>>`文字列の現在のフォーマットが継承されます。



注：

変更しても、Financial Reporting印刷サーバーを再起動する必要はありません。

▶ テンプレートをカスタマイズするには:

1. Microsoft Wordを開きます。
2. 「ファイル」、「開く」の順に選択し、`${home.reports}/bin/`フォルダ(デフォルト)にあるFR_TextTemplate.doc文書に移動し、「開く」をクリックします。
3. フォーマットを変更するには、`<<FR_content>>`をハイライトし、フォーマットを変更します。
4. 「保存」をクリックします。



注:

デフォルトとは異なる場所にテンプレートを保存する場合は、JConsole.exeファイルのTextPrintTemplateに新しい場所を指定する必要があります。

JConsoleの詳細は、*Oracle Hyperion Financial Reporting* 管理者ガイドのプロパティ情報に関するトピックを参照してください。

注釈でのセル・テキスト、Planningユニットの注釈、およびFinancial Reportingドキュメントの表示



注:

現在、Planningユニットの注釈は、Oracle Fusion General Ledgerで使用されません。

設計者は、特定のFinancial Reportingレポートで自動的に問合せを実行するかどうかと、セル・テキスト、Planningユニットの注釈、注釈として添付されたドキュメントなどを戻すかどうかを全般的に制御できます。.properties設定に基づいて、レポートのプロパティ・シートには、レポートごとに機能のオン/オフを切り替えることができる一連のコントロールが表示されます。fr_global.propertiesのグローバル設定は次のとおりです。

- AllowCellTextAsAnnotation=trueの場合、レポートのプロパティ・シートに「セル・テキスト」チェック・ボックスが表示されます(Financial ManagementおよびPlanningに表示され、Essbaseには表示されません)。デフォルトでは選択されていません(オフ)。
- AllowPlanningUnitAnnotationsAsAnnotations=trueの場合、Planningでは、レポートのプロパティ・シートに「プランニング・ユニットの注釈」チェック・ボックスが表示されます。デフォルトでは選択されていません(オフ)。
- AllowDocAttachmentsAsAnnotations=trueの場合、Financial Managementでは、レポートのプロパティ・シートに「ドキュメントの添付」チェック・ボックスが表示されます。デフォルトでは選択されていません(オフ)。

Linux/UNIXサーバー環境でのFinancial Reportingのフォントの更新

LinuxまたはUNIXサーバーにFinancial Reportingをデプロイすると、Financial Reportingで使用できる一部のMicrosoftシステム・フォントが印刷時に使用できないことがあります。これは、これらのフォントがLinuxまたは

UNIXに含まれていないためです。たとえば、太字または斜体の"Microsoft Sans Serif"フォントは、初期的には太字または斜体が適用されない通常フォントとして表示されます。

LinuxまたはUNIXでFinancial Reporting上にこれらのフォントをデプロイするには、フォントをダウンロードしてインストールする必要があります。



注:

Financial Reportingではtrue-typeフォントのみをサポートしています。これらのフォントは、Microsoftからライセンス供与されるか、Webから無料の代用品をダウンロードできます。

サーバーにフォントがインストールされたら、`xdo.cfg`ファイルを更新して新しいフォントを含める必要があります。`xdo.cfg`ファイルは、レポートのすべてのフォントをサーバー上のフォント・ファイルにマップします。このファイルには、他の印刷サーバー設定も含まれます。

デフォルトでは、`xdo.cfg`ファイルは次の場所にあります。

`EPM_ORACLE_INSTANCE/FinancialReporting/lib/F0Processor`

`xdo.cfg`ファイルを更新するには、Oracle Hyperion Financial Reportingサーバーで`FRPrintServerUtility`を実行します。`FRPrintServerUtility`はシステム・フォントをスキャンし、`xdo.cfg`ファイルを改訂して新しいフォントを認識します。

デフォルトでは、`FRPrintServerUtility`は次の場所にあります。

`EPM_ORACLE_HOME/products/financialreporting/bin`



よくある質問

この項の内容:

ユーザーのPOVにあるディメンションを変更しても、グリッドに影響がないのはなぜですか?	289
グリッドのPOVがレポート・デザイナーに表示されないのはなぜですか?	290
ワークスペースを使用しているユーザーは、どのようにしてグリッドのPOVにディメンションが設定されていることを確認できますか?	290
ユーザーのPOVを変更した場合に、グリッドの行、列、またはページの軸で選択したメンバーに変更が反映されるようにするには、どのようにレポートを設計すればよいですか?	291
なぜブックのPOVが必要なのですか?	291
レポート・メンバー選択とは何ですか?	291
レポート・メンバー選択を「レポートのPOV」と呼ばないのはなぜですか?	291
なぜバッチのPOVが必要なのですか?	292

ユーザーのPOVにあるディメンションを変更しても、グリッドに影響がないのはなぜですか?

レポートに複数のグリッドが入っていることがよくあります。ユーザーのPOVのディメンションを変更すると、そのうちのいくつかに影響します。

289ページの図5で、2つのグリッドは同一に見えますが、メジャーと年の値が異なります。

図5 1つのレポートにある複数グリッド

User POV: Product: Product Market: Market Scenario: Scenario

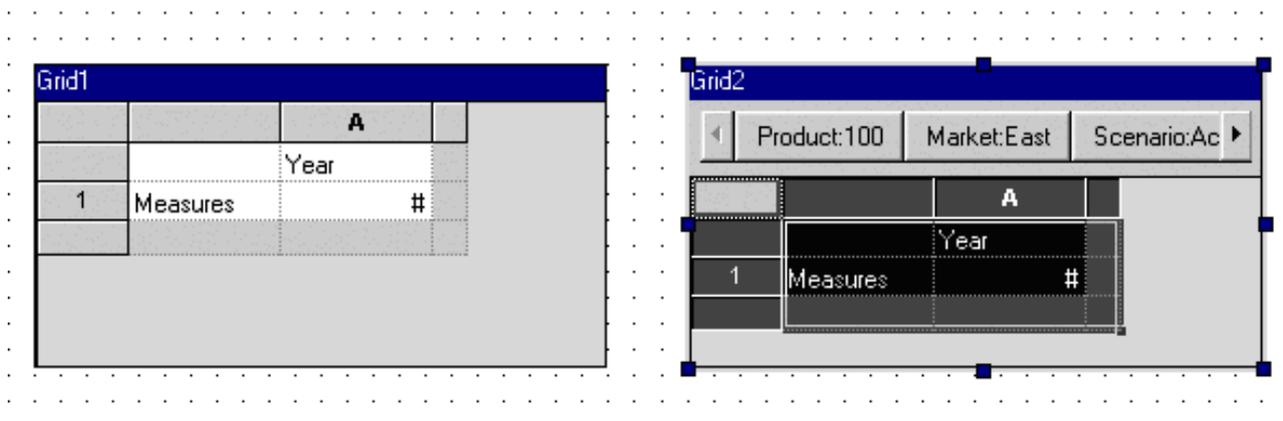
	Year
Measures	105,522
<u>(Export to Spreadsheet)</u>	

	Year
Measures	12,656
<u>(Export to Spreadsheet)</u>	

レポート・クライアントに戻ってグリッドのPOVをオンにすると、製品、市場、シナリオのメンバーがGrid2に設定されているのがわかります。したがって、レポート・デザイナーでこれらのディメンションを変更しても、Grid2には影響がありません。

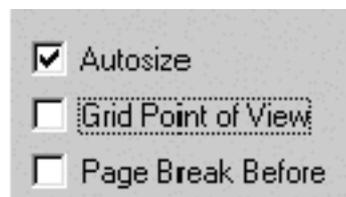
レポートを設計するとき、テキスト・ボックスまたは行か列のヘッダーにページ・ディメンションのユーザーが表示されるようにしておく便利です。

図6 使用可能なグリッドのPOV



グリッドのPOVがレポート・デザイナーに表示されないのはなぜですか？

グリッドPOVを無効にした場合、レポート・デザイナーには表示されません。



ワークスペースを使用しているユーザーは、どのようにしてグリッドのPOVにディメンションが設定されていることを確認できますか？

レポートを設計する際、ディメンションのグリッドのPOVがグリッドの特定メンバーに設定されているテキスト行の脚注を使用して、グリッドを設計する必要があります。他に、ディメンション値を行または列ヘッダーに挿入する方法もあります(次の図を例として参照)。グリッドのPOVをオフにすると、列の説明(カスタム見出しを使用)には、グリッドがシナリオ・ディメンションの実績を表示していることが示されます。

図7 ヘッダーにディメンションの値が表示されたレポート

User POV: Product: Product Market: Market

Grid POV: <u>Scenario</u> : <u>Actual</u>		
	Qtr1 Actual	Qtr2 Actual
Measures	24,703	27,107

(Export to Spreadsheet)

ユーザーのPOVを変更した場合に、グリッドの行、列、またはページの軸で選択したメンバーに変更が反映されるようにするには、どのようにレポートを設計すればよいですか？

選択した軸のCurrentPOVメンバーを使用するか、またはCurrentPOVをメンバーのパラメータとして使用したメンバー選択関数を選択します。レポートが実行されると、軸値がユーザーのPOVから取得されます。すべての軸値がユーザーのPOVから取得され、ユーザーごとに完全に動的なレポートが作成されるように、グリッドを設計できます。

なぜブックのPOVが必要なのですか？

ブックのPOVを使用すると、だれでもブックを実行するたびにブックのすべてのレポートのグリッドに同じデフォルト値を同時に使用できます。これはブックのデータベース接続に固有ですが、ブックのレポートまたはレポートのグリッド・オブジェクトに固有ではありません。ブックのPOV値がブックとともに保存されると、ブックのPOVを変更しても、ブックを設計したユーザーのPOVには影響しません。

レポート・メンバー選択とは何ですか？

レポート・メンバー選択は、グリッドの行、列、またはページの軸に設定されていないディメンションの値、またはブック内の特定のレポートにあるすべてのグリッドのPOVに設定されたディメンションの値を定義します。

レポート・メンバー選択を「レポートのPOV」と呼ばないのはなぜですか？

すべてのPOVは、ディメンションに1つのメンバーを設定できます。レポート・メンバー選択は、ディメンションに複数のメンバーを設定できます。複数のメンバー、または結果が複数のメンバーになるメンバー選択関数が1つのディメン

ションに設定されると、ブック内のレポートは各メンバーに対し実行されます。複数のメンバー、または結果が複数のメンバーになるメンバー選択関数が複数のディメンションに設定されると、ブック内のレポートはこれらのメンバーのすべての組合せに対し実行されます。レポートのページ軸のメンバーの各組合せに対しグリッドが生成されるように、ブック内のレポート・メンバー選択を使用して、メンバー・セットの各組合せに対しレポートが生成されます。

なぜバッチのPOVが必要なのですか？

バッチの実行時にバッチ内のすべてのレポートのすべてのグリッドに対し同時に同じデフォルト値を使用するように、バッチをスケジュールできるからです。これは、バッチのデータベース接続に固有ですが、バッチのレポートまたはレポート内のグリッド・オブジェクトには固有ではありません。バッチのPOV値はバッチのスケジュール時にのみ保存されるので、同じバッチの異なる値を設定できます。バッチのPOVへの変更は、バッチを設計するユーザーのPOVには影響しません。またバッチを設計するユーザーのPOVへの変更は、バッチのPOVに影響しません。

B

通貨一覧

この付録では、Oracle Hyperion Financial Reportingで使用する通貨記号を一覧表示し、説明します。



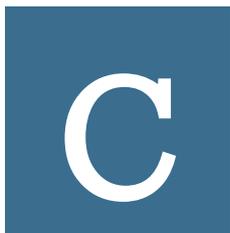
注:

フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、イタリア、ルクセンブルク、オランダ、スペイン、ベルギー、オーストリア、キプロス、スロベニア、マルタ、アイルランド、ポルトガルで使用されている通貨はユーロです。

表35 通貨一覧

国	通貨名	通貨記号	ISOコード
アルゼンチン	ペソ	\$	ARS
オーストラリア	ドル	A\$	AUD
オーストリー	シリング	S	ATS
ベルギー	フラン	BEF	BEF
ブラジル	レアル	R\$	BRL
カナダ	ドル	Can\$	CAD
チリ	ペソ	Ch\$	CLP
中国	元	Y	CNY
デンマーク	クローネ	Dkr	DKK
エジプト	ポンド	£E	EGP
欧州連合	欧州連合通貨単位(ユーロ)	€	XEU
フィンランド	マルカ	mk	FIM
フランス	フラン	F	FRF
ドイツ	マルク	DM	DEM
ギリシャ	ドラクマ	Dr	GRD
香港	ドル	HK\$	HKD
インド	ルピー	Rs	INR
インドネシア	ルピア	Rp	IDR
アイルランド	プント	IR£	IEP

国	通貨名	通貨記号	ISOコード
イスラエル	シェケル	NIS	ILS
イタリア	リラ	Lit	ITL
日本	円	¥	JPY
韓国	ウォン	W	KRW
ルクセンブルグ	フラン	LuxF	LUF
マレーシア	リングgit	RM	MYR
メキシコ	ペソ	Mex\$	MXP
オランダ	ギルダー	fl	NLG
ニュージーランド	ドル	NZ\$	NZD
ノルウェー	クローネ	NKr	NOK
フィリピン	ペソ	Php	PHP
ポーランド	ズロチ	Zl	PLN
ポルトガル	エスクード	Esc	PTE
ロシア	ルーブル	R	RUR
シンガポール	ドル	S\$	SGD
南アフリカ	ランド	R	ZAR
スペイン	ペセタ	Ptas	ESP
スウェーデン	クローナ	SEK	SEK
スイス	フラン	SwF	CHF
台湾	NTドル	NT\$	TWD
タイ	バーツ	Bht	THB
トルコ	リラ	TL	TRL
イギリス	ポンド	£	GBP
アメリカ合衆国	ドル	\$	USD



Oracle User Productivity Kitの使用

Oracle User Productivity Kit (UPK)がデプロイされていて、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceが管理者によってUPK Playerパッケージ用の有効なURLで構成されている場合、ユーザーはOracle Enterprise Performance Management SystemのUPKコンテンツにアクセスできます。UPKの構成の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace管理者ガイド』のWorkspaceサーバーの設定に関する項、およびアプリケーション・サポート・ガイドのOracle User Productivity Kitに関する項を参照してください。



注:

事前に作成されたUPKコンテンツを使用できます。Oracle.comで入手可能なOracle Enterprise Performance Management SystemのUPKについて記載されたデータ・シート<http://www.oracle.com/us/products/applications/tutor-upk/064788.html>を参照してください。Financial ManagementおよびPlanningモジュールには、Oracle Smart View for OfficeおよびReporting Studio用の適切なコンテンツが含まれています。Oracle Hyperion Financial ManagementおよびOracle Hyperion Planningはコンテキスト依存の方法でUPKの起動をサポートします。Smart ViewまたはReporting Studioから起動されたUPKコンテンツでは、コンテキストに対してフィルタ処理されていない完全なプレーヤ・パッケージ・アウトラインが起動されます。Reporting StudioおよびSmart Viewユーザーは、役割フィルタを使用して、Oracle Smart View for OfficeまたはOracle Hyperion Financial Reporting Studioのコンテンツのみを表示できます。

▶ UPKのヘルプを開くには:

1. 次のいずれかのアクションを行います:

- 「ヘルプ」メニューを選択し、次に「Oracle User Productivity Kit」を選択します。

- 「ヘルプ」ツール・バーの「UPK」をクリックします。

- ダイアログ・ボックスの「ヘルプ」をクリックし、次に「ヘルプ」ツール・バーの「UPK」をクリックします。

2. オプション: ダイアログ・ボックスを開いた場合、作業完了時にダイアログ・ボックスを閉じます。

